異なる世界で

のぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異なる世界で

【Ｎコード】
Ｎ０５８５Ｘ

【作者名】
のぶ

【あらすじ】
買い物してたらいつの間にか砂漠にいた！
異世界トリップという、いかにも王道な設定です。
やや腹黒い主人公が異なる地で、力強く生きていくお話をご覧あれ。

蒸発（前書き）

作者の趣味全開です。笑
文才はありませんが、ガンバルのでひとつよろしく。
ということで、どうぞ。

蒸発

『どこですかーっ、ここは?!』

私は混乱していた。だから叫んだって訳ではないんだけど。

叫んだその声は砂に吸収されて、だだっ広そうなこの地には響かなかった。

そう、今、私は、

…砂漠の真ん中にいる。

真ん中って表現が合ってるか分からないけど、四方を見渡す限り、砂、砂、砂!木も、ましてや砂漠定番のサボテンもない。そして八方を見渡しても、人っ子一人、虫一匹たりとも視界には入ってくれなかった。

事の背景を言おう。簡単に言っちゃえば、気が付いたら“ここ”にいた。ここってのはもちろん今立っている、砂漠。

てゆーか暑い。途方もなく。

寒いからと着こんでいた上着を脱ぎ、ロンTになる。それから額と首を流れる汗を拭った。

何でこんなことになったのか、とりあえず整理しなくちゃ。

三日後に大学の入学式を控えた私、榊原　寧‐サカキバラ　ネイ‐は今日引っ越しを終え、無事一人暮らしを始めようとしていた。

なのに、なのに！一体どんな状況だっての。

こんな砂漠、知らないし。いや、サバクってむしろ何ですかって話ですよ。しかも買い物袋を二つ下げて、結構間抜けな図。

中の生もの腐っちゃいそうだなぁ。

『って、今はそれどころじゃなーい！』

混乱は混乱を呼ぶだけ。だから、落ち着かなきゃ。

そう分かってても、混乱しないはず、ない。整理どころか余計分からなくなっただけだった。

「わーお、でっかい声だね☆」

『ウルサイッ！今はそれどころじゃ…ナ、イ？』

え…今どっかから声が聞こえた気が、したんだけど。気の所為か。あまりの暑さに頭イカレたのかも。

一人首を傾げる。だって、もう一度周りを見渡しても、やっぱり誰もいなかったから。

「どうして疑問形？」

…ん？やっぱり声が聞こえたみたい。そうか、ここは天国なのか。天国って花畑じゃないの？三途の川だって渡ってないのに。

いや、川はきっとこの暑さで干上がったんだな。花畑だなんて嘘言ったの誰だよ。こんな暑苦しい砂の世界じゃ天国じゃないじゃん。

やっぱ死んでみないと分からない事実ってことなんだね。

「もしも～し？何で黙ってんの。」

…空耳じゃない！確かに声が聞こえた。でも、どこから？

キョロキョロと辺りを見渡す。でもやっぱり砂漠には私以外何もなかった。

「あっ、ひょっとして僕を探してるんだね。状況把握力はなかなか悪くない。

ただし、詰めが甘いね。」

何の詰めだよ。

間延びした喋り方にイライラしてきた。だっていつの間にかこんなとこに立ってて、幻聴みたいに誰もいないところで声が聞こえてくるってのに、何が状況把握力は悪くない、だよ。

ツッコミどころ万歳過ぎて、そんな気が失せるって。

「おーい、大丈夫〜？」

大丈夫もクソもあるか！頭の配線おかしくなりそうだってのに。

「アハハ☆混乱しちゃってるんだネ！」

いちいち頭にくる言い方すんな。いくら寛容な私でも、そろそろキレたい。

「ヒントをあげよーぅ。」

語尾を伸ばすな！そして最後にちょっとだけ発音するな！

会話なんてしたくない、って訳ではないんだけど。今は会話できるような人物がこの人しかいない。

ただ、姿の見えないこの声の人物はものすごく面倒臭い人だって分かるから、ツッコミはあえて心の中でしておいた。

「周りにはいない。下は砂だからいるはずもない。あと残るは？」

…まさか。あるはずない、そんなこと。

そう思いながらも、半信半疑の中ゆっくりと上を見上げた。

『〜〜――…ッ？！』

「アハハ☆驚いてるねぇ。」

“驚いてる”の域じゃないからーっ！どうやって浮いてるの！？

てゆーか何なの、そのマヌケ過ぎる画は！

その声は見事に上から聞こえていた。

頭イカレてんのはこの人だよ。さっきは自分かと思ったんだけど、この目に見えてる状況はどうやっても真実以外の何物でもない。

…三輪車？

あろうことか空飛ぶ三輪車に乗っていたまさかのイケメンは、姿形こそギリシャ神話から飛び出して来たような神々しさなのに、見事なほどまでに残念だった。

金の髪、碧い目、纏う白い衣装。彫刻から飛び出してきたみたい。

『…あなたは誰？何で三輪車に乗ってるの？』

おずおず聞いた。声は絞り出されたように固く、低い。身体が強張ってるのが、自分でも容易く分かった。

だって頭おかしい人だったら怖いんだもん。世の中何かと物騒だしね。用心するのも当たり前。

でも、この状況でできることはこの人の話を聞くことくらいしかない。それに関しては至極残念だ。

「これは三輪車って言うのかい？小さな子供が乗っていて楽しそうだったから、ちょっと拝借してきたんだよー。この乗り心地はサイ

コーだね。

それにしても、キミは何でそんなに熱烈な視線を向けてくるんだい？あっ、もしかしてこれを狙ってるんだなぁ。そんなに見たってこの三輪車はあげないよ！」

『いらんっ！』

何この人。会話が一向に成立しないんですけど。

私は頭に手をあてて、お手上げのポーズをとるしかなかった。

てゆーか、拝借って言いつつも、子供から盗んできたってことじゃん！サラッと言ったけど、れっきとした泥棒だって。マジ、面倒臭い。

『ああ、そーか。これは夢なのか。夢なんだな。もう十分満喫したから早く目を覚ませー。』

買い物袋を片手に持って、空いた手で頬を抓って見ると。

…痛かった。

「何を言ってるんだ。現実逃避は恥ずかしいから止めなよ。」

『あんたのそのカッコの方が百万倍も恥ずかしいわっ！』

屈辱的。大人になって楽しそうに三輪車に乗ってるやつだけには恥ずかしいなんて、言われたくないっての。

ああ、全身の力が抜けてきた。死ぬのかな、私。

もう何でもいいからこの状況から逃げたかった。

「おっと、僕の許可なしに寝ようとするなんて、いい度胸じゃないか。」

知らないって。力が入らないんだもん。とりあえず、喉、乾いた。

…水。そうか、水買ったんだった。ガサガサ音を立てながらビニール袋を漁る。

あ、みっけた。

「ほー、無視するあげくに飲み物って。君、思いやりがないね。」

あんたに言われたくないわ!

じとーっと睨みつけながら、ゴクゴク喉を鳴らして一気に飲んだ。

『ぷはーッ。生き返るー。』

上から“おっさんかよ”なんて聞こえたけど、私、ぴちぴちの18歳ですから。さて、喉も潤ったことですし。

『アナタハダレデスカ?』

質問タイムと行きましょう。

「なんでカタコトなの?まあ、いいか。僕は“神”!」

Ｗｈａｔ?今何とおっしゃられた?

『か、み…さま?』

「イエス、ザッツライト☆」

やっぱり、天国だったのか…うん、意識が朦朧としてきたし、そうなんだよ。

私は完全に体を砂の上に放り出した。

「ちょっと、ちょっと!まだ話は終わってないぞ。」

『神様、ちょっと、ごめん…くらくらしてきたし、目が掠れてよく見えないんだ。』

実際、もう、太陽の光が眩し過ぎるくらいしか見えない。あとは輪郭が全部ぼやけてる。

「ああっ、しょうがない。人来ちゃったし、あとでまた会おう。僕の名前は“ジュノワール”。

いいか、“ジュノワール”だぞ。」

ほら、繰り返して、と言われて小さく呟く。

なんとも言い難いカタカナだな。とか、失礼な事を考えてみたけど、何だか焦ってるその人は、早口でまくし立てた。

「そう、ＯＫ!そう口に出して呼びさえすればすぐ行くからね。じ

や！」

あ、三輪車が去っていく。

ものすごい勢いで漕いでいる。だけど、それよりも遥かに速いスピードで進んでいた。

あれ、浮いてるし、漕ぐ意味無いよね…

力無く砂の上に放り出した身体。右手の方へと三輪車で去っていく白いものは、霞んだ目には、すでにはっきり見えていない。そして、霞んだ視界から物体らしきものが気えっ去った。

そして、私の意識も…

目覚め

『んッ…』
「おい、大丈夫か？」

あー、ダルイ。私、何してたんだっけ？

…ああ。神様とか名乗るイケメンが現れたんだっけ。三輪車とか、浮いてるとか、奇妙な事があった気が…

変な夢だった。目を覚ましたら、きっと！

きっと…？

『ここ、どこ？』

視界に入っていたそこは、白い部屋だった。

病院、とか？いや、ひらひらがいっぱい。お姫様みたいなベッドに横たわっている。

日本人には滅多にないと言う、天板付きのベッド。なんでそんなとこに寝てるんだろ？

状況を把握するために、部屋を一望しようとゆっくりと体を起こした。

「ここはデューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか？」

横からする声。感情の浮き沈みは無く、ただ淡々としている。

でも、少し待ってほしい。理解するには…ちょっとキャパオーバーかも。容量の少ない私の脳には、かなり厳しい状況だった。

何が、どうなってるんだ？

さっきまで砂漠で三輪車に乗ったウザい神と話した夢を見て、その後は知らないベッドの上で寝てる、と。

…あり得ない。どんな状況だよ。

私が押し黙っていると、小さく“記憶喪失か？”と零す人が一人。

『てゆーか、あなた、誰？』

寝起き特有の掠れた声。相当寝てたみたい。そういえば、酷く喉が渇く。

「ああ、自己紹介がまだだったな。デューク王国の宮廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リッキンデル・シェパードだ。」

…今日はイケメン祭？何、この格好良い人。

さっきのアホみたいな感じで夢に出てきた神様は儚げで、綺麗な感じだったけど、この人は、亜麻色の髪、意志の強そうなスミレ色の瞳。整っていて綺麗だけど、どこか野性味のある顔はもう、格好良いの一言に尽きる。

てゆーか、外国人？日本語喋ってる？上手すぎやしないか？

「おい、大丈夫か？」

ちっ、近い！

顔に一気に熱が集まってきた。

あれか、外国人特有の、スキンシップってやつか？！

私には今まで関係ないことだったから、実際にされると戸惑うって。

そう思ってたのがいけなかったんだろうね。

『だ、大丈夫だす！』

『「……」』

“だす”って、みごとに噛んだ。

余計に恥ずかしくなって俯くしかできない。

今までにないイケメンに会ったんだよ？そりゃ、少しくらいは猫を被って、女の子らしく淑やかにしておきたいものだったけど。無念、の一言に過ぎる。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかったみたいに流された。けど、有り難いから私も何もなかった体で答える。

『榊原寧。』

「サカキバラ・ネイ？どっちが名前なんだ？」

……？どっちも何もないでしょ。何を言ってるんだ、このイケメン。

いや、待てよ。目の前にいるイケメンさんは見るからに外人っぽい顔つき。外国だと反対になるんだっけ？

『ネイ。ネイが私の名前。』

やっとのことでそう言うと、クーンは優しげな笑みを零した。

と、思ったらまた眉間にしわ。元の真剣な顔つきはどこか厳しそうだった。

「ネイ、自分の状況が理解できるか？」

至極真剣な趣。私は自分が一筋縄ではいかない状況にいるんだと思うしかなかった。

とりあえず、目の前の人は信頼できる人間だと思う。勘、だけど。だから正直に話そう。

『…今から言うこと、信じてくれますか?頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言います。だけど、真実だから。』

鼻がつーんってしてきた。

混乱のせいで、普段はありえないこと、泣くなんて行為に及ぼうとしてる。

だめ、泣くな。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

顔は見えてないはずなのに、優しくかかる声。それは、涙をもっと誘うものだった。

頭の中がぐちゃぐちゃで、どうしてここに居るのか、とか、目の前の人がどうなのか、とか、もっともっと疑問は頭に浮かぶ。でも、とりあえず、話してみよう。そう思った。

『ここが何処だかは分かりませんが、さっきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

そうか。私、助けられたんだ。

あのアホ神（真実か分からないけど）が無理矢理話を聞かせようとして、炎天下の中に放りっぱなしにするからこんなことになった

んだよ。

あやうく神様に殺されるとこだった。

『でも、その前には日本って国にいたんです。』

“ニホン？”と首を傾げる。

やっぱり。私は全然知らない土地にいる。だって、さっき言われた国の名前なんて聞いたことないもん。それは自分が無知な所為かもだけど。

それにしても、どうして言葉が通じてるんだろう？私、日本語喋ってると思うんだけど。さっきも思ったけど、ホントに上手な日本語話してるんだよね。

…とりあえず、話を先に進めよう。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。

あそこでジュ…何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

あー、事実なのに、自分でここまで喋っといて、何言ってるんだこいつって思ってるんだけど。ってことはもちろん目の前の彼は…

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

真剣な顔して悩まないでください。私だって訳わかんないんだか

ら。

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。」

イエス、ザッツライト。神様の部分は割愛されちゃってるけど。

何度も小刻みに首を縦に振った。

信じてもらえなくても、事実は事実だもん。嘘はついてない。隣から大きく深いため息が聞こえてきた。

わかるよ。私はどう考えても頭がおかしい厄介者だもんね。

「ニホンに、神様、ねぇ。」

うん、その渋い顔、期待通りの反応だね。私だって訳分かってないもん。

『あ、買い物袋がない…』

いまさらそんな心配をしてみた。だけど、その返事はすぐに返される。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

あ、ホントだ！私の食材ちゃんたち！

日本人だって証拠が欲しくて、早いとこ自分が正常だって思いた

くて。必死に力が入らない身体を動かそうとした。

けど、無理なことは無理だ。

『きゃっ…！』

「危ない。」

ベッドから転がり落ちそうなところをクーンに抱きとめられた。

うわっ。筋肉しっかりついてるよ。現代男子には少数派な肉体だ！って感動してる場合かーい。

『ご、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

すぐに言い訳をしてみた。けど、すぐに頭の中では、小さな疑問が浮かぶ。

自分で言っといてなんだけど、服が違うような気が？

視線を自分の方へ持っていくと、まさかの白いワンピースのようなものを着ていた。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えさせたに決まっているだろう？」

中世のヨーロッパか！何て突っ込みたいのに、言葉は出て来てくれなかった。

『あの、これを私に着せたのって…？』

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とは言っても女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

待て待て待て。早乙女？

辞書で引いた早乙女という意味に違いない。でも、それにしても若く見られ過ぎてる気がする。

この人、私を幾つだと思ってるんだ？

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

「１４くらいだろう？」

ちゅ、中学生？！確かにアジア人は若く見られるって言うけど、あと二年で成人ですけど。

『私、１８です。』

そう言うと、あからさまに驚かれた。あんな綺麗な顔の表情が変わってくれるのは嬉しいけど、ちょっと複雑。

「…すまない。顔つきや身長から言って、まだ成人していないかと思った。」

うん、ストレートに言ってくれてありがとう。だけど、ちょっと傷ついたよ。

けど、笑顔を崩すことなく、気になる情報だけを聞いて行く。

『ここでは何歳で成人ですか？』

「１５だ。」

なるほど。私はここではとっくに大人になってるってわけか。

『あなたはいくつですか？』

そう尋ねると、２４歳だとすぐに返事が来た。

随分と大人っぽくいらっしゃる。身長も１８０以上ありそうだし、そんな人から言ったら、１６０？もない私は子供に見えるんだろうね。なんか、嫌だけど納得。

ぐー。

突然の大音響。その出どころは私のお腹だ。恥ずかしいにもほどがあるって。

「食事を運ばせよう。」

ごめんなさい。深く反省しておりますとも。けど、腹が減っては戦はできぬ、とも申しますし。

ここはひとつ腹ごしらえと行きませう。

その人にお願いをすると、私はだるい身体をベッドに戻した。

「大丈夫か？」

気だるそうにしていたのが気になったのか、顔を覗き込んでくる。心配そうなその目は子犬をも想像させるほど、キラキラしていた。

…ちょっと可愛いじゃないですか。

なんて思ってると、ドアがノックされた。と、続々とメイドさんたちが入ってくる。すぐに食事の用意がテーブルに用意されると、メイドさんたちは出ていった。

早業っ！板についた仕事って感じ。

それに感動していると、大きく、少しかさついてる手が差し伸べられた。

「さぁ、腹が減っているんだろう？食べよう。」

その言葉に嬉々として頷くと、伸ばされたクーンの手を借りてベッドから降りた。席についてから疑問が一つ。食事のセットが３つ。今ここにいるのは私と彼の二人。

どゆこと？

何て考え込んでいると、その様子で私が何を考えているのか分かったのか、答えを教えてくれた。

「もう一人、ここにくるヤツがいる。ネイの話を聞きたがっているから、あとで紹介するよ。ほら、待ってなくていいから食べろ。」

促されはしたけど、先に食べるのはどうも気が引ける。私が厄介

になってるものだって言うのに、我が物顔で一人先に食べてたら失礼でしょ。

だから、待つことにした。

目覚め - その2 -

「すみません。遅れました！」

…どうやらイケメン祭は現在進行形で続行中らしい。

しばらくしてやってきたのは綺麗な男の人。銀髪で青の瞳。線が細く色が白いその人は、クーンとは正反対の性質みたい。どこか中性的な感じがした。

「遅い。ネイが腹を空かせていると言うのに、いつまで待たせるつもりだ。さっさと席につけ。」

厳しいお言葉ッすね。

なんて勝手に私が待つことにしたくせに。やってきた人は私に“すみません”ともう一度言うと、席についた。

「ネイ、食べろ。腹が減ってるんだろう？」

そう言われて頷くと。

『いただきます。』

手を合わせてそう言って食べ始めた。

うーん、味薄くないですか？いや、食べさせてもらっといて言っ

ちゃあなんだが、現代っ子は舌が肥えてると言いますか。

ほぼ味が薄い料理の数々は、正直言っていくらお腹が空いてるからと言っても、食べ続けるには厳しいものがあった。

「ネイ、さっきの挨拶のようなものはなんだ？」

不慣れな手つきでフォークとナイフを使う私をずっと見ていたのか、クーンは手を動かした様子もない。さっきの言葉、つまりは“いただきます”が随分と気になってる様子。だから説明した。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そういうものたちの命を奪って人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になって私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの命を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるって感謝するのですよ。』

そう言うと、クーンはいただきます、と口にしてから食べ始めた。もう一人の人は私を微笑みながら見つめている。視線に気になりつつも、口に運ぶフォークは止めなかった。

味気ないけど、お腹は空いてるんでね。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のもののようです。」

さいでっか。てゆーか、誰なんだろう？

疑問に思いながらも、味の薄さに幻滅していた。　これじゃあ、食べたくても食べられないよ。うーん。少し考えてから箸をとめた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だったじゃないか。」

いや、それはもう恥ずかしいから掘り返さないでください。今からでも穴を掘って入りたいですから。てゆーか、せっかく用意してくれたのに残すのは失礼だよなぁ。でも味が…

……！思いついた！

私は買い物袋をとってきて、中を漁る。突然の行動に、二人は固まっていた。

「ネイ？」

不思議そうに見つめてくる。けど、私は構うことなく自分の作業に没頭した。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

訝しげな表情。

そりゃそーだ。見たこともないものが並んでるんだから。

私は嬉々として説明を始めた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、

醤油に味噌です。』

ここに来たのが買い物帰りで良かった。何にもなかったから、必要な物をまとめて買ってたんだ。できれば普通に自分の生活の中で使いたかったけどね。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなって。』

言い訳ですけどね。味が薄いから、なんて正直に言ったら失礼極まりない。

興味深そうに見ている二人に説明しながら、使ってみることにした。

まずは…スープか。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会う万能調味料です。』

そう言って、自分のスープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなった液体。それを口に運んで、少し嬉しい気分になった。思わず笑みが零れる。

でもやっぱり二人は不思議そうだった。

私は構うことなく、サラダにはマヨネーズをかけ、バターで和えたポテトのようなものにケチャップをかける。口に運んでみると、どれもしっくりきた。

『…食べてみます?』

あんまりにも強い視線に耐えられなくなってそう言った。すると二人はすぐに頷く。

どうやらイケメン二人は、好奇心旺盛なようだ…と心のメモに書き込んでから、行動に移す。

私はスプーンでスープを掬うと、中性的な人に差し出した。

少し困ったような表情。

あ、マナー違反?でも差し出しちゃったし。いまさら引っ込められないって。

差し出したままにしていると、ゆっくりとスプーンに口を寄せてきて、飲んでくれた。

それを確認すると、今度はもう一人の方にサラダを差し出す。さっき見ていたからか、気にすることなく口に運んでくれたので、腕は疲れずに済んだ。

あれ、反応なし?

二人を交互に見る。すると、少し止まっていた。

あらら、お口に合いませんでしたか?そう心配していると。

「「おいしい…」」

『そうですか。それは良かった。』

そーでしょーとも。

私は満足げに笑みを零すと、残りの物を胃袋に納めに掛かった。

二人が物珍しそうな顔をしてたから、私は尋ねてから同じように調味料をかけてあげる。

すると、嬉しそうに食べ始めたから、一足先に食べ終わった私はその食べっぷりをのんびりと眺めていた。

「「ご馳走さまでした。」」

食べ始めと同じように私の真似をして挨拶をすると、メイドさんを呼んでお茶を淹れてもらっていた。お茶くらい私にだって淹れられるのに。

不躾なのだろうがじーっと観察していると、お茶を淹れて空いたお皿を手に取ると、早々と去って行ってしまった。

「ネイ、本題に移らせてもらうぞ。」

改まった態度に私もキュッと体を縮こまらせて、二人を見据えた。

…イケメンに視線を向けられるのって、居心地悪い。こっちが見つめて目の保養にする分にはいくらでもいいのに。

「こっちは神官のレークサイド・マカリアスだ。」

一時間近くもずっと一緒にいて、しかも食事を共にしたのにも拘らず、漸く名前を知ることができた。

それにしても、こう、何て言うんだろう…神々しい、よね。さっきのあほ神様よりも神様っぽいし。クーンって人と並んでも見劣りしないその姿に、圧倒された。

なんか、私、ふつーだよね。

ちょっと淋しく悲しい気分になっていると、何事もないかのように話は進められていた。

「砂漠で倒れていたネイを回収したのは私だが、砂漠にいるのを視たのはレークだ。」

“私”？さっきまで俺って言ってたのに。俺って言ってた方が、見た目に合ってたからなんか勿体ない。

でもよく分かんないけど偉い立場にいるみたいな雰囲気だし、なんかしきたりとかがあるのかもしれない。

レークって言うからその人に目を向けると、ばっちり視線が合ってしまった。

にっこりと笑われると、俯くことしかできない。直視できません！

「私が盆の前に立っていると、誰もいない砂漠に倒れている貴女が

視えました。知らないと思いますが、あの砂漠は誰も通らないんです。」

…そうだったんだ。誰もいないところに倒れてるなんて、死んでたっておかしくない。

『助けていただいて、本当に有難う御座いました。』

頭を深々と下げる。状況が飲み込めなかったとはいえ、もっと早くにお礼を言うべきだった。

失礼極まりないよね。

「ネイさん、とお呼びしても構いませんか?」

そう尋ねてからレークさんは話し始めた。

「本来ならあの盆には滅多に一人の人間だけが映し出されることはありません。使えるのが私だけなので周りの人間にはバレていませんが、これが知れ渡ると大変なことになります。」

…なんかよく分からんが、大変な事に巻き込まれた?そんな感じは否めない。

二人の顔を見ても、冗談だ、とは言ってくれなさそうだった。

「鏡盆には本来、たくさんの人間が映し出されて、国や世界の状況を知らせることしかできない。」

眉間にしわを寄せていうクーンさんの表情からして、深刻な事態

なのが良く分かった。

もし何かあったら、あのアホ神、何をして詫びてくれようか。ただじゃ済まさん。

「この国の言い伝えでは、鏡盆に映った人間は、神からの声を届ける預言者だと言われている。」

もしや…？

少し俯いた状態から、目線だけを二人に持っていく。

っ！やっぱり！

「察しの通り。預言者はつまり貴方ということになります。そうなった以上、貴女が映し出された鏡盆は、最初の神の啓示があるまで使用できません。

砂漠に倒れているところを保護していることにするので、まだ上の人間には話していません。しかし、知れ渡ってしまうのも時間の問題でしょうね。」

明るい笑顔で言わないでください。まじ、厄介すぎるから。イケメンだから直視できないとか、もう関係ない。

私なんて、この前まで単なる一女子高生だったんだよ？

それが急にこんな見知らぬ土地にやってきて、おまけに神の声を伝える預言者だなんて言われて。脳内の考え事する部分の容量不足。はい、きゃぱおーばー。脳みそぐるぐる。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まった。詳しい話はまた明日にでもしよう。

ネイ、疲れているようだから、もう寝ろ。」

その心遣いに、涙が出そうになった。

「そんなっ！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークさんに目線だけ向けて諌めると、部屋から追い出した。

おー、強引だな。

なんて他人事みたいに思っていると、また手を貸してくれ、ベッドに戻してくれた。

「…眠れそうか？」

あー、心配してくれる姿も様になってますねぇ。漸く見慣れてきた私は、少しだけ笑顔を浮かべて。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

そう言った。

「ネイが混乱しているのは分かっていたのに、こちらの事情で長話に付き合ってもらってしまった。礼を言うのはこちらの方だ。有難う。」

慈愛に満ちた様なその微笑みにどこかを掴まれた気がしたのは無理もない。

イケメン祭はこれにて終了としていただきたいですね。これ以上何かあると、心臓が持ちそうもないもん。

そんなことをぼーっとして考えていると、クーンさんは手を伸ばして頭を撫でてきた。

〜〜一…っ！格好良いじゃないですか。微笑みながら、頭撫で撫で、って反則でしょ。

顔に一気に熱が集まってきた。だから、顔を隠すために俯く。

本当は布団に潜り込みたかったけど、クーンさんの手がまだ私の頭を撫でていたから堪えた。

「ここ、絡まっているな。少し待ってろ。」

何の事かと思って、赤くなった顔を隠しつつ、その行動を横目で追う。近くの化粧台まで言って櫛を持ってきたクーンさんは、ベッドの上に座り、私の髪を丁寧に梳き始めた。

もちろん私はされるがままになり、身体を強張らせる。

「…綺麗な髪だな。」

髪を梳き終わったらしく、もう一度頭を撫でると、お休みと言って出て行った。

『～～―…っ！』

声にならない叫びをあげると、今度こそベッドに潜り込み、布団に包まる。心臓は壊れそうなほど強く、早く脈打っていた。

妖精

「おはようございます！」

目を覚ましたら、ベッドの傍らに女の子が立っていた。

『おはよ、ございます…？』

その元気のいいこと。にっこりとした満面の笑みに圧倒された。

「もう日も上がっています。そろそろ起きても良い頃合いですよ。」

指差された窓の向こうには青空が広がっている。差し込む光から、太陽が大分高い位置にあることが分かった。

それにしても、まずは…

『あの…どちら様でしょうか？』

生憎昨日の状況は目が覚めるまで、夢だって思ってた。結局この部屋にいることが分かったから、ちょっと落胆。で、起きた途端に知らない人。

混乱、混乱。ってなわけで。早速質問しました。

「失礼いたしました。」

きゅっと唇を結び、真剣な表情になる。そんなに畏まらないでほしーんだけどネ。こっちも緊張しちゃうから。

「今日付けでネイ様のお抱えとなりました、お世話役を務めさせていただきます、女官のミリアと申します。」

丁寧に挨拶をされ、思わずつられて頭を下げる。そんな私の行動にびっくりしたのか、ミリアは焦っていた。

必死な言葉に驚きながら、私は頭をあげる。そこにあるミリアの顔は随分と困っていた。

でも仕方ない。

こんなに丁寧に挨拶されたことないもん。そりゃ、同じように返すってのが、道理でしょう。

それに、聞きました？私がメイドさんを抱えるとか言ってましたよ！？…って誰に話しかけてんだか。なんてノリツッコミみたいなことしてみたり。

「さあ、ネイ様。お着替えいたしましょう。」

『ネイって呼んでください。私、様付けで呼ばれるような人間じゃないですから。』

さっきから歯痒かった。私、偉い人でも何でもないし。

でも、ミリアは了承してくれなかった。

「分は弁えなければなりません。」

どうかお許しください、と言ったミリアは、今度は頭を下げる立場になっていた。

そんなにこだわることなのかなぁ。きっと、この世界には階級制度があるんだろーな。

私はそんなものがある日常にいなかったから、それがどんなものかなんて分からない。でも、ミリアのこの行動にそれが垣間見えた気がした。

『…わかりました。』

こう言うしかなかった。

だって、この所為でミリアが何か言われたら嫌だもん。これからもっと打ち解けられたらいいなぁ。

「さ、着替えましょう。」

そこからが地獄だった。

どれにしますか、と言われて開けられたクローゼットの中にはまさかのドレス。

こんなの着たことないし！てゆーか、是非パーカとジーパンで！なんてのはムリみたいで。

ミリアの恰好を見ても、足が見えていないくらい長いスカートをはいている。この世界の恰好は厄介そうだ。

「きっとその白い肌には何でも似合いますよ。」

えっ？なんか嬉しそう？とか思った私が馬鹿だった。

ミリアの性格はちょっと厄介。（すみません、でも事実。）純粋に楽しんでいるから、止めてとは言えなかった。

でも、着せ替え人形みたいになってる間に、いろんなことを話せたからまだマシかな。

ミリアは２０歳らしい。大人っぽいのに、行動に幼さが見えるのはそういうことか。それにしたって胸あるし、色気が半端ない。

世の中って不公平だ。平たいわけではないのに、ミリアよりも少々淋しい自分の胸元が空しい。…目を逸らす事にしよう。

結局、争った結果、私の主張に負けたらしく、スカートが膝下くらいのものを選んだ。

本来は女性が足を出すことはないらしい。でも、あんなの着てたら動けないじゃん。私が大人しくしていられる訳がない。

…自慢げに言うことじゃないけど。

白いワンピースを着せられ、今度は化粧をさせられた。ふわふわなスカートはバレエみたいだなぁと思ったけど、口に出したら不思議な顔をされてすぐに口を噤む。

どうやらこの世界にバレエはないらしい。だから、踊りみたいなもの、と言ってごまかした。

「最後に髪を結いましょう。」

この国では長い髪を結わないのは礼儀に反するらしい。じゃあ、髪が短い人はどうするんだろう、って思うけど、髪が短い人は基本的にはいないんだって。変なの。

髪を梳かれながらボーっとしていると、後ろから唸り声が聞こえてきた。

『…どうしたの？』

「いや、この綺麗な髪を結ってしまうのは勿体ないと思いまして。編み込むと跡が付いてしまいそうで。」

気にすることでもないのに…そういえば。

『昨日、クーンさんも言ってた。』

鏡に映っているミリアは目を丸くしていた。

なんか変な事言った？

『どうしたの、ミリア？』

不安になって声をかける。ミリアは驚いた顔をしたまま口を開いた。

「…クーン魔道師さまはネイ様の髪に触れたのですか？」

『うん、どうして？』

ミリアはやっぱり驚いた顔をしていた。

クーンさんはなんかユウメイジン、みたい？それに、年ごろの女性に男性が触れることは、めったにないと言う。それって、現代日本じゃ考えられない事だよね。

「クーン魔道師さまは女性に触れることは滅多にありません。舞踏会では断れない時のみ、夜会に至っては義務でない限り出席いたしません。

生理的現象の解消の時のみ、女性に触れると有名ですね。女性たちはクーン魔道師さまが誰と結婚するのか気にしています。

人気がありますから、女性たちは競って気に入られようとしているのが現状です。」

ほー…・・あの容姿じゃ当たり前だよね。

それにしてもミリア。

『一気に喋ったね。』

当たり前です、と言って、得意げに続けた。褒めた訳じゃなかったんだけどねぇ。

「女中内でも有名なお話ですもの。女の人たちはみんな噂話が大好きですから、嫌でも耳に入ってきます。」

そうなんだぁ。まあ、女の人の性ってとこだよね。

それにしても気になることが一つ。

『“生理的現象の解消”ってナニ？』

理解できなかったことを尋ねると、ミリアは渋い顔をしていた。

なんだぁ、その顔は？

そう思っていると、大きなため息を一つ零した。

「…ネイ様はまだ知らなくてよいことです。」

そう言われちゃえばもう何も聞くことはできなくて。髪をどう結うかという問題にまた論点が向けられた。

『ポニーテールにしていい？』

そう問うと、返事を聞かないままてっぺん付近で縛った。

「うーん。」

ちょっと悩ましげ。ダメ、だったのかな。

「それはそれでネイ様の差見の艶やかさを引き出しておりますけど、髪は全てきっちりまとめてしまうのが当たり前ですし。」

そっか。なんかいろいろあるんだね。服装は妥協してもらったんだもん。ここは従っておくべきだよね。

そう思った私はそのままお団子にしていく。ミリアはピンで固定するのを手伝ってくれた。

「よくお似合いです。」

…褒められると、どんな反応していいか分かんない。

社交辞令だってのは分かってるんだけど、照れくさかった。

「失礼します。」

ノックの音と共にドアが開いた。

居候の立場で何だが、ドアは返事の後に開けて欲しい。

もし着替えの最中だったらどーすんの。私、仮にも一応女の子だよ?とは言えない。

「おはようございます、ネイさん。よく眠れましたか?」

朝から眩しいほどの笑顔。随分とご機嫌な感じがした。

『おはようございます、レークさん。』

私を見てから頷き、支度は終わったようですね、と言った。

「朝食を運ばせましょう。クーン殿も早朝会議が終わったらこっちへ来るそうです。その後の予定は、私が管理させていただきますね。」

なるへそ。そう言えば、昨日私に聞きたいことがいっぱいあるって言ってた気がする。自分の研究がどう、とか。

その時間がやってくるってことで、レークさんは目に見えて生き生きしてるみたいだ。どうやら私は貴重な研究材料らしい。

妖精 - その2 - （前書き）

明日提出の課題が終わっていない・・・
しかしこっちはサクサク進む。笑

では、続きをどうぞ。

妖精 - その2 -

「悪い、遅くなった。」

嫌な思考を遮るかのように、今度はノックもなくドアが開いた。

お前もか！と言うツッコミはもちろん言えるわけもなく。私はおはようございます、と朝の挨拶をするだけだった。

そんな姿を見かねたのか、ここまで口を閉ざしていたミリアが口を挟む。

「お二方とも、女性の部屋を訪れるのはいけないことではありませんが、ノックと返事を聞いてから扉を開けることを忘れないで下さいまし。

もし着替えの最中だったらどうするおつもりですか。」

そう言うと、朝食の準備をしてきます、と残して出て行ってしまった。

ちょっ、ミリア！言い逃げはないよ！この空気をどうしてくれようか…

紛れもなく気まずい雰囲気が部屋一杯に充満していた。

「…すまなかった。」

しゅんとして謝罪を述べてきたのはクーンさん。

どどどっ、どうしよう?!…可愛いんですけど。

美形は何しても許せる気がするのは私だけだろうか。いや、確か例外（アホ神）もいたっけ。ま、どーでもいいことは置いとこう。

『あの、大丈夫ですから。でも…着替えてるところは見られたくないので、今度からはお願いします。』

てゆーか、見たくもないもん見せられる方が可哀相だしね。見て減るものじゃないって言うけど、見られて減るものならとっくに悲惨なお腹を晒してる。

でも、そんなの見た人の方が不愉快でしょ?ってなわけでお願いに至った。

その後にレークさんも謝ってくれ、三人で朝食をとる。私が違うところから来た事を知らない人に話を聞かせることはできないため、クーンさんは人払いをしていた。

もちろんミリアも。ちょっと淋しく思ったけど、味気ない食事に日本製の調味料を加えるのにはちょうど良かった。

最早口を開いたのはクーンさん。

「ネイの立場はレークの再従兄妹＜はとこ・またいとこ＞と言うことになった。遠い土地からやって来たので、この国のことはよく知らないという設定だ。」

あいあいさ～。立場をごまかす為の嘘ってことですね。了解いたしました、と肯定するために首を縦に振った。

カチャカチャと音を立てながらナイフとフォークを扱う。確かフランス料理のマナーだといけないことだった気がするけど、生憎こっちは毎日箸を使って食べるという文化に染まってる。

今さらだけど、日常でたとえナイフとフォークを使っていたとしても、ファミレスで、とかで、マナーを習ったことはさっぱりない。

ごめんなさい、と内心思っておきながら、口にすることは言い訳じみてて気が引けた。

「この後のことはレークに頼んである。ネイは心おきなくこいつに迷惑をかけるといい。

昼と夕刻には顔を出す。それまで、この世界について知りたいことを聞き、自分の状況を把握して、俺たちに話してくれ。」

いいか、と聞かれ、大きく頷いた。昨日の私のあり得ない戯言を信じてくれているだけで嬉しい。なのに、それに加えて私を支えようとしてくれてる。

もう、感謝、の一言しか出てこない。

だから。

『…有難う御座います。』

深々と頭を下げた。座っている状態だったから、テーブルに頭が

付くぎりぎりまでだけど。

すぐに頭をあげろ、と言う声がかかり顔をあげると、気難しそうな顔をしているクーンさんと、にっこり微笑んでいるレークさんがいた。

「ネイさんは私の再従兄妹なんですから、親類に感謝の言葉など不要です。さあ、朝食を続けましょう。」

優雅に食事を続ける姿を不躾ながらにじーっと見つめてしまい、クーンさんが私のことを見ているなんて気が付かなかった。

食事が済み、昨日と同じくお茶を飲みながらのんびりとしているとノックの音が部屋に響く。それは返事を待たないまま開いた。

…ここの人たちは礼儀を知らないのか？

なんて思っていると、クーンさんに向かって似たような紺色の制服らしきものを着ている男の人が近づいてくる。片膝を立てて傍らに膝間づくと、用件を述べようと口を開いた。

「宰相殿がお呼びです。」

「用件は？」

「大臣たちが疑問の声を上げているようです。昨日のドラゴンの使用についてと、城を抜け出した件について。

早急に、とのことで、失礼ながらも朝食の時間に参りました。」

「そうか。」

二人のやり取りを顔を見ながら交互に見てしまった。映画のワンシーンみたいでちょっと格好良い。

ボーっとカップを持ちながら見ていると、足元に何かがトンッと当たった。

『……？』

ああ、そうか。あんまり見ていちゃいけないってことね。

私の座っている椅子を軽く小突いたのは、紛れもなく今も優雅にお茶を飲んでいるレークさんだった。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

“はっ”と返事をすると、男の人は私を一瞥してから大股で出て行った。

誰だお前って目は痛かったけど、私の方こそ誰だお前って感じ。招かれざる客かもしれない。私だって不本意に訳も分からず、右も左も何も分からない状態でここにいる。

それでも、客人の部屋だと言うことを忘れて欲しくなかった。

…なんて、お世話になっといて私、勝手だなぁ。

「昼にここへ来るのは難しくなりそうだ。」

ため息と共にカップを置く音。その眉間には皺が寄っていた。難しそうな顔はそれでも画になっている。

けど、そのうち心労で倒れたりしそう。さっきの人の態度とかだと、偉い人みたいだから、板挟みとかにならなきゃいいけど。

立ちあがったクーンさんを見上げると、一瞬だけ表情を緩め、おでこを軽く撫でた。

「その服も髪型もよく似合っている。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

そう言うだけ言うとさっさと行ってしまった。途端に顔が熱くなる。

何その顔、何その台詞！それこそ言い逃げだって。

『〜〜……っ！』

声にもならず悶える。カップのお茶はもう温くなっていた。

「クーン殿があれほどまでに気を許しているのは珍しいですねぇ…ところで、その反応は何なのですか。」

別段気にすることなどないでしょう、と尋ねてくるレークさんの反応こそどうした、って思う！

イケメンは目に入れ過ぎると痛いことがよく分かった。学習して、次からは直視し過ぎないようにしないと！私の心臓が持ちません！

スー、ハー、と深く深呼吸。心を落ちるかせるためにはこれが一番効く。

ようやくそれを止めて目を開くと、レークさんはずっとこっちを見ていたみたいで、不思議そうな顔をしていた。

『すみません。落ち着きました。』

謝罪の言葉を述べると、もう一杯飲むために女中さんに頼んで淹れてもらうと、二人きりになった部屋で面白そうな顔をしながら質問してきた。

「随分と混乱していたようですが、どうかなさったんですか？」

どうもこうもないよ。ってのは説明にならないよね。てゆーか、そこ聞くんですか。

『いやー、男の人に触れられたことなんてなかったものですから、少々混乱してしまいました。』

「ご家族に男性はいらっしゃるでしょう？」

はい、いますとも。

お父さんがいますけど、そんなに関わりないし。

『年齢が近い男性、しかもイケメンなんて、私の周りには未だかつて存在したことなんてありません。

だからどうも緊張してしまって。』

そう言うと、また首を傾げている。どうやらここの人たちとは価値観が違うみたいだ。

「いけめん、とは何ですか？」

…あ、そこですか。イケてるメンズ、なんだけど、めちゃくちゃな日本語は伝わらないってことか。

ってゆうか、今さらだけど何で言葉が伝わってるの？

『クーンさんもレークさんも格好良い、と言えば伝わるでしょうか。うーん、顔が随分と整ってらっしゃるから、じーっと見られると、平凡過ぎる私にしたら心臓に悪いんです。

きっと二人はおモテになるでしょうから、そんなことを思って勝手に緊張している私がいけないんです。慣れてきたらきっと大丈夫ですから、気にしないでください。』

そう一気に言い終わると、一息ついて、お茶を口に含もうとする。けど、猫舌な私はふーふーと息を吹きかけて冷ます破目になっていた。

「“おモテになる”？」

あー、伝わんないんだ。今度からきちんとした言葉に直さなくちゃ。

まだ不思議そうにしているレークさんに“女性に人気で、たくさん言い寄られていそう”な事の意だと伝えると、納得したように頷いていた。

やっぱりモテるんですか。

ところで。

『私、日本語を話しているつもりなんですが、どうして言葉が伝わってるんでしょうか。』

大き過ぎる疑問。さっき、レークさんの口元を見ていたら、明らかに日本語じゃない動き方をしていた。

と、言うことは。

レークさんたちが喋っているのは日本語じゃない。じゃあ、どんな言語を喋っているの?それがどうして私に伝わっているの?疑問は膨らむばかり。

きっとそれはレークさんも一緒。

妖精 - その2 - （後書き）

今夜は徹夜だ！

閑話（前書き）

クーンサイドのお話です。

閑話

レークに言われたことは俄かに信じ難かった。鏡盆に一人の女の子が映し出されたと言うのだ。

これは単なる神話ではなかったのか？

そう疑問に思いつつも、鏡盆を除くことができない俺は、指示に従って動くこととしかできない。

誰も通らないはずのシュラスバンド砂漠に黒髪でおかしな格好をした女の子がいるはずだと言われ、俺はすぐさまに国所有のドラゴンを一匹拝借した。

その所為で今審議に巻き込まれてしまっているのだが。

「宮廷魔法師及び、騎士の一等指揮官でもある貴方であろうと、いかなる理由があってもドラゴンを自由にできるはずはないと思われるのですが？

これは吾輩の判断が間違っているのだろうか。」

…ちっ、狸ジジイめ。

先程からつらつらと告げているものを聞きながし、自分の思考に耽った。

赴いて行った砂漠には本当に不可思議な格好をした女の子が倒れていた。と、言うことは、神話が実現してしまったのだ。

あり得ない。

そう思いながら、倒れている女の子に近寄って声をかけた。

「大丈夫か？」

女であるにもかかわらずズボンを穿いている。まずここがあり得ない。それに加えて素材が分からない袋、明らかに造りがおかしな鞄。

…まさか、本物か？いや、それは少女に聞いてみてからの判断だろう。まずは取り急ぎ運ばなければ。

「大丈夫か？」

もう一度問うと。

『待ちやがれ、アホ神…』

空耳だと信じたい。

耳を疑うような神を冒涜する言葉と、口調。もしかして下級市民か。いや、それにしても格好がおかし過ぎる。

『…んっ、暑……』

本人に聞くしかないのか。そう思いドラゴンに乗せると、急いで都へ戻った。

そこからが大変だったのは無理もない。

ドラゴンを返しに行くと、飼育係に泣きつかれた。俺が責任を持つ、と言い残して、少女に目がいかないように、なるべく勤め、使われていない客室に連れていく。

レークの幼馴染みが女官を務めているのは助かった。世話を頼むと、何食わぬ顔をして常務に戻る。　その時はまだドラゴンのことはバレていなかった。

ルイス派が何か嗅ぎつけたのかもしれないな。あいつは少々厄介だ。

仕事を終え、真っ直ぐに客室へ向かう。いつにもまして終業が遅くなったため、もう目を覚ましているだろうと寝室へ向かうと、その少女は目を閉じたままだった。

…儚げだな。

見てまずそう思った。

抱きあげた時には羽が生えているかのごとく軽く、感触からして

華奢だと分かった。身長もそう高くはない。

きっとまだ成長途中なのだろう。

そう思って不躾にも見つめると、眉間にしわが寄る。

肌は白く透き通っていて、唇は果実を思わすように色合いも良い。

黒髪は艶やかさが際立っていた。

…触ってみたい。

そんな衝動に駆られてから、いくら少女だからと言ってそんなことをしていいはずがないと自分を叱責した。

それからどれだけ時間が立ったのだろうか。じっと見つめていた少女は顔をしかめる。それから小さく声を漏らした。

『んッ…』

その直後に長いまつげに縁取られた目は、少し眠たそうに開いた。

「おい、大丈夫か？」

もう一度声をかける。しかし、よく眠っていたようだし、まだしっかりと頭は働いていないらしい。

しばらくして大きな目をさらに大きく開くと。

『ここ、どこ？』

そう呟いた。その声は掠れていたが、どこか引き込まれてしまうような甘い声。少女にぴったりだと思った。

「ここはデューク王国の城だ。自分の状況は、理解できているか？」

身体を起こし、それから俺をその瞳に移した。ようやくこの場に俺がいることを知ったらしい。だが、俺が言ったことに微塵も反応しない。

もしかして、記憶喪失、とか？砂漠に倒れていたくらいだし、何かあったことは明白だが、まさか、盗賊に襲われて捨てられた、とでも言うのだろうか。

『てゆーか、あなた、誰？』

少し舌っ足らずな言葉使い。しかし不思議と不快には思わなかった。

「ああ、自己紹介がまだだったな。デューク王国の宮廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リッキンデル・シェパードだ。」

せっかくの述べたのに、反応を示さない。俺の顔をじっと見つめているようだ。

…何か付いているのか？

しかし、その魅力的な瞳に見つめられていると、どうも居心地の悪さを感じ、口を開いた。

「おい、大丈夫か？」

まさか、どこか具合の悪いところが？

ぐっと身体を前のめりにして様子を伺おうとすると、顔を赤く染める。

まさか、熱が出たしたのか？と、思ったが。

『だ、大丈夫だす！』

『「……」』

思い切り噛んだようだ。見ず知らずの男がいるわけだし、いつの間にか知らない場所にいた。混乱している上に、きっと緊張してるんだろう。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかったように会話を続けた。こう言うことは気にするべきではない。それに、何事もなかったような顔など、し慣れている。

その様子にホッとしたらしく、今度は間髪開けずに質問に答えてくれた。

『ネイ。サカキバラ・ネイ。』

「サカキバラ・ネイ？どっちが名前なんだ？」

とっさに疑問をこぼしていた。

名前の形式として、どこか不思議な音を持っているそれは、発音

し難い。そして、“サカキバラ”も“ネイ”もどちらも名字にはありそうなものだが、名前としては違和感を持つ。

少女は不思議そうな顔をしながら、考え抜いた挙げ句に答えた。

『ネイ。ネイが私の名前。』

やっとのことでそう言う姿は、真っ直ぐに俺を捉えて離さない。その瞳は澱みなく輝いているように見えた。

思わず笑みがこぼれてしまった。そして、いつになく珍しいことをしてしまったと思い、いつもの表情に戻す。それから質問の続きへと戻った。

「ネイ、自分の状況が理解できるか?」

考えている様子から、全く理解できていないことが伺える。こう言う時は急かしても無駄だろう。

『…今から言うこと、信じてくれますか?

頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言います。だけど、真実だから。』

考え抜いたのであろうその言葉に、疑問を持った。

“信じてもらえない”ことを話す?それはきっと勇気がいるのだろう。瞳には涙が集まっていた。

零れさせまいと我慢している姿は抱きしめてやりたい衝動にから

れた。それを何とか引っ込めると。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

そう言った。なるべく、感情を見せないように。

もうしばらく耐えるような表情を見せて、それから語り出した。

『ここが何処だかは分かりませんが、さっきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

別段気にすることもない、普通の話だ。それも真実に則っている。

『でも、その前には日本って国にいたんです。』

“ニホン？”

次に述べたことは、理解できないものだった。ニホン、とはどこかにある土地のことだろうか。今まで耳にしたこともない。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。あそこでジュ…何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

分からない単語だらけだ。それにしても。

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

そう本気で心配してしまった。もしくは空想癖のある子なのか？
そうであるならば、管轄外だ。俺の手には負えないのかもしれない。

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。
ニホンに、神様、ねぇ。」

信じがたいことだらけ。それを証明することはできないが、この少女の戸惑いようから言って、嘘をついてるようには思えなかった。

『あ、買い物袋がない…』

小さな呟きに、頭では別のことを考えながらも答える。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

すると、すぐさま手を伸ばそうとした。が、まだ力が入らないのか、ベッドから落ちそうになる。

『きゃっ…！』

小さな悲鳴があがる。しかし展開が読めていた俺は、迷うことなく手を伸ばした。

「危ない。」

でも。…こんな展開は予想していなかった。

腕に力を入れて抱きしめたネイは、ふわりとせっけんの香りがする。それに、抱き心地が…非常によかった。

『ご、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

焦ったように言葉を紡ぐその姿は愛らしく、もうしばらく腕に納めたいと思ってしまうほどだった。

あり得ない、この俺が。

思考を切り替えようと、話を別へと進める。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えさせたに決まっているだろう？」

この娘が着ていて物は、うちの女中に洗わせることにした。それにしても、二人で首を傾げてしまうほどの変わった衣服は、着ていては異国の者だと気付かれてしまう。

それでも、勝手に洗っておいて返さない訳にはいかないため、乾いたら持ってくるように言っていた。

『あの、これを私に着せたのって…？』

顔はもう真っ赤だ。

俺じゃないかと心配しているのか？

疑われるのは嫌だと言わんばかりにすぐ答える。

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とは言っても女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

安心した表情をしてくれるかと思ったが、顔をしかめている。何か気に障ること、言ったか？

その答えはすぐに分かった。

閑話 - その2 - （前書き）

クーンサイドが続きます。

閑話 - その2 -

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

女性なら本来聞かれたくないことだろう。しかし聞かれては答えるしかない。

「１４くらいだろう？」

思った通りの年齢を述べる。少し強張った顔。やっぱり失礼な事を言ったのかもしれない。

『私、１８です。』

「…すまない。顔つきや身長から言って、まだ成人していないかと思った。」

返ってきた答えに驚いて、すぐに謝った。それにしても、若く見える。

『ここでは何歳で成人ですか？』

あまりにも真剣な表情。それは普段からも若く見られがちな事を気にしている風に見えた。

「１５だ。」

そう言うと少し考えて、年齢を問われる。２４と答えると、上から下までじっと見られて、大きなため息を零した。

と、思ったら。

ぐー。

突然の大音響。彼女はさっきの顔よりももっと赤い顔をしていた。

「食事を運ばせよう。」

ずっと寝ていた所為か、水分も口にしていない。もっと早くに気にするべきだったな。食事の準備をさせるように女中に言いつけ、ネイに目を戻す。

「大丈夫か？」

ベッドに身体をもう一度預ける姿があまりに辛そうなので声をかけると、苦笑いで頷いている。何とか席に付けたようだが、身体は重そうだった。

それからレークが来ると、話をしながら食事を始める。その時にいった言葉は初めて聞いた言葉は俺とレークの心に留まった。

どう意味かを問うと、慈愛に満ちたような表情。それに惹きつけられ、思いがけず不躾にもじっと見つめてしまった。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そんなモノの命を奪って人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になって私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの力を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられるって感謝するのですよ。』

なるほど。

当たり前過ぎて気が付かないことにも感謝を述べている姿は、心を大きく揺さぶったような気がした。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のもののようです。」

面白そうな顔をしているレーク。その間も手を止めないネイの食べっぷりに満足していると、急に手が止まる。

嬉しそうにしているレークは気にしている様子もなく、少し上の空で笑顔を浮かべていた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だったじゃないか。」

腹が鳴るほど空いている様子だった。それを掘り返した所為か、また顔を赤くしている。今日は何回顔を赤くさせたら気が済むのだろうか、と少し微笑ましくなった。

「ネイ？」

何しゃべらないと思ったら、急に立ちあがり、ネイの物らしい荷物の所へ寄って行った。ガサガサと音を立てながら漁っている。

何がしたいのか分からず、見つめることしかできない。

しばらくすると、何かを抱えて戻ってきた。どん、と音を立てながら並べていく。訳の分からない容器に入っているそれらは、変な色をしていた。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

さっきまでは戸惑っていたのに、今は随分と嬉しそうだ。楽しげな笑顔をしながら、俺の質問に答えてくれた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、醤油に味噌です。』

調味料？味を整えるために使うヤツ、か。それにしても、どれも聞いたことない。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなって。』

国の味…ネイの国の味、は随分と気になった。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会う万能調味料です。』

そう言って、スープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなった液体。それを口に運んで、思わず笑みを浮かべている。口に運んで、何かに満足したように頷いていた。

『…食べてみます？』

それがどんな味なのか、気にならないと言えばうそになる。…でも、まだ名前も知らないはずのレークに先に差し出すのは気に入らない。

しかも自分が使っていた食器を使って、だ。

少々恨めしくなり、横目でにらみ付けるように見届けたあと、自分にも同じように差し出されて満足する。

あまり、このような事に頓着しない性格なのかもしれないな。

差し出されたものを口に入れてみると自然と言葉が零れた。

「「おいしい…」」

変わった味だが、深みがある。今までに食べていたものが、薄く感じられてしまうほどに。

『そうですか。それは良かった。』

いつの間にか食べ終わっていたネイは、俺たちが興味深そうに見ていた調味料をかけてくれた。

今まで俺が食べていたものと味が全く違う。格段に美味くなっていた。これ外国の味だと言うのだろうか？

ネイが食べ終わっていた時の挨拶を言うと、女中を呼んでお茶を頼む。その作業を飽きることなくじっと見つめている姿は微笑ましかった。

一服しつつ一通りの話をしてみると、段々表情を暗くしていく。大分、情報を詰め込み過ぎたのか、少し待って欲しそうだ。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まった。詳しい話はまた明日にでもしよう。ネイ、疲れているようだから、もう寝ろ。」

そう言うと、嬉しそうに笑顔を浮かべている。それに満足した。

…満足？なぜ俺は満足しているんだ？

「そんなっ！情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークに目線だけ向けて諌めると、部屋から追い出した。

強引だと分かりつつも、ついつい行動してしまったことに反省するべきだが、俺としてはレークに謝るつもりはない。

…正直、この時間は俺に欲しい。

「…眠れそうか？」

さっきまで長時間寝ていたはずだ。もし眠れないようなら、話相手にでもなろう。そう覚悟していたのだが。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

ネイはそう言った。

…何故がっかりしてるのだろうか。

しかし、それをおくびにも出さずに礼を述べた。褒めて欲しいところだ。

「ネイが混乱しているのは分かっていたのに、こちらの事情で長話に付き合ってもらってしまった。礼を言うのはこちらの方だ。有難う。」

…どうして手が出てしまったのだろう。無意識にネイの頭を撫でていた。思っていたよりも細い髪はサラサラして、指通りがいい。

ん？一か所、髪が絡まっているような感触がした。

「ここ、絡まっているな。少し待ってろ。」

近くの化粧台まで言って櫛を持ってきて、ベッドの上に座り、髪を丁寧に梳く。

「…綺麗な髪だな。」

ずっと触れていたい衝動にかられたが、鏡であったばかりの娘にここまで固執しようとしている自分に驚いた。

…きっと、妹みたいだから、だな。うんうん、と頷いて、自己完結する。

もう一度頭を撫でると、おやすみ、と挨拶をして部屋を出た。

「クーン殿っ！聞いておられますかな。」

「…ええ。」

…物思いにふけってしまった。

気が付いたたら血圧が上がったような真っ赤な顔が目の前にあった。赤い顔と言っても、ネイとは全然違う。

向こうを可愛らしいと言うならば、こっちは不愉快になる顔としか言いようがない。

そう言えば、今朝の恰好はよく似合っていた。

シュエランがやって来た時に驚いた様子だったネイには謝るべきだな。あいつも返事の前に扉を開けていたからな。

ネイが俺とシュエランの会話をオロオロ見ていたのは知っていた。交互に見上げているのは小動物を連想させ、大きな黒い瞳に魅了されたのは言うまでもない。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

先にわざと行かせる。途中退場になってしまうため、言いたいことを真っ直ぐに伝える。その時に、

結われている髪を避け、額の辺りを撫でた。

「昼にここへ来るのは難しくなりそうだ。…その服も髪型もよく似合っている。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

我ながら、柄にもない、気障ったらしい事を言ってしまったとは思う。だが、後悔などしていない。

…そもそも、時間が空く可能性があるのだろうか？とりあえず、ジジイにもっと血圧でも上げてもらって、普段の仕事に戻ろう。

「昨日、ドラゴンを使ってレークの再従兄妹を迎えに参りました。その際、賊に絡まれていたらしく、保護を頼まれましたので、若輩者ながら承らせていただきました。」

「どうやって賊に襲われているのを知ったのだ？っ！まさか。まさか、あの方が本当に現れたのか？！」

あほか。そう言いたいのを何とか抑える。

「大体は約束の時間に来ないことで何かがあったに違いないと分かっておりました。嫌な予感がするとのことで駆けつけて行きましたところ、襲われそうになっておりました。

その再従兄妹君には見込みがあるらしく、今回は鏡盆を見せるために招いていました。」

淡々と語る。ここ数年で無表情になることは慣れていた。何気ないことのように語るフリも。

そして言えることは、こんな奴らにはネイを合わせたくない。

実際はレークの再従兄妹と言うだけでも危ないが、異国、いや異世界からやって来た娘などと言っては、神話に沿って崇められてしまう。

そんなことをしたら、ネイは飾られたものとして神殿に軟禁状態になってしまうのが目に見えている。

そんなこと、絶対にさせてはやらん。

「そんなことっ、われわれに黙って行ってよいと思っているのか？！」

あー、うるさい。こんな時間があったら、政の一つに時間を費やした方がいいことを知らないのだろうか。

いや、こいつらにそのような事を考えるような能力はなかった。

呆れたようにため息をつくと、丸投げにもとれる発言をする。後は任せた、と言う意味を込めて。

「今回のことは宰相殿にも知らせてあった故。未来の神官候補として受け入れる前に、その素質を確かめるために黙っておりました。まだうら若き乙女なのです。

今後の幸せを考えると、中途半端な力の所為で人生を棒に振ることもないでしょう。そこの見極めのために、黙っていたことは謝罪いたす。

しかしながら、そのように判断の鈍る若さを持った乙女に揺さぶりをかけようとする輩もいましょうから、黙っておりました。」

ここまで言われては誰も何も言えないだろう。少し厄介な事と言えば、何も知らないはずの宰相殿が巻き込まれていることだ。

そして、笑顔を浮かべていることから大層ご立腹だと分かる。

…とりあえず、避けるとしよう。しかし三日と持つまい。そうなったら腹をくくろう。

そう決意してその場を離れた。

閑話 - その2 - （後書き）

クーンさん、意外と感覚だけで動いてますよね。
次回はまたネイちゃん視点です。

楽しみの時間

もうそろそろやってくる時間。

そう思った次の瞬間、ノックの音が響き渡る。

ほら、キタ。

少し身体を強張らせ、一呼吸置いてから“はい”と返事をすると、扉が開かれた。

「もう風呂は済ませたか？」

それにもはい、と答える。すると、さも当たり前かのように私がいるソファへやってきて、タオルを私の髪へあてた。

これはもう三日も前から始まっている。何で習慣づいてしまったのかはよく分からなかった。

ただ、髪を乾かしてもらうのは気持ちいいから、私は嬉しそうに私の髪を拭うクーンさんに身を任せることが身についてる。

止めた方がいいと思いながらも、どこか緊張感のあるこの時間が、実は何よりも好きだ。

昼間は最近ミリアと一緒にいて、この国について学んでいる。初日こそレーンさんは一日中地球について質問してきたが、あまりに多くの時間は費やせないらしい。

それでも、食事の時は必ずやってきて、子供がおとぎ話をせびるように、いろいろと質問していった。

それに比べてクーンさんとはめったに会えない。たまに食事を一緒に摂るけど、昼間にあったことはなかった。

レークさん曰く、忙しいらしい。

じゃ、神官は忙しくないのか、と聞いたら、今は祀り事がないから忙しくないって言ってた。

その代わり、行事の時には寝る間もないほど忙しいんだって。

で、昼間は忙しいクーンさんがやってくるのは就寝間際になっていた。時間と言っても、正確には分からないんだけど。

この国には、いや、この世界には太陽が６コ、月が６コある。おそらく一日は２４時間で、太陽も月も、一つで二時間を表していた。

朝の６時ほどに太陽が一つ出る。これは朝の６、７時を表す。二時間たつと、光る太陽が一つ増えることになっているのだ。夜はこれが月に変わるだけ。

便利にできているようで、しっかりと把握できるわけではない。しかも法則を知らないでいると、私みたいに卒倒する羽目になるだろう。

そりゃそーさ。あるはずもない太陽が６つもあったんだから。

で、月が三つ上がるころにクーンさんはいつもやってくる。そしてお喋りをしながら、タオルで私の髪を拭ってくれるのだ。

「よし、こんなものだろう。」

乾いた髪に櫛を通すと、満足そうに頷いている。私はいつものことながらお礼を言った。

すると、頭を撫でてくる。

ぐちゃぐちゃになった髪をまた梳くのもクーンさんだった。

…だったら最初からら撫でるのやめればいいのにね。二度手間だって。

そう思っても、どこかで止めて欲しくないって思ってる。結局のところ、クーンさんに甘えきっている自分がいた。

手を取られ、寝室まで連れて行かれる。ベッドに横たわると、布団をかけてくれた。まるで小さい子供に戻ったみたい。

『クーンさん、私、子供じゃないんだから自分で髪を乾かすのも、布団をかけることもできますよ?』

朝も早くから会議だと言っていた。それに帰るのはいつも深夜近く。ちゃんと眠れているのか心配だった。

「…そんなこと言うな。」

え?

絞り出された声はどこか悲痛そうで。弾かれたように起き上がると、ランプの薄明かりの中、しっかりとクーンさんの顔を見ようと努めた。

「俺はレークやミリア程ネイに会える訳じゃないから、夜のこの時間を楽しみにしてるんだ。一日の楽しみを奪わないでくれ。」

それは思いがけず、懇願だった。でも、顔色を伺えば、疲れているのは一目瞭然。目の下にはクマがある。

ってことは、現在進行形で疲れてるってことだよね、うん。

一人で頷いていると、名前を呼ばれ、意識の焦点を横の人に合わせる。

『本当に楽しみなんですか?』

それを切り口に、思っていることが溢れ出した。それはもう、堰を切らせたかのように。

『クーンさんはいつも仕事を終わらせてからすぐに来てくれているみたいですけど、それでこの時間と言うことですよね?ってことは、これからお屋敷に戻るともっと遅くなるはずです。

それなのに、朝は私が起きるよりも早く、城に来ています。そんなに働いてどうするんですか。

他に無能でも政をこなすための人数はいるんじゃないですか?

てゆーか、早朝から深夜まで働くなんて、労働基準法を丸無視してますよね。』

例えば、朝８時くらいのスタートとすると、夜の１０時位まで働いてることになる。ってことは、１４時間勤務?!

ありえない!働き過ぎ!!

どんな世界でも統治するための政治が必要だって分かってる。議員とか、ここの場合だと貴族って類のものの数が多いってことも。

レークさん、言ってた。この世界には貴族階級の人がいるんだって。その階級を持つ家の主が、国の中心である国会に参加して会議をしてるんだって。

そんな中でも、理由は教えてくれなかったけど、クーンさんは大変な立場にいるみたいで、休む暇もないらしい。

気にかけてあげて、って言ってたレークさんの言葉に、私はつい頷いてた。

…思い返してみると、夜にやってくる時も朝にやってくる時も、いつも疲れた顔、してた。もっと早く聞くべきだったのに。

「気にしてくれて有り難いが、いくらネイに言われても俺はこの時間を止めるつもりはない。」

…なに、その断言。そして、無意識ですか?その極上の表情(カオ)は。

最高に格好良く見えるその表情は、私の心臓を鷲掴みにした。き

っと顔も赤いに違いない。

ホント、格好良い人は何しても許されるどころか、むしろ公害に近いくらいに自分に負担が来る。

要するに、目の保養は行き過ぎると毒になるってこと。俯くしかできない私の意思なんて、端から叶うはずもなかった。

それでも譲れないことが一つ。残念ながら、私はその方法なんて微塵も分かりはしないから、直接本人に尋ねるしかない。

『…私がクーンさんにしてあげられることはありませんか？』

何でもいいから、何かできることをしてあげたい。だって、クーンさんは私の命の恩人だもん。あんな砂漠で倒れてる人間を助ける人なんて、いないはずだったのに。

それなのにクーンさんは国軍のドラゴン？を動かしてくれた。

レークさんにこの国のことはたくさん聞いてる。魔法が在って、不思議な生き物がたくさん居て、妖精さえもいる世界。

この世界の最高峰であるこの国のために一番働いてるのはクーンさんなんだって。

クーンさんは私が知っていることを知らないけど、私を助けた時に使ったドラゴンのことで、たくさんの人たちに責められてるみたい。なのに、私は悠々とここで生活して、尚且つクーンさんの負担になってる。

…それが、どうしても許せないの。

「ネイ、有難う。しかし、そこまで気を使うことはない。」

『でもっ…！』

違うんだ、と言ってクーンさんは首を横に振る。それは初めて私の言葉を遮った。

「ネイは俺たちの世界の人間とはものの考え方が違う。価値観が違うんだ。

それは俺に癒しを与えてくれる。今まで当たり前であったことを違うと言うネイは、面白い。俺に直接向かって働き過ぎだと言うヤツに初めて出逢った。」

クシャッとした笑顔は、今までで一番私の心を震わせた。

…ホンモノ、だって思ったの。

数少ないクーンさんの表情。大部分は無表情。その中で、今の笑顔は、間違いなく本物だった。

『私にできることを教えてください。』

譲れない。何かしてあげたい。義務感とかじゃなくで、自分の意志でそう思った。

今の笑顔が毎日、無条件で出るようにしてあげたい。それは、私にできることじゃないかもしれない。

でも、できることかもしれない。

可能性が１％でもあるんなら、私はそれに賭けて、命の恩人にしてあげられる事をしたい。

「では、この時間を、出来る限りずっと俺だけの物にしてくれ。望むのはそれだけだ。」

『そんなの、望むことじゃないでしょ！』

あっ、タメ口きいちゃった。

ごめんなさい、って呟くと、勢いが殺がれて黙る。すると、大きくて重みのある手が私の頭を撫でていた。

「今、ここから一歩も出してあげられないんだ。それを俺は謝らなければいけない。

それに、今は何とか先延ばしにしているが、これからこの国のことにおそらく巻き込んでしまう。今のままのネイでいて欲しいのに、これから起こることはきっとネイの負担になる。」

そう言ったクーンさんは少ししゅんとして見えた。

自分のことを考える暇がないくらい働いてるのに、私のことばっかり心配して！お人好しにもほどがあるよ。

私のことなんかより、もっと自分の事に気を使うべきだ。そこは、

どうしても譲れない。絶対に考えてもらうように、しなくちゃ。

『いつか、絶対クーンさんのお願いを聞いて見せますから！考えて置いてくださいね。』

結局、そんな約束を取り付けることしかできなかった。これが約束できただけいいのかもしれない。

この時の帰り際に言っていた、二、三日したら会いにくる人がいるかもしれないと言うことが現実のものとなるなんて、この時の私は想像もしていなかった。

宰相さま、登場（前書き）

お気に入り登録をして下さった人がいるみたいで。
とてもうれしいです。

これからも頑張りますので、ひとつ気長にお付き合いください。

では、続きをどうぞ。

宰相さま、登場

「それでは、箱のようなものに映像が映し出されるんですね！
でもそれは…」

勘のいい方はお気づきでしょう。私がレークさんに説明しているのは、テレビです。

いやーね、もっと上手く説明するはずだったんだけど、箱って言っちゃったわけですよ。

さらには絵心が最悪なもので、言葉を探すしか伝える方法はない。

『目に見えているものとほぼ同じ映像を映し出せるんです。』

その一言に、おお、と驚きの声を上げて、目を丸くしている。ちょっと、面白いかも。

…ああ！ちょうどナナメ掛けの鞄の中にケータイ入ってたと思う…

そう思って鞄の所へ近寄って行こうとしたら…

「失礼する！」

おう？！

何事かと思ってドアの方を見る。そこにはオロオロしているミリアと、厳格そうなおじさんが立っていた。

『どちら、様でしょう？』

明らかに怒ってらっしゃいますよね？ってくらいの雰囲気を纏っている。初対面なのに、私、このおじさんを怒らせるような事を何かしたんだろうか。

否。…記憶にない。

てゆーか、この部屋から一歩も出てないのに、むしろ迷惑をかけるって言う方が難しい気がする。

困ってレークさんを見てみると、苦笑いを浮かべて肩を落としていた。

…その反応、なに？

何が起こるか分からない状況に戸惑う。そして、どうすることもできなくて、とりあえず身構えてみた。

「宰相殿、ようこそ御出でで。もちろん、このことはクーン殿は知っておられますよね？」

何この空気。現代っ子だから、もちろんそこは読んで黙るけど…

一触即発？

でもなさそーだけど、レークさんの笑顔が胡散臭い、いや、どす

黒い…でもなくて、張り付けた様なものなのは確かだ。

「ヤツにはめられた。」

お気の毒に。

何にはめられたかはよく分からないけど、眉間のしわの深さに、何だか哀れになった。

さっきまで怒ってるみたいな感じだったのに、そうでもなかったのかな。顔つきは元々そんな感じみたいだし、この人もクーンさんと同じく疲れた顔をしている気がした。

「ミリア、あいつを呼んできてくれ。」

かしこまりました、と言うと、当たり前のようにミリアは行ってしまった。

なになに?!今から何が起こるって言うの?

それよりも、あいつでだれか伝わってしまうのがすごいと思った。

一人、訳も分からず立ちつくす。すると、おじさんの目が私を捕えて離そうとしない。

…怖いんですけど。かなり。

苦笑いするしかできなかった。

「貴女がレークの再従兄妹、かな。」

うっへぇ。本気で怖いっす。

けど、ここで委縮する訳にはいかない。クーンさんのマイナスに繋がることだけはしたくない。

『お初にお目にかかります。ネイと申します。』

ゆっくりと丁寧に礼をして見せる。顔を上げた時に部屋にいた四人は驚いているようだった。

ちょうど入ってきたクーンさんとミリアは入口のところで固まっている様子。

どこか変、だった？

一人オロオロとしていると、おじさんは急に笑いだした。ひとしきり笑った後、さっきの顔とは違う柔らかなものを浮かべている。それにちょっとだけ安心した。

それにしても、急に笑い出すなんて、ワライタケでも食べたのかな？

「実に肝の据わった娘だ。・・・気に入った。」

ん？気に入られた・・・って何事？

周りを見渡してみても、どうやら状況が理解できていないのは私だけみたいだ。とりあえずお茶にしましょう、というレークさんの言葉で、この空気は一時保留。

ミリアがお茶を入れて部屋から出ていくまで、椅子にくっついたように留まるしかなかった。

「さて、この馬鹿が丸投げした話の真実を教えてもらおうか。」

おじさんが顎で指したのはクーンさんだった。クーンさんが馬鹿だなんて、そんなこと言ったら私はどうなるんですか?!って、言いたくても言えない。

だって、ここの中で話しを理解できていないのは、私だけみたいだから。

「ネイ、設定を言ってくれるか?」

急に話を振られた私は、中身を溢さないようにカップを置き、三人の顔をしげしげと伺いながら口を開いた。

『私はレークさんの再従兄妹にあたり、一族の中でもレークさんに次ぐほど力があると言われています。

そのために神官見習いの候補生として王都を訪れようとしたところ、賊に襲われそうになってしまい、そこをクーンさんに助けられました。

現在はその休養をとるために、城の一室を借りています。』

早口でそう言うと、大きく息を吸い、同じように大きく吐いた。

間違えてはいないはず。ここ二、三日ずっと確かめられてたこと

だから。

そんな私の様子を見て、おじさんは大きくため息をついた。どうやら、聞きたかったのは、そういうことではないらしい。

「設定などではなく、事実を教えてくれ。」

なるほど。それなら、確かにさっきのでは答えにはなっていない。

ここで口を開くのは私であるべきなんだろうけど、事情を話し始めたのはクーンさんだった。

「ネイは鏡盆に映し出された。」

それだけ言えば分かるのか、妙な沈黙が息苦しい。おじさんは目を見開いたまま私をその瞳の中にとらえていた。

「この方が…」

何処の方よ?

急な態度の変化。それに、崇めるような暑い視線は、かなり居心地が悪い。私は目を逸らすと、カップを手にとり、息を吹きかけて冷ましにかかった。

「ネイは砂漠に倒れていたんだ。それでここまで運んできた。話を聞いていると、予言通り、とでも言おうか。

この娘は価値観がどうも異なっていて面白い。しかし、政に引き込まれていいような子じゃない。純粋な、良い娘なんだ。」

私に注がれているクーンさんの熱い視線には気付かなかった。それ以外の二人は何かしら悟ったみたいだけど。

「しかし、そうもいかんだろう。鏡神祭は一月後に迫っている。それまで見鏡盆が使えないことが知れ渡ったら、ただじゃ済まされない。」

そうだろう、とレークさんに問いかけるから、私はそちらを向く。目があったレークさんの表情は少し困っているようだった。

事実、らしい。確か、前にもそんな話してた気がするけど。

「その通りですが、私はクーン殿に賛成です。この乙女を政には引き込みたくない。大人の汚い世界に巻き込むなんて言語道断です。

ルイス派の人間にとっては格好の獲物となるでしょう。それに、まだ預言者＜最後の乙女＞と決まった訳ではありません。」

…私は動物か？獲物になって狩られるなんて、冗談じゃない。

それにしても最後の乙女ってナニ？

意味のわからない単語に戸惑っている私を置いて、話は進んで行った。

「一月後まで何とか隠しましょう。国王陛下には鏡神祭の後に報告すると言うことして、とりあえず乙女かどうかの判断は明日の日没後にいたしませんか？」

私のことなのに私を省いて話が進んでませんか？

ふとした疑問だが、助けてもらった時点でこの話が始まっているみたいだ。

私は一体何者な訳？ここでは稀有なものとでも言うんだろうか。さっきのこのおじさんの熱い視線の事も気になるし。

もう我慢ならない。分からない事を聞くことにした。

『口を挟んでごめんなさい。だけど、分からないんです。私はこの世界にとってどんな存在なのですか？』

それが分からないことには私の中で話は進まない。理解できないに等しい。

置いてきぼりをくった私は何とか追い付こうと努めた。

「話していなかったな。」

そう言ったクーンさんに目を向けると、少しだけ愁いた目をしている。なにか、大変な事なんだろうか。

「鏡盆には人間が一人だけで映ることはないと言っただろう？」

その問いに大きく頷く。いつか聞いた話だった気がする。

「それに一人きりで映されるのは＜最後の乙女＞と相場が決まっている。

＜最後の乙女＞とは神からのお告げを伝えることができる、預言者のことだ。

そして、最後、と呼ばれるのは、未だかつていなかった預言者のことを指し、最初で最後の乙女の意を示している。」

なんすか、その仰々しい話。私には無関係に思えるんですけど。そんな大それた存在のはずないよ。

今まで日本のどこにでもいる女の子の一人だったんだもん。

ワンピースの裾をギュッと握る。その手に柔らかく乗って来たそれは、クーンさんの物だった。

心配そうな瞳。きっと、相当酷い顔してんだろーなぁ。なんてしみじみと思ってみたり。でも、混乱してるから、そこは許してほしい。

「ネイにとっては巻き込まれたくないものだろうが、この国の神話に記述されていることなんだ。

それに、ネイが一度映ってしまった鏡盆はネイが神殿にいかない限り、使うことはできなくなって、この国の政治に関わってしまう。」

う〜ん。映らないのは困るよね。それにしても、神様を信仰して

るのかぁ。それはちょっと厄介だよね。

宰相さま、登場 - その2 -

『質問、しても良いですか？』

私が知りたいことは山ほどある。

理解できないことだけじゃなくて、私自身が気になることも。その問い掛けに頷いてくれた三人を交互に真っ直ぐ見つめる。

真剣な顔をしてるから、私の顔にも力が入った。

『この国の人たちの多くがその神を信仰してるんですか？信者の敬虔さはどのくらいですか？』

あんまりにも熱狂的だと、嫌でも＜最後の乙女＞とか言うものの立場に立たされそう。それに、もし私がそうでなくても、勝手に理由を付けて祭り上げられそうだもん。

それだけは、何としてでも確実に避けたい。

「国民のほぼ9割が信仰しておる。中には熱狂的な信者もおるな。」

難しい顔をしたおじさん、いや、宰相様がそう言った。

まじ、勘弁。今さらだけど、何としてでも避けたいよね。私、そんな面倒な事からは、回避を希望します。

『…私の居た世界にはいくつかの宗教がありました。でも、私は無宗教です。

いや、多神教って言った方が正しいのかもしれません。私の国の住人はとても自由で、それぞれの宗教に準じた催し事を行うんです。』

こう説明してると、やっぱり日本の文化って面白い。てゆーか、ここまで来ると自由すぎるよね。

「その口ぶりだと、ネイさんは神を信じておられないようですね。」

そうか。神官様から見れば、信じられない人間なのかも、私。

でも、実際問題自分がどう思うかだし、思想はその人の自由だ。

思ってる事なんだし、それを隠して本当のことを述べないでごまかすなんて、おかしい。

私は頭に、不愉快に思ったらすみません、と付けておいてから話し出した。

『私自身は基本的には神様を信じていません。もしかしたらこの世界を創った神様はいるかもしれませんが、縋り付ける神様はいないと思うんです。

だって縋りついて本当に助けてくれる存在がいれば、治らない病気なんて存在しないと思いますから。』

ここまで言っといてなんだが、みんなの視線が痛い。信仰している人から見れば何とも不愉快な話なんだろうけど、単なる小娘の浅はかな考えってことで、勘弁してほしいとこッすね。

『私のいた世界では自分の信仰している宗教を他人に押し付けて、過去にも現在にも争いが起きています。

聖職者がお金を得るために、神に助けてもらえる紙切れが出回った過去があります。

これは人間の我儘で、私腹を肥やす為にやったことで。でも、その行為は神様に結びついてしまうんです。

神様は自分に似せて人間を創ったと言われています。そう考えると、神様がいると信じると、汚い心を持っている人物を想像せざるを得なくなりますから。

それを崇めることはできません。』

ここまで言って、完全に冷めてしまったお茶を飲み干した。

…我ながら捻た考えだよね。自覚はしてるんだけど、どうも自分の考え方は真っ直ぐになってくれない。

「神様のことで争いが起きたと言っていましたが、それは本当に自分の信仰する神を信じているからなのではないですか？」

それって自分の神が一番正しい、って考えなのかな。ある特定の人物からしたらそうかもしれない。

けど、私が言いたいのはそんなことじゃなかった。

『どの神がそこに在るのかを争って戦うことは、敬虔な信者の行いかもしれません。でも、私の中ではその考え方は違うんです。

その神が真に存在するのであれば、そのことで争い合って、自分の所為で人間が死ぬことなんてないと思います。

もしいても確認もできない存在。ならばどうしてその人のために多くの命が奪われるのを黙って見ていられるのでしょうか？』

真っ直ぐレークさんを見つめて言うと、右隣から盛大なため息。宰相様は見た目よりも、本当はもっと若いのかもしれない。私みたいな統制のとれないバカがいるから、心労で髪が白くなったのかも。

…ご苦労様です。

「もしも＜最後の乙女＞ならば、随分と変わった考えだな。」

あ、ため息ついたのはその所為？自分でも変わってるのは自負してるけど、そこは個性ってことにしておいて欲しいね、うん。

『まだそうと決まった訳ではありませんよ。それと、もう一つ申し上げておきますと、私のいた世界では、科学が非常に進んでいます。その結果、人間は猿が進化したものです。

神が造ったと言われる人間が、実は環境に合わせて、時を重ねて優秀になったってことです。

この進化論は、神を崇拝している者たちからすれば、信じられな

いものなのでしょうが、事実、証明されています。』

ゆっくりと立ち上がって、お茶をみんなのカップに注いでいく。自分の席に着くと、またお茶を覚ます為に息を吹きかけた。

「ネイさんは大人しくて柔らかい空気を持っているのに、意外と意思がお強いのですね。」

…褒め言葉として受け取っていいのかな?

だんだんレークさんの笑顔が胡散臭く見えてきた。遠まわしに大人しく従ってろよ、って言われてる気がする。

『私、性悪なんですよ。だから、猫を被るのも得意ですし、人を言い負かすことに何の負い目も感じていませんしね。』

にっこり笑ってそう言うと、宰相様はまた笑いだした。

「これはネイの勝ちだな。ますます気にいった。」

ますます気に入られた?宰相様の判断基準が分かりません。

『私の世界では、一人ひとりの意志が尊重されます。言論の自由だって、思想の自由だってあります。女性に対する差別もありません。

もしかしたら、私のいた今の社会は女性の方が強いのかも。』

おじいちゃんとおばあちゃんを見たってそうだ。かかあ天下が発生してますもん。おじいちゃんってば、完全に尻に敷かれてる。

それよりも、ここから変える方法ってあるのかな。これからどうなっちゃうんでしょう。

ため息を零した直後、ここで急に空気が打って変わって、意気消沈気味にレークさんが話し出した。

「あと一月ほどで鏡神祭なので、興味深いネイさんのお話を聞きに来ることができません。」

あら、せっかくの知り合いに会えなくなるの？そうでなくても三人しか知ってる人いないし、部屋から出られないのに。あ、今日もう一人増えたんだっけ。

がっかりしていると、不思議そうな顔で見られる。何でもないって答えたけどね。

『テレビの話はもうしばらくお預けですね。次は上手く説明できるように整理しておきます。』

手をグーにして力む。脱・説明下手人間！

それにしても。

『これから一カ月も喋る人がいないのかぁ…』

みんながいるのも忘れて独り言ちる。何か役に立てることないかな？いや、ここから出たらいろいろ大変だろうし。

でも、バレない形で自由に歩き回れたら…

！！思いついた！

『クーンさん！』

思い立ったら即行動派の私は、すぐさまクーンさんに飛びつく。
もう、噛み付かんばかりの勢いでまくし立てるように言った。

『女中のお仕事させてください！』

そこにいた三人が固まってしまった。とりあえず、どんな返事が来るかワクワクして待ってると、がっくりとしているお人たち。

どういうこっちゃ？

一人理解できずに首を捻る。それを分かってくれたのか、クーンさんは代表になって話してくれた。

「＜最後の乙女＞かもしれないネイに、そんなことはさせられない。」

なるへそ…なんてこった！

せっかくいい案だと思ったのに、どうやら採用されないらしい。
でも、これができないとなると、本当に一人ぼっちで一カ月過ごすことになっちゃう。

それに、こんなお姫様みたいな生活、心苦しくて仕方ないんだ。

『そこを何とかなりませんか？働かざる者食うべからず、とも言いますし、こんなに何もしない生活なんて、あり得ません。』

私の意見が一理あるのか、三人は顔を見合わせて困っている。

…もうひと押し、だね。さっき提言したように、私の意志は強いんですから！

『もし私が＜最後の乙女＞であってもなくても、これから先、元の世界に戻れる保証はありません。

どう転んでも、いずれは独り立ちするべきですし、こう言う籠の鳥になったようなお嬢様生活なんて、私の性質には合わないです。』

女中の仕事を覚えれば、自分のことは自分でできるようになる。

それに、住む所を探せるし、もしもお給金も貰えれば何もかもこの暮らしに合わせていけるかもしれない。

だから、曲げる訳にはいかないの。

そう思いじっと三人の顔を見つめる。まず降りたのは宰相様だった。

「こう言っていることだし、何せ誰とも会わずに一月もこの部屋から出るな、とは言えんだろう。」

宰相様ったら話が分かるー！

って、抱きつきたい気分だったけど、そんな空気じゃないことは

重々承知。だから、我慢した。

その言葉を聞いてレークさんは。

「仕方ないですね。私が話相手に慣れないのは悔やまれますが。」

そう言った。

すぐさま反応してクーンさんは言葉を遮ったが、二人の重い視線にとうとう陥落。

承知をしてくれた。

宰相さま、登場 - その3 -

「ネイ、条件を付けても良いか？」

そうキタか。どうやら心配症であるらしいクーンさんは、簡単に野放しにはしてくれないみたい。逃げたりしないのに。

でも、条件を飲まずに自由を失ったら嫌だから、顔色を窺いながら小さく頷く。

それにホッとしたような表情を浮かべて話し出した。

「宰相殿か俺のどちらかの専属の女中として働くことだ。」

そうか。いろいろと知らない事だらけだもんね。

妙に納得しながら、了解したことを告げる。でも、話はそれだけじゃ終わってはくれなかった。

「お前の専属でいいじゃないか。ネイ、こいつに働き過ぎだと注意する役目を承ってくれんか？」

やっぱり。他の人から見てもクーンさんは働き過ぎってくらい働いてるんだ…

宰相様はきっとクーンさんのことを心配してるんだね。レークさんだったらこうはいかない。クーンに言いくるめられちゃうだろうから。

『了解いたしました。』

立ちあがって前で緩く手を重ね、綺麗にお辞儀をして見せた。最初の時みたいに、みんなは驚いた顔。

今日はこんな顔見てばっかだなぁ。

なんて一人暢気にそう思った。

「ネイ、お前はどこで覚えてきたんだ?先程もどこぞの令嬢のようだったし、今もその気品さは完全に消えきっていないが、女官のようにお辞儀をして見せた。

不思議でしょうがない。」

そんなこと言われても、記憶にないんだけど。でも、強いて言うなら。

『ドラマとか映画の影響かも…』

この呟きを理解できる人はいなかった。三者三様、さまざまな顔をしている。

「それは、なんだ?」

簡単に説明、できないー!どうやっても無理だよ。私、説明下手だもん。

…う~ん。困ったぞえ。

『先程レークさんには説明しましたが、私のいた国では機械がとても発達しているんです。“テレビ”と言うものがありまして、目に見えているような映像を映し出す機会があります。

レークさんは分かってくれましたが、おそらく鏡盆に映っているものを見る感じだと思うんです。

そのテレビには、たくさんの物が映し出されます。その中の一つがドラマです。ドラマとは、劇場で見られるものを何回かに分けて楽しむものです。

映画とは、それ専用の映し出す写映機を使い、大きな白い布にそれを映して見ます。例えば、ドラマが1時間を一回の物とすると、10回ほど放送して話が完結することと、映画は二時間ほどで一つのお話が完結することに違いがあります。』

たぶん、あってると思うんだけど。

大体の感じで伝えてみたから、かなり内容的には不安になる。

どうも英語は伝わらないみたいだから、スクリーンとか使えなくて困ったけど、これが私の限界です！

…自慢して言うことじゃないけど、さ。

「何となくは理解できた。ネイのいた世界は文化が発展しているようだな。」

優しさに涙が出そう。

クーンさん、明らかに眉間にしわが寄ってて、ちょっとこんがらがってます、って顔してるのに。

『はい、ものすごく。不便な事はありませんし、逆に手が掛からなさ過ぎて人がダメになっている様な気がしますが。』

「まだ便利な事があるんですかッ?!例えばどんなものがあるので…「レーク。」」

有り難い。

流石に急なテンションの高まりがみられるレークさんはここ数日で、あのアホ神くらい厄介だって分かったから。

見兼ねて止めに入ってくれたクーンさんにまた感謝した。

「詳しい話を聞くのは、事が無事に過ぎ去ってからだ。とりあえず、あと一月はネイのことを鏡神祭があるから、とごまかすことはできるだろうが、問題はその後だ。」

…確かに。ひとまずこの状況から脱することができただけいいけど、肝心の問題を後回しにしただけだって気付いた。

「明日の朝はゆっくりしろ。ミリアにすべて任せておくから、何食わぬ顔をして俺の執務室へ来い。」

そう念押しをすると、忙しそうに去って行った。

ですよね。だって、私のいる客室にくるのはいつも夜遅く。きっとそれも一日中、根詰めて働いてから。

なのに余計な事で時間を取っちゃったから、今日はもっと遅くになるんだろうなぁ。倒れなきゃいいけど。

「そう言うことならば、あとはお前たちに任せた。とにかく、もう一度考えることもあるだろうから、また訪れる。

あいつの世話はネイに任せた。頼んだぞ。」

そう言うと、宰相様も足早に去って行った。

みんな忙しい人たちなんだろうね。私なんかに構わなくてもいいのに。って、そんな訳にもいかないか。

どえらい話になってきちゃってるしね。

レークさんもどこかへ行くだろうから、一人でボーっとしてようかなぁ。って思ったのに。レークさんは立ち上がることもせずに、地球のことを聞いて止まない。

忙しいんじゃなかったの、って聞いたら、明日から頑張るからいいんだって。

あんた、それ、職務怠慢ってやつじゃないっすか。しっかり働こうよ。…私が言えたことじゃないけど。

夕食を一緒に摂り、それが終わってもレークさんは興味があることをひたすらに聞いて行った。

クーンさんが来た時にはぐったりしてたのは無理もない。

「…疲れたのか？」

それはクーンさんじゃない。顔色だって悪いのに、私の心配してる場合じゃないよ。

『夕ご飯は食べましたか？』

少し、と返ってきた答えに不安になる。それに、やっぱり働き過ぎだって思った。

私、確実に負担になってる。明日から、しっかり働いて、クーンさんに少しでも楽してもらわなくちゃ。一人でガッツポーズをする。

髪を拭いてくれているクーンさんには見られずに済んだ。

『あんまり、無理しないで下さいね。クーンさんが倒れちゃったら、心配になって私が倒れちゃいますから。』

真剣にそう言ったのに、なんだそれ、と呟いて喉の辺りで小さく笑われた。今日はいつもよりも遅い時間に来たから、本当に申し訳ないと思ってる。

だから心配したのに。なんで笑われたんだろう。いや、もしかしたら私が何か言葉を間違えたのかもしれない。

「ネイが倒れたら誰が倒れた俺の世話をするんだ？明日から俺の専属になるんだろう。」

あ、そっか。主の世話もせずに隣で倒れてるなんて、女中失格じゃん。…私、ホント馬鹿。

いや、でも、それくらい心配してるんだって、いい方向にも取れるよ。ね？とか、誰に言う訳でもなく、話を振って見たり。

『お願いですから、ご自愛ください。』

女中さんっぽく言ってみたけど、やっぱり映画とかドラマとかの真似でしかない。ミリアに聞いて、しっかり勉強しなくちゃ。

一人物思いに耽っていて、クーンさんの表情が硬くなったのには気付かなかった。

「ネイ、みんなの前ではそうして入ればいいが、俺の前では普段通りにしていて欲しい。」

でも、と口を開こうとすると、すぐに遮られる。

「そっちの方が俺の気が休まる。」

ずっと人に敬語を使われてたりとかするから嫌なのかな？クーンさんがそう言うなら、そうしよう。

了解を伝えると、髪はもう乾いていた。今度は櫛を通してくれる。その時にも話は続いた。

『…どこか、借りられる部屋を探さないと。』

「なに？」

うひょ！低い声が耳元でした。

ゾクッとさせるような響きは、何とも言えない艶やかさを持っている。なのに、どこか怖かった。

『いや、だから、えっと…』

目力強いから、余計に怖い。

イケメンは流石に迫力ありますね。って、今は顔見えてないけど。でも、顔も体格も体型も良いんだもん。もちろん声だって、極上だ。

『女中が城の客室にいるのもおかしいですし、どうなるにしろ、一人立ちしなければいけませんから。』

それもそうだな、と悩ましい声。それでも手は止まらなかった。

「女中の間はここにいるのは、確かにおかしいな。一月はここにいることは難しい…そうか。ならば、俺の家に来い。

そうすれば夜のこの時間もなくならずに済むからな。」

…なぜそうなる？！

急な話の展開についていけなかった。

確かに行くあてはないけど、どこか仲介とかで紹介してもらって、暮らすって形にならないの？

なんていう間もなく、意気揚々とクーンさんは帰って行ってしまった。

なんてこった…

専属女中（メイド）、出動

「ネイ様、おはようございます！」

『おはよー…・・』

昨日のことが気になってあんまり眠れなかった。顔、最悪だと思う。

「あら、眠れなかったんですか？」

やっぱり…

『顔、そんなに酷い？』

そう聞くと。

「ええ。」

なんて、すぐに返事が来て凹んだ。

自分で聞いておいてなんだけど、ちょっと包み隠して欲しかったぜ。とか強く思いながらも、脱力した。

「早く顔を洗って来て下さい。きっと目が覚めますから。」

返事をすると、バスルームに向かった。水で軽く顔を洗い、顔を拭う。

鏡に映った顔は…

『お化け…？』

そんな残念過ぎる私は歯を磨いて、ミリアがいるであろう寝室へ向かった。

「あ、目は覚めましたか？お召し物の準備はできてますよ。」

そう言ってベットの上に広げてあったのは、簡単に言えばメイド服。

『フリフリ…』

まじで勘弁してほしい。

「お城の女中服は可愛らしいですから、きっとネイ様に似合いますよ。」

うん。…嬉しくないけどね。

それに、こんなに長い裾って…ありえないっしょ。

『ミリアの服の方が可愛いと思う。』

そんなちっちゃな呟きはミリアに届くはずもなく。さっさと着ろと目線で催促され、のろのろと着てみた。

「よくお似合いですわ！」

うそだ！キモいだけだって！！

『ミリア、これいじっちゃダメ？』

眉だけを綺麗に動かして見せるその様は、訝しげな様子をそのまま表していた。換えはありますけど、という言葉を聞いて、ハサミを貸してもらう。

生き生きと刃先を鳴らすと、ちょっとだけ引かれた。

「もしかして…」

そのとーり！ふふふ。楽しませていただきまっす☆

息を大きく吸うと、刃を動かした。

『ミリア、ペチコートある？』

そう言うと、少し興味が出てきたのか、渡してくれる。それを付けると、スカートよりも少し短めに切って、軽く縫いつけた。

『編上げのブーツ、履いてもいい？』

こっちの世界に来てから、お願いして茶色の編上げのブーツを履かせてもらって言った。でも、こっちの女の子はブーツは履かないらしい。勿体ないよね、可愛いのに。

流石に髪はまとめて、化粧をしてもらう。

完成です！

「いい。すごくいいです！」

そう褒められて私の鼻は高くなる。

スカートは足首まであってウザったかったから、膝が見えるか隠れるかの所まで切った。そして編上げブーツ。肌がたくさん見えるのはダメらしいから、ちょっと緩めの靴下をはいて、極力見せないようにした。

ゴスロリに近くなったけど、足首まであるよりマシ。これで大分動きやすくなった。

「可愛らしいですけど、きっと上の方々が見たら憤慨なさるわね。」

『別に怒られてもいーよ。自分がいた国とは文化が違うんだって言えばいいんだから。

あ、でも、そうするとクーンさんに迷惑かけちゃうかなぁ。』

そこが一番のポイントだよね。

でも、この世界の服は本当にあり得ない。動きやすさなんて皆無。確かに地球の衣服の文化は露出が激し過ぎるかもしれないけど、ここはいくらなんでも布が多過ぎだ。

私だって足を出したがらない女子高生だったけど、流石に膝は出てたもん。ま、ここじゃそれを配慮して膝も出てないんだけどね。

これでも譲歩した方だって。それに、何だったらパンツ履いて仕事したっていい。いい加減、ジーパン履きたいんだよね…

ズボンは男の人しか履いちゃいけないらしいから、当分はムリだろう。

「あら、こんな時間！ネイ様、クーン魔道師の所へ急ぎましょう。」

そう言われて、少し戸惑った。カスタム女中（メイド）服のままだったから。

でも、面倒だからいっか。

なんて、ミリアが忘れてるみたいだから、しめたもんだと思って、黙って着いて行った。

「クーン魔道師様、ネイ様をお連れしました。」

ほー…・でかい部屋。

ノックをして開いた先には机が一つ。それしかなかった。

そこに着いて仕事をしている様子のクーンさんは、切りがいいところまで行くと顔を上げる。

それからちょっと驚いた顔をした。それに気づいたミリアははっとして私を見る。それからやっちまったって顔をしていて面白かった。

…睨まれたからすぐに止めたけどね。

「随分といじったようだな。」

はい、申し訳ありません。とか謝って見たり。でも、実際は口だけで、反省なんてしてないけど。てゆーか、部屋にいた時だってこれくらいの丈だったし、誰にも文句は言われなかったもん。

気にするほどじゃないと思うんだけど…

『これ、そんなに変ですか？』

裾をちょっと上にあげてそう聞くと、目のやり場に困るから下ろせ、と言われる始末。今さらだけど、ここの文化とは合わない気がする。

「似合っている。まぁ、それでもいいだろう。」

助かった。長い丈だと転んじゃうだろうしね。怪我だけは勘弁ってなことで。

「仕事の仕方はミリアに聞けば大抵わかるだろう。それに、俺はあまり世話が掛からないだろうから、そこに居てくれるだけでいい。」

それだけ言われると、私はミリアに続いて部屋を後にした。

城は迷路みたいになっている。しっかり暗記しないとまずい。道を覚えがてらに、それじゃ私の意味がないんじゃない、ってミリアに聞いたら、それだけで十分すぎるんだって言われた。

「これは私から話せることじゃありません。しかしながら、宰相様に少しは言われたでしょう？

クーン魔道師はこの城では厄介な立場に居ます。仕事をし過ぎないようにネイ様が注意して下さるだけで十分ですよ。」

なるほど。みんなクーンさんが働き過ぎだって思ってる訳ね。

ワーカホリック？いや、働いてないと落ち着かない訳でもなさそうだし。何か理由があるんだろうねぇ。

話してもらえない限り、私には理解できない。早く話して欲しいなんて思っていると、女中部屋に着いた。

ミリアはここで着替えているらしい。ここから、調理場や洗濯場など、城内を案内してもらった。

それにしても広すぎ…

ミリアはもう慣れたって言ってたけど、私は当分無理そうだ。たいていの所を案内してもらって部屋に戻ると、第一城人発見。

一瞬ぎょっとした表情をされて、言わんことがよく分かった。

あ、やば。

どう考えても視線は私のスカート。早速怒られると思ったら、おばさんは豪快に笑い出した。

「あんた、クーン魔道師様に聞いた通りの子だねぇ。」

クーンさん、何か余計な事言った?!自己紹介でもしますかね。

恐る恐る口を開いた。

『お初にお目にかかります。クーン魔道師様の専属女中となりました、ネイと申します。

以後お見知りおきを。』

昨日のように手を軽く前で組み、丁寧にお辞儀をしてみると、今度は目を丸くしていた。忙しい人だ。

「奇抜な格好をしてると思ったら、教養があるみたいだねぇ。」

あ、そこですか。大概の人に教養があることを驚かれるのはどうしてだろう。やっぱり幼く見えるのかな?

「私は女官長のマーサ・マキンズ。たいていのことは私が管理している。それにしてもその格好は?」

早速キタ。やっぱり言わなくちゃダメだよねー。

『私のいた国では、足首までスカートがあることは滅多にありません。それに、あれだけ長い丈だと、転んでしまいそうだったので。』

すみません、と頭を下げると、また笑い声が聞こえた。

「あんまり気にすることはないさ。でも、ここの連中にはそれをあまり良くないと思うものもいるだろう。それでなくても、“あの”クーン魔道師の専属なんだから、目をつけられるかもしれない。

怪我をしないように気をつけな。」

そろそろきな臭くなってきた。そんなにクーンさんは大変な人なのかな。

「まぁ、その格好をしていると逆にクーン魔道師の専属だと分かって、そこら辺のお偉いさんに小間使いにされずに済むだろう。」

豪快なおばさんと、いや、マーサ女官長と握手をすると、ミリアと一緒に厨房へ向かった。

専属女中（メイド）、出動 - その2 -

「ここで、お茶の準備をします。何度かお茶を淹れてるのは見ましたが、正しい入れ方をお教えしますね。」

残念な事に、私は言われてすぐに覚えられるたちじゃない。だからエプロンのポケットからメモ帳とボールペンを出す。

その二つに不思議そうな眼を向けてきたけど、質問されなかったからあえて答えなかった。

「おっ、新人さんかい？」

陽気な声。明るくおはよう、と声をかけられ、私はさっきと同様に丁寧に挨拶をした。

「ははは。俺にそんなに畏まることはない。お、お譲ちゃん、随分と軽そうな格好じゃねーか。」

はい、キター。本日二回目の服装チェック。

『本日よりクーン魔道師様にお仕えいたします、ネイと申します。

この格好は動きやすさを重視いたしました。私は人よりどんくさいらしく、長いスカートだと、上手く動けないのです。これは転ばないための配慮ですので、どうかご勘弁を。』

「…ミリア、この方はどこぞのお譲さんかい？」

おっと。何か間違えた？

不安になってミリアを見ると、しょうがない、と言った様子でため息をついた。呆れられたみたいでちょっと悲しい。

「いえ、新人さんですから、きっと緊張してるんです。」

あ、なるほど。わかったぞ！さっきのはお偉いさん方に使う言葉。ここでは少しだけ丁寧に喋ればいいってわけね。

「そーか、そーか。そんなに緊張することはない。

ここは気取ってる調理場のヤツらじゃないから、安心して何でも聞けばいいさ。

俺はミハエル・ユース。みんなにはエルって呼ばれてんだ。ここでコックをしてるから、昼食なんかは注文してくれていいぞ。」

あら、良い人そうで安心。気取った人だったらどうしようかと思った。

さっきのマーサ女官長といい、エルさんといい、優しい人が多そう。なんか、こういうのってたいていは新人が虐められたりハブられたりするのがオオドウじゃない？

あ、ドラマとか本の読み過ぎか。

私はよろしくお願いします、と言うと、ミリアに連れられてクーンさんのお部屋に戻った。

ら。大変な事になってましたよ。

クーンさんが夜中まで仕事してる理由が分かった。

部屋見戻ってみたら、書類の山、山、山！

さっきまで平穏だったのに、びっくりするくらい人が出入りしてる。

部屋が広い理由はここにアリってか。

「驚くのはまだ早いです。こんなのはまだマシな方なんですよ。」

ウソっ。こんなの、仕事って量じゃない。もはや、うーん、そう！簡単に言っちゃえば戦争に近い。

クーンさん、必死に書類の山と戦ってるから。

『クーンさんってドM？』

「なんです、それ？」

『マゾってこと。苦痛を喜びに感じる人のこと。』

二人で部屋の隅に立ちながら立ち話。

クーンさんが働いてる時に何やってんだってお叱りの言葉を得るかもしれないけど、生憎人がせわしなく動いてるせいで、ミリアは

もうしばらく仕事に行けそうになかった。

「もしそうなら、気持ち悪いですね。でも、仕事に関してはそう言えるかもしれません。

日常はどちらかと言うと違うようですけど…闘い方で言えば、守るよりも攻めるほうが得意だとお聞きしました。」

『Sってことか…』

今度は不思議そうにSの意味を聞かれて、私は丁寧に説明した。

「ネイ様のお国は不思議な事や物、文化がありますね。ここまで知らない事だらけだと、むしろ面白いです。」

そう、なのかな。まあ、確かにここの文化は驚くことが多い。それに不便なことだらけだし。

今のところ、電気がないのが一番痛いとこだよね。エジソンは偉い人だよ、ホント。

「では、私は仕事に戻ります。お昼時になりましたらお迎えに上がりますね。」

丁寧に礼をして、出て行ってしまった。一段落した部屋は静かで、書類を捲る音と、ペンの音だけが響く。

こりゃ、話しかけられない。

「ネイ。」

うおー。クーンさんの方から話しかけてきた。

何でしょう、と言うと、手は休まず、顔を上げないまま言葉を続ける。

「同じ職場の人間にはもう会ったか？」

こんな時まで私のことなんか気にして。ものすごい仕事の量なのに…

『はい、マーサ女官長とエルさんとは会話を交わしました。お二人ともとてもいい人です。』

「そうか。あの二人に気に入られたのなら大丈夫だな。」

そうなのか？いや、クーンさんが言うならそうなんだろう。あの二人はどう見てもリーダー気質だったし。

『あの、クーンさん。余計なことかもしれませんが、これ、手伝えませんか？』

国家の機密書類だとかだとまずいと思うけど、そうでなければ何か手があるかもしれない。

『さっき行き来している人たちの話が聞こえていたんですが、ここには省がたくさんあるみたいなのに、書類は皆さんバラバラに置いて行かれました。

それを分類するくらいなら手伝えると思うんです。』

そう、さっき実はちょっとイラッとした。だって、どこの省の誰かは名乗るのに、どうしてそのまま書類を重ねてくんだって。誰がどう考えても、効率的じゃない。

「…ネイがやることじゃない。」

その突き放された冷たい口調。こんな重苦しい空気を纏っているクーンさん、初めて見た。
怖い。

けど、私の心配ばっかりしてる人には言われたくない。

『私はクーンさんが私を心配してくれるように、クーンさんのことを心配してるんです。どうか、ほんのちょっとしか手伝えませんが、やらせて下さい。』

お願いします、と付け加えて頭を下げる。必死の懇願だった。

「ネイ、その“お願い”はずるい。」

苦虫をかみつぶしたような顔。どこかずるかったらしい。よく分かんないけど。

『じゃあ、手伝わせてくれるんですね?』

そう言うと、小さく渋々と言った感じだけど、了解の返事が戻ってきた。

やったー、と喜んで置いてから疑問が一つ。

私、こっちの字読めるのかな？って、かなり根本的な事を今さら！アホ過ぎる…

恐る恐るゆっくり書類を手にしてみると。

『あれ？』

私の呟きにどうした、と心配そうな声がした。

『読める…』

書いてある字は明らかに日本語じゃないのに、普通に読めた。疑問だらけ。言葉も分かるし、字も読める。違う世界に居るはずなのに、こんなのってアリ？

「大丈夫か？」

そう聞かれて現在に帰ってきた。

呆けてる場合じゃない！少しでもクーンさんの仕事の負担がなくなるように手伝わなくちゃ。

うし！両頬を叩いて気合を入れる。

それから女中部屋に戻った。

ちなみに、廊下は一切走ってません。このスカートの丈でさえ怪

しげな顔されるのに、走って置いてお転婆だと思われたらなお悪い印象しか与えかねないもん。

でも、最後の方は早足になって、女中部屋に飛び込んだ。

お目当ての人がいて安心。すぐに声をかけた。

『マーサ女官長様。』

「マーサでいいよ、ネイ。どうしたんだい？」

飛び込んできた私に驚きながらも、普通に対応してくれた。流石、大人！

『少し大きめの机をお借りしたいのですが、どこかに宛はありますか？』

クーンさんの机に積み重ねてある書類を整理するためだと話すと、着いて来るように言われ、また城の中を歩く羽目になった。

やっぱり覚えられそうもない…

専属女中（メイド）、出動 - その3 -

「久しいね、リュクス。」

着いたのはお城のすぐ近いところにあるスポーツの練習場みたいなところ。でも、そこで繰り広げられていたのはもちろん陸上競技なんかじゃなくて、見るも見事な剣技だった。

「あれ、マーサさんじゃないですか。どうしたんです？」

どうやら二人は知り合いらしい。赤毛の青年はそばかすのある頬を上げ、無邪気に笑っていた。

随分と爽やかそうな人。私はじっと見つめてしまった。

「あれ、後ろの人は…初めて見る顔だね。」

私の視線が熱過ぎたのか、話題に上がってしまった。早いとこ戻りたいのにぃ～。

「この娘は今日からクーン魔道師の専属の女中になったんだ。ネイだよ。ネイ、こっちは騎士団第二軍長官のリュクス。クーン魔道師の部下さ。」

ほー。若いのに立場的には高い所にいる人なんだ。さすが、こう

いう仕事だと実力主義なんだね。

『初めまして。』

そう言うとにこやかな挨拶の返答。それからお約束になった私の格好の説明を終えて、机の件に話は移った。

「と言う訳で、クーン魔道師の部屋に運んで欲しいんだよ。お願いできるかい？」

マーサさんの話を聞いたリュクスさんは、嫌がるどころか目をものすごい勢いで輝かせた。

…犬？

耳と盛大に振られてる尻尾が見えた気がして目を擦ってみると、そこにそれは存在してなかった。

でも、なんかリュクスさんって犬っぽいなぁ。

「お任せ下さい！そんなお願いならいつでも聞きますよ。」

誰かの名前を呼ぶと、リュクスさんはその人に事を説明する。その人もやっぱり嬉しそうにしていた。

クーンさん、みんなに人気なのかな。イケメンは男女問わず人気が高い、って心のノートにメモっておいた。

場面は変わりまして、現在は私はお城の廊下を、机を運んでくれている騎士団の方と歩いております。二人は人懐っこいらしく、奇抜な私も簡単に打ち解けていた。

クーンさんは騎士団の長官だって聞いてたのに、言われるまで記憶の奥底に仕舞ってあったみたい。完全に忘れてた。

「クーン魔道師は俺たちの中じゃ人気が高いんだよ。年寄りのお偉い方には嫌われているが、貴族の娘たちの間でも人気が高いな。」

ああ、それは言われなくても分かる。

『あの容姿ですから、若い娘たちは放っておかないでしょうね。』

きっとアイドル状態。顔、スタイル、完璧。てゆーか、何頭身ですか？足、長いよねぇ。

私は…うん、見なかったことにしよーかな。

残念過ぎる私の容姿の説明はパスと行きますよ。

「おや、ネイは興味ないのかい？」

からかいを含んでるその瞳には、わざと空気を読まずに一刀両断。

私はそう言うことには関与しないで、傍らで話を聞いてる役が性に合ってるし。

『私、クーン魔道師さまに命を助けていただいたんです。ですから、その恩を返すために誠心誠意お世話させて頂くまでですよ。』

笑顔でそう言うと、そう言う意味じゃないんだけどなぁ、なんて呟きが聞こえた。

わざとですよ、わざと。からかいに対することを言わなかっただけで、さっきのは私の本心だしね。

それ以外は何も口を開きません！

「それにしても、クーン魔道師にお目にかかれるのはいつ振りかな。」

名前を聞き逃した騎士さんは熱っぽくそう言った。本当にクーンさんのことを慕ってるんだって感じる。

それにしても、会うの久しぶりなんだ。あんだけデスクワークしてれば当たり前っちゃ、当たり前か。

「今の地位に就いてからは練習場にいらしてないんだ。ネイは見たことないかもしれないけど、魔術だけでなく、あのお方の剣は迫力があるんだよ。」

ほー。それは一度お目にかかりたい。

現代の地球じゃ本物の剣なんて闘う道具じゃないだろうし、日本

で持ってたら銃刀法違反で即逮捕だもんね。

『一度でいいから見てみたいです。』

きっとあの格好良さが引き立っちゃうんだろーなぁ。目の保養を通り越して、毒になるはず。その時には卒倒しないように気をつけなきゃ。

「俺は一度もあの人に勝ったことがないから、久しぶりに是非手合わせ願いたいなぁ。」

リュクスさんの目は、さっきとは違う輝きを持っていた。何て言うか、ギラギラしてる。

勝ちたいって思ってるのか、闘いに飢えているのか。どっちにしろ、今の私にはまだ非現実的な話だ。

…およよ?また人が出入りしてるみたい。

朝ほどではないけど、何人もの人が書類を抱えてクーンさんのお部屋に入って行く。出てくる人はみんな何も持っていなかった。

ってことは、全部あの部屋に収まってるのか。

…量、多過ぎませんか?いくらなんでも仕事量がありすぎ。あんなことずっとやってたら、クーンさんそろそろ倒れるよ。

「中に運び入れるのか?」

縦にゆっくり頷く。すると、ちょっとどいてろ、と言われ、机を

そこに置いた。

「サイモン、中の調度いい所にこの魔法陣を置いてきてくれ。」

サイモンさんって言うんだね。

ここで名前をようやく知ることができた人、サイモンさんは、リュクスさんが持っていた紙を持って中へ入って行った。

詳しいことは後でクーンさんに聞こう。魔法なんて空想上の物が実在してるだけで興味津々。だけど、ここでは当たり前らしいから、変な反応を見せたら疑問に思われる可能性大。

置いて来ました、と帰って来たサイモンさんが言うと、お礼を述べてからリュクスさんは右手を横えた。

どんな方法を使うのかと思うと。

「≪転送≫」

そう言ったと同時に指を鳴らした。

案外シンプル。なんちゃらかんちゃら、呪文みたいなものは掛けないみたい。少しだけ夢が削がれた気がした。

ほら、杖を使う、とか。長い呪文を唱える、とか。

某ファンタジー映画、みたいなのをイメージしてたから、ちょっと残念だった。

でも、やっぱり驚く。目の前に合ったはずの机とその上に乗せられた魔法陣の紙は、あったはずの私の目の前からごく自然に風景に馴染んで消えていくかのようにスッと見えなくなったから。

『リュクス様も魔道師だったのですね。』

本当、ありえない世界だよ。とんだファンタジーだらけの所に来ちゃってたみたい。

「様付けなんてするなよ。柄に合わない。」

あらら、照れてる？

リュクスさんの顔はその髪ほどではないけど、赤くなっていた。照れてるかどうかを尋ねると、照れてない、何て頑固な返事。そんなの肯定してるもんだよ。

面白い人はっけーん！

私から逃げるかのようにクーンさんに挨拶に行くと告げると足早に部屋に入り込んで行った。慌ててその後を追う。

私とリュクスさんが廊下で立ち話をしている間に一段落ついたのか、人通りはまた途絶えていた。

中に入るとサイモンさんがもうクーンさんと話している。本当に久々だったみたいで、少し分かりにくいけど、クーンさんは喜んでるみたいだった。

「クーンさん！」

あ、犬が飛びついて行った。やっぱり全力で振られる尻尾が見える。

ホント、懐いて…いや、慕ってるんだねぇ。

「ネイ、机を運んできたのか？」

はい、と返事をして、お茶のワゴンに近づく。手を動かす前に謝罪を入れた。

『勝手な事だとは思いましたが、このままではこちらが書類で溢れてしまうと思いましたので。

しかし、これからはクーン魔道師さまにお伺いを立ててからにいたします。』

丁寧に礼。それからお茶を淹れはじめた。

さっきの手順を思い出す。ミリアに言われた通りに、ミリアに言われた通りに…　心の中で何度もそう呟いて、お湯を注ぎ、蒸らし時間を計るために砂時計をひっくり返した。

本当に女中だったんだ、なんて呟いてリュクスさんの言葉は聞こえなかったフリをしときましたよ。

温めたカップを三つ用意して、砂時計の中の砂が完全に落ち切ったタイミングを見計らってお茶を注ぐ。それが終わるとトレーにそれを乗せて、丁寧に三人の所まで持っていった。

うん、置くところがない。

当たり前だけど、クーンさんの机の上は書類だらけ。

こんなにすぐに役立つとは、ね。

私は運んで来たばかりの机の上にカップを三つ並べた。有難う、と言われると嬉しくて笑顔が零れる。

『初めて淹れたので、味の保証はできませんが、どうぞお飲み下さいませ。』

「ネイも一緒に飲もう。」

味の感想を待っていると、クーンさんは唐突にそう言った。

いや、それはいかんでしょうが！

『私はクーン魔道師さまの女中なのですから、それは困ります。』

初仕事のウキウキはどこへやら。

リュクスさんたちの目の前でなんつーことを抜かしてんの！

うろたえる私、主張を揺るがさないクーンさん。二人のやり取りを二人は目を丸くして見ていた。のにも拘らず。

「“魔道師さま”なんて呼び方は外だけでいい。少なくとも俺に直接そう言うのはやめてくれ。」

もー！！！無理難題ばっか、押し付けないでよ。ってか、そこの二人、助けてー。

なんて手を伸ばそうとしたら、クーンさんの妨げによってそれは達成されなかった。

専属女中（メイド）、出動‐その４‐

「クーンさんとネイはそういう関係なのか？」

リュクスさんっ、訳の分からん事言うな！てゆーか、クーンさんは否定くらいして！

「ネイは賊に襲われていたところを俺が助けたからと、身の回りの世話をすると言って聞かないんだ。」

何それ～。半分以上嘘じゃないですか！

とは言えず。私はぐっと押し黙った。

「確かに身のこなしは貴族令嬢のそれですね。もしかして、そうなのですか？」

サイモンさん、話を膨らませないで。そして、そうか私に弁解の余地を！

「それは…」

クーンさんはここで黙って私を見る。その所為で視線は私に集まった。ひじょーに居心地が悪い。

「ネイ、そうなのか？」

リュクスさん、そんなの知ったこっちゃないですよ。大体から言って全部初耳だし。

言葉に困って黙ったままの私。こんな微妙な空気の中、口を開く勇気なんて無い、って思ったのは四人中三人。

空気なんてお構いなしに口を開いたのは、さっきまで見えてた尻尾（比喩）を下しているリュクスさんだった。

「まさか、賊に襲われたのが原因で記憶を失ったのか…?！」

急な展開に耳を疑う。眉を顰めて。

『…はい?』

なんていった所為で勘違いはさらに続いてしまった。

私のおバカー！

「悪かったな。思い出せないのに無理に聞き出そうとして。」

泣いた！なんてこった。大の男が泣いてますよ。

『あの…「いいんだ！」

はひ?今ので伝わったはず…

「何も言わなくていいんだよ。」

…ないよね～。

『リュクスさん、何か勘違いしてるんじゃ…』

ガシッと肩を掴まれて言葉を遮られる。思わず飛び上がったのは無理もなかった。

「辛いことが分からない状況下にいるんだな。クーンさん、俺、ネイみたいな娘を増やさないためにも鍛錬を行い、見回りをしてきますっ！」

……

行っちゃったよ。

私の手と口はリュクスさんを止めようしたところで固まっていた。

「ネイ、何かあればいつでも相談に乗る。では、私もこれで失礼します。」

サイモンさんは礼儀正しく挨拶すると、やっぱり勘違いしたまま行ってしまった。

伸ばしていた手を空中から力無く下ろす。

それから、さっきから聞こえてくる、聞き慣れたクーンさんの喉

の奥で笑う小さな声がする方を睨みつけた。

『…クーンさん、遊びましたね？』

笑ったところでそれは確定してた。大体、意味深に黙りこくった時点で可笑しいとは思ってたんだよね。

「…すまない。あいつらと会うのは久しぶりだったから、つい懐かしくなってな。」

貴方はいつもそんなことして部下をからかってたんですか！私なんていい餌にされちゃいましたよ。

「リュクスの勘違い癖は治らないみたいだな。」

そう言ってまた笑った。

『リュクスさん、いつもあんな感じなんですね…』

こんなこと言ったらダメだろうけど、会う度に疲れそう。それにしても、この世界に来てから、必ずって言っていいほど最初は話を聞いてくれない人が多い。

「驚いただろう？少し前までは毎日会っていたから何とも思わなかったが、久しぶりに見ると面白かったよ。」

明るい微笑みを浮かべたかと思いきや、いきなり陰った。それが何だか自嘲気味な笑顔に見える。

『クーンさん？』

顔を覗き込むと、また笑顔を作ろうとしてる。私は咄嗟にそんなの嫌だって思って、やめてください、と口にした。

『無理に笑わないで。そっちの方が見てて不安だよ。

私、クーンさんの手伝い頑張るから！協力し合えばきっとリュクスさんたちと会う時間ができるよ。』

ぐっとスカートの裾を握っていた。皺ができてるだろうから、きっと後でミリアに怒られるだろうなぁ。

なんて、今はそんなこと気にしてる場合じゃなかった。

「普段の口調はそっちなのか？」

はっ！勢い余ってタメ口に！

『ごめんなさい。』

目上の人は敬わなくちゃ。日本人として、これ、常識なり。

「いや、気にしていない。むしろ、いつもその口調であって欲しいくらいだ。」

それはできませぬ故。丁重に辞退を申し出た。

『リュクスさん、言ってました。クーンさんと手合わせしたいって。クーンさんもその顔だときっとそう思ってますよね？』

ぐっと押し黙った。ってことは図星なんだね。勝手にそう解釈して話を進めた。

『クーンさんは騎士団の方々から人気があるみたいですし、貴族の娘さんたちからも人気があるって聞きました。そんな人が部屋に篭ってるなんて、勿体ないですよ。』

「リュクスのやつ、余計な事を。」

ありゃ、情報源がばれてる。聞いちゃいけなかったみたいだから、リュクスさんは後で怒られてください。

『私もクーンさんがリュクスさんと手合わせしてるとこ、見てみたいです。』

そう言うと一瞬動きが止まる。不思議に思っていると、手が伸びて来て…

「失礼します！」

「な、なんだ！」

きゃー！し、心臓ひっくり返る！

その手が私に触れる寸前にドアが開かれた。

「書類のお届に上がっただけなのですが…」

私は急いでカップを下げる。クーンさんも何もなかったかのように、受け答えをしていた。

顔、あっつい。

クーンさんの目があんまりにも真剣だったから。目、逸らせなかった。

あーっ、もう！考えるとまた顔が赤くなるでしょーが。

自分を叱責して、ワゴンを端に寄せてから、クーンさんのところへ向かった。

『クーンさんって、この書類をチェックするだけが仕事じゃないですよね？』

「ああ。法律改定の嘆願書や、城下の制度についての様々な書類がここにはある。

各省ごとに内容は異なるが、認可して議会へ行くものは宰相のところ、不可の場合はその省へと逆戻り。

その場合、添削をして戻している。必要があればそこまで行って、説明を行っている。」

コレ、全部？うひゃー、クーンさんすごい。私なら一日も持たないと思う。しかも全部一人でやってるみたいだし、天才、いや秀才さんなんだねぇ。

これ、私なんかが手伝えるのかな？

って、ダメダメ！やるって決めたんだから、やる前から尻込みし

てちゃいかんでしょー。

『机の上にある書類はどこの省のものかはバラバラなんですよね？』

聞くところによると、説明をしてくる人がいてそれを聞いてる間に置いてく人が多いんだって。分類する暇もないらしい。

そんでもって夜遅くまで仕事してたら、きっと対策を用意する暇も労力もないはず。

女中さんとか従者さんを付ければいいのに、ミリア曰く、クーンさんは周りに人を置くのは監視されてるみたいで嫌らしい。

『まだ手を付けていない書類を分類します。ほとんどは手を付けてないですよね？』

そう尋ねてから、着々と分けていく。省の名前は日本のものと何ら変わりなくて、ちょっと面白かった。

「…ネイは働いていたことがあるのか？」

なかなかの手捌きだったのが意外だったのか、その声はちょっと驚いている。

心外だなぁ。

『仕事じゃなくて生徒会の役員をやっていたんですよ。』

分からないだろうと、生徒会の説明をした。

『…と、まぁ、社会に出た時のための訓練ですね。社会の人間関係を教え込むには、学校を一つの組織のように見立てて運営するのが、口頭で教えるよりも簡単ですから。

…よし、終了！』

サクサクと仕分け完了。

「早いな。」

お褒めいただき光栄です。はい、次行きましょ、次。他にやることは…

ゴーン、ゴーン、ゴーン…

低い鐘の音。私のやる気になっていた脳は、完全に思考を遮られた。せっかくやる気になってたのに。

『これ、なんの鐘なんですか？』

「昼時になったら鳴るんだ。」

なるほど、お昼休みか。そう言えば小腹が空いた気がする。

いつもはあの部屋から出られなかったから、ミリアが運んできてくれてレークさんと一緒に摂ってた。

でも、今日は勝手にしてもいいよね。よく分からないから、ミリ

アがいると思われる女中部屋にいったん戻ろう。

『クーンさんはお昼ご飯はどこかで摂るんですか？』

「…いつも食べない。」

はい？今、何とおっしゃった？

私は耳を疑った。

信じられない言葉が聞こえてきた気がしたけど、気の所為だよね、うん。

なんて思ってもう一度聞いてみたら、その“まさか”の答えが返ってきた。

『食べない？！いつも？！』

念を押すように聞くと、やっぱり肯定された。

し、信じられない！私なんて美味しいご飯のために頑張ってるってのに。

「そんな時間はないんだ。終わらせるのが遅くなると、省長にも迷惑になる。少しの間も勿体ない。」

なんちゅー男じゃ！食べ盛りの２０代、それでいいんだろーか。

『…食べる時間がないだけで、食べる気がないわけじゃないんですね？』

「ああ。」

なるほど。これは専属女中（メイド）の出番ですね！ご主人様のためにも一肌も、二肌も脱ぐ覚悟でございます。

「ネイ、だから俺のことは気にしないで食べに行け。」

でも、って食い下がったのに、クーンさんの意志は固かった。

将来は頑固親父になること間違いなし。いっその事、ここに居座ってやろうかと思ったけど、腹が減っては戦はできぬ、とも言いますし。

闘うことなんてないんだけど、一時退散と行きましょう。

『すぐに戻ってきますから！』

そう宣言して駆けだした。

自分の格好に奇異の目を向けられてるとか、廊下は走っちゃいけないとか関係ない！（いや、関係あるだろう。）

私は我が主のために頑張ります！

『たのもーっ！』

バンッ、と思い切り扉を開けた。そこにはたくさんの女中さんたちが、当たり前だけどいらっしゃいまして。すごい数の視線を集めてしまった。

やっちまったぜ！

知った顔の方に目を向けると、二人とも頭を押さえていた。

「…ほら、あんたたち！さっさとご飯食べないと午後の仕事に間に合わないよ。」

その度胸に感服。マーサさんの粋な計らいで何とかそこにいた女中さんたちは私を気にして酷く後ろ髪を引かれてるような感じだったけど、女中部屋からは出て行った。

「もう！急に飛び込んで来てはダメでしょう？

そうでなくてもネイ様は目立つのに。」

はい、怒られてます。

反省?御覧の通り、もちろんしてますよ。ほら、ちゃんと正座。

てゆーか、ミリアって怒ると怖いんだね。今度からは怒られないように気をつけなくちゃ。

『ごめんなさい。』

「まぁ、いいじゃないか。それにしてもすごい勢いで入って来たね。何か用事があったんじゃないのかい?」

はっ!そうだった!

『クーンさんがいつもお昼を摂ってないって言うじゃないですか!どういうことです?!』

さっき思ったんだけど、お昼はあの部屋に運べばいい。それくらいの余力はこの城にいる使用人の多さから言えばあるはずだもん。

「う〜ん。それを私の口から言うのはお門違いってヤツだ。

まぁ、見たってことになれば誰の責任にもならないかもね。」

少し考えるように間をとってから、マーサさんは視線をミリアに向けた。

「ミリア、一緒に行きな。紅茶のワゴンを持ちにクーン魔道師の部屋に、ね。」

マーサさん、好き！

ばっちりとウインク付きで言われた言葉に感動した。

こう、ドーンと胸を張って言われるから、何となく安心できる。

「でも！クーン魔道師さまはネイ様に一番知られたくないと思っているのではないのですか？」

「でも、も何もないよ。あの子は人に頼らな過ぎるんだ。味方はこんなにもいるのにね。」

大きなため息。この時のマーサさんは、まるで母親みたいに見えた。

どうしようもない息子を心配してる母親。

…きっと、クーンさんのこと、大切に思ってるんだね。

「私はネイに感謝してるんだ。あの子が自分の傍に人を置くようになったことだけでも大きな進歩じゃないか。」

なんだか複雑、みたい。ややこしいなぁ。知りたいことは教えてもらえないし。変な改定願いなんて山ほどあったし。

ここの政治は大丈夫なのかねぇ。

実はさっき、仕分けしながら、いけないとは思ったんだけど、内

容をちらっと、ね。

ほら、ダメだって思うことほど反抗的にやってみたくなるって言うか。立ち入り禁止って書いてある所ほど立ち入ってみたくなっちゃうって言うか。

国の重要書類とは分かりつつも、ついつい見てしまったわけで。

私、天邪鬼なのかも知れない。

「…わかりました。ネイ様、行きましょう。」

お、ミリアが折れた。流石お母さん的存在のマーサさん。

それにしても。

『同じ仕事してるんだし、“様”付けするの止めよーよ。』

ずっと気になってたんだよね。

言うタイミング逃してたから今まで言わなかったけど、私は単なる女中だし、ミリアは女官だよ?立場が上の人に様呼びされちゃーね。周りにいる人だって変に思うよ、きっと。

「それだけはなりません!」

ちぇー。

結局言い合いになって、マーサさんから私たちに雷と言う鉄槌が下されました。

ってことで、話は一時保留。

私とミリアはそそくさとクーンさんの部屋に向かった。

それはドアを開ける寸前に、聞こえてきた話。冷静なんて言葉を頭からふっ飛ばすくらいのものだった。

「ほう、噂の専属とやらはおらんのか。見物に来たと言うのに、時間の無駄になってしまったではないか。」

ゆったり、いや、ねっとりとした纏わり付くような話し方。虫唾が走る。

「申し訳ありません。昼食を摂りに行かせました。」

クーンさんが謝ることないのに！てゆーか、そんな見物する時間があるんだったら仕事しろよ。

「ほう。主人を差し置いて昼食に行くとは生意気。とんだ忠誠心だな。」

余計なお世話だ、コノヤロウ！

口が悪いかも知んないけど、腹が立つもんは腹が立つ。いや、段々腸が煮え繰り返ってきた気がしてきた。

私は何とか握り拳を作って耐える。しきりにミリアが心配そうな

視線を送って来た。

「…クーン魔道師さまにとっては日常茶飯事のことなのです。ですから、頭にくるとは思いますが、辛抱なさってください。」

その小声が耳に入って来た時、思わず手を握り締めるのを忘れていた。

日常茶飯事って、こんなねちねち言われるのが日課になってるってこと?ありえない。

「戯れ事、戯言だと思って気にしないのが得策です。

あんな肩書だけで生きている、無能な税金ドロボウ貴族の狸ジジイの言うことなど、気にしなければいいのですよ。

さてと、お耳汚しはここら辺で終わりにしていただきましょう。」

ただ呆然として部屋の扉の前で立ち尽くしていた。

…ミリアって毒舌なんだ。

ちょっとのショックとかなりのダメージを受けながら、私はミリアの後に続く。何事も聞いてなかったみたいに入ってく姿に、もう完敗だ。

「失礼いたします。」

堂々と歩く姿は格好よくて。どこまでも姐さんについて行きます、って心の中で誓った。

「宰相様からの伝言でございます。“騎士団員育成法の改正案はまだか”、との催促です。」

はつみみー。いつの間に宰相様と会ったのかなぁ。

てゅーか、私、ちょっとあの人苦手なんだよね。昨日会った時、若干怖かったし。しかも急に笑い出すから、心臓が何度もびっくりしちゃったんだよね。

「了解した。午後一番に届けるとを伝えてくれ。

お前は今後、午後の仕事に支障が出ないよう、ひるやすみをしごとに当てなくてもよい。宰相殿にもそう伝え、すぐに休憩をとってくれ。」

畏まりました、と言うと、ミリアは出て行ってしまった。

「他人の心配をしている暇などお前にはないはずだが。

それにしても、この女中が噂のお前の専属か?足を曝しよって、品位が疑われる上に、お前の母親を連想させる。

少し幼い気はするが、顔と身体は中々よいな。もしや愛玩用か?」

愛玩用?それは一体何ですか?

訳の分からないことを言うオッサンを睨みつけながら、貶されてることは確かだと雰囲気から察した。

「…聞き捨てならない事をおっしゃる。それはあなたには関係のない事だ。

それに、その娘は愛玩用などではない。…人を計りかねると、そのうち己の身を滅ぼしますよ。」

最後の一言は、私の背筋にも何か寒いものがぞっと来た。ってことは、このオッサンはクーンさんのその迫力を一身に受けてるはずだから、なおさらだろう。

案の定、狸ジジイは顔を真っ青にして、部屋からそそくさと出て行った。

「…すまない。」

オッサンが出て行ってからはしばらく、どちらとも口を開こうとしなかった。

私は詳しい事を聞いていいものか悩んでいたし、クーンさんはきっと私に話そうかどうか迷ってたんだと思う。

『どうして謝るんですか?』

クーンさんは悪いこと、一つもしてないのに。むしろ、謝って欲しいのは訳の分からない御託を並べて、明らかに私の事を見降ろしてきたあのオッサンだよ。

喋り方がねちっこかったその人は、イメージ通りの体型だった。

良く言って恰幅がいい、悪く言ってメタボってる。撫でつけられ

た茶色の髪は、見事なまでの七三分けで油ギッシュだった。

なんか、失礼だとは思うんだけど。…巨大な豚さんが質のいい服着て歩いてます、って感じ。

『クーンさんは何も悪くない。』

大体から言って、あのおじさんが訳わかんないことばっかり言うのが悪い。そんな中途半端だと却って気になるってくらいのささやかな情報。

あー、ホント気になるっての！

…ま、聞かないけどさー。あんな顔してちゃ、聞けない。

さてと。私はご飯でも食べに行こうかね。

『クーンさん、私ご飯食べに行ってきます。』

一礼して、お茶のワゴンを押しながら部屋を後にした。ミリアがきっと待っててくれるはずだから、急がなくちゃ。

私は走らない程度に急いで、女中部屋に滑り込んだ。

「お帰りなさいませ。」

涼しい顔をして礼をしてくれるミリア。しかし、その裏側はいかに、って感じ。

さっきちょっぴり怖かったしねぇ。

「どうしてそんな目で見るのですか？」

私の顔に何か付いてますか、なんてベタなこと、聞かないでください。心苦しいですから。

『んーん、何でもない。お腹空いちゃった！食いっぱぐれる前にご飯行こー。』

腕を引っ掴んで何とか回避。私はそのまま使用人たちの食堂へ連れて行ってもらった。

辛口ミリアとサンドイッチ - その2 -

ほー、広いねぇ。

流石はお城、高校の学食とは一味も二味も違う気がした。

ずらっと並べてある長机とベンチには人が集まって座っている。

それでも、もう昼休みが終りに近い所為か、人は疎らになりつつあった。

要するに、ちょっと雰囲気がヨーロッパ的な食堂ってとこかな。

トレーに自分の分を乗せるみたいだし、多分システムは学食とかと同じだと思う。

あ、見知った人たちはっけーん！

『マーサさん、リュクスさん、サイモンさんにエルさん！』

声をかけるとすぐに振り向いてくれたみんなは、明るい笑顔を向けてくれる。さっきまでの黒い気持ちはどこかへ行って、安心感が胸一杯に膨らんだ。

「おう、ネイ。今しがたリュクスに聞いた。…お前、記憶がないんだってな。」

なにー?!

いきなりテンションが低くなるエルさん。それぞれの顔色を覗ってみると、みんな暗い顔をしてる。ってことはそう信じてる訳で。

りゅ、リュクスさんのおバカー!何でさっきの今でもう話してんのよ。

まぁ、忠犬だろうから、悪気はないんだろうけどさぁ。

『いや、あの…それは、ですね…「いいんだ!」

またこのパターンか!いい加減飽きてきたぞ。

「俺、何でもするからな。ネイがやりたいことはなるべく叶えてやる!だから、記憶が戻るまで、何も心配することはねえ。安心しときな。」

はい、また弁解できないままですよ。

エルさんは涙を拭いながら厨房の方へと駆けて戻って行ってしまった。

「何がどうなってるのかは分かりませんが、とりあえずお昼を摂ってしまいましょう。」

ミリアの言葉は有り難かった。何とも勘違いが激しい人たちだ。私にはこのまま止めることはできないんだろうなぁ。これからはミリアに任せよう。

私は無視を決め込むことを決意した。

「ネイには複雑な事情があるってことは聞いてたけど、そう言うことだったんだね。」

う〝っ！マーサさん、首、絞まってます！！

何やらマーサさんまで勘違いしちゃったらしく、私は首元を締め上げるかのように抱き締められていた。

「マーサさん、ネイ様を放してあげて下さい。そのままでは花畑を見ることになってしまいますよ。」

冷静に、しかも食べるのを止めないままミリアは言った。

助かったけど、やっぱりミリアは裏が存在するのね。誰にだって裏側はあるのかもしれないけど、ミリアの場合は普段が明るくていい子だからか、ちょっと、いや大分怖い。

ミリアだけは敵に回さないようにしよう。これもまた心のノートにメモっておいた。

解放された私は、食事に手を付ける。

『うん、素材そのものだ。』

頷きながら食べる。ミリアはもう慣れていたようだけど、マーサさんはそれが不思議だったみたいで尋ねてきた。

『私の食べ慣れていたものとは味付けが違うのです。』

「そうか、記憶をなくしても身体は覚えてるってやつだね。」

勘違いは続行中で、私はもうそれでいいと思って、記憶喪失なんかじゃないと言うのは止めておいた。

ミリアに続いて食べ終わると、お茶を飲みながらため息をひとつ。午前中の間にいろいろありすぎて、ちょっと疲れちゃった。

人と接するのが苦手って訳じゃなかったはずなのに、この短時間で会った人たちはみんな個性的過ぎて。その強烈なキャラにクタクタだった。

もしかしたら、しばらく決まった人以外と会話を交わしてなかったから、急に人がたくさんいるとこに出て来て、人酔いしちゃったのかなぁ。

「大丈夫ですか？」

マーサさんは仕事に向かったらしく、目の前には心配をかけてくれる人が一人だけいた。

大丈夫、と小さく零すと、お茶を一気飲み。それをトレーに置くと、ミリアが片づけに行ってくれた。

さてと。これからどうしようかな。

とりあえず、私の中でクーンさんの仕事時間短縮計画を進めるために必要な事を考えなくちゃ。

「どうしました？そんな怖い顔して。」

急に声がかかる。聞いたことがある声。

『レークさんっ！』

声がした方を向くと、ここ数日一番一緒に居た人がいた。

「服を大胆にいじられましたね。“ニホン”では手足を出すのが批判的には捉えられていないため、当たり前なんですよね？」

ひたすら話してたから、クーンさんは地球についての知識を、今じゃかなり持ってる。ニコニコしながら話す姿に、はい、と答えると、その瞳はキラキラしていた。

「よくお似合いですよ。人形のように愛らしいですね。」

う～ん、嬉しくない。人形って…子供じゃないんだから、違う褒め言葉にして欲しかった。

ん？てゆーか、褒め言葉だったのかな？

レークさん、異世界の研究が進まないからお昼にでも話をしようって昨日言ってたけど、それを本当に実行するとは。確かお祭りの準備で忙しいはずなのに、大丈夫なのかなぁ。

「あー！神官様発見！！」

“げ、見つかった”、そう呟きましたね、今？逃げ出してきたんかい！

あれよあれよと言う間に、レークさんは白い服を着ている人たちに引きずられて行ってしまった。

何だったんだろうか？

呆然と立ち尽くしてると、ミリアが帰ってきて言った。

「私は仕事に戻りますが、ネイ様はどういたしますか？」

おそらく一部始終を見てたはずなのに。全く動じてないし…

『うーん、とりあえずクーンさんの仕事時間を短縮させる方法を考える。っと、その前にご飯持ってこうかな。』

私も気にするのを止めて、意識を別のことに持っていく。

「厨房の方に行けば、エルさんがいますから、相談すれば何とかなると思いますよ。

それと、クーン魔道師さまの仕事時間を短縮する方法は、私も考えてみます。」

ミリア万歳！

私は嬉しくなって飛びついた。

『ありがとう、ミリア！』

ミリアは固まったままだった。

ちょっとくらい反応して欲しいんだけど…無反応だと対応できない。

「…ネイさまは感情の表現が豊かですね。」

遠慮がちに言われたけど、そうは思わない。感情表現が一番なのは、多分リュクスさんあたりだ。

『ごめん、五月蠅かった？』

「いえ、そういうことではありません。」

少し言葉を濁す。そんな事されちゃあ、余計に気になるってのが、人間の性。

でも、ま、時間も無いし、そんなことしてる場合でもないんだけどね。

「とにかく、何でも協力しますから。ネイさまはそのままでクーン魔道師さまに接してあげて下さいな。」

了解、と残すとエルさんに会うために厨房まで行ってみた。

すごいお皿の量。まず最初にそう思った。

洗い甲斐があると言うか、何と言うか。それはそれは半端ない数の、使用済みの皿が山積みになっていた。

「お、ネイじゃねーか。どうした？」

困ったことでもあるのかい、と聞かれ、その表現にさっきのことを思い出す。

結局私は記憶喪失ってことになったままなんだよね。って言っても、もう弁解する気は更々ない。

人間ってのは学習するモノですからね。いい加減、何を言っても私が気を使ってるっていう風にしか捉えてくれないって分かってるもん。

それに、さっき思った。このヘンテコな設定は使える。だって、さっきのご飯もよく分からない野菜がいっぱいあった。

って、ことは、だ。

記憶喪失で全ての記憶が無ければ、きっと知らないことだらけでも変には思われないはず。

そう納得して、本題に入った。

『クーン魔道師さまが時間が無いっておっしゃるから、何か軽いも

のでも作って行こうかと思って。協力、してくれませんか？』

ゆっくり、見上げて懇願するように言った。

策士とでも何とでもお言い。私、腹黒いですからね！

「あ、ああ、もちろんさ。」

イエス！作戦成功ってことで、目的の実行はサクサク行きましょ。

辛口ミリアとサンドイッチ - その3 -

「何を作る気なんだ？」

そう、問題はそれなんだよねぇ。一応記憶が無いってことになってるから、テキパキ作るのはきっとまずい。

てゆーか、バレる。

そこまで記憶の所為にできるかが問題。エルさんが気にしない人だったらいいんだけど。

純粋に、私が記憶喪失だけど、体が覚えているから作れる、とか、純粋に信じてくれたら尚いい。

…よし、ここは気にしないで進めることにしよう。

エルさんにお願いして、パンと卵と野菜と油と酢を用意してもらうことにした。

「野菜は何がいるんだ？あと、たまごは何のたまごを使う気だ？」

ずらっと並べられたものに驚いた。すごい数。で、気が付いたことが一つ。

ここは城内の厨房、つまりたくさんの食材が詰まってるってこと。

そりゃあ、種類を尋ねられるほど有り余ってますよね。

自分で選べって言われたらまずい。ってことで、先手を打ちましょ。

『レタスとトマトとキャベツ。あ、あとニンニクもあったら。それとハムとベーコンとチーズもあれば嬉しいですね。』

エルさんって本当にいい人だよ。言ったものを全て聞きもらさずに、すぐさま用意してくれましたから。

それに、挙動不審な私を疑いもせずに…　心が少し痛みます。

でも、それにしたって。…用意した量が多すぎると思います。

トマトは一籠、ベーコンとハムとチーズは塊。油に至っては、瓶が一ダース。何人前よ?

それにしても、見かけないものだらけ。恐る恐る手にとって、黄色い葉っぱをかじるとレタスの味!白いのはキャベツ。

この液体、まさか…ほんのりピンクがかった液体は酢だった。

全部味は同じでも、色や形が違う。これから、食べる度に違う色のものを口にするのね。複雑。

「ネイ、だから卵はどれにする?」

そう言って見せられたのは、さっきの量の多い卵。よく見ると、３０種類以上あるみたいで、色や形が違った。手前にあったのを手にとって、とりあえず器に割り入れた。

『これ、黄身が緑!』

驚愕の事実！てゆーか、食べる気すらしない色だった。

「それは黄身じゃなくて緑身だ。」

うっそー、まっじー？ジョーダンやめてよっ！…いや、至極真面目だ。

エルさんは不思議な眼の色を隠しもしないで、私を見つめている。それからハッとして、愁いを帯びた目に変わった。

「ネイ、やっぱり記憶が薄れてるんだな。これからは何でも言え！おじさんが何でも相談に乗ってやるからな！！」

ハイ、って言いつつ、後ろめたくなって心の中で謝った。いくら腹黒い私にも、流石に良心は存在する。

本気で心配してくれているエルさんに、全てにおいて嘘をついてるのが心苦しかった。

そんなこんなで一段落ついて。

「ネイは黄身の卵が欲しいんだな？」

論点は元に戻った。

説明されたことによると、鳥の種類によって卵の中身の色が違うらしい。

黄身のものは原種に近くてあまり好まれないらしい。黄身が緑とかピンクとか黒とか、ましてや青とかより個人的には断然黄色がい

いと思うけどね！

ま、それは個人の自由だから一端置いといて。

『まずはこれを茹でます。』

それから、それから。やっぱりやることがあるのは嬉しくて。向こうに居た時よりも手早く料理を始めた。

卵の黄身と酢と油を使ってマヨを作る。

これはやっぱりサンドイッチには必需品だよね～。

そう思って掻き混ぜていると、初めてこれを見た時のクーンさんたちと同じように、エルさんは不思議そうな顔をしていた。

『ちょっと舐めてみます？』

それに頷いて小指にちょっとだけ付けて舐めた。すると、みるみる表情が変わる。

「う、うまい！こんなに美味いもの、今まで味わったことがない！

ネイ、どうやって作ったのか、もう一度説明しながらやってくれないか？」

その興奮とキラキラした目に圧倒されつつ、ちょっと面白かったから、企業秘密ってことにしといた。

今は時間がないし、また次回に乞うご期待！早くクーンさんに食

べてほしいから。

それからの作業はもっと早く進んだ。エルさんが手伝ってくれたしね。

ベーコンをカリカリに焼いて、ハムとチーズをスライスしてくれてる間に、私はパンにバターとニンニクを混ぜたものを塗って、フライパンで焼いた。

卵は潰してマヨネーズを加える。キャベツの千切りにもマヨネーズ。

本当はマスタードも入れて和えたかったんだけど、その、色が、ね。まさかの青だったからやめた。

青って！食べるものに青って！！食べる気失せないの？！

…とにかく、見事過ぎるお色でした。

ここまで用意したらサンドするのみ。私は三種類を考えてる。ＢＬＴサンド、たまごサンド、もう一つはハムチーズサンドのキャベツ入りだ。

あんまりにも熱い視線を送ってくるエルさんに、一種類ずつおすそ分けした。

さすが料理人。初めて見る食べ物に興味津々だ。手伝ってくれたお礼くらいにはなるよね。

そして、毒味係でもある。

酷いとか言う言葉は受け付けません。興味がありそうだし、私が作ったんだから毒の心配もない。

ま、食材が初なもの（見た目）だったってことで。

じーっとエルさんが咀嚼する音に耳を傾けて、感想を待った。

「う、うまい！今まで味わったことのない味だ！ネイ、料理の才能があるんじゃないか？」

ありがとうと言い、後片付けを簡単に済ますと、新しくお茶の用意をしてクーンさんの仕事部屋へと向かう。

その間もクーンさんの仕事時間の短縮方法を考えた。

でも、そんなに調理場から遠くなくて。そこにはすぐに着いてしまった。

朝とは違って人通りはない。ゆっくりと息を吸いこんでから、ノックして部屋に入った。

「ネイさん！元気にしていますか？」

開けた瞬間に満面の笑みが迎えてくれた。

『レークさん！』

なんでここにいるの？てゆーか、さっきのことを思い出すと、逃げてきましたね？懲りない人だなぁ。

なんてちょっと呆れちゃう。どうせまた引っ張り戻されるか、怒られるかのどっちかだと思うんだけど。

「実は頼みたいことがあるんです。」

さっきの笑みは未だ絶やしていない。ずっと思ってたんだけど、レークさんとクーンさんってホント対照的だよね。

って、今はそんなこと考えてる場合じゃなくて。お願い、だっけ？

あんまり好ましくなさそうだけど、レークさんのお願いとあっちゃあねぇ。聞くしかないでしょ。

同時進行でお茶を淹れることに許可をもらって、手を動かしながら耳を傾けた。

「私が神の声を聞くには、一度ネイさんに鏡盆に触れていただく必要があります。そうしないと、私は存在を感じられないのです。

式典の準備が進むにつれ、誤魔化すことが難しくなってきました。このままでは事実が発覚し、＜最後の乙女＞の存在が疑われてしまうでしょう。」

そんな事態になっていたのね。無意識に難しい顔になってしまう。

その人物を二人の男性が眺めていることは、当の本人も気づいていない。

『…それは、私の存在を隠すために必要なんですね？』

嫌だ、そう思う。

私はこの国の人の心を助ける存在かもしれないのに。でも、やっぱり私には何の力もないと思うから。

だから、その人たちの象徴として崇められるなんて、絶対に嫌だ。

無責任な事、したくないし言いたくない。それを回避するためなら、協力は惜しまない。

心の中でそう決心し、レークさんたちに向き合った。

『…わかりました。ご協力させて頂きます。』

身体を綺麗に曲げて頭を下げる。これは女中としての礼じゃない。私自身の決心。

辛口ミリアとサンドイッチ - その4 -

『それより、今時間ありますか？クーンさんにサンドイッチを作って来たんですけど、たくさんあるのでレークさんもいかがですか？』

二人は初めて調味料を見た時のような顔をした。それのお陰で、説明が必要なんだと分かる。

『私の世界の食べ物です。いや、挟んだだけだし、料理って言うほどのものではありませんけど。

クーンさんが食べる時間もないとおっしゃるので、手で掴んで食べられるものを用意しました。』

そこまで説明すると、どうぞ、と二人に促した。

本当はお米食べたいよね。でも、ここではパンしか見かけないし。

私みたいな東洋系の人がいるみたいだし、エルさんに聞いてあるか確かめてみよう。

今となっては本当に恋しいよ、焼き魚と米とみそ汁。日本人には必要不可欠な味だよね。

『お口に合うか分かりませんが、そんなに食べれないものではないと…

「うまい！」

「おいしい！」

二人の声はほぼ同時。見たことないものを食べるのを訝しがってるのかと思いきや、もう口に運んでいたようだった。

二人と勢いよく食べてる。そんなにお腹空いてたのかな？

二人の食べっぷりに満足しながら、お代りの紅茶をカップに注いだ。

お皿はあっという間に空っぽ。清々しいほどの食べっぷりにまた満足した。

「ごちそうさまでした。」

例に習って、いつもの挨拶。日本の挨拶、定着してる？

どうやら食に関しての深い考えを、一言の言葉で言い表していることに二人は感心したらしい。

私にとってはもう当たり前のことだったけど、文化も宗教も違うし、珍しい考え方なのかもね。

手を合わせて挨拶している二人を、不躾にもじっと見てしまった。

…いかん、いかん。ここ数日でいい男を見慣れてしまった。

これじゃ目が肥えちゃうって。

「さて、私はそろそろ戻るとします。今頃部下たちが血眼になって私を探してる事でしょうから。」

分かってるなら、もっと早く帰ってあげて下さい。

さっきから聞こえないふりしてたけど…レークさんを呼んでる声がずっとしてる。

半分泣きそうな声色からしても、ずっと探してたんだね、ってちょっと可哀相に思えた。

「では、日時は改めて。また明日もこの時間に参りますので。」

そう優雅に挨拶を残すと、さっとクーンさんの仕事場を後にした。

『レークさんの部下さんたち、可哀相ですね…』

思わず独りごちる。それに一言、気にするな、と言う言葉が返ってきて、何事もなかったかのように、レークさんを呼ぶ部下さんの声は途絶えた。

心の中で部下さんたちにエールを送ると、目の前の紙の束に意識を向ける。

こっちもこっちで大変なのだ。…主にクーンさんが。

手伝えることがないか考えなくちゃね。

一度食器を下げ、その途中で気付いたことがあり、ミリアに紙と書くものを受け取って、足早にクーンさんの元へと戻った。

「…何を始めるんだ?」

忙しいはずなのに、私を気にしてくるクーンさん。それじゃ意味無いって。

だって、仕事を効率よく回す為に私がいるんだよ?なのに、私のことをいちいち気にしてたら、タイムロスでしょ。

ま、そうは言っても、いきなり何か始めたら気になるってもんだよね。ってことで、説明しながら手を動かすことにした。

『この部屋を訪れる方々は、書類を自由に置いて行かれるようなので、あとで分けるのが面倒にならないように、あらかじめ置いて行く場所を指定するようにしようと思ったんです。

こうやって紙に省名を書いておけば一目で分かるでしょう?』

私は書類とにらめっこしながら、お手本どおりに名前を書こうとする。けど、どうも上手くいかない。

…うわっ、曲がった!

「…そうか。」

あ、今私の書いた字、ちらっと見ましたね!そしてあたかも見なかったフリするの、止めてください。余計に傷つく。

下手なら下手って言ってくれた方がまだマシだって。てゆーか、問題はペンと紙にある、と思う。

羊皮紙は凹凸激しいし、羽ペンはペン先がさけてるから自由に動いちゃう。

それに加えて、なんで読めるのか分からないこの国の文字はくにゃくにゃしてるし。きっとこの国の識字率は悪いと思っちゃうほど、ヘンテコな字だ。

格闘することおそらく３０分。私はようやく全ての省の名前を書いて、札のようにすることができた。

午前中に仕分けした分をそこに並べていく。

次は厚手の大きめの封筒に、これまた３０分ほどかけて名前を入れていく。次はさっきよりもうまくかけた気がする。

「それは？」

伸びをしている私に、見計らったように声をかけてくる。

『これはチェックが終わったものを入れる封筒です。』

チェック？と聞き返され、英語は伝わらない事を思い出した私は、確認の事だと伝えた。不便だと思う。

だって、日本語英語って結構普及してたから、日本語に直すのって結構難しいんだよね。

『もし私が省への道のりを覚えたら、私が届けに行く事も可能になりますし、その方が回転率が上がると思ったんですけど…』

最後の言葉を濁したのは、途中で自信がなくなったから。逆に迷惑かけるようなら止めた方がいいかも、って思えてきちゃって。

それに、クーンさんの無機質な目線の意味が気になった。

なんか、嫌だった？一度うろたえ、それからクーンさんを見る。視線があって、一瞬で逸らした。

…目力強いですね。切れ長の目は、私を捉えて離さないようだった。

『あの…』

無言の空間がきつくて、自分から声をかける。でも、やっぱり視線を真っ直ぐ交わすことは難しかった。

「ああ、悪い。ネイが他のヤツに知られると思うと、少しイライラしてな。そうでなくてもこの城内でネイはもう有名人になっていると言うのに。」

驚いて視線を上にあげると、その瞳に捉えられる。さっきと同じように逸らすことはできなかった。

『お、おお、お茶の用意をしてきます！！』

何とかそう口にすると、そこから飛び出した。

何これ！心臓が、痛い。活発に働き過ぎ！

胸の辺りを押さえるように、昼休みの比にならないほどのスピードで廊下を駆け抜けて、侍女部屋に飛び込んだ。

「ネイさま！あれほど飛び込んではいけないと…ネイさま？」

その場にへたり込んで心臓を押さえる。

冷静に慣れ、自分！

「お顔が真っ赤です。熱でもあるのでしょうか？」

心配してくれるミリアを余所に、私は自分のことで精一杯。おでこに手を当てて熱を計ろうとしてくれてるけど、原因は分かってる。

何だか知らないけど、クーンさんの言葉にドキドキしてるからだ。

『ねぇっ、ミリアっ！クーンさんって天然タラシ？』

「は？」

例によって、私はミリアに詳しく話す破目になった。

天然タラシ

現在、午後のお茶の準備をしております。

侍女部屋に飛び込んだ時、そう言う訳でちょうどミリアは私を呼びに行こうとしていたらしい。

「で、何があったんですか？」

テキパキと手を動かして聞いてくるミリアとは違って、私は動揺を隠せない。

いきなり核心を突いてくるのがミリアらしいと言いますか、うん。遠回りする時間はないって分かってるんだけど。

『あの、ですね…』

そう切り出した。何で敬語なのか聞かれたけど、それはなんか雰囲気だよ。

『クーンさんのお仕事を手伝おうとして、書類を私が配達してはどうかと提案してみたんだけど…そう言ったらクーンさん、私を他の人に知られるとイライラするって。』

あの時の目があんまりにも真剣だったから、他意はないんだって分かってるけど、ドキドキしてしょうがない。

自分一人の動揺はそのせいだ。

「ま、仲がよろしいんですのね。あの方にしては、分かりやすい行動に出るには随分と早い展開です。」

納得したように頷いてますけど、ミリア、私良く分かんない。置いてかないでよ。

どう言うことか話してくれるように懇願すると、言葉を選ぶようにして話し始めた。

「そのままの意味です。ネイさまはそのまま受け取ればよいと思いますわ。」

『それって、私の存在が迷惑で知られたくないってこと?!』

ま、まさか、そんな風に思われてるとは!ああ、でも確かに、私ここに来てから迷惑しかかけてないし…

てゆーか、突然ポッと湧いて出た私に親切にしてくれ過ぎてるし、いい加減そう言う扱いしてる事に気づけよ、って話?

「何でそうなるのですか!」

さっきまで平静だったミリアは、いきなり声を大にして言った。

でも、そう言う結論に、なるでしょ?

『だって、私はこの城内じゃ有名だって言われたよ?この奇抜(らしい)な格

好の所為でしょ？それに、ここに来てから迷惑かけてばっかりだし…』

私の今の気分はどん底だ。迷惑かけないようにするにはどうするべきか、悩みどころ。

「その意味、私分かりますわ。」

ため息をついて、手を休めて私に向かって言った。

「ネイさま、ご自分の容姿についてどう思われていますか？」

自分の容姿？今そんな話だったっけ？

不思議に思いながらも、ミリアの質問に答えた。

『指して特徴もなく、平凡な感じ？あと、残念な足の短さしてるよね。』

この国の人たち、みんな背が高くて足が長い。しかも、女の人たちなんかボン、キュッ、ボン、な体形してるから、私が最初早乙女って言われたのにも、今さらだけど頷ける気がする。

私の答えにやっぱり、と独りごちると、ミリアは口を開き始めた。

「ネイさまが1日で有名になられたのかは、たくさん理由がありますが、原因はその容姿ですわ。」

なに？！そんなに見るに堪えぬほど酷い？ニホンに居た時はそん

な事もなかったはずなんだけど…

「的外れな事をお考えになっているところ失礼しますが、ネイさまはご自分の容姿に自信を持った方がよろしいですわ。

大きく神秘的な黒い瞳はぱっちりしておられますし、艶やかな黒髪は印象的なほど美しいです。それに加えて透き通る白いお肌。

身長は平均よりも低いかもしれませんが、華奢な身体に細い手足。それなのにお胸はしっかりおありになって、総合的に見ても人の目をとても惹く、愛らしい存在です。

最初にクーン魔道師さまがおっしゃられたように、物語の森の妖精のように愛らしいんですもの。

クーン魔道師さまはきっと誰かにネイさまを取られるような気分になって、嫌なんだと思います。」

は、早口！一体どこで息継ぎしてたの、ってくらい早口だった。

「お分かりになりまして？」

そう言われれば、頷くしかなかった。

「それで、“天然タラシ”とはどういうことですか？」

どうもこうも、そのままの意味。日本人にはかゆい台詞を真顔で言ってくるんだもん。

『妖精だとか、私の髪を梳くのが楽しみの時間だからそれを奪うな、だとか。

なんか、こう、ここら辺がかゆくなる言葉をたくさん言われてるような気がしておりまして、ですね…』

そう言って、私は自分の胸の辺りに手を置いた。

「まぁ、クーン魔道師さまはそんなことをおっしゃられているのですね。意外ですわ。」

え?そうなの?私の記憶によりますと、しょっちゅうそんな事言ってる気がするんだけど。

もしかしたら、ここの人たちにとっては普通のことなのかもしれない。ほら、外国人ぽい感じだし、お世辞を言うのが当たり前とか。

私がいちいち気にし過ぎてるだけなのかも!そう納得。

『そか、そうだよね!お世辞なんだからいちいち気にしてちゃダメだって!』

わはははは、と大声で笑っている隣。

ミリアが頭に手をやって、悩ましげにため息をついたのは言うまでもない。そして。

「お気の毒に。」

そう呟いたのを、大声で笑っているネイが聞きとれるはずもなかった。

閑話？（前書き）

クーンさんサイド、再びです。

閑話？

はぁ、と一つため息。

先程飛び出して行った少女に声をかける事も出来ないまま、開け放たれた扉を閉めた。

さっき自分の口から出た言葉は、らしくないもの。

何を言ってるんだ、俺は。まるでおもちゃを取られて駄々をこねる子供みたいだな。

自分を省みるとはこのことか、と妙に腑に落ちて、椅子に座り直す。目の前の膨大な仕事を横目に、どうしても思考が別の方へ行ってしまう事実がそこにはあった。

ネイと出会ってから、大分日が経つ。夜の時間はお互いのことを知るのには最適な環境だった。

それに、ネイのあの艶やかな髪にも触れられる。見た目だけでなく、細くてサラサラと手からこぼれる髪は、本当に触り心地がよく、いつまでもな出ていたい気分にさせるものだ。

ネイに楽しみを奪うなと言ってしまうほど、気に入った時間。今日からそれがどうなる事やらと、いつもよりも進まない仕事に対してため息をついた。

とりあえず進めないと。今日からネイが屋敷に住むことになるんだ。夜遅くまでなど待たせてはおけんな。

気合を入れると、目の前のものに向き合った。

ハンコだけのものをすごい勢いで終わらせ、椅子の背もたれに寄りかかる。今日一日で大分疲れた様な気がしていた。

ノック音。それからドアが開いた。

「失礼いたします。お茶の用意をしてまいりました。一休みしてはいかがでしょうか？」

期待していた人物とは違い、もう一度背もたれに寄りかかる。普段ならば誰かに見せる姿ではないはずなのに、どうも力が入らない。

どうかしたんだろうか？普段の俺ならばこんな醜態見せたりしないのにな。

半ば自嘲気味に笑いを溢すと、調度いいタイミングでおかれたお茶に手を伸ばした。

「うまいな。」

「恐れ入ります。」

「…ネイはどうした？」

そう聞くと、さっそくですか、などと言われた。何か間違った事

を聞いたのだろうか？

「私が入室した際も、あからさまに残念な顔をしておりましたわ。」

そう…だったのか？意識していたわけではないのだが。

それよりも、元々は顔に出にくいと言われていたはずなのに、ネイが関わるとそうもいかなくなるのだな。

そう思い、自分に呆れる羽目になった。

「ネイさまは現在精神統一をすると言って、固まってらっしゃいます。」

何かあったのか？

そう思っただけのつもりだったが、口にしていたらしい。

ミリアの呆れた顔。いつもなら俺に向かってそのような表情はしないはずの完璧な女官だ。

そんなに変だったのだろうか？

「ネイさまはクーン魔道師さまのお言葉で心を乱しておいでです。それにしてもクーン様、ネイさまをあまりお苛めにならないで下さいまし。」

頼まれたようにそう言われても、身に覚えはない。

俺の言葉で心を乱す?何か変な事でも言ったか?思い返してみても、見に覚えがない。

分かることは、普段よりも格段に自分に正直になって、真っ直ぐ思った事を伝えていた、ということだけだ。

何がいけなかったのだろう?

「でも、私は応援いたしますわ。ようやく心をお砕きになれる方に出会えたのですね。

しかし、私からの忠告をお許しくださいませ。」

…なぜ、いろいろばれている?

疑問に思うことばかりだ。俺は顔に出にくいとみんなから言われていたはずだ。

と、言うことは。…ネイか?

「お察しの通りですわ。」

何故表情を読まれている?!半ば混乱に近い。

「ネイさまのこととなると、本当に分かりやすいほどお顔に出ております。

ところで、ネイさまのことですが、色恋に大分疎い方のようです。

クーンさまのお言葉で、この辺りがかゆいとおっしゃられておりました。その時にすべてお話になって行きましたわ。

クーンさまの事も、ご自分の事も。」

やはり、ネイだったか。あれほど分かりやすく、素直な娘はいないからな。

「…それで？」

先を促す。それはネイが自分の事も話したと言うから。

「私が言えることはここまでです。」

その思いはミリアには知られていたようだ。すぐに口を噤んでしまった。

「それでも、私は応援している事をお伝えしておこうと。何かあれば全て伺います。

ネイさまの内面を話すこと以外でしたら、何でも承りますわ。」

ミリアは丁寧に礼をすると、一度微笑んでから出て行こうとしてドアに手をかける。その途中でその動作を止め、俺に再び向き合った。

「ネイさまのはご自分の容姿に自信が無いようです。頓着がないとも言えますね。ですから、男性に言い寄られてもきっとお気づきになられないと思います。

クーン魔道師さまのお仕事を手伝いたいという熱意は、是非ともお受け下さい。

あと、リュクスさまが言っておられましたが、ネイさまは一度クーン魔道師さまの剣さばきを見てみたいそうですわ。」

どこで息継ぎをしたんだ…？

早口なミリアに驚く。

それよりも、ネイは自分の容姿に自信がない？

ありえない。あれほどまでに可憐であるのに。

気に入っている黒髪はもとより、あの黒い瞳は神秘的で惹かれる。吸い込まれそうになるほど透き通った純粋な色実を見せるそれは、とても大きくて愛らしい。

唇は果実のように艶やかで、赤い。

白い肌は触れると消えてしまうと思うほど儚く繊細で、華奢な身体は守りたいとつい思ってしまう。

身長が低く細いために最初は未成年かと思ったが、もう成人年齢は当に超している。

初めて砂漠でネイを抱き上げた時に、これほどまでに儚い少女がいるのかと思ってしまうほどだった。

男なら放っておかないであろうに、本人は自信が無いらしい。しかし、それは逆に役に立つ。

邪な思いは、そのまま顔に表れていた。当の本人は気付いていないが。

明るい性格、突っ走る癖。これは男から迫られても、天然攻防が期待できる。それに加えて色恋に疎いのであれば尚更だ。

そう嬉しく思いながらも、自分もその中に含まれていることに少し気を落としてしまった。

さて、どうしたものかと気にしつつも、目の前の仕事が終わらなければネイの髪に触れられる時間もやって来ない事を意味している。

…早いところ片付けよう。

そう思い、またネイのことで走らせるペンを止めた。彼女は成人している。あれだけ愛らしければ、元の世界に恋人がいたのではないのか？

…これは盲点だ。

そう気付き、もう一つ気になることができた。レークにニホンのことを話してはいるが、一向に寂しがるところを見ていない。

普通ならば、帰りたいと思うのでは？自分の故郷を思うことは当たり前だ。

その行動を一度も見せないとは、一体どういうことなのだろう？

何か事情があるのかもしれない。

今夜はこれを聞くことにして、そのためにも目の前の仕事を終わらせようと躍起になった。

おかげで捗ったのは無理もない。

閑話？（後書き）

彼が一番純粋でイイ奴なのかもしれません。

温かい家（前書き）

お気に入り登録が１００件をこえました！
ありがとうございます！！

「よし、終わった。」

クーンさんの一言にホッとする。

今日は私が初めて働く日だったから、大分迷惑かけちゃってたから。終わらなかったらどうしようかと思ったよ。

『いつもより早く終わりになったみたいですね。』

めまぐるしいほどのスピードだった。

私はと言えば、ミリアにお願いして各省までの道のりを教わって、書類を届けたり、お茶を入れたり、そんなことで一日が終わってしまった。

もっと、役に立つことしないと。そう意気込んで、やる気を明日へ持ち越すことにした。

「ネイがいたからな。よし、帰るとするか。」

さっと立ち上がると、エスコートをするかのように私に手を差し出してきた。

と、ここで戸惑う。いや、日本人としては戸惑って当たり前だと思う。

それに、私はクーンさん専属の女中だし…そのままフリーズしていると、ノック音、それからドアが開いた。

「ネイさまのお荷物をお持ちいたしました…何をなさっているのです？」

明らかに呆れたようなミリアは、半眼で見てきた。そんな事言われても、と心の中で言ってみたものの、それはもちろん届くことはない。

一時停止したかのように立ち止まっていた私とクーンさんは、ここでさっきの動作を止め、再生された。

「外に馬車のご用意はできております。ネイさま、また明日お会いしましょう。」

そう言うと、さっさと踵を返す。

ミリアらしいけど、いくらなんでも要点しか述べなさすぎじゃないですか？！って、混乱してるのは、さっきの微妙な空気の所為なんだけどね。

気を取り直して、何事もなかったかのように振る舞う。それはクーンさんも一緒。私は促されるまま馬車に乗り込み、お世話になるクーンさんの家へと向かった。

馬車は１０分足らずで止まり、到着した事を伝える。

クーンさんに続いて降りようとすると、慣れないものの所為か、バランスを崩してしまった。さっきと同じように手を差し伸べられ

たけど、今度は素直にその手を取ることができた。

ほわー、いかにも、なお屋敷ですなぁ。

古く、しかしどこか風情があって、造りがしっかりしているお屋敷を、私は馬鹿みたいに感心して眺める。

ほら、都会に初めて来た人が、街並みとか電車に驚く、あれと一緒。今までの生活からしてみれば、あり得ない家の造り。

本気で、中世ヨーロッパに送り込まれたんじゃないかって思っちゃうほど。

「ネイ?」

馬車から下りてからいつまでも突っ立っていた私に、どうしたんだ、と声がかかる。

どうしたもこうしたも、圧倒されてるんデスヨ。とか、言える暇もなく、私は促されて中に足を踏み入れた。

広い玄関、吹き抜け、正面の螺鈿階段。…映画のセットみたい。

どうも現実味がない。緋現実的過ぎるのかもしれない。

本当に、ここで生活してるの?

見慣れた無機質な部屋の造りが面影もないそこは、壮大過ぎる作り物のように感じた。

クーンさんのお屋敷の中は、城よりも生活館が漂っている。豪華だけど豪勢とは言えないそこにある調度品の数々は高そうだ。使いこんであって、逆に好感を持つ。

それに触れてみたい好奇心に駆られつつ、目の前の人物たちによってそれは阻まれた。

「お帰りなさいませ。」

うわ、リアルメイド！城にもいたけど、こっちの方が本当にご主人さまに仕えてます、的な感じ。私もこれからのために見習わないと！

「クーンさま、こちらのお譲さまは？」

不躾にもじーっと見つめていると、視線を交わすことなくクーンさんに疑問をぶつけている。

私、そんなに不審者っぽいのかな？

何だかいたたまれなくなって、視線を下へ向ける。こう言う時は大人しくして、クーンさんに任せておくのが一番だ。

「今日からここに泊ることになったネイだ。俺の部屋の隣が空いていたな？そこをネイに充てて、取り急ぎ湯あみの用意をさせてくれ。」

疲れているだろうから、と付け足された言葉に突っ込みたくなった。

それはクーンさんの方でしょ、って。あれだけ働いといて、私の心配って。自分の休息も考えて欲しい。

「まぁ、それならば先に申しつけておいてくだされば、お部屋をネイさまに合わせた可愛らしい飾り付けにできましたのに。

シュリキスさまはそんなことをおっしゃられませんでしたが、この事はお知りで？」

「…私は知っている。」

…宰相さま？！どうしてここに居るんだろう？

一人訳が分からない私に、クーンさんは後で話すと耳打ちした。

「ネイ、よく来たな。自分の家だと思って寛ぐといい。また後日ゆっくり話すとしよう。

私もネイの料理を食してみたい。その時はぜひ私も預かりはかりたいものだな。」

そう残すと、さっさとどこかへ行ってしまった。

…この世界の人たちはいつも急に現れて、いつもすぐに消える。心臓、びっくりしちゃうから。

でも、帰り方が見つからない今、ここでの生活を考えるべきだから、慣れなきゃいけないと思う。

…なんか、どっと疲れた。

それを顔に出さないようにしていると、さっきのメイドさんは私を部屋に案内してくれた。

『うわー…・・』

お屋敷についた時にも呆けちゃったけど、ここでもまた呆ける。

だって、広過ぎ…今までの価値観が崩壊しそう。

くるくる部屋を見回す。ここまでくると現実なんだって思うしかない。

「お気に召しましたか？」

私を面白そうに眺めて、そう尋ねてきた。一瞬ハッとして、一人じゃなかった事に気づいて急に恥ずかしくなる。私は動きを止めて、メイドさんに向き直った。

『あの…こんなに広い部屋を使わせてもらってもいいんでしょうか？』

「お嬢さまはとても謙虚な方なのですね。」

さっきの笑顔と違って、優しい微笑み。私はおばあちゃんを思い出してしまった。今、思い出したくなかったのに。

私は俯く。そうするしか対処法がなかったから。

いつも見たくないものから目を背ける癖は健在らしい。こうやって私はいつも逃げている。何かを察してくれたのか、声色に少しだけ変化があった。

「もう少ししたら湯あみの用意が終わります。これからしばらく滞在するようなので、このお部屋も少し飾らせて頂きますね。」

『あっ、いえ、私なんかのためにそのような事をしていただくわけにはいきません。』

語尾が小さくなる。メイドさんの目力に負けたから、目をそらしてしまった。

『ここに居させてもらえるだけで、十分なんです。』

私は多くを望んじゃいけない。他人の迷惑になるべくならないよう、他人の役に立つようにしなくちゃいけない。

「まぁ、本当に謙虚な方なのですね。しかし、クーンさまの命ですもの。おもてなしさせてくださいな。」

でも、という私を止め、さらに話し出す。

「謙虚な事はお嬢さまの美徳だと思います。しかし、他人の家に世話になる事を考えてみてください。

おもてなしとはされるもの。それを受けなくては失礼にあたると言う事を覚えて下さいまし。」

『…はい。』

私にとってその言葉は重くのしかかった。言われた事は的を射ている。私は、失礼なことをしてるんだってこと、考えてもいなかった。

それに…ここはあの場所とは違う。きっと、考え方だって違うはず。

「そんな顔はなさらないでください。女中どもはお嬢さまがいらして下さったこと、実に喜んでおります。

この家のお譲さまは早くに嫁がれてしまったので、物寂しく感じたいたのです。」

にっこり笑顔はやっぱりおばあちゃんを彷彿とさせた。

「男だらけではむさくるしいか？」

ひ！急に声が？！

と、思ったら、クーンさんが入口に立っていた。

いつの間に来たんだろう？

着替えたらしく、公務の時よりもラフな格好。それでも現代的なものとはだいぶ違っていた。

「いいえ、そのような事は申しておりません。ただ、楽しみが増えた、と。」

一触即発?

主従関係が成り立っているはずなのに、どうも火花が散ってるように見えた。

腕を組んでいるクーンさんは、若干威圧的。一方、女中さんは相変わらず微笑みを浮かべたままだ。お互いに纏っている空気に温度差がある。

どうしたものか、仲裁に入るべきか、と考えていると、一言声をかけて女中さんは出て行ってしまった。

もちろん残されたのは二人。クーンさんはお風呂に入るように言うと、一時間ほどしたらくると残して出て行った。

部屋に、今度は一人ぼっちで残る。

とりあえず荷物を抱えてソファーに座っていると、奥の扉から女中さんが数人出てくる。どの人も30代ほどで、やわらかい笑顔を浮かべているから好印象だった。

「湯あみのご用意ができました。」

私ははい、と立ち上がる。そこへ向かうとその人たちは笑顔を浮かべたまま、その場を動かない。

どいてもらわないと入れないんだけど…?

え？と思っていると、一瞬で服を剥ぎ取られた。

『えっ、ちょっ、まっ……！』

止めようとした声を遮られ、お手伝いしますの一言。ひ、一人で入れますー！

温かい家（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

ネイの心、クーンの思い

…疲れた。お風呂に入ったはずなのに、疲れた。

一人では入れるのに、花の浮かんだお風呂に入れられ、隅々まで洗われた。良い匂いがするから、その点に関しては嬉しいけど、死ぬほど恥ずかしかった記憶しかない。

髪にもなんか塗り込もうとしてたけど、クーンさんがいつも乾かしてくれる事を述べたら、違和感の残る笑顔をして早々に切り上げて行った。

全て済んだことの安心感から、白いキャミワンピのようなものを着せられてるけど、そんな事を気にすること無くソファーにだれる。

身体がぽかぽかする所為か、うとうとしてきた。でも、クーンさんが後で来るって言ってたから、まだ寝ちゃいけない。

そう思ってはみたものの、ついうとうとする。夢半ばになったとき、ノック音が聞こえ、いけないと思って姿勢を正して返事をした。

「悪い。起こしたか？」

いえ、と一応。顔から半分寝てたことなんてばれてるんだろうけど、それでもやっぱり一応。

当たり前のように私の所へやってきて、いつものように髪を拭っ

てくれる。これにはホッとした。

さっきまで、3、4人に囲まれてお風呂に入ってた。恥ずかしいったら無い。

でも、クーンさんに髪を乾かしてもらうのは、最初は恥ずかしかったけど、今は心地いい。眠りを誘う心地よさを押さえながら、今日も話をした。

「ネイ、聞きたいことがあるんだ。」

神妙な面持ちであろうことが、雰囲気からして分かる。私は何を聞かれるのかと身構えた。

「ネイは…どうして元の世界に帰りたいと言わないんだ?」

その言葉はずっしりと胸の奥に圧し掛かった。

それは今まで黙ってきたこと。…触れられたくなかったこと。

俯いて、何も言えない。それは私の黒い部分だから。

『聞いたらきっと、私のこと嫌いになります。』

だから、聞かないで欲しいと願う。ここに来てからの私を、今の私を知ってくれてる人だから。私を嫌って欲しくない。

嫌われたら、今度こそ立ち直れない。

「何を聞いても、俺がネイを嫌いになることなど有り得ない。ネイ

こそ、俺の話を聞くと、きっと俺を嫌いになるさ。」

話したくなければ話さなくていい、と言われ、迷う。

私を嫌わない？

…でも、それは“絶対”じゃない。

だけど、私もクーンさんの事情、気になってた。昼間のおデブさんが言ってた事もあるし。

『私が私のこと話したら、クーンさんもクーンさんのこと教えてくれますか？』

それにＯｋを貰えたから、私は正直に話すことにした。

『私…いらない子なんです。』

つい最近までのことだったんだけど、何とかその輪から脱した。それでも、関係性は切れないから、この世界に来れたこと、実は心から嬉しく思ってる。

『私の両親、離婚してるんです。その時、どっちが私を引き取るのか言い争ったの。

…二人とも、私のことといらないから。お互いに押し付け合って、別れてからもずっと喧嘩し続けてました。

結局、父方の祖父母に引き取られました。』

そこまでは辛かったけど、捻てた訳じゃない。おじいちゃんもおばあちゃんも優しくて、私は両親のどちらかに引き取られなくて良かったって思ったし、今まで生きてた中で幸せだった。

でも、問題はその後のこと。

『祖父母が事故で亡くなって…私はまた行き場を失いました。結局父に引き取られたんですけど、それは世間体があったからで。

本当は新しい家族がいたから、私は邪魔者だったの。』

ここまでくると、自嘲気味に笑うしかない。泣かないようにするためには、そうすることで紛らすのが一番だから。

『高校生になって、家に居辛くなってバイトばっかりして。早く家を出たくて、遠くにある大学に合格を貰って、家を出たんです。』

いつの間にか髪を拭っていた手は止まり、頭をなでる動作に変わっている。

クーンさんは何も言わずに、ただそうしてるだけだった。それに身を任せるように、私はクーンさんの胸に背を預ける。体温が、少しだけ私の心をほぐしてくれる気がした。

『非行に走らなかったのは、多分心のどこかで期待してたから。でも、やっぱり私はいらない子に変わりなかった。

昔から、何をするのも苦にならない性質だったんです。勉強も、運動も、努力とかしなくても簡単にできちゃうから、不器用な妹と

比べる対象に必然的になる私は邪魔者。

妹は慕ってくれたけど、あの人たちは自分の娘より何でもできる私が嫌いだったみたい。』

あの時の目。私が何をしても褒めてくれなかった。だから、途中で諦めたの。半分血はつながってるけど、赤の他人。

腹違いの妹だけど、年の離れた知り合いの女の子。

ただそれだけの関係で、私は単なる居候。そう考えるようになってた。

『そんな人たちと縁を切りたくて、遠くの学校に入ることを決めました。離れたいと思って遠くへ逃げたけど、知らない世界に来たんだったら、もう会う事もないから。だから、帰りたい、って言わないし、思いもしてないんです。』

ここまで言って、やっぱり根っ子の部分はいつまで経っても変わらないな、と思った。

クーンさんは何も言わない。逆に言われなくて良かったって思う。それに、何を言うにしても困る内容だって分かってる。

次は俺の番だ、というクーンさん。だから、俯いてた顔を上げて、クーンさんを見た。

「宰相殿がここに居たことに驚いていただろう?」

その問いに、正直に頷く。クーンさんは、私の頭をなでる手を休

ませること無く、口を開きだした。

「俺は…宰相殿の養子だ。」

随分気心が知れた仲だと思ってたけど、そう言うことだったのか、と思った。思っただけで、口は挟まない。

「俺の元々の名はクーン・リッキンデル・デューク。現国王陛下は俺の腹違いの兄にあたる。」

?!

ってことは、だ。

…クーンさんって、ひょっとしなくても王族の血が流れてるってこと?

うん、なんか分かる気がする。纏ってる空気とか、品の良さが滲みだしてるから。

「母上は身分が低かった。先王は単なる遊びだったみたいだが、母上に手を出した。そんな関係だったために、先王は俺の認知を拒んだ。」

私と、少しだけ似てる。親に拒まれた時、クーンさんは何を思ったんだろう?

「母が亡くなってから、俺を引き取ったのが王家の親せきにあたる宰相殿だ。幸い兄上との仲は悪くなく、俺は兄上の役に立ちたいと

思って今の役職にこぎ付けた。

実際は余計な仕事や貴族たちの小言で精一杯だが、これから努力して、兄上の片腕くらいにはなってやるつもりだ。」

…すごい。私は捻てるっていうのに、クーンさんは目標すら持ってる。

さっきクーンさんが私の話に触れなかったのと同じように、私もクーンさんの話には何も触れなかった。

それから他愛もないことを話してたら、いつの間にか寝ちゃってたみたい。朝目が覚めたら、ベッドに横たわって布団がしっかりかかっていた。

きっとクーンさんが運んでくれたんだよね。お礼、後で言わなくちゃ。

さて、どうしたものか…

今日も一日頑張るぞ、と意気込んだはずなのに、その途端から力が抜ける。私は昨日初めてここに来たわけで。何がどこにあるか、とか、昨日来てたカスタムメイド服がどこにあるのか、とか。諸々知らない。

つまり、どうしていいのか分からないってことにつながる訳だ。
と、タイミング良く昨日のメイドさんがやって来た。

「よくお眠りになられたようですね。本当ならばもう少しお休みしていただきたいところですが、クーンさまと共に城へ行くようですから、失礼ながら起こしに参りました。」

私なんかに敬語使わなくても、って思うけど、おもてなしは受けるもの、だから。私はありがとうございます、と礼を取った。

顔を洗って着替える。やっぱりカスタムメイド服は目立つらしく、気にしていた女中さんにどう作ってあるのか教えて欲しいと頼まれ、それに了承した。

そのまま誘導されて大広間へ。

朝ごはん、らしいです。

でも！やっぱり広すぎ！

みんなでご飯を食べるには、少々（大分）広い部屋。パーティーを催す際に、この位の広さがなきゃダメなんだってさ。貴族って大変なんだね。

お誕生日席に宰相さま、その向かいにクーンさん、右手に奥さまがいる。私は失礼ながら、空いてる席に腰を下ろした。

「ネイ、よく眠れたか？」

おはようございます、と言ってから質問に答える。挨拶、大事だからね。最優先。

『はい、とても。』

宰相さまは満足げに頷き、奥さまを紹介してくれた。

奥さまは、まさに貴婦人、そのもの。微笑みも言葉遣いも、所作も。全てが柔らかくて優雅。

「クーンが女性を連れてきたと聞いて、とても驚きましたけど、とても愛らしい方で嬉しく思いますわ。」

クーンさん、モテそうなのに、女の人連れて来たこと無いんだ。

あ、でも、生活してて中世ヨーロッパ的な雰囲気（映画情報）だったから、私のいた現代とは違って、簡単に交際するってわけにはいかないのかもね。

「これからも、クーンをよろしくお願いしますね。」

頭を下げられて私もつられる。

『私、クーンさんにお世話になりっぱなしなので、少しでも力になれるように頑張ります。』

頭を上げるように声をかけられる。だから、ゆっくりと上げると、微笑み続けている奥さまがそこにはいた。

「母上、公務の時間が迫っています。ネイを苛めるのはそのくらい

にしてあげて下さい。」

いつの間にか宰相さまとクーンさんはご飯を食べている。いつもクーンさんが私の所へ来てくれていた時間を考えると、確かに時間ないかも。

私は慌てて手を合わせてから食べ始めた。

「まぁ、私は苛めてないわ。心外ね。情けない息子のことをお願いして何が悪いのです？」

あら？意外とおっとりしてないかも。

ズバズバ言う奥さまに、クーンさんはたじたじだ。面白いもの見れた気がする。

奥さまに口撃されているクーンさんを見て、私と宰相さまは目を合わせて笑った。

どうやらいつもの事らしい。

一方的な口論になっているその横で、私はのんびり宰相さまとお喋りしながら朝食を取ることができた。

口撃

『奥さま、意外と毒舌なんですね。』

馬車に揺られながら、ぐったりしてるグーンさんに話しかける。
朝から随分とお疲れなようだ。

『疲れているようなので、後で甘い物でも用意しますね。あ、それと、今日のお昼ごはんも用意しますか？』

「甘いものはあまり好きではないのだが…」

甘いものが好きじゃない？！ダメダメ！疲れてるんだから、少しでも糖分とらなくちゃ。

「昼は任せる。ネイの作るものは面白いし、美味いからな。」

そう言われて嬉しくなって、いっぱいの笑顔でハイと答えた。

昨日、あんなこと話したのに、変わらない態度。嫌われてない気がして嬉しかった。

城に到着してまず出迎えてくれたのはミリア。ミリアに連れられて昨日の女中部屋へ。そこに居たマーサさんは笑顔で迎えてくれた。

「昨日はよく眠れたかい？」

『はい。』

それはよかった、と言い、クーンさんに早速お茶を持っていくように言われた。

カチャカチャを立てながら用意していると、今日も陽気なエルさんが鼻歌交じりで登場。朝の挨拶を交わしたのに、まだそこに留まって私を気にしている。不思議に思っていると、今日もクーンさんの昼食を作るのか尋ねられた。

「ネイの料理は興味深いし勉強になる。是非作るところを見せてくれ。」

なるほど。マヨのことごまかしちゃってたから、そりゃ得体のしれないもの作る人が気になるのも仕方ないよねぇ。

『了解しました。また後ほどここに参ります。』

カラカラとワゴンを押して向かう途中、やっぱりカスタムメイドは目立つみたいで、じろじろ見られたけど、たじろぐことなく丁寧に礼をとってから進む。

世の中気にしなくていいものは気にしない。人の視線なんて一番気になるけど、文化が違うとこに居るんだもん。気にしたら負け。

視線なんて素知らぬふり、を通してクーンさんの執務室に着くと、お茶を丁寧に淹れる。

仕事前だもんね。

美味しいお茶で心を落ち着けてからの方がいいはず。

湯気の上がる紅茶を持っていき、優雅に呑むクーンさんを眺める。

ほんと、いい男。恋人の一人や二人、いてもおかしくないだろーに。

クーンさんがお茶を飲み干そうとしたその時、ノック音が広い部屋に響き渡る。どうやら仕事の時間みたい。

私は急いでカップを下げる。扉は返事を待たずに開いた。さっきより慌てて昨日用意した机に着く。説明を任せてもらうことになってたから、ぐっと身構えた。

『おはようございます。』

丁寧にまずお辞儀。次に頭を上げて、笑顔を浮かべる。

『各省の名が書いてあるカードの所に書類を置いていただきたく思います。クーン魔道師さまに説明が必要な方は、そちらへお並びください。』

何ら訝しげな顔をされる。

うん、そんな気はしてたから、覚悟はできてる。だから、私は笑顔を絶やすことなくそうするように促す。それでも反発する人は必ずと言っていいほどいるわけで。

早速その声が上がった。

「なぜ我々がそのような事をしなければならない。」

おおっと。

一際高そうな生地で作られた服を見に纏っているおじさんに、お小言ちょうだいしましたー。

あの人はきっと、身分が高い人。

近づいてきて私の前に立ち、じろじろと頭のてっぺんからつま先まで見る。

…省の名前、見えた。だからこそ、この人がなんでこんな態度を取るのか、ここで納得した。

曲がりなりにも、クーンさんは省をまとめる筆頭くらいの地位に居るはず。若いからと言って、失礼な態度を取っていいはずがない。

昨日、ミリアにいろいろ聞いといて正解だった。

この省の人は元々議会に居た人が多く、王族に反発気味。今の王に代替わりした時に、失脚させられたのを根に持ってるんだって。

…自分が悪いことしたくせに。

いかん、いかん。

自分の黒い感情を心の引き出しに収めつつ、笑顔を引きつらせないように気を引き締めた。

『失礼ながら申し上げさせていただいてもよろしいでしょうか？』

そう言ってから、さらに続ける。言ったのは建前。返事を待たないまま自分の思った事を述べていく。

反論させない勢いで。

『クーン魔道師さまが毎日膨大なお仕事をなさっている事はご存知ですよね。

あのお方は大変勤勉な方で、自分の持てる力、全てを使ってこなそうとするお方でいらっしゃいます。

それ故に昼食を取る時間も惜しんで働いておられます。』

「だが…」

喋らせませんけど、何か？腹黒万歳ですよ。

こんなことで自分の性格の悪さが役に立つんなら、露見するのだって恥ずかしくない。だいたい、私が言ってるのは正論だもん。それを盾にするくらいの事はできるはず。

『立場的にそう言う方なのは存じ上げております。

しかし、どんなに努力を惜しまず、働き者である方も、人間は人間なのです。

体力的にも精神的にも、必ず限界があるのです。それに、クーン

さまは書類調整のお仕事に留まるだけでなく、騎士団長としても働かなければなりません。それにも関わらず、現在はそのお時間がございません。

夜中までかかって机に?り付き、翌朝には誰よりも早く登城して執務室に居らっしゃられる。食事もままならず、睡眠もままならない。

それでもこのお方が倒れないとでもお思いでしょうか?』

ぐっと押し黙る顔を満足して見つめる。その間も笑顔を絶やさない。

後ろの人、引かないでー。私は事実を述べてるだけだからー。

「…それでも、それが仕事というものだろう。」

まだ言うか。まだ言いくるめられなくちゃ気が済まないのか?そーか、それなら受けて勝つのみ。

またにっこり笑って続けた。

『先程も述べましたように、クーンさまの仕事は机上のみではないのです。

机に縛り付けられている時間を短縮できれば、クーンさまの身体を労わる時間が出来ますし、さらなる騎士団の強化にも希望が望めます。

それに、夜中に届く書類はそちらにとっても好ましくないのでは

ないでしょうか？』

訳が分からん、って顔すんな。いや、あんたは帰るんだろうけどさ。他の人たちは納得してくれてるみたいだから、夜遅くならない方がいいと思ってるんだって。

『ちょっとしたことで時間を取られない方がいいのです。何事も効率が大切ですから、今私とこうして言い争っている時間も勿体ないとは思いませんか？』

そう言った瞬間に、人々は並んで書類を置いて行ってくれる。一方、私の口撃を受けたおじさんは顔を真っ赤にしている。けど、私は素知らぬふり。

そして腹黒いですから、追い討ち掛けますよ、純粋っぽく、天然っぽく。

『書類、お預かりいたします。それと…出過ぎたことを申しました。どうかお許しください。』

書類を受け取って頭を下げる。おじさんはさらに顔を真っ赤にさせて、出て行ってしまった。

あら、もっと怒らせちゃった？…ま、いいか。

そのことで周りの人はより一層機敏に動き始め、書類を重ねていった。

書類が積まれていく机を見ながら、クーンさんが説明を受けたも

のを封筒に入れる。後で分かりやすくするために。

いつもよりも一時間も早く列が片付いたとクーンさんが言った時、ちょっとだけ嬉しくなった。

「その封筒は？」

ああ、これか。

『届ける書類用に作ってみました。一定量が済んだら、説明が必要なもの以外は私が配達しますね。』

ここまで用意して、やる気満々！なのは、よかったんだけど、もう書類の分類が済んでるから、やることなんて無くて。

『…ヒマ。』

思わず独りごちる。横目でペンを走らせているクーンさんを見て、嘆息した。

『クーンさん、何かお仕事ください。』

邪魔して悪いけど、暇すぎる。

昔から生徒会、バイト、勉強と忙しい事に慣れてたから、やることがないとどうも落ち着かない。

一昨日まではレークさんと話してたから、一応はやることがあっ

た。でも、今はこの部屋にはクーンさんと私しかいない。

それに、集中して仕事してるのに、雑談なんかしてうるさくするわけにはいかない。

『やることがないと落ち着かないんです。』

良く言えば働き者、悪く言えば落ち着きがない。

足をじたばたしてみる。さっき、クーンさんに椅子に腰掛けてろって言われた。本当は女中だからって断ったんだけど、許されなくて座らさせてんだよね。

…思ったけど、クーンさんって過保護?ってな訳で、手足がフリーな私は、とりあえず軽く暴れてみることにしたんだけど…

そんな事は敢え無くスルーされた。

「俺としては、届けに行かせるのも好ましくないんだが…」

え!これ以上やること奪うんですか?!やってられないよね、私。てゆーか、迷惑だったのかな。

そう思って質問してみても、そう言うことじゃないと言われて終わりだった。なのに、渋い表情が目に焼きつく。

どう言う意味なんでしょう…?

異文化

結局やることがなくてクーンさんの執務室を後にした。

とりあえず、女中部屋に向かう。もしかしたら何かやることあるかもしれない。と、思ったのに。

「ネイさまにやらせるなんて、いくらなんでもそれだけは聞き入れられません！」

頼みの綱だったミリアに、一蹴された。どれだけ懇願してみようとも、頑なミリアは折れてくれない。

最終的に、は私は客人だからと断られる羽目になった。

「今日もクーンさまの昼食を作るおつもりなら、早々に厨房へ向かわれたらいかがでしょうか？」

ミリアのアドバイスは私を閃かせたけど、どうもここで疑問。

『私が行ったら邪魔にならないかな？』

そうでなくても城内中の人の食事をあそこで用意してるらしいんだもん。流石に私的欲求を満たす為に使っちゃダメでしょ。

とか何とか言いつつ、昨日は使っちゃってるんだけどね。

「いつも紅茶を用意している場所なら、使用は可能ですよ。器具と

材料さえエルさんに用意してもらえれば、何とかなるはずです。」

…エルさん、何者？てゆーか、厨房で仕事しなくてもいいの？

不思議に思って訊ねると、続けざまに意外過ぎる答えが返ってきた。

「エルさんは料理長です。」

なに？！そんな偉い人だったの？！

『どうしよう！私、すごい気軽に接しちゃってた。失礼過ぎだよね？』

「大丈夫です。」

焦る私とは裏腹に、ミリアは至って冷静。

「エルさんは決して私たちを見下したりいたしません。“様呼びはやめてくれ”とおっしゃられて、今ではみんな気兼ねなく話すことができる、とてもよいお方です。」

そう、なんだ。うん、そっか。なんかそんな感じだよね。見ず知らずの私にまで気さくに話しかけてくれたような人だったし。

でも。

『…料理長パシらせちゃった……』

一番のしこりはこれ。

昨日全てを用意してくれた事を思い出す。あれは流石にひどかったよね。

“パシらせ…？”と呟くミリアに、こき使う事だと教え、うなだれる。確かに知ら言いものだったり、場所だったりしたし、無理もないんだろうけど…

「エルさんはネイさまの料理の興味がおありですし、むしろ手伝わせてほしいと言うはずです。」

そう言われて、厨房まで押しやられる。エルさんを呼んでおいて、ミリアは楽しそうに去って行った。

「今日は早かったな。で、何を作るんだ？用意するものは？」

キラキラした瞳にさっきの話を重ね合わせてみても、どうも料理長には見えない。

そんな失礼極まりない事を考えながらも、やることはやろうと思って、腕まくりをした。

『うーん、何作ろう…』

全く持って何も考えてなかった。でも、今日は昨日よりも時間できそうだし。がっつり食べる時間くらいあるでしょう。

なんて、無責任なこと考えたりして。それだけじゃなく、ちゃん

とお腹いっぱい食べて欲しいって意味もあるんだけどねぇ。

それに、さっきミリアからの言伝で、お昼はレークさんも一緒だって言ってたし。

うん、軽食じゃなくて、普通のご飯にしよう。

『エルさん、マヨネーズの作り方、知りたいですか？』

次の瞬間のエルさんは、まるで小さい子供みたいに大きく頷いていた。

そんなに首振ったら、もげるよ？と思いながら、昨日とほぼ同じものを用意してもらって、順を追って説明をしていると、やっぱり素人の私と違うエルさんは、料理人の手つきを披露してくれた。

『これ、生野菜にも温野菜にも合うんですよ。あとは炒め物、肉でも魚介類でもどんと来い、です。』

ほう、と目を細めて考え込んでいる。私は構わず先に進むことにした。

鍋で骨付きチキンを炒め、水と野菜とハーブを加えて煮込む。だけど、大雑把な料理に見えたのか、意識をこちらに戻してきたエルさんは心配そうにしていた。

「ネイ、本当にそれは大丈夫なのか？」

それ＝骨。こんな料理方法は未だかつて見たことがないらしい。

『ここから良い“ダシ”が出るんです！』

「だし？」

もう！なんでこんなに料理基準が高くないの？！

『ダシは料理の基礎を支えるものです。これが美味しくなくっちゃ、味に深みが出ませんから。』

とか何とか言いつつ、最近見た某テレビ番組の何とかタロウさんの作り方を思い出していた。

ホント、テレビって便利だよねぇ。

野菜やミンチ状の肉を練っていく。つまりはハンバーグなんだけど。

こっちでは、肉は単にステーキとしてしか出されないらしい。勿体ないよね。いろいろと食べ方があるのに。

今度、鶏団子が入ったお鍋でも作ったら、エルさんは驚いてくれそうだな、なんて、不敵にほくそ笑みながら企んだ。

今日は残念ながらソースもケチャップも置いて来ちゃったから、塩コショウのみ、って思ってたんだけど。

エルさんが、サルーテとかいう、こっちの調味料をかけたらいいと教えてくれた。

味見してみたら、美味しい。

こんなのがあるんなら最初から使えばいいのに、って思ったけど、どこかの民族のものだから、お貴族さまたちは好まないんだってさ。

食べ物にまで上流とかそんなモノ押し付けなくてもいいのにね。美味しいものは美味しいって言えばいいじゃん。

こっちにはチーズもあるって分かったんだけど、これもまた民族のもの…後は省略。ハンバーグにはチーズが合う。高カロリー万歳な感じだけど、美味しいものに目がない私には、関係ないよね。

お昼にはまだ早いから、それはひとまず置いといて、今度は甘味に移る。食材は何となく揃ってそうだけど、食感が珍しいだろうと思ってプリンを作ることに決めた。

とか思ってたまご割ったら失敗。赤いの開けちゃったから。赤い卵は、何ともグロかったけど、温めたミルクを入れた時点で、ピンクになって安心した。

普通のには、カラメルを下に入れた。これなら、甘いのが苦手だって言ってたクーンさんにも食べられると思って。もう一つは、昨日迷惑をかけた人たちに渡す分。これは、上に砂糖をかけてブリュレまがいのものにしよう。

言葉が悪いのは、私の表現力のせい。まずいものは作ってない、はずだから、安心して欲しいところだ。

蒸し焼きにするようにオーブンに入れ、今度はスープへと意識を向ける。

灰汁を取って、ハーブやら野菜やらを取り除く。新しく切った野菜を入れ、塩コショウで味を調えた。

うん、コンソメスープの素を使わないで初めて作ったけど、なかなかのできだ。野菜が柔らかくなるころには、いい匂いが辺りに立ち込めていた。

「…良い香りだ。」

覗き込んで、興味津々な様子を隠しもしていない。

『味見、しますよね？』

いいのか、って聞いてきたけど、どう見てもそうしてみたいって顔に書いてあるし。それに、私も味見くらいしなくちゃ、今回は保証できないしね。

小皿に少し掬うと、私とエルさんは同時に味を見る。…少し薄いかな、と思って塩を足し、もう一度味見をしてみると、今度はちょうど良かった。

「…ネイ、こんな上手いもの、初めて食べた。」

呆然としているエルさんに、この国の料理の発展がどれほどなかったのか、確信を得た。

思ったけど、（この世界の人って言ってもまだ数人にしか会ったことないけど）ここの人は新しい事に挑戦することをしない。それは、私にとっては一つの怠惰に思えた。

『何事も挑戦することが大切ですよ。未知の発見ほど面白い事はありません。

…私のいた世界では、宇宙や過去に対して以外はたくさんの事が解明されて、子供たちはそれを学んでいました。それじゃ、つまんない。分からないことが分かるようになるのが、楽しい事なのに…』

「ネイ?…思い出したのか?」

は!そうだった。私、記憶喪失（設定）だった!

今さら難しいだろうと思ったけど、何とか濁す。

『…私、今なんて言いました?』

言い訳、きつかったよね。どうしよう、なんて考えていると、タイマーが鳴った。

…助かった。私は急いでオーブンを開けると、天板を取り出して、固まり具合を確認。そして、満足。後は冷やすだけだ。

けど。

『エルさん、これって冷やせますか?』

「ああ、厨房の方に、少しだけだが、魔道を使えるものがいる。冷却の魔道をかけてもらえば、すぐにでも冷えるさ。で、それは食べられるのか?」

プルプルしているその動きを訝しげに見ている。それでもその動

きが不思議なのか、面白そうにも見える。

てゆーか、食べ物で遊ばないでよ。

『そうですよ。デザート、いや、おやつですね。クーンさんが随分とお疲れになっているようだったので、糖分を取っていただこうと思って。』

あれだけ働いてるのに、私の面倒まで見て。尚且つちゃんとした食事を取らなくちゃ、いつか、いや、近いうちに絶対に倒れる。それを回避することが唯一私にできること。

そう使命感を勝手に持った。

「…ネイ?」

一人の世界から呼び戻されると、そこには知らないおじさんがもう一人。いつの間に来たんだろう。

「で、どのくらい冷やすんだ?」

訊ねられて、困ってしまう。基準って言っても、ここの温度の単位なんて分かんないし。℃なんて伝わんないよね。

しばらく考えて、それから。

『抽象的な言い方になっちゃうんですけど、山に流れる川の水、くらいですかね。

室温よりも全然冷たくて、食べる時にひんやりするくらいがいい

んですけど…伝わりましたか？』

おじさんにおずおずと言った。自分の表現力の無さに嫌気がさしたのは。言うまでもない。あんまりにも言葉があいまい過ぎたから、心配だった。

「大丈夫ですよ。」

そう言って、にこやかな表情を浮かべたまま、冷却の魔法をかけてくれた。

魔法って便利！見た目は変わってないけど、器に触れると冷やっとしていた。

異文化 - その2 -

『あのー……』

調子に乗った私は、ピンクのプリンの表面に乗せた砂糖を焦がして貰った。本当に便利だ。

って、貴重な力をこんなことに使うなんて、やっちゃいけないんだろうけどね。

反省してるのかしていないのかはさて置いて、私は感謝を行動で表した。

『お二方とも、これ、たくさん作り過ぎちゃったんで、よろしければお一つどうぞ。』

手伝ってくれたお礼。これがお礼って言うのも、料理人の二人には失礼な話かもしれないけど、今の私にできる事はこれだけだから。

「いいのか？実はさっきから、どんな味がするのか気になっていたんだ。」

昨日のサンドイッチ、今日のスープの如く、エルさんは目を輝かせている。それを見て横に居るおじさんは、もっと優しく微笑んでいた。

「色が違うが、味はどう違うんだ？」

そっか。赤い卵なんて、使うの初めてだったから、味のこと考えるの忘れてた。赤いからって、辛い訳ないよね？

恐る恐る聞いてみたら、たまごの味自体はあまり変わらないけど、赤いほうが濃厚なんだとか…色は私的には受け付けられないけど、どうやら味の保証はされてるみたいだ。

『黄色い方は、下にほろ苦いカラメル、というものを入れています。クーンさんがあまり甘いものを好まないと言う事で、食べやすいように甘さを控えてあります。

もう一つは、表面の飴を割って食べていただく形になります。こちらは下にカラメルが入っていないため、少しばかり甘くなっています。』

私の説明を、エルさんはふんふんと腕組みをして聞いている。おじさんも興味を持ったのか、二つを見比べて、私の見慣れた方を手に取った。

「…ネイ、両方食してみたいのだが。」

迷いに迷ったのか、言い辛そうにそう言ってきた。

「相変わらず、料理長は食い意地が張っておられる。」

おじさんはやっぱり笑顔。しかし、言葉には確実にからかいが含まれていた。年の功ってやつかな。

「ち、ちがう！両方の食感を確認してみたいだけだ！」

焦ってるのか、噛んでるし。顔も赤い。おじさんがエルさんをからかうの、なんか分かるなぁ。反応が面白くて。

ほほえましく思いながら、私は両方勧めた。

『どうぞ。食べてみてください。私も感想が聞きたいですから。今お茶を入れるので…あ、時間大丈夫ですか？』

勝手に話を進めようとしてたけど、二人とも厨房に戻らなきゃいけないはず。でも、５分や１０分は大丈夫だから、と近くの椅子を引っ張ってきて腰掛けていた。

それを見て安心。今までで一番手際よくお茶を淹れ、二人の前に出す。スプーンを渡すと、二人は早速食べ始めた。

「ほう…これは。」

さっきまでは目が笑っていて細かったのに、今は真ん丸く見開かれていた。

「ネイ、流石だ。美味いよ。このプルプルとした食感。ほろ苦いカラメル。冷たさもちょうどいい。」

さっきまでの焦ったような姿はどこにもなく、しっかりと味を確かめるようにしている。料理をしている人のそれだった。

プロに批評されるのって、ちょっと不安。

次の言葉を待っていると、もう一方のプリンに手を付ける。上を

割っている姿は、何とも楽しそうだ。それから、一口含み、味わう様子を見せた。

「食べる前も楽しく、食べてからも二つの食感が楽しめるとは面白い。」

お気に召してくれたようですね。

その表情に私は安堵した。

「ネイ、悪いんだが、これを三つほど分けてくれないか？是非とも食していただきたい方がいるんだが。」

それは全然構わないんだけど、気になることが一つ。

さっきまでの砕けていた口調が、“食していただきたい”と丁寧になった事だ。身分の高い人に食べてもらうのかなって、不安になる。不安に思ったことは、見事に顔に表れていたらしい。

「量が減ってしまうのを心配しているのか？」

返事に困っている私は、そう思われていったのか、と弁解するために口を開いた。

『量は構わないんですけど、もしも高貴な方が口にするのなら、お口に合わないんじゃないかと思って。

クーンさんとレークさんと私、あとミリアとマーサさんと宰相さまにも上げたいから…最低六個残っていれば構いません。けど、新鮮なものを提供したいのであれば、もう一度作りますけど。』

「そうか！それならば、クェーカーの方で、下にあの苦いカラ…何んとかってのを入れてくれ！」

“カラメル”が言えなかったね。てゆーか、私は私で聞き取れない単語に戸惑うばかりだ。

“くぇっ…？”と、何かのない声みたいになっちゃったけど、私からしたら発音しにくいったらありゃしない単語だったから仕方ない。

「クェーカー。赤い方の卵だよ。」

ああ、またあの血みたいな卵を見ることになるのね。少し凹みつつも、食後のデザートだって事なので、すぐに取り掛かった。

付け合わせと、ハンバーグも同時進行でし上げつつ、赤い卵は目を逸らしながらかき混ぜる。

うん、いつか…要は“いつか”慣れることを目標に頑張ればいいよね。

クーンさんたちのお昼ごはんを仕上げ終わると、ちょうど良く昼時のチャイムが鳴り響いた。その時、いつの間にかエルさんもおじさんもいなくなっている事に気付き、驚く。集中してて、いついなくなったのかも分からなかった。

そう思いつつも、クーンさんもエルさんも待ってると思い、食事をワゴンへと乗せる。

温かいうちに持っていきたいから、急がなくちゃ。

けど、そこでエルさんに声をかけなくちゃと気付き、厨房に顔を出すと、とんでもない状況が広がっていた。

「おい、早くこれ片付けろ！」

「パンが出ていないぞ！」

うへぇ…まさに戦場。

私はここじゃ働けないな、と思った。

「ネイ！どうしたんだ？」

あまりの圧巻に、呆然としていた私に声をかけ、エルさんはさっきの女中専用の台所へと来てくれた。

『プリン、できました。後は冷やすだけになっていますから。』

「わかった。わざわざすまんな。後でまた話そう。今は落ち着かないからな。」

それは見たから知ってます。みんな忙しそうだったし、今はエルさんがいないからもっと大変だろう。

私は了解し、エルさんを厨房へと追い返した。それからワゴンを

カラカラ押して執務室に入ると、レークさんが目に入る。

もう来てたんだ…今って忙しいって言ってなかったっけ？あ、そう言えば、さっきレークさんを探してる声が聞こえたかも。

『レークさん、また逃げて来たんですか？』

書類をどけ、皿を並べる。ついでにお茶も淹れて、とやる事をテキパキとする。まだ二日目だけど、私って案外順応性高いのかも。

「そうしていると、本当に女中さんのようですねぇ。それよりも“また”とは聞き捨てならないです。

あの人たちは昼食の時間でさえ、私を神殿に閉じ込めようとするんですよ？」

必死な訴えに、それほどたいへんなのかと感心しつつ、用意が終わったので声をかけた。

『お仕事お疲れ様です。そのお話はひとまず置いておいて、食事にいたしましょう。せっかくですから、温かいうちに食べていただきたいのです。』

そう言うと、椅子にもたれかかっていたレークさんは姿勢を正す。一方のクーンさんは書類からまだ目を話していなった。

「放っておきましょう。一段落するまではきっと動きませんよ。それより、今日は何を作ってくださったんですか？」

『今日はハンバーグとサラダとスープです。昨日よりも時間があり

そうだったので、普通の食事の様式にしてみました。』

レークさんにハンバーグの説明をしていると、クーンさんがようやくこちらにやって来た。今日は昨日ほど疲れていないみたい。顔色がだいぶ良く見えた。

『私もご一緒していいですか？』

とか何とか言いつつも、実はちゃっかり自分の分も用意してきていた。ってなわけで、早速了承を貰って席に着く。と。

「「『いただきます。』」」

三人で手を合わせてそう言った。合わせた訳じゃないのに、タイミングがぴったりで吃驚。けど、私に合わせてくれてるみたいだったから、ちょっと嬉しかった。

『そう言えばミリアから言伝を聞きました。レークさん、私に何の話があるんですか？』

食事をしながらいつものように談話する。私はこの時間が大好きだ。

私の事、事情を分かってくれている人たちだから、なおさら安心するんだよね。

「ああ、ちゃんと伝わっているようで安心しました。」

一人、クーンさんだけが蚊帳の外で、眉間のしわを一層深くしている。そのうち、跡が付いちゃいそう。

「祭が近づいてきているので、そろそろ鏡盆に触れていただこうと思いまして。クーン殿、時期的にも良い頃合いだとは思いませんか？」

「…そうだな。人に紛れ、人知れず行うのが無難だろうな。夕方から夜に掛けてがいい。」

夜、人がいない時間。そんな時間のお城って怖そうだなぁ。なんて、自分の事なのに、他の事を考える。

てゆーか、鏡盆とやらに触れた時に何か起こらなきゃいいけど。宗教上のものって、なんかいわく付きで怖そうだよねぇ。

箸を進めながらも、心はここにあらず。脳内に留まって、自分だけ物思いに耽っていた。

触ると、元の世界に戻っちゃう、とかだったらどうしよう？…それだけは、マジ勘弁。

「ネイ？どうした？」

さっきよりも柔らかい表情のクーンさんを目の前にして、私はにへらと笑うしかなかった。

『何ともないです。さ、食べちゃいましょう。』

そう促す。だって、レークさんがいる前では話せない。何だか知らないけど、勢いでクーンさんに喋っちゃった、私の黒い内面の事

だから。

それに、これ以上私の暗いとこ見せたら、今度こそ嫌われちゃうかもしれない。そうしたら、私はこの世界でも生きていけない。

「…本当に？」

『ま、いいじゃないですか！』

明るく振る舞う。暗いと、本当に心配されちゃうからねー。それに、こう言うのを隠すのは、昔から得意だ。

悪魔の笑み

『今日は甘味も用意しましたよ。クーンさんも食べてくれますよね？』

もちろん念押し。“ね”は強調して言った。甘いものだけど、有無を言わさずに食べてもらいますよ、ってね。

まるで何も聞いていなかったかのように箸を進めるクーンさんを、レークさんと二人で見合って笑った。

お皿が綺麗に片付いたころ、私はプリンを出した。でも、生憎室温くらいになっちゃってて。がっかりした。

せっかく冷やして貰ったのに。

『すみません。これ、さっきまでは冷たかったんですけど。』

「冷やして食べるものなのですね。」

レークさんは面白そうに観察している。まだ、異世界の研究は諦めていないんだってさ。

『プリン、という名前のお菓子です。黄色い方は少し甘さを控えてありますから、クーンさんにも食べられると思います。』

笑顔で目の前に置く。やっぱり二人には珍しく映ったようで、不思議な眼差しを向けていた。

「冷やそうか？」

一瞬、何を言われたのか分からないかった。だけど、クーンさんが魔道師だった事を思い出す。だから、お願いして冷やして貰った。

やっぱり魔法って便利！

二人に食べるよう促して、私はお茶のお代わりを注ぎ入れる。でも、言われた訳でもなく、二人はすでに手を付けていた。

「これは…おいしいですね。」

にこにこ食べてくれるレークさんは、ちょっと子供みたいだ。お代わりを要求され、もう一つ追加。それも美味しそうに食べてくれている。

『クーンさん、どうですか？』

さっきから無言だし、やっぱり甘過ぎてダメだったのかも。そう心配になる。でも、そうじゃなかったみたい。

「下に入っているのがほろ苦くて、食べやすい。さすが、異世界の菓子は作り方も違うんだな。」

感心しているみたいなとこ悪いんだけど、反応が今一理解できない。あれほどお菓子を嫌がっていたのに、パクパク食べ進めている姿はどうも不自然だ。

ここのお菓子って、一体どんな感じなのかな。

「甘さ控えめなのがいいですね。これならクーンさんにも食べられて調度良いでしょう。」

やっぱり、全然違うんだ。だからエルさんが興奮してたのか！

てゆーか、エルさん、そう言うことならちゃんと教えといてよー。

ここまできたら、気にならないはずがない。

『ここのお菓子って、どんな感じのものなんですか？』

「何と言いますか、甘い、ですね。」

話をクーンさんに振った。でも、反応は二人とも同じものだった。

「甘い、な。」

なんすか、その一言で終わらせちゃう感じ。悪いけど、私には全然伝わって来なかった。

『もう少し詳しく教えてくれませんか？よければ料理の参考にしたいんです。』

「ここのお菓子、ですか…」

二人は顔を合わせて嫌そうな顔をしている。それから、遠くを眺めるように、視線が散った。

「俺はとにかく見たくもない。よく貴族の娘たちはあんなものを食

べられると思うな。」

眉間のしわは、今までで一番深かった。それほど嫌いなのがよく分かる。でも、そんなに、って思えるくらいの反応だった。

「私はクーン殿ほどではありませんが、1、2年に一度食べたいと思うか、思わないかというほどですね。たいてい食べてから後悔しますけど。」

それって、どういう意味？美味しいの？まずいの？

訳が分からなくてそう尋ねると、二人は声を合わせて言った。

「「甘いんだ（です）。」」

『甘い…？お菓子なんだから、当たり前ですよね？』

甘いお菓子なんていっぱいあるはず。文化が違うんだから、ポテチみたいなしょっぱいお菓子があるとも思えないし。

「いや、甘過ぎるんだよ。」

「そうなんです。何事もほどほどが大切だと、あれを食べると言うも思います。」

その反省は、どうなの？甘いって、甘いだけでしょ。そこまでつっぱねる理由でもあるのかなぁ。

「こう言われても、分からないのが当たり前ですよね。では、食べてぜひ一度苦痛を味わってください。」

…それは、笑顔で言うセリフじゃないと思う。てゆーか、敬語で言われると余計怖いって。

そう考えていたけど、笑顔だけみてると、レークさんはとっても優しそうに見えるから、正直本心が読めない。

結構長い間一緒に居たけど、掴めない人だってことだけはよく分かっていた。

自分の興味があることは、とことん追求する人だ。でも、そうでないことには淡白だとも言える。

同族のにおいがしないでもないけど、レークさんの方が大人だから、長い歳月をかけての底知れない深さがあの笑顔に垣間見えてるような気がした。

きっと、笑顔の分だけ、あっちの方が厄介なんだろうな、なんて思う。

「そんなに見つめてくれるとは、嬉しい事ですね。」

心から思ってもいないような歯痒い台詞をありがとう。私も笑顔で応戦して見たけど、やっぱり叶わないほど完璧な笑顔が板についていた。

「苦痛を味わってみるには、そのお菓子が必要ですよね。」

笑顔で言って席を立つと、廊下に出て女中の一人に声をかけてきたようだった。ここにそのお菓子を持ってくるように、って。

そこまでして、二人が言う苦痛を味合わなくてもいいんだけどなぁ、とは思ったけど、好奇心には勝てない。

それに、レークさんのお遊びにつきあってみても面白いんじゃないかなって思った。でも、私はMじゃない。日頃のお礼ってだけ。

5分も経たないうちに、ノック音が聞こえて、お皿がテーブルに置かれた。のは良いんだけど。

『なに、これ？』

そう思わず呟きが零れていた。

「ティレ・タータ、という一般的なお菓子です。」

目を背けるクーンさん、笑顔のレークさん。そして私は目が点になってるに違いない。

三者三様の反応がある部屋の中、一番注目を注がれているそのお菓子は、見事なまでのお色だった。

今までだった、食材とかで変な色は見慣れてた。だけど、これは流石に驚愕の域だ。

ピンク、黄色、水色、黄緑。見事なまでの蛍光色の塊が、お皿に並べられていた。

一口サイズの丸いそれは、食べるにはどうも抵抗がある色をしている。アメリカとかのお菓子みたいな色だ。

『これが…お菓子？』

無意識に出た呟きは、クーンさんが拾って、そうだと教えてくれた。でも、心は放心状態だ。

「さ、どうぞ。」

…悪魔の笑みだ。

神殿につかえている、力のある神官だと言うその人の笑みは、一見すれば天使の笑みかもしれない。

…だけど、今の私には悪魔の笑みにしか見えない。

これなら、常に無表情か、怖そうに眉を顰めているクーンさんの表情の方が、優しげに見えるよ、私。

「遠慮なさらず。」

してませんよ、遠慮なんて。そう言うのも戸惑われて、私はティレ・タータに手を伸ばす。一番手前にあったピンクのものを手に取ると、ひと思いに口の意放り込んだ。

『？？――…・・っ！』

それが失敗だったなんて、いとも簡単に分かること。声にならない叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入

っていなかった。

さっき飲んじゃったんだった！

仕方がない方、必死に目で訴えてクーンさんのお茶を横取りする。私がそれを飲み下した時のクーンさんの表情は、憐れんでいるように見えた。

「大丈夫か？」

そんな訳もなく。私はワゴンまで行くと、新しいお茶を渋くなるくらいにして、カップに注いだ。

「人のお茶を盗って飲むなんて、ネイさんはお茶目さんなんですね。」

お茶目とか、そんな事言ってられるレベルじゃない。果たして、これをお菓子と呼べるんだろうか。

私は未確認物体をじとーっと半眼で睨みつけた。

「どうでした？」

相も変わらずニコニコしているレークさんは、腹黒さが全開だ。儚い感じの男の美人さんなのに、残念過ぎる。一本の図太い神経が見える気がした。

お茶用意した方がいいって、教えてくれてもよかったんじゃないの？

さっきのお菓子と同じように、今度はレークさんを睨みつけた。でも表情は変わらない。私は諦念の感を抱いて、深く嘆息した。

『砂糖の塊よりも甘くて、衝撃的でした。てゆーか、まだ歯が痒い気がします…』

そう言って自己確認をしちゃった所為か、歯を磨きたくなった。

「歯が痒いとは、あまりにも適切な表現ですね。で、これで分かりましたか？ネイさんのお菓子とこちらのお菓子はかなり違うのですよ。

ネイさんのものなら、毎日でも食べられますよね、クーン殿？」

クーンさんは小さく頷いた。でも。

…嘘だね、絶対。

いつか、クーンさんが気に入ってくれるようなお菓子を作れたらいいなって、今は純粋にそう思える。

それに、そんな行動一つにもクーンさんの優しさが見えた。そして、それが倍増して見えるのは、隣に居るレークさんの所為だと言うことは、絶対否定できないだろう。

てゆーか、まだしてるんだけど。レークさんを遠くからの声。

昼休みはもう終わってるころだろうし、声が悲痛そうに聞こえるのは、私の彼らに対する憐れみだけじゃないと思う。

でも、今日は昨日と違うことが起こった。

「さて、私はお暇いたしましょう。」

優雅に立って、綺麗な笑顔を浮かべて礼をとる。そして、片膝で立つと、私の手の甲にキスをした。

「また後ほど会いましょう。是非夕餉もネイさんの手で作っていただけると嬉しいですね。では、失礼。」

まさに、貴公子のように去って行った。

口撃、再び

なんだ、あれ。

見慣れないその姿に呆然としていると、クーンさんが来て私の手を拭った。

『どうしたんですか？』

「…いや。」

会話は続くことなく、クーンさんは定位置について仕事を始めている。

…そうか。今夜は神殿に行かなくちゃいけないからね。早く仕事を終わらせなくちゃいけないんだ。

私はワゴンを片付けて、昨日のうちにミリアに教えてもらっていた道のりを思い出しながら書類を届けた。

やっぱり格好とかにギョッとされたりもしたけど、若い人たちはみんな親切みたいだ。年老いた力のある人に逆らえないだけなのかもしれないけど、私みたいなのにも親切にしてくれるのは正直言って嬉しい。

それに、そう言う人たちはあまりクーンさんに反発を持っていないみたいだった。

こういう場所でも、やっぱり女のこの情報力はすごい。昨日のうちにミリアにいろんな事を聞いておいてよかったと安堵した。

ここにはルイス派とシェパード派という二つの派閥が合って、二分される。ルイスは過激、シェパードは温厚。温厚派の筆頭はその名の通り、宰相さまが筆頭だったりする。

王もどちらかと言えば温厚派寄りで、過激派の議会を追放したり、一斉排除に掛かったりと、結構手を妬いているみたい。そんな過激の一派は、ここの神様を強く崇拝しておられるんだそうな。

その厄介者に私は見つかったら大変なんだろうな、とか、頭の片隅に思いつつ、注意されたように、赤い羽根の小さな飾りを胸に付けている人たちを避けて通っていた。

それが過激派のマークらしい。こっちで赤い羽根と言えば、いい事の象徴だったりするのにね。こっちではルイス派の象徴で、一致団結している様を誇示する象徴なんだって。

道が分からなければ、その赤い羽根の人じゃない人に聞くのが得策だって言われてたから、その通りにするとみんな親切に教えてくれたし、書類も笑顔で受け取ってくれた。

でも、これから向かうところはそうもいかない。

『失礼いたします。書類を届けに参りました。』

ノックをしてからドアを開ける。でも、開けなきゃよかった、ってすぐに後悔する羽目になった。

ここはかの有名な議会部署だったから。

視線が一気に私に注がれる。それは、何か汚いものを見るような目で。

私はこんな視線を知ってる。向こうでも、毎日のように特定の二人から向けられていたから。

議会部署は融通が利かない。しかし、宗教上の敬虔な信者だから、神の御子の血縁だとされる王家には逆らわないらしい。

それなら、なんでクーンさんを目の敵にするんだって話だけど、御子は御子でも卑しい血との混血だから許されないとされてるんだって。

王は純血。クーンさんは混血。そこには雲泥の差があるらしい。だから、いくら王位継承権を放棄した元王族であるクーンさんが、いつか反旗を翻して王になろうとするんじゃないかって疑ってるらしい。（ミリア情報）

あれだけお兄さんの事慕ってるって語ってくれたもん。そんなはずないのに、勝手な憶測だけで流言するの、やめてほしいよね。

で、だ。ここからが問題。

ノックして声までかけた。なのに、誰も受け取りに来ない。

無視ですかー？いい大人がガキみたいな真似を。いい加減イライラするんですけど。何度声をかけても無視っていい度胸ね。

カルシウムが足りてないのか、イライラが最高潮に達した。

ふふふ、そろそろキレるぞー。

『すみませんが、どなたか書類を受け取っていただけませんか？』

これが最終警告。これで無視なら、自分の身分も何も関係ない。てゆーか、こっちには元々身分なんてもん関係ないんだから。クーンさんや宰相さまに迷惑をかけると思って我慢してるだけだもん。

「……」

ってな訳で、堪忍袋の緒がブチ切れた。ネイ、行っきまーす。

『いい加減にして下さい。そこに付いている耳は飾りですか？いい大人が言葉も理解できないとは、残念なことですね。』

もちろん挑発的に言った訳で。もちろん反応する人が出てくるわけよ。

「女中のくせにそんな口を聞いて、平気だと思っているのか。」

わざとやったことにこうも思い通りに乗ってくれるとは、アホ過ぎて怒る気も失せる。でも、言わせてもらう。言っても無駄だし、私を城から追い出そうとするとは思うけど、そんなの関係ない。

『私は当たり前の事を言っているまでです。仕事は仕事。書類を受け取ることすらできないとは、議会が聞いて呆れます。』

おじさんたちの困惑の表情は、面白い。こんな若い女に言われるようなことじゃないと思ったんだろうけど、こうなったらとことん言わせてもらいますよ。

「これが卑しい混血の専属か。主人が主人だからか、教育が成っていないな。」

そう言って、近くに居る人が近づいてきた。書類を受け取ってもらえるのか、と思いきや、伸ばされた手は、私の頬を思い切り弾いていた。

私の身体は揺れたけど、そこから一歩も動かない。口の中か端が切れたのか血の味がしたけど、私は泣く事もなくニヤッと笑ってやった。

『頭に血が上れば、女などお構い無しに手を出すんですね。』

悪いけど、こちとらこういう状況には慣れてる。殴られたくらいで取り乱したりなんかしてやらない。そして、そんな姿を何とも言えない視線で見てくるその表情も、もう何年来にも渡って見てきたものだ。

『大人はそうやって、子供に正しい事を注意されると怒りだす。』

自嘲気味にそう言ってやると、目の前の男は顔をもっと真っ赤にさせた。

この人は、クーンさんを侮辱した。これで私が怒らない訳がない。軽く言いくるめてやろうと思ったのに、そうはいかないほど冷静さを失っていた。

『身分など関係ありません。皆生活するために働いているのです。その頑張りに上も下もありません。同じように必死なのですから。』

動揺することなく、さっきと同じように手を前で小さく組んで、女中のそれらしく言ってやる。懇切丁寧に言ってやるのは、屈辱感を煽るため。そうでなければ、こんな丁寧な言い回しなんてしない。

『働かざる者食うべからず。ただ書類を受け取ると言う仕事にも満たない動作をすることすらできないのなら、タダ飯を食べているのと同じこと。給料をもらう資格すらないと言うことになります。』

目の前の男はぐっと唇を噛んでいる。それが自分の非を認めている事をよく表していた。

『書類を受け取っていただけますね？』

笑顔で再びそう言うと、今度こそ受け取ってもらえた。その時の議会の執務室は驚くほど静かで、私の姿に視線を、声に耳を傾けていることが一目瞭然だ。

丁寧に礼をして。

『失礼いたしました。どうか無礼な言動をお許しくださいませ。』

なんて、ちゃっかり自分の言動についてまで謝ってから、そこを

後にした。

廊下を進みながら頬に手をやる。

あーあ、思いっきり殴ってくれちゃって。一応うら若き乙女だぞ！顔に傷でも残ってくれたらどうしてくれよう。

そう考えたら、またイライラしてきた。

これ、腫れちゃうかなぁ。とりあえず、冷やした方がいいよねぇ。

だから、クーンさんの執務室じゃなく、女中部屋に戻ることにした。のは、いいんだけど。

「ネイさま！そのお顔はどうしたんです！」

悲鳴にも近いミリアの声がその部屋に響き渡ったのも無理はなかった。

「こりゃ腫れてるねぇ。ミリア、落ち着いて、冷やすものを持ってきな。」

あたふたするミリアに、その場にたまたま居たマーサさんが指示を出す。それくらいにミリアは驚いていたらしい。

「ここじゃ目立つ。食堂にでも行こうか。今の時間ならあそこには誰もいないからね。」

手を引かれて連れて行かれる。私は怒られる子供のように、黙っ

て着いて行った。

一番入口に近い端の席に座り、ミリアが濡らしてきてくれた布を、頬に当てる。ひんやりして気持ち良かったけど、ちょっとだけ沁みた。

心配そうな視線を向けて、違う布で唇の血を拭ってくれる。切れていたのか、それから消毒もしてくれた。

「何があったんだ、と聞いてもいいかい？」

私は怒られる覚悟で頷き、一言一句漏らさないように、丁寧にさっきの議会の執務室での出来事を話した。

けど、私が思っていた反応とは違って、マーサさんは大声で笑い出してしまった。

「マーサさん！笑いごとでは済まないわ！」

一方のミリアは顔が真っ青。やっぱり、普通ならあり得ないような事、しでかしちゃったみたいだね。

「いや、あんた変わってるよ！」

私の一連の出来事を笑い飛ばしてるマーサさんには言われたくないけど、ここの価値観と私が持っている価値観の違いを大きく知るきっかけになったには違いない。

『正論を言ったつもりだったんですけど、何か変なところありました？』

「無いから面白いんだよ。

とは言え、乙女のやわ肌に傷を作るなんざ、男の風上にも置けないねぇ。ネイの白い肌に傷が付くなんて、可哀相じゃないか。」

マーサさんが突いてきたそこは、時間が経ってさっきよりも赤く腫れていた。こりゃ、目立つな。ミリアが持ってきてくれた小さな鏡に映る頬を眺めて、諦めたようにため息を溢した。

『いえ、私もちょっと挑発してやろうって思ってたのに、イライラが最高潮に達してしまって。

もう少し考えれば顔に傷を付けないように言いくるめることができたのに、これは私のミスですね。』

淡々とそう語って、自分の中で反省した。

いつまでも相手がぐだぐだと言ってたからって、私が先にキレたのには変わりない。今度からは気をつけよう。

口撃、再び - その2 -

「そう言って見せるところが驚きだよ。普通なら畏まって言えないし、叩かれた時点で泣くだろうからね。」

『私はちょっと変わってるらしいですから。叩かれた時には一歩も動かずに、叩かれた後には笑ってやりましたよ。

それより、私、城から追い出されますかね？』

またマーサさんは笑いだした。自分の頬が腫れている事を、そんなこと呼ばわりしたのが面白かったらしい。

マーサさんは、笑い上戸なのかもしれない。さっきから笑いすぎだよ。

でも、私にとってはそんなことだった。クーンさんの下で働けなくなる方が、よっぽど心配だったから。

「うーん、五分五分だね。あいつらにも矜持ってもんがある。正論に対して力でねじ伏せようとした事すら、正論で黙らせたんだ。また力でねじ伏せようとしたら、自分たちの非を認めているようにも思えるからね。そう考えたら、大丈夫かもしれない。」

その言葉に安堵した。

きっと、このことはいろんな人の耳には入らない。それも矜持。

クーンさんの下に居る若い女中に言いくるめられたなんて、絶対に言えない事だろう。それも言わずにただ気にくわないという理由で辞めさせるなら、不当解雇に違いない。

「ネイさま、あと一刻ほどでお茶のお時間ですけど、その顔でクーン魔道師さまのところへ行ったら、心配されるのではないですか？」

それを聞いた瞬間に固まってしまった。

どうしよう…

『怒られるっ？！』

いきなり興奮した私を、二人はどうどうと落ち着かせようとしてくれたけど、そう上手くいく訳もなかった。

だって、クーンさんの下に居るのに、クーンさんにとって分が悪いことしちゃったんだもん。とんでもないことしでかしたな、って見捨てられても仕方ないことしちゃったよ！

私、この世界に知り合いなんていないのに、追い出されたらどうしよう！

「議会に対して物怖じもしないのに、やっぱり変わった子だねぇ。」

落ち着いてる場合じゃないって！どうしようー！

混乱している私の許にエルさんがやってきて、またひと騒動あった事は当たり前だろう。

それでも何とか落ち着いた私は女中のキッチンへと行き、ミリアとマーサさんにプリンをご馳走した。

二人とも美味しいと言って食べてくれ、エルさんも食べさせたかった人から好評だったらしく褒めてくれたけど、私の心は落ち着かない。

料理をしてみればいいんじゃないかと言われ、それが単なるエルさんの好奇心だと分かったのは、調理も半ばになったころだった。

「ネイ、オーブンはもうよさそうだ。入れるか？」

それに頷き、生地を並べた天板をいれ、私は小鍋の方を掻き混ぜていた。

「いい香りがしてきたな。」

私が料理をしている最中、エルさんはひたすらちょろまかとしていた。最初の方は注意してくれていた二人も、いつの間には仕事に戻っててここにはいない。

それくらい、私の心は乱れていた。

そして、どうやって説明して、どう謝ろうかも考えていた。

「ジャムはいい頃合いだ。もうそろそろ火から下ろしてもいいんじゃないのか？」

そう言われて、掻き混ぜていた手を止める。よく見れば、煮詰り過ぎてるくらいだった。

料理中に考え事なんて。失敗します、って言ってるようなもんだよ。

なんて、また小さく落ち込んだ。

刻一刻と私の胸には重しが圧し掛かっているように感じられる。それも、どんどん重たくなっていた。

火から鍋を下ろしていると、タイマーの音が鳴り響く、それに反応したのもエルさんの方が早かった。

「こんな風に焼き上がったのか。パン…のようだが、それとは違うのか？」

『あ、はい、違いますよ。パンはイースト菌を使っていますが、これはベーキングパウダーで膨らませています。』

私が無意識のうちに作り始めていたのは、スコーンだ。…初めて私が作ったお菓子。そして、おばあちゃんが好きだと言って食べてくれたお菓子。

「同じように寝かせてたじゃないか。」

『いえ、こっちの生地は、混ぜ合わせた材料が馴染むように寝かせただけです。パンのようにイースト菌の作用で膨らんだりはしてい

なかったでしょう？』

さくさくと第二弾を天板に並べて、オーブンに入れる。それを気にする事もなく、エルさんは焼き上がったスコーンを不思議そうに見ていた。

『温かくても美味しいですが、冷めている方が私は好きですね。それにさっき作ったジャムを付けて食べるんですよ。』

興味津々な様子のエルさんに、実践して見せる。スコーンを二つに割って、ジャムを付けて食べる様子を見て、真似をしている姿は見ていて面白かった。

何事も初めてのものって警戒するものだけど、エルさんは見事に恐る恐る口に運んでいる。期待を裏切らない反応って、人が違うだけでこうも微笑ましく思えるのはなんでだろう。

さっきのおじさんたちに関しては、呆れてしまったけど、エルさんはその反応をしてくれること自体が嬉しく感じた。

「う、美味いっ！」

毎度毎度、美味しいと言ってくれる姿に、笑顔が全開になるのは無理もない。私は満足げに頷きながら、残りのスコーンも口に放り込むと、お茶のセットを用意し始めた。

小さな器に三種類のジャムを入れ、大きいお皿に並べる。そのお皿の空いているスペースには、バター、チーズ、そして焼きたてのスコーンを並べた。

「おお、見た目にも綺麗だな。」

また感心してくれている様子は、大きな子供みたいだ。

『またたくさん作りましたから、お好きなだけ召し上がってください。』

エルさんが料理に関わっている事で、最初から多めに作ることを決めていた。初めてのものを食べたがる癖がある事を、たった二日だけど十分に承知している。

「有り難いな。それで、もう一つお願いして悪いんだが、さっきのと同じように皿に盛り付けてくれないか？」

その申し出に了承をすると少し待つように言われ、しばらくすると何かを抱えて戻って来た。

エルさんが持ってきたものは、さっきのシンプルな白いお皿とは違い、バラが描かれている何ともお高そうなもの。

こう言うのを割ったら洒落になんないよね。とか何とか思いつつ、割ってみたらどうなるかを想像したくなって、止めておいた。

こんなことを考えるなんて、私ってやっぱり天邪鬼って言うか、性格ねじ曲がってるよね。

こう、立ち入り禁止の場所に入ってみたくなったり、触るなって表示してあるものに触ってみたくなったりしない？

考えに耽りながらも手は動かし、お皿に盛り付けるとエルさんは

嬉しそうに運んで行った。

どうやらプリンの人に持っていくらしい。

私もクーンさんの所へ持っていきますか、と思ってから、自分の仕出かした事を思い出した。

どどど、どうしよう！結局なんて言ったらいいのか、考えるの忘れてたー！

一人で頭を抱えていると、調度いい所にミリアがやって来た。

もちろん他の女中さんもいたけど、みんな変なものを見るような目で見るだけで、私に触れてこようとはしていない。

自分でも、それは最良の判断だと思う。それくらいに、今の私は余裕がなかった。

「あら、やっぱり腫れてしまわれましたね。」

痛そうと言わんばかりの心配する視線を向けてくれる。ここにミリアの優しさが垣間見えた気がした。

『そんなことはどーでもいいの！』

女の子が顔に傷を作っちゃいけないとか、気にするべき事だけど、今はそれ以上に気にするべき事がある。

『クーンさんに分が悪いことしちゃったから、謝らなきゃいけない

の！』

お茶のセットの用意も、お茶菓子も用意できてる。でも、肝心の謝罪の言葉の用意はできていない。

きっとまだクーンさんの耳には届いてない事だとは思うけど、バレるまで知らんぷりなんて、できないもん。

そう呟くと、ミリアの呟きに胸を抉られた。

「そのお顔で何かがあったことなど、知られてしまうのでは…？」

一応気を使って、小さく言ってくれたみたいだけど、それが逆に自分の失態を知る大きな原因にもなってしまった。

「女は度胸、ですよ。ネイさま、ここは早めに暴露してしまった方が、気が楽になるのではないでしょうか？」

イタイ…ミリアの言葉が痛い…

尤もな正論は、さっき正論という名の御託をおじさんたちに並べた私には、威力が半端ない。

つまり、自分の美意識的にも、逃げられないってことだ。でも、きっと一人じゃ成し遂げられない。

『お願い！ミリアも付いてきて！』

半分泣きそうなわたしの懇願に、やれやれと言った様子で了承し

てくれた。

二人きりになる事は、何とか回避された。後はどうやって謝るかを考えるだけだ。

でも、考えても考えても、言葉は見つからなくて。さっきのミリアの言葉を借りて、ぶっつけ本番でその時に出てきた言葉に任せようと決めた。

謝罪

度胸、度胸…

ワゴンを押しながら、ブツブツと呟く。ミリアが心配そうな視線を向けてくる事にさえ気づけなかったのは無理もない。

執務室の前に着いてしまい、深呼吸を繰り返す。どうも間が悪く、クーンさんの部屋に書類を届けにやってくる人はいない状態だった。いつまでも動けない私に、ミリアが声も出さず目線だけで促してくる。

分かってるけど、動けません！

目ではそう主張したつもりだったのに、お構い無しにミリアはその重々しく思える扉をノックしてしまった。

そして言うことには。

「度胸、ですよ。」

とのことで。

私のタイミングなんてお構いなしに、返事も聞こえてこない扉を開けて、私を中に押し込むような形で突っ込んだ。

書類に目を向けているクーンさんは真剣な顔、そのもので邪魔しちゃいけない気がする。

だから、逃げようとした訳じゃないけど、空気を読んで回れ右をしようとしたのに。後ろに張り付いていたミリアは、そこをどいてくれようとはしない。

目で訴えても、何をしても笑顔を張りつけている。

「逃げてはダメです。」

もう一度言おう。断じて、逃げようとした訳ではないっ！

女二人がこそこそしているのは、どうも目につくらしい。

「何をしている？」

そう声をかけられた時には、終わったと思った。そして、もう逃げられない、とも。

やっぱり逃げようとしていたんじゃないかって言う、批判の声は一切受け付けないのでよろしく。

ちょうど後ろに居るミリアと視線を合わせている状態の私は、クーンさんに背を向けている。きっと、顔はまだ見えていない。

振り返るの、怖い。

「ネイ？」

『ごめんなさいっ！』

振り返った瞬間に頭を下げ、そのまま議会の人たちに何を仕出かしてしまったのか、洗い浚い吐いていた。

『クーンさんの足かせになってしまったかもしれません

…本当にごめんなさい！』

最後にそう言うと、私の勢いは殺がれた。その後には沈黙が残り、誰もが動こうとはしない。

私はもちろん、まだ頭を下げたままだった。

「…何があったのかは、よく分かった。」

静かな声。でも、低くて少し怖い。

私は許して貰えるかどうかが怖くて。必死に頭を下げたままでいた。

「ネイ、話がしたい。向き合って話し合おう。顔を上げてくれ。」

そう言われてしまえば、そうするしかない。

私はゆっくりと顔を上げた。

「ネイ…その顔はどうした？」

さっきよりも低い声。もっと怖く感じたけど、それでもさっきより優しく感じた。

勢いよく立ちあがってこっちまでやってくる。その手が私の頬に触れようとした瞬間に、扉が開かれた。

「ネイ！とんでもない事を仕出かしてくれたな！」

ずかずかと迷いなく入ってきたその人は、紛れもなく、この王宮でも力を持っている人物。私の知っている数少ない人の一人である、宰相さまだった。

てゆーか、今“とんでもないことしでかした”って言ったよね？！

…バレてる？

口ぶりからは何をしたかを知ってるご様子。でも、目の前の人物によって、私の視線は動かすことができない。

てゆーか、マーサさん、あの人たちにも矜持があるって言ってませんでしたか？

皆無じゃん！早速ふれ回ってるみたいなんですけど。

「…宰相殿。少し席を外していただけますか？ミリアもだ。」

有無を言わせぬ雰囲気。

私としては、二人がいてくれた方が助かるんだけど、そうもいか

ないらしい。

足音、ドアの開閉音。それがした後は、二つの気配すらもいなくなっていて、静かなこの執務室の中には私とクーンさんしかいない事がありありと分かった。

空気を読んじゃったのね…

レークさんとかだったらこの状況を引っ掻き回してくれそう。

けど、さっきから目を逸らすことも許さないと言わんばかりの眼差しを向けてくるクーンさんなら、言いくるめてしまいそうだとも思った。

「その傷は、誰によるものだ?」

…誰って、聞いちゃいますか、そこ。

早速な質問に、私は答えることができない。むろん、その人を庇っている訳じゃない。だから、素直に言ってしまえば。

『わかりません。』

――――覚えていないんですよ。

「…庇っている、という訳じゃなさそうだな。」

当たり前ですよ!正論言われてキレて…そんで女の顔を引っぱたくやつのことなんて、何で庇わなくちゃいけないんだって話ですよ。

なんにせよ、クーンさんのさっきの言葉が、私のことを理解してくれているようで嬉しかった。

叱られムードだったのに、不謹慎？

ま、私みたいな人間のことを構ってくれてるってだけで、前に居た家族よりもずっと近い存在に思える。だからこその喜びだ。

「ネイ？」

『あ、すみません。スパークしてました。』

“スパーク”の意味を問われ、答えに納得されてしまったのは無理もない。カタカナが伝わらないのは、少々厄介だ。

『私の顔つき、ここの人たちと少し違うでしょう？』

「ああ、すこし。」

肌の色なんかは、私は元から白いからそう変わらない。だけど、彫の深さや髪や目の色なんかは、はっきりと違った。

見事にヨーロッパ系の顔立ちだ。

『元の世界でも、私のいた国の付近はアジアと呼ばれていまして、黄色人種でクーンさんたちの肌や髪の色、顔の特徴なんかが違っているんですよ。』

ここには黒髪の人は確かに一人もいなかった。でも、可笑しな色

はたくさん見かけた。強いて言えばそこで見分けなんかは付くけど、一度会っただけじゃインパクトがないと覚えられないもん。

「では、ネイの国ではみんな肌が黄色く、髪と目が黒いと？」

みんな、じゃないんだよねぇ。でも、上手く説明できるか分からないから、なるべく理解してもらえるように丁寧に話した。

『黄色、と言ってもそう変わりませんよ。髪も染めてしまえば黒ではないし、目もカラーコンタクトっていうレンズを入れちゃえば、外国人と同じにはなりますね、一応。

でも、決定的なのは顔の造りの違いでしょう？

同じ人種の人の顔の区別は付くけど、どうもほかの人種の方の顔は区別が付き難いんですよ。』

「それでは、分からないというよりも、覚えていないということか。」

腑に落ちたように納得されると、ちょっと傷つくよね。でも、一瞬だもん。頬を殴られたのは。

その後はあの場に居た人たちに、引かれるように努力するのでいっぱいだったし。

見渡せる限りの顔が引きつってた印象はあるけど、一人ひとりを詳しくなんて覚えていない。

『それよりも、怒ってないんですか？』

「それよりも、じゃない。一番重要な事だ。」

何が、と問うと、私が殴られた事だという答えが返ってくる。それに少しだけドキリとしてしまった。

「内容自体は、然して問題じゃない。正論だろう。この身に何が降りかかろうと、ネイの身の安全は保障するさ。」

…私はその、あなたの身に降りかかることを心配しているんですが。

「怒っているのかと聞いたな。怒っているさ。ネイに手を上げたそいつにな。」

纏っている空気がどす黒く見えたのは私だけだろうか？

「ネイに対しては怒っているんじゃなく、心配してるんだよ。

赤く腫れてしまっているな…」

その大きくてしっかりとした手に、頬を撫でられる。私は恥ずかしくなって、視線を下に降ろした。

ちちち、違う意味で顔が赤くなりそーですっ！

優しい手つきで私の頬を撫でている。その手は暖かく、少しかさついていて…

男の人のてだって、そう思った。

だからこそ、余計に近くに居ることを自覚させられている。

どうも、クーンさんとは距離の測り方が難しい。

私は昔から、両親に虐げられてきた。一時はおじいちゃんとおばあちゃんのお陰でなんとかなった私の性格だけど、お父さんに引き取られてからは昔の自分に戻ってしまっていた。

自覚はしていたけど、毎日両親にとられる態度のおかげか、他人に本心は見せられなかった。…人を、信じられなかった。

人とは上辺で付き合うだけで、話も上手く合わせてるだけ。本当の自分の気持ちなんて話さないし、話そうとも思わずに心に仕舞ってしまうような、サイテーな人間だ。

ただし、口撃して撃沈させることに関してだけは、攻防は考えるけど本心を言っている。だからこそ、もっとサイテーだと言われても当たり前のことだと思う。

人を観察して、その時の身の振り方を考える。無鉄砲なふりして、逃げることなんて得意中の得意。

いい人だ、と言われる度に、心のどこかが痛むのは、よくない事をしているからでしょ？

そう言われる毎に負い目を感じてるから、そう言われた時に笑顔が引きつらないように気をつけなきゃいけなかった。

だけど。

そんな私の壁を、ここの人たちは簡単に崩してしまう。

ここに来てから、元気で空気が読めない明るい性格で振る舞っている。でも、今はそれが自分自身の根底の中身なんじゃないかって思える。

中でも一番近づいてくるのは、クーンさんだ。

自分のことなんか喋っちゃって、泣き顔見せちゃって。髪を撫でられている時なんか、その胸に抱え込まれるように自分を預けてる。

それを…心地よく思っている。

人を信じられなかったはずの私が、信用している。それが事実だった。

謝罪 - その2 -

「ネイ？」

呼びかけに、現実に引き戻される。上げた視線は、目の前の人によって囚われてしまった。

「痛かったか？」

いつの間にか、考え事の所為で、表情が引きつってたらしい。それを、クーンさんは自分が触れた所為だって勘違いしたみたい。

『いえ、大丈夫です。少し嫌な事を思い出してしまっただけなので。』

そう言うと、今度はクーンさんが顔をしかめた。

「それを、俺が聞くことはできるか？」

クーンさんに聞かせる…？

私は戸惑った。

今までもそうだけど、クーンさんにはいろんなことを話し過ぎちゃってたから。私の祖父母のこと、両親のこと、新しい家族のこと。

普通なら引かれるか憐れまれるような話なのに、クーンさんはそ

れを聞いた今でも前と変わらない態度でいてくれる。

それを、今度こそ失ってしまう気がして、怖い。

だから、笑ってごまかした。

『今話してしまうと、長くなります。

宰相さまが外でお待ちでしょう?それに、クーンさんだって今日は神殿へ行くために仕事を早く終わらせなければいけません。また今度にしましょう。』

精一杯だった。

どうか、忘れて。お願いだから、聞かないで。

そうしないと、今度こそ見限られちゃうから。

「…そうだったな。」

そう言うと、私の背のすぐ傍にある扉を開いた。

「どうぞ。」

待ってました、言わんばかりにドカドカと入って来たその人に心癒されながら、少し空気が軽くなった気がした。

そんな風にあからさまにほっとした私を、クーンさんが見ていたことになんてこの時は気付かなかった。

「今日一日でネイは有名人だ。…と、これはどうした？クーンにやられたのか？」

まさか！クーンさんは優しくしてくれこそ、殴ったりなんてしないって。

多分それは宰相さまも分かってること。

きっと、わざとだ。私とクーンさんの間にある空気が重苦しかったから、きっと変えようとしてくれたんだと思う。

「私はそんな事いたしませんよ。」

いつの間にか定位置に戻って書類に目を向けている。さっきまでの一連の出来事が嘘だったみたい。

「しかし、聞いた話にはネイが怪我をしていることは入っていなかったが…」

どうやら、複雑そうだ。そして、話は歪曲しているに違いない。

これは詳しく聞いて、私にとって悪い物だったら、報復してやらねば。

一瞬ニヤッとしてから、私はいつものように笑顔を張りつけた。

『宰相さま、詳しくお聞かせ下さい。私も事実のみをお話しますから。』

お茶の用意もありますから、と言うと、宰相さまは喜んで運び込まれたばっかりの机の方へと進んでくれた。

「これは？」

お茶、そしてお菓子を並べる。

今までにないものだったからか、宰相さまは不思議そうで楽しそうな表情を浮かべている。その顔はレークさんと重なって見えた。

『スコーンと言うお菓子です。アフタヌーンティーの習慣があるイギリス、という国が発祥のお菓子です。ジャムを付けてお召し上がりください。』

カップに紅茶を注いで、一つは宰相さまへ。もう一つは黙々と仕事をしているクーンさんの元へと置いた。

『クーンさんも、よかったら召し上がってください。乗せるものとしてバターとチーズも用意しました。あまり甘くありませんよ。』

そう言った私はいつものことながら顔を上げてもらえないと思ったけど、今日は少し違っていた。

顔を私の方へ向け、じーっと見つめるような視線を送ってくる。

きっと、さっきのことがあったからだ。私は笑顔が引き攣らないようにするので精一杯だった。

「ネイもこちらに座りなさい。詳しい話を聞かせてもらいたい。」

そう言われ、私は席に着く。そして、何があったのか四度目になる話を語った。

「…随分と、やらかしたようだが、正論だな。無能な奴ほどよく吠える。おまけに＜最後の乙女＞に手を上げるなんて…

そいつの首をどう切ってやろうか。」

ステイ、ステイっ！宰相さま、何か黒いものが出てます！

その重苦しい空気の中、私は笑顔を張り付けながら紅茶に口を付けて何とか視線を逸らした。

血の繋がりなんか無くたって、間違いなくクーンさんと宰相さまが親子だってことが確認できたよ…

『宰相さま、私が＜最後の乙女＞と決まった訳ではないですし、そうであっても表に出る気はありません。

その事を知らない議会の人たちにとっては、単なる小娘に違いありませんから。』

どうかそのどす黒い靄を引き取ってください…

そう言う気持ちを込めてそう言った。

そして、最も気になること。

『で、宰相さまがお聞きになった噂って、どんなものなんです？』

これを聞かなきゃ始まんない。内容によっては、どう報復するか考えてやらなきゃなんないからね！

私こそ黒いってことは、重々承知してるし…　やられたら三倍返しが必須でしょ。

「いや、噂も聞いたが、実際はクーン付きの専属を辞めさせろと直接言われたな。」

なっ！

私は驚いて言葉も出ない。マーサさんが言ってた矜持の話が頭の中を過ぎ去り、そんな事を考えるような人間でないことがよく分かった。

「今ネイから聞いた内容は、一切違っていたがな。そして、監督不行届きでクーンに対しての処罰も望まれた。」

…やっぱり。迷惑、かけちゃったんだ。

「まぁ、一蹴してやったがな。」

頼りになります。

ほんと、権力って大切だよね。

『あの、その…噂、ってどんなものなんでしょうか？』

おずおずと聞いたけど、これが私の一番聞きたかった事だ。

絶対最悪だと思う。あの人たちのことだもん。無いことだらけで話したりしてるはず。

「言葉遣いが成っておらず、態度の悪い女がクーンに付いた、と。」

ほっほー。言ってくれますねぇ。

「その女にクーンが絆されている、と。

今まで女に興味がない様に振る舞っていた愚息だからこそ、この噂はおそらく貴族のお嬢様たちにもふれ回るだろう。」

…更なる敵を作ったか……

ここは異界の地。人間の上下関係やら、制度やら、時代背景さえも違う。

現代の日本社会とは違い、女や庶民に対して差別があるのが現実だ。

階級制度の所為でここにいる貴族は増長しているように思える、ってことは、つまりその娘さんたちも、そう言う事だ。

たった一回の出来事で有名になるってのは、随分と大変なことをやらかしちゃったみたい。

「…なんだ、その噂は。俺がいつネイに絆されたというのだ。

それに、ネイの態度や言葉遣いも、きちんとしている。根も葉もないことだらけだ。」

ホント、私もそう思うよ。尾ひれに胸鰭、おまけに背びれまで付いちゃってる。どれだけ話を大きくすれば気が済むのよ。

『私、悪女決定ですかね？』

「そのようだな。」

呑気にお茶を啜りながら、肯定しないでください！こっちは死活問題ですよ。

殴られ解いて、お役御免とあっちゃあ、生活していけないって。

城から追い出されても良いけど、とりあえずここに留まって鏡盆に触れなきゃいけない。それが終わったら、どうしようかな…

どこかお給金が出るとこで働いて、生活していかなきゃ。私、城から出たって言っても、クーンさんの家まで馬車で移動してたから、城下のことなんて知らないんだよね。

生活水準って、どんなものなんだろう。

「おお、これは美味い。ネイは料理屋が開けそうだ。」

！

『それだ！』

思いついたと言わんばかりに声を上げれば、急に出た大声に二人は何事かと目を見開いていた。

「どれだ？」

こちらに近づいてきて、椅子に掛けるクーンさん。その手には、さっき私が運んで渡した紅茶のカップがあった。

どうやら休憩するらしい。

調度いい頃合いだと思い、お代わりを注ぎ入れる。その時に、さっきのことを話した。

『鏡盆に触れてしまえば、私が城に来ることは無いですよね。そうしたら、お給金が貰えるところで働いて、そのうち小料理屋でも開こうと思って。

私が作る料理はどうも珍しいみたいだし、流行るかもしれないでしょう。』

ここの料理水準は高くないし、高級料理とまでは行かなくても、きっとそれなりの値段で提供できる。

そしたら、がっぽりだ。

「…それもいいかもな。だったら、軍資金が集まるまでは、うちで働けば良い。住み込みで働けば部屋代や食事代が浮くし、早く貯まるだろう？」

あ、食べてくれてる！

クーンさんの提案にびっくりして目を向けると、スコーンを口に

運んでくれている姿が目に入って嬉しくなった。

「おい、私には裏が読めるぞ。それではお前が嬉しいだけではないか。」

『？』

どうやら、親子で意思疎通しているらしい。私には二人の会話の意味がさっぱりだ。

「でも、それもいいだろう。ネイが表舞台に出たくないのであれば、仕方があるまい。譬えネイが＜最後の乙女＞であろうと、私はお前自身が気に入っている。

お前がしたいようにすればいいさ。」

にっこり笑ってくれる姿には、今度こそ黒い物は見えなかった。…心からの笑みはなんとも安心できますよね。

「ただ、その白い肌に傷を付けるとは。」

「本当に許せんな。」

息、ぴったりですよね。

でも、一番驚くべきことは、二人が私のために怒っているということ。

おじいちゃんとおばあちゃん以外には、未だ嘗ていなかったような存在。私は俯きながら紅茶を飲み、涙が出るのを堪えていた。

こんなことしてたら、またクーンさんが心配してくれちゃうんだろうな。そう思って少しだけ、また嬉しくなった。

再会

『お疲れ様でした。』

おそらく夜7時ごろ。いつもよりも早くクーンさんの仕事は終了した。

書類を届けて戻って来たところに、お茶を用意して待っていた。

うん、女中（メイド）としての働きはなかなか悪くないはずだ。

今日はもう何回か書類の配達をしてみてたんだけど、かなり多くの好奇の目にさらされて大変だった。

元々格好や黒髪黒目のおかげで目立ってたからそう苦にはならなかったけど、私の悪女説は完全に浸透しているらしい。変な視線を感じるからね。

まだそれならいい。クーンさんに迷惑にならないもん。

哀れまれてる分だけ、私が悪目立ちするから。クーンさんはただ悪女に操作されてる男ってことでしょ？

「ああ、今日は助かった。」

私の横で、椅子に力無く体を預けている。本当に疲れている姿が見て取れた。

多分だけど、私のこととか聞かれたりして大変だったよね。

何か言葉を返さなくちゃ。そう思ってみても。

『…ごめんなさい。』

謝ることしかできなかった。…他の言葉が思いつけなかった。

また私の所為で負担をかけた。負担を減らそうとしたのに。

「謝るな。ネイは俺が言えない事を言ってくれたんだ。嬉しいよ。」

優しい微笑み。この人は、全てが優し過ぎる。

私は、そんなに良い人間じゃないから。その優しさに触れる度に、心が痛くなった。

「ネイ?どうしたんだ?」

手を差し伸べてくる。纏っている空気さえもが柔らかくて、今の私には刺のように刺さった。

「そんな顔するな。」

次の瞬間、私の視界は黒く埋まっていた。

温かい感触、頭をなでる手。仄かに香る優しい香り。私はクーンさんの全てに包まれていた。

「ネイのその表情を見るのは辛いんだ。」

腕を引かれ、いつの間にかその胸に顔を埋めていた。

座っていたクーンさんには、膝立ちしている状態になっているであろう私の全体重が掛かっている。

重いだろうからと身動ぎしてみても、がっちりと固定されていてできなかった。

「泣きそうで悔しそうで、辛そうな、そんな顔見たくないんだ。」

上から声が降ってきて、その心音が聞こえてきて。少し心地よくなってくる。…ずっと、ここに居たくなる。

でも、駄目だ。

私が関わったら、駄目だ。私になんて関わっちゃったら、ろくな事無い。

気持ちや表情をごまかすなんて簡単なこと。昔から慣れてる。

人と深く関わっちゃいけない。表面上は大丈夫でも、私は人を信じることが上手くできないから。裏切られた時に落胆する辛さは誰よりも知っている。

人に深く関わっちゃいけない。私と接点を持つことで後悔させる羽目になるから。自分の嘘に気付かれたら、良心が痛む。

『大丈夫、私笑えます。』

胸の辺りを押して、私はクーンさんから離れて立ちあがった。

明るくなった視界には、クーンさんが入ってくる。やっぱり心配そうな顔をして、私を見上げていた。

「悪いが、俺には大丈夫そうには見えないな。」

意志の強い瞳は、深い紫の奥がギラついて見えた。

『大丈夫。』

これはクーンさんに言ってるようで、自分に言い聞かせていた。

大丈夫、ひとりでも大丈夫。

一人になったときの孤独さや、信頼していた人がいなくなることは、辛いことだ。だったら、始めからそうならないようにすればいい。

『あ、私、夕飯も用意したんですよ。レークさんも来るみたいだから、用意してきますね！』

そう言って、部屋を飛び出した。

とぼとぼと廊下を進む。

この時間は人もそう多くはいないから、視線も気にならない。厨房へ行くと、夕飯の時間帯で忙しそうに見んな働いているようだった。

温かい料理を出す為に、急いで仕上げて盛り付ける。

私は用意していた夕食用のワゴンをこっそりと引いて、部屋に向かった。

「ネイさん！」

執務室へ着く少し前。ちゃんと顔が作れるか心配で、どうも歩調はゆっくりになっていた。

そんな私に後ろから声をかけてきたのは、レークさんだった。

「今日は大変だったようですね。」

あらら。そこまで噂が広まっちゃってるんですか。

思わず脱力。そんな私の行動から思考が分かったのか、面白そうに笑う声が隣から聞こえた。

笑いごとじゃないんですけどー。

すみません、って言いながら、目元をぬぐっている。そんなに笑わなくてもいいと思うんだけど。

「きっと私が聞いた噂は増長したものなんでしょうね。」

分かってるんなら、私の顔を見ただけで笑わないで下さいよ。

そう言う意味を込めて、半眼でじとーっと睨みつけてやった。

だって、私やクーンさんに取ったら笑いごとじゃないもん。って、

そんだけのことしでかしちゃった私が言うことじゃないけど。

「夕食をとりながら、面白い武勇伝でも聞かせて下さい。」

楽しんでるよ、この人。

矜持なんか持ち合わせてない議会の人も厄介だし、話を聞かない騎士団の人も厄介だ。

でも。

誰が一番厄介かって、このお方！レークさんに違いない。

この人は空気が読めないんじゃない。読めないふりをして引っ掻き回してるだけだ。

これは、性格ねじ曲がって、人一倍状況が読める私だから言えること。状況をごちゃまぜにして楽しんでる気がある。

最初は誰よりも優しい人だと思ったけど、笑顔だけだ。誰よりも心根が優しいのはクーンさんに違いない。

そう思ったことでさっきのことを思い出して、何となく戻り難い思いがぶり返してきた。

それでも、歩を進めていれば勝手に目的地に付いちゃうわけで。二人揃ってクーンさんの執務室に入ると、あからさまに脱力しているその部屋の主の姿が目に入り込んだ。

「なんですか、その態度。あからさまに失礼ですねぇ。」

思ってもない事を。

なんて、一連の出来事の所為で思わざるを得ない。私はいつもながらの半眼で睨めつけるだけにとどまった。

『今すぐ用意をしてしまいますね。』

二人には積もる話もあるだろう。今日は大切な事をしなくちゃいけないし。

用意が終わると、二人は挨拶をしてから食べ始めた。

「これは、美味しいですね。」

『すみません。いろいろとあったもので簡単にできるものしか作れなかったんです。』

今日の夕食はスープとサラダとパスタ。カルボナーラだ。

「これが、簡単なのか？」

少々驚きながら味わっている様は、さっきのことを思わせないほど自然な会話だった。

『簡単ですよー。いつものお料理の半分の時間もかかってないですもん。』

自分も出来に満足しながら口に料理を運ぶ。簡単だけど美味しい一品ってとこだねぇ。

「ネイさんは本当に非の打ちどころがない女性ですね。引く手数多でしょう？」

またまたこの人は。思ってもない事を。

『そんなことある訳ないじゃないですか。』

笑ってそう言い放った。そんな私の笑顔に笑顔を返してきたレークさんは、やっぱり強者だと思う。

だんだんレークさんって人が分かってきた気がする。

「これを食べ終わったら神殿へ行くことになる。それによって、今後の状況が変わってくるだろう。」

真剣な声に、思わず背筋が伸びる。これからどうなるか、とか分かんないけど、とりあえず流れに身を任せてみることにした。

再会 - その2 -

食事が終って、食器も片付けると、私はレークさんが用意してくれた神官服に着替える。白いワンピースみたい。

そんな感想を持つ服の上に、また白いマントを重ねる。

髪は下ろして耳の下で一つにまとめた。マントについてるフードを深くかぶって、って完全に危ない団体の人じゃん！

でも、顔を見られない方がいいんだって。髪もわざわざ下ろすのは、性別が女だってばれないようにって言う配慮らしい。

私の変装らしきものが完成すると、とうとう執務室を出て、神殿へ向かうことになった。

なるべく俯き加減で歩くように言われてその通りにしてるから、今どこら辺を歩いているのかは分からない。

そうでなくても、城の中をきちんと見て回ったことなんかない。逸れたら大変そうだな、と思いながら、前に居るクーンさんを追い、レークさんの横に並んで歩いた。

小さく呟くような声で会話を交わすことには、どうやら神殿はこの城の中心にあるらしい。

この城は真ん中を囲うように高い建物があり、その中心にはジア教の神殿があるのだという。

「神殿は神聖な場所ですから、この神官たちはこの衣装でいるのです。これには無垢という意味が込められているのです。

王は神の神子であり、私たちはその御子であります。そんな子供である私たちは純粋無垢でなければならないのですよ。」

どうやら戒律やら何やらと色々とあるらしい。その話は長くなりそうだったから、また今度と言ってごまかした。

レークさんって、自分の興味があることを話す時は長くなるから。別に、面倒とか思ってないけどね。

『神様を祀ってるんですよね？鏡盆って何のためにあるんですか？』

戒律はともかく、どう言う様式なのかは知りたい。

日本では鏡が御神体だったりもするけど、鏡盆もそういうものなのかな？

「鏡盆とは神と御子を繋ぐもの。神の心を映すものと言われています。

神が気に掛けているのはこの国のことであり、国内の情勢を隈なく見せてくれるのです。」

へぇ。そんな力があるんだ。

レークさんに見えてるものがどんなものかは分からないけど、そんな力があるんなら、私なんていらないんじゃないのって思う。

ちゃんと確立してる訳だし、イチイチ＜最後の乙女＞とか引っ張り出さなくてもいいんじゃないの？

考えているうちに、どんどんと近づいて行く。

たどり着いた時。

神聖、という言葉が、初めて理解できた気がした。

そこは白でいっぱい。むしろ、それしかなかった。

顔はまだ隠したまま。何人かとすれ違ったから、フードもまだとっていない。だけど、一歩踏み入れた時、空気の違いに呼吸を思わず止めていた。

「もう顔を上げても大丈夫ですよ。」

そう言われてフードを取ると、広い空間が広がっている。今まで言ったことがある場所の中では一番無機質で、最も澄んでいた。

白い石造りで、浅く一段下がった円く広いところには、透き通った水が入っている。その真ん中には同じような白い石の腰辺りまである台があり、上に銀色のものが乗っていた。

あれがきっと鏡盆だ。

「どうした？」

優しい声が掛かる。それに応えようとしたのかは分からないけど、無意識に言葉が口から零れていた。

『…綺麗。』

でも、怖い。

それさえも零れ落ちたらしい。さっきと同じように問われ、私は目の前に広がる景色に囚われたまま答えた。

『ここで感じるのは神聖さ。それ故の畏怖。

でも、今までで一番心地良い場所。』

口走ったことに戦いて、私は視点を横に居る二人に合わせた。

『ごめんなさい、変な事言っちゃって。』

私の言葉に対して、特に何を思った訳でもなかったのか平然としている。うろたえているのは私だけだった。

「いえ、変な事ではありません。むしろ、ネイさんが＜最後の乙女＞であると、再確認できた気がします。」

そう言われてしまえば、困ってしまう。だって、そうなりたくないから。

困って周りを見渡し、水辺が気になって近づく。溜まっている水に手をつけてみた。

「あ…」

何か言いたげな呟きに、振り返る。二人は吃驚して固まっていた。

どうしたのかを訊ねると。

「その水は、人によっては毒にも清水にもなり得るものなんです。」

毒…？

思わず目を丸くして手を持ち上げる。どこも痛くないけど、ちょっと怖い。私、根っ子が真っ黒ですからね。

どれだけ人を言い負かしてきたか…

恨まれてたって、当たり前だと思う。

「ネイさんは、大丈夫ですよね。」

納得しているレークさんをじっと見つめてしまった。彼の中でそれはもう決定事項らしい。

「もちろん神官である私は平気です。でも、面白いことに、クーン殿も平気なのですよ。」

ニヤッと笑ったように一瞬見えたのは、私だけだろうか。てゆーか、私の中のレークさんは、もう腹黒い人に格上げされていた。

「クーン殿の身の上はご存知でしょうか？」

身の上って、あれだよね…？陛下が腹違いの兄にあたるってヤツ。

昔は王族で、継承権を放棄したって言ってた。元王様に認知してもらえなかったっていう話しが、私の中では一番印象に残っている。

私がゆっくりと頷くのを見ると、面白そうに語りだす。クーンさんが止めようとしたのは、無意味らしい。

「王に認知されなかったのに、王族となり王位継承権が与えられたことを不思議に思いませんでしたか？」

そう言われてみれば。認知されないってことは、王家には成れないはず。でも、継承権を持ってたってことは、何かしら原因があるってことだよね。

「クーン殿が確か４歳のころ、ここにいらしたことがありまして。やんちゃ盛りだったために、城中を駆け回り、ここに入り込んでしまったのです。」

クーンさんにも、そんな時期があったんだね。きっと可愛かったんだろうな。

思わず想像してクスッと笑う。目を向けたその人は、少し不機嫌そうな顔をしていた。

『その頃のクーンさんに合ってみたかったです。』

私の発言に、ちょっと不満そうだ。その表情を見られただけで満足。

二人の顔を見合わせて、一番面白そうにしているのはもちろんのことレークさんだった。

「私はもうここで修業をしていたんですが、あまりにも印象的だったのではっきり覚えてますよ。

入り込んで走り回って、床に滑ってこの清水の中に落っこちたんです。」

ああっ、やっぱり見てみたかった！身もだえするほど可愛かろう…とか、勝手に想像してみちゃったり。女の子ですから、妄想は大得意です。

「普通なら、この水は毒となります。清水になることはそう滅多にありません。

王家は平気ですが、興し入れしてくる方たちでさえも、毒となるのです。お年を召した貴族さまたちは彼を卑しい血として卑下していますが、この清水が認めました。

駆けまわっていたクーン殿はこの水に落ちましたが、何ともありませんでした。そのために、継承権が認められることとなったのです。」

なるほど。そういう経緯があったってわけか。いちいち此処の人って面倒なことするんだね。簡単に認めちゃえばいーものを。

「別に、認められた訳ではないだろう。」

不満げに言っているクーンさんが、少しだけ可愛く見えて笑ってしまったのは内緒だ。

「さて、長話はここまでとしまして、最速当初の目的を果たすといたしましょうか。」

さっきと表情は変わらないのに、緊張感が走った。私は急に背筋が伸びた気がして、その場に佇む。

促され、一歩、また一歩と近づく。そうするにつれ、何かが変わってしまう心地がして、足が重くなった。

振り返ってみると、レークさんは相変わらずの笑顔を張り付けて、先へと促している。もう一人の人物は、射抜くような強さの視線で私を捉え、それでもどこか見守ってくれているような温かな雰囲気を纏っていた。

進まなきゃ。

思いのままに、歩を進めた。

手を伸ばす。鼓動が速くなった。

触れる瞬間に戸惑い、それでも手を伸ばす。

ひんやりとした感触がした瞬間に、それは眩いほどの感色に発光した。

目を開けていられない。だけど、自分の視界にはしっかりと鏡盆

が見えている。触れているものは冷たいのに、包まれる光は温かい。

…不思議な感覚だった。

“名を…我が名を呼べ…”

囁くような声がした。美しく、この世のものとは思えない。

何とも言い難い感覚に囚われた私は、いつの間にか気付かずに涙を流していた。

名前？貴方の名前なんて知らない。

“知っているはず。この世界に来た時に教えたものがあるはずだ。呼べ、ならば我は応えん。”

この世界に来た時…？アホ神には会ったけど…

…あ！

私は、思い出していた。

『“ジュノワール”』

次には光はさらに眩くなり、完全に目を開けていられなくなる。しかし光が瞼の裏まで伝わって来た。

徐々に弱まる光。余りの強い刺激にしばらくそのままでいたけど、声を掛けられてゆっくりと開くことになった。

「やあ、元気にしていたかい？」

嫌な予感はしてたんだよ。期待…はしてなかった。だけど、そう言う類のものを裏切らないってのが、このアホ神だ。

本当に神様だったとは…世も末だよ。私、この神に殺されそうになったってのに。

「君ってば、全然呼び出さないんだもん。僕、焦っちゃったよ。」

うわー。緊張感の欠片もない。どうにかしてよ、この人。いや、この神。

本当なら敬うべき存在なんだろうけど、そんな気がしないのは何故だろう。

それはきっと、今度は木馬に乗っている所為だからだ。

『あんた、ホント余計な事に巻き込んでくれちゃって！これからの生活、どうしてくれんの？！』

緊張感の欠片もないこの御方は神様であるらしい。

…確かに見た目綺麗だし、そんな感じはしないでもないけど、認めたくないって思っちゃうのも仕方ないと思う。

さっき、なんで泣いちゃったんだろう。私の涙を返せ！

「なんだい、あの時みたいに熱烈な視線を向けてくるなんて。

あ！この馬はあげないよ！」

『いらん！』

デジャヴ…

また誰かからぱくって来たんだろうなぁ。

ホントに神様かよ！と言うツッコミを、誰かに委ねます…

「ネイさん、そこに神様がおられるのですか…？」

いつにも無く真面目な表情。レークさんにはそこに光があるよう

に見えるらしい。一方のクーンさんは何の変哲もない景色にしか見えないんだって。

って、そんな事言ったら、私って何もないところに話しかける変な人じゃない？

この神に付き合って会話なんてしてたら、私の人間性疑われちゃうよ。

「あ、君今失礼なこと思っただろう。」

何でわかるのよ。変なとこ敏いって言うか、自分の悪口に敏感って言うか。

「一応神様だからね。分かるさ。」

うわー。自分で神様言っちゃったよ！

私には頭の変なお兄さんとしか思えないね。

「君、もう少し包み隠すってことを覚えた方がいいよ。」

私の考えていることがことごとく分かるのか、少し嫌なものを見るような目を向けてくる。だけど、私は気にしない。

言いたいことははっきり言わないと！特に、こういうテンポや空気が読めない人にはね。

『じゃあ神様は、もう少し人を思いやることを覚えた方がいいよ。』

失礼だろうけど、本当にそうだ。

だって、私初対面なのに思いやりがないと罵られた上に、砂漠で脱水症状と熱射病起こして倒れたんだもん。

神様がもう少し考えてくれてたらそんな事にはならなかったし、現代の日本社会では夏に熱射病で倒れる人が少なくはない。そのまま命を落とす人だっているんだから、本当に危ない。

「まあ、それに関しては考えない事もないが…」

あ、ないんだ。いい傾向だね。

「で、詳しい話を進める前に、＜最後の乙女＞の証明のため、守人二人を選り抜こう。」

『守人？』

ってゆーか、私が＜最後の乙女＞なのは決定事項な訳？

アホ神に背を向けてぐるぐると思考をめぐらせていると、何やら難しそうな顔をする二人が目に入った。

何て言うか…物申したいって顔してる。

『…何か？』

「ネイさん、いくら貴女が神を信じておられなくても、そこに神が在るとわかったのならば、敬う心を忘れてはいけません。」

はい、早速お説教をいただきましたー。

でも、この人の、いやこの神のどこを敬えと?!

まさかの子供の遊び道具、木馬に乗ってるんだよ?てゆーか、木馬なんて私も初めて見たし。

そんなナリの神をどう敬えって言うんだ。

「とりあえず、事実を知りたい。ネイは＜最後の乙女＞で間違いないんだな?」

「あ、こいつあの時のガキ!水に落っこちた時は面白かったなぁ。」

「やっぱり＜最後の乙女＞でしたか!神がそこにおられるのですね!」

・・・大騒音。

私が答えるよりもまず。

『全員黙れ!一度に喋るなー!』

私は聖徳太子じゃない。１０人どころか、３人の話だって同時になんて聞けやしないから。

って訳で、キレた。

「「「・・・・・・」」」

静けさが広がり、私は満足して三人の顔を交互に見る。それぞれがなんとも表現し難い表情を浮かべていた。

『まずは確認します。存在はともかく、二人はジュノの声が聞こえますか？』

「なんで省りゃ・・・『黙ってって言ったでしょう？』

笑顔を張り付けて言うと、押し黙る。

最初からそうしててよね。何度も注意するの、面倒だから。

ジュノから二人へと視線を移すと、横に首を振っている。ってことは、ジュノが言ったことを通訳する必要があるってことだな。

『ジュノ、さっきの守人の説明をお願い。』

「それが神様に対する態度かい？えーと…まあ、いいとするか。

ネイが＜最後の乙女＞であることを証明するための者が二名必要になるんだ。その人には、君を介して僕を見えるようにしてあげるんだよ。」

私一人がアホ神が見えてるって言っても、証明するものがないか

ら守人を作る必要があるってこと？

ややこしいなぁ。

『それで、その人たちを決めるのはジュノなの？』

「ああ。調度良いだろう、そこの二人が。頭数も揃ってるし。」

……

そんなテキトーでいいんかい！

ジュノの指した先には、クーンさんとレークさん。確かに二人が揃ってるけど…いささか安易すぎませんか？

私が急に視線を向けると、二人は私をずっと見ていたのか目があった。

「さあ、説明は一度で終えた方がいい。そこの二人を君の横に呼んで。」

こいつ、ちょっとだけ私に似てるのかも。とか、思っててげんなりしちゃうけど、思いついたら即行動に移るところなんかがそっくり。

本当はもう少し詳しく話をしてもらってから、状況を把握してから、行動に移したい。だけど、このアホな神様は早くと催促してくる。

仕方なしに嘆息を溢し、二人を手招きした。

『二人とも、こちらに来ていただけますか？』

何事か、と言う顔で近づいてくる。てゆーか、さっきからずっと混乱したような表情を二人は浮かべていた。

でも、それは私も一緒。

私だけ神様と話しているからと言って、きちんと状況が出来ているかと言ったらそうじゃない。むしろ、状況は悪化している一方だ。

「君を挟んで左右に立ってもらって。」

ジュノの指示通りにする。でも、ここでちょっと待ったをかけて、二人に問いかける。

『貴方たちを私の運命に巻き込むことになります。

…正直に言って、私はお二人にこれ以上迷惑をかけたくはありません。もし嫌なら、これから私も何が起こるのかはよく分からないし、理解も出来ていないけど、断っていただいて構いません。』

どうかを訊ねると、レークさんは一秒と間を置かずに了承をしてきた。

神官なのだから、神の関わることに自分の身を置くのは当たり前だし、当然の務めなんだって。

嬉々として言って見せたから、本心なんだと思う。

「ネイに関わることについては大丈夫だ。むしろ歓迎する。

しかし…俺のような卑しい血と呼ばれるものが、神に関わっていいのだろうか？」

自分のことを“卑しい血”と呼ぶなんて。思わず眉を顰めてしまった。

クーンさん、いい人なのに、周りの評価はどうしてこう、伴ってないんだろう。誰よりも努力して、誰よりも高みを目指せるような人なのに。

って、真剣に考えてしまったのは私だけだったみたいだ。

「オッケー、おっけー、オールおっけー！

ほかのヤツらになんか任せてられないでしょ。この清水が認めた人間なんて、少ないからねぇ。」

本当に、緊張感と言うものを持って欲しいと願ってしまわずにはいられない。なんでこんなに間が抜けたような発言しかできないかなぁ、と思いながら、表情が変わらないクーンさんを見て、ジュノの言葉が聞こえていない事を思い出した。

『大丈夫だって言ってます。清水が認めた人間は数少ないから…って、清水が認めた人間しか守人にはなれないの？』

途中から、話しかける人変わっちゃった。

視線をジュノに向けると、うんうんとうなずいている。てゆーか、木馬をギコギコ動かすの、やめなさいよ。

「守人？私も初めて聞きましたが、清水が認めた人間が選択される何らかのものなんですか？」

『うん、＜最後の乙女＞の証人らしいです。

二人にこんな事言っちゃあなんですが、このアホ神、残念過ぎるんで、会話を交わした時に、がっかりしないで下さいね。』

私の言葉にジュノは少々不貞腐れてるけど、事実だもん。先に言っとかないと、神様に期待してる分だけ、会ったときに残念な思いをするに違いない。

一通りの確認が終わって、私たちはいま、鏡盆の前に立たされている。右手をクーンさんの手に、左をレークさんの手に添えていた。

「じゃ、さっき教えた通りに。さあ、はじめようか。」

映画監督ばりにしているジュノは放っておいて、さっさと事を進めることにした。

守人 - その2 -

“よーい、アクション！”とか、そんなの映画がないこの世界のどこで覚えて来たんですか。

一度手を離し、鏡盆の中の水に触れる。それは、下に広がる水よりも温かく、柔らかさを帯びていた。

清水で濡れた手を、二人に預ける。

『レーク・ビギンズ、これより貴方に神の加護を授け、＜最後の乙女＞の証人として守人の役を授けます。

受け取っていただけますか？』

気恥ずかしい。上から目線で言ってる感じが、何とも気分が悪い。

けど、ジュノ曰くおごそかな空気の下に行われなくちゃいけないからって、お得意の猫かぶりでそんな空気を醸し出すように言われた。

「はい、貴女に忠誠を。」

膝間づいて、手の甲にキスを落とされる。

あーっ、恥ずかしいったらないよ！

顔が赤くならないように、ってのはムリだけど、そうであっても表情は変えないように心がけた。

『クーン・リッキンデル・デューク、これより貴方に神の加護を授け、＜最後の乙女＞の証人として守人の役を授けます。受け取っていただけますか？』

「…貴女に忠誠を。」

そう言って落とされるキスは、先のものよりも恥ずかしくてドキドキする。少しかさついた冷たい唇が触れたところが、少しだけ熱くなった気がした。

と、クーンさんの唇が離れた瞬間、私が鏡盆に触れた時のように光が放たれ、神殿を埋め尽くす。

建物の中にいるのに、風が吹いて神や衣服を揺らした。

“お前たちに、わが名を呼ぶことを許そう”

あ、またこの感覚。涙が目の奥から自然と湧いてきて、流れ落ちていく。

風と光が止んだ。目を開ける前に、私の頬に手の感触がする。

ゆっくりと目を開くと、クーンさんの手が私の頬を伝う涙を拭ってくれていた。

「やっだー、僕の前で僕の乙女とイチャイチャしないでよーぅ。」

…やっちまったよ、この神様。

最も敬われるべき存在のはずなのに、一発目に間抜けな姿を吐露していた。

「神、さま…このお方が…」

レークさーん。この人、そんなに熱い視線を送れるような人じゃありませんよー。

聞いてますかー？

って、無理だよね。この国の神官様なんだもん。ずっと、恋焦がれていた存在に違いない。

それよりもまず。

『私がいつあんたの乙女になったって言うの。』

僕の乙女、とかイチャイチャ、とか聞き捨てならないぞ。

「この方が、神…」

例によって、クーンさんも固まっております。

敬う存在なのは知っている。でもその前に。

何故この神の格好を突っ込まない。木馬を前後に揺らしている、この見るも見事に残念なイケメン神様ジュノワールにもっと言うべきことあるでしょ！

『ジュノ、とりあえず木馬で遊ぶの止めなよ。もっとほら、神様っぽい感じで光を背負ってみるとかした方が、見栄えがいいよ？』

何ともフランクに話しかけた私を、レークさんは驚愕の表情で見てきた。てゆーか、さっきから私この口調だったし、今さら驚くことでもないと思う。

「やあやあ、守人に選ばれたお二人さん。僕は神様。名をジュノワールと言う。」

偉そーに。

私は半分睨みつけるような顔で、ジュノの話を聞いていた。

「守人に選ばれた二人は、僕と乙女の証人で在り、乙女を守るべき存在だ。制約を交わした限り、裏切りは許されない。

先に口ずけた際の清水が、裏切ったときには毒となりその身体を侵す。

いいね？」

ちょっと、ちょっと、ちょっと。そんな物騒な話聞いてないんですけど？！

そう言ったら、だって言ってないもーん、とか抜かしやがった。いつかいっぺんシメテやる！

「二人は今、僕の声が聞こえ、姿が見えているはずだ。」

そうだね、と訊ねられ頷いてる二人は、神の存在に戦いてるみたいだ。最初の言葉を最後に、さっきから口を開こうとしない。

何て言うんだろう。恐れ多い、って感じ？の態度をしていた。

「彼女から手を離すと二人は僕の声を聞く事も存在を見る事も出来ない。もっとも、神官の方は僕の存在を光で感じ取ることができるだろうが。」

やっぱり、レークさんってすごいんだ。神官も家系だって言ってたし、なんか特別な力があるのかな、なんて思った。

「僕がネイを＜最後の乙女＞として送り込んだのは、地球の現代における知識を使って、この国の乱れた政治を正して貰おうとしているからだ。」

その意味失礼だろうけど、よくわかる。

ここのお偉いお貴族さまは何と言っても働かないし、その地位を振りかざしてるだけだ。ミリアが税金ドロボウって呼んでたけど、全く持ってその通りの行動や生活をしている。

『私、そんなに知識ないけど、大丈夫?てゆーか、なんで私が＜最後の乙女＞だなんて仰々しいものに選ばれたわけ?』

そこがよく分かんないんだよね。私じゃない方がいいじゃん。

「もともとニホン人を選んだのは、髪色や目が神秘的だからだよ。それに…」

それに?そう小首を傾げてみると。

「可愛いっ!」

な、何事?!ジュノがご乱心じゃーい!

『ちょ、ジュノ!離れてよー。』

「つれないなぁ。そんなところも可愛いんだけどね。照れなくても良いんだよ、乙女。」

話を聞け!私がいつ照れた?キレたのには間違いないけど、なんでこのアホに対して照れなくちゃいけないって言うの。

てゆーか、ほっぺたつんつんするのやめて!

「二人も思うだろう?髪や目はさることながら、肌の色や華奢さ。

まさに乙女と言う感じだろう？」

そんなテキトーに私も決めたわけ？訳の分からん基準で人を許可なく異世界に飛ばすなよ。

こっちに来れたことは結果的に良かったけど、ジュノに対しての評価はガタ落ちだ。

「そうですね。儚げなところも、乙女には合っていると思います。」

クーンさんは未だに口を開いていない。レークさんはやっとこさ、って感じだ。

そんなにジュノに緊張すること無いと思うんだけどなぁ。

「だろう？って言うのもあるんだけど、実は僕が異世界旅行をしたことがきっかけで、歪みが出てしまってね。

君の運命を変えてしまったんだよ。」

なんだそのカミングアウト！

「…思い出してごらん。」

次の瞬間、頭の中を映像が過った。振り返ったときに目に入ったのは…

『きゃあああああああ！』

勝手に悲鳴が喉から飛び出していた。頭を抱え、立っていられなくなり、その場に崩れ落ちる。

「ネイ！」

急に温もりに包まれた。クーンさんの腕が、私を包み込んでいる。レークさんは私の肩に手を置いて、心配そうに覗き込んできていた。

二人の優しさが、私を正気に戻してくれたみたいだ。だけど。

『私…死のうとしたの？』

涙が溢れて止まらない。

私はビルの屋上に立っていた。表情なんて何もなくて。何の変哲もないままに足を放している姿が、脳裏をよぎった。

「…ああ。世界線が変わってしまったんだよ。ここに来た君は、Aという世界に居た。

だけど、僕が移動したことで歪みを作り、死ぬ予定でもなかった君が自殺を図った。これはBと言う世界にいる君がした事だけど、

予定外の出来事。

だから、君の存在自体をこの世界に引っ張り込んだんだ。」

うそ…そんな…

私、確かに引き取られたところで両親に蔑ろにされてた。だけど、死のうなんてするはずない。だって、おじいちゃんとおばあちゃんの思い出があるもの。

二人が先に逝くことは、当たり前のことだから仕方がない。だけど、それは事故のせいだった。父さんはそれが私の所為だと罵った。私が関わるとロクなことがないと言った。私が関わったから、二人が死んだと言った。

…私は、運命を憎んで飛び降りた。

…ちょっと待って。今の私の思考はおかしい。

「君が混乱するのも無理はない。乙女、今君の中には、二人の自分の記憶が混ざり合っているんだ。AとBの両方の記憶が混ざり合って混乱しているんだよ。

残りは明日話そう。今日は一度帰って落ち着くといい。」

私は涙を溢し続けながら、一度だけ頷いた。

混乱と救い

ジュノは眩い光と共に消えた。

何か言ってたけど、全然頭に入って来なくて覚えていない。

「ネイ、帰ろう。立てるか？」

時間をかけ、何とか思考をいったん止める。私はずっと、クーンさんに縋りついて泣いていたらしい。

迷惑をかけまいと自分の足で立ち上がろうとしたけど、上手く力が入ってくれなかった。

「レーク、明日の会議はお前が受け持ってくれないか？ちょうど鏡神祭のことがあったろう？」

「わかりました。その様子だと、ネイさんを一人にしておくことはできないでしょうし。出勤は午後からと言うことで取り計らいましょう。

私一人の力では、もとないですから、宰相さまにもお伝えください。」

レークさんがそのまま急いで神殿を後にする。私は、ちゃんと挨拶すらできなかった。

「…帰ろう。」

そう言って、私を横抱きに抱えてくれた。

『ごめん、なさい…私、重たい…』

「重くなどない。ただ、安定感をとるために、首に手を回しておいてくれ。」

いつもなら恥ずかしいと思う事なのに、さっきから私、少しおかしい。

迷いなく言われた通りに腕を回し、クーンさんに顔を埋めながらまた泣いた。縋りつくようにして、その温もりに安心感を求めようとしてしまう。

結局そのまま馬車まで連れて行かれ、乗っている間もずっとクーンさんの膝の上に居た。

お屋敷に着くと、そのまま抱きかかえられていく。中に入ると、女中さんたちがオロオロしているのが分かった。

だけど、いつもみたいにできないの。辛くても、頭にきていても笑顔を浮かべることなんて簡単だったのに。

「湯あみは明日に回せ。何か温かい飲み物を用意した後、今日は誰もネイの部屋に近づくな。」

クーンさんはそう言うと、私を抱えたまま部屋へと連れて行って

くれた。

ベッドに降ろされる。だけど、なかなかクーンさんから腕を離すことが出来なかった。…温もりが離れて行ってしまうのが、怖かった。

「悪い、着替えを済ませたら急いで戻る。」

頭を撫でられ、背中を撫でられ、宥められる。私は何とか腕を離した。

足音が去って、ドアがしまる音がする。急に寂しくなって、また涙が零れ落ちた。

ベッドの上で体育座りをして、自分の膝に顔を埋める。自分で自分の身体を守るように、足を抱える。混乱はまだ治まってくれそうになかった。

不意にノック音がして、顔を上げる。クーンさんが戻って来たと思ったからそうしたけど、それはメイドさんだった。

「温かいお飲物をお持ちいたしました。それと、お召し変えをいたしましょう。」

私はそれに応えようとはしなかった。メイドさんはそれでも優しく接してくれ、帰って来た状況が状況だったろうに、それを聞くことなく私を着替えさせる。

まるで子供のように成すがままにされ、メイドさんは着替えさせ

ることができると出ていこうとした。

咄嗟に声をかけ、クーンさんのことを聞くと。

「シュリキスさまと話しておられます。すぐにお戻りになられると思いますわ。」

そう教えてくれると、今度こそ部屋を後にした。だけど、今一番会いたくなかった人かもしれない。

あのメイドさんは、おばあちゃんを彷彿とさせるから。

私はさっきよりも小さく蹲った。

…早く、クーンさんに会いたい。

なんでそう思ったかは分からないけど、ただ会いたかった。その温もりに縋りつきたかった。

そう願えば願うほど、時間が経つのが長くて。祈りを募らせるほど、静かな部屋が辛かった。

「ネイ。」

ドアが開かれ、ベッドまでやって来たその人に、自分から抱きついた。

『…うっ、ん……』

嗚咽が零れる。噛み殺しているはずなのに、理性が崩壊しつつある私は、もうそろそろそれが出来ないことが分かっていた。

優しい手が頭を撫でる。次の瞬間には、大声をあげて泣いてしまった。

「…落ち着いたか？」

『…はい。』

鼻を啜りながら、涙を手で拭う。クーンさんの胸元は私の涙でびしょ濡れだった。

「ゆっくり整理しよう。」

ホットミルクを受け取り、小さく頷く。

クーンさんは、泣きやむまでずっと頭を撫でてくれて、胸を貸してくれていた。

途中からなんで泣いてるのかさえ分からなくなっていたの。頭の中を整理することが、今一番大切な事なのかも知れない。

「頭の中を整理しよう。何があったのか、聞きたい。」

真摯な態度に、向き合った。泣きじゃくってる私をずっと温めてくれて、なおも優しく接してくれてる。本当に優しい人だと思った。

『クーンさんに、話した私は、どんな私でしたか?』

言葉が詰まる。上手く話せなかった。

困ったように微笑むと、話した通りに昔の私のことを話してくれる。

それを私は知っていた。だけど。

『そのことは覚えているのに、もう一人の私の記憶もあるんです。』

記憶は途中まで一緒だけど、ある時期を境に全くの別物だった。

両親が離婚した時、私は父方に引き取られ、祖父母と共に暮らしていた。父はたまにしか帰って来なくて、外に恋人がいることは祖父母と共に私も分かっていたことで。

それでも、もし父が再婚した時にはついて行こうと考えられるくらいには、仲の良さは戻っていた。

それなのに。

祖父母と私で旅行に出かけたあの日、事故に遭ってしまった。駆けつけた父は私に向かって。

お前が関わった所為で――――と、冷たい視線を向けられた。

全部ぜんぶ、私が悪い。今までの不幸なできごとは、全部私の所為。

父の言葉に胸を突かれた。

…その日から私は多くの感情を失った。頭の中をただ私に関わると人が不幸になると、考えるようになった。だから、他人と関わらなくなった。

きっと私が死んでも誰も涙を流さないし、誰も心動かされたりしない。…生きる意味を失った。

そして、早く祖父母に会いたいと最期に思ってビルの屋上から飛び降りた――――

「自ら、命を断とうとしたのか…」

私は、小さく頷く。自分のことなのに、そうじゃないような感覚。だって、これはもう一人の私の人生だったから。

『私は、今の私は、クーンさんに自ら話した私です。でも、もう一

人の、人生が狂ってしまった私も私なんです。』

だから、混乱している。どっちが本当の自分なのか分からない。

思考を持っているの。二人分の。

大学生になる前までの私の記憶と考え方、自殺をした高校2年生の私の記憶と考え方が、ごちゃまぜになってる。

私が私一人じゃないみたいで、少し気持ち悪い。

「二人分の自分の記憶が、混同しているのだな。」

クーンさんの言葉が、私の今の状況をはっきりと表していた。

「…泣き疲れているんじゃないのか？」

空になったコップを私から預かり、近くのテーブルに置いてくれる。

動作が少し不自然に見えた。ベッドに腰掛けているクーンさんの胸に私がしがみついていたから、上手く身動きが取れないようだ。

迷惑だと分かっている。それでも、私はそれを止めようとはしなかった。

『少し、疲れました…』

声は鼻声だし、大声で泣いたから掠れている。目は腫れぼったく

て重く、身体はだるい。

「今日は考え疲れただろう？もう寝ろ。」

私を枕元へと運び、布団をかけてくれる。でも、一人じゃ寝られそうになかった。

『独りに、しないで…』

いつもの私なら、強がって一人で寝てただろう。でも、今日はもう一人分の私がいるから。考え方が、一つに定まらない。一人で大丈夫だと思ってるのに、一人になりたくないと思う。

違う人間の記憶を引き継いだみたいだったのに、脳裏に浮かぶ身に覚えのないような映像の主観は私だった。

「一人に、なりたくないのか？」

目も合わせないまま、頷く。

しばらく無言が続き、クーンさんがどうしたらいいのか迷ってることが手に取るように分かった。なのに、自分の言葉を覆す気にはなれない。

「…わかった。」

その返事に顔を上げると、少し難しそうな顔をしている。

やっぱり、迷惑だったよね。

「常識を考えると、少し憚られるが。」

小さく唸るように言うと、隣へと滑り込んでくる。そして、私を抱きしめるようにして、布団へと納まった。

ドキドキする。でも…安心する。

私は少しだけ戸惑って、それからクーンさんの胸に縋りついた。頭を撫でてくれる手は優しい。安寧を私に届けてくれる。

「…ネイ。少しだけ、お前の考えに意見したい。いいか?」

囁く声が、二人の近さを物語っていた。泣き疲れていた私は、眠たさのために頭が上手く働いていなかったけど、小さく頷く。それが分かったのか、なおも囁きながら言葉を続けた。

「もう一人のネイは、お前が死んでも誰も泣かないと、誰も心を動かされることはないと言ったな。だけど、違う。」

驚いて、顔を上げる。私を見ているクーンさんのその目が、とても優しかった。

「今は、俺やレーク、城に居る人だって、ネイと関わった人間はみんな明るくなった。面白い考え方や行動は、みんなの心を動かしている。

みんな、お前のことを想っているよ。」

…救われた気がした。

みんなの笑顔が浮かぶ。それはどれも優しくて、温かかった。

睡眠と言うまどろみの中に身を投じる前に見た最後の映像は、クーンさんの笑顔。それから――

「――…よい夢を。」

温かい言葉だった。

閑話？（前書き）

クーンさんｓｉｄｅです。

閑話？

『お疲れ様でした。』

書類を届けて戻って来ると、ネイがお茶を用意して待っていた。

「ああ、今日は助かった。」

今日はいろいろと視線が刺さる。廊下を歩くたびに好奇の視線が自分に降り注がれていることが分かった。

普段から、その存在故に見られる事も多かったが、こうもあからさまだと疲れる。

俺は椅子に身体を放り出した。

『…ごめんなさい。』

小さく謝る声。その表情は、自分を責めているものだ。

「謝るな。ネイは俺が言えない事を言ってくれたんだ。嬉しいよ。」

それが俺の正直な気持ちだった。

この国の役人は働かない。しかし、力だけはある。だからこそ、俺も宰相殿も黙って、従っているフリをしていた。

面倒なことから目を背け、状況を悪化させたのは己の身から出た錆。ネイが言ったことは当に正論だった。

正直なところを述べた俺だったが、ネイの表情は浮かない。かなり自分のしたことを省みているようだ。

「ネイ？どうしたんだ？」

辛そうな表情を見ていることなど、出来なかった。手をさしのばし、少し腫れてしまっている頬に触れる。触れた瞬間にピクッと動いたが、後はされるがままになっていた。

この白く、綺麗な肌に傷をつけたヤツが恨めしい。

そのまま何度か手を往復させると、ネイの表情はますます燻っていた。

「そんな顔するな。ネイのその表情を見るのは辛いんだ。」

…一瞬、泣くかと思った。

そう思ったら、自分を律していることなどできない。細いその腕を引き、自分の腕にすっぽりと収める。体温を感じて、漸くネイがそこに在ることが確認でき、一安心した。

「泣きそうで悔しそうで、辛そうな、そんな顔見たくないんだ。」

何を言っているんだ、とすぐに思い返す。俺らしくもない、と。

だが、俺に包まれている少女は何も言わない。

しばらくして、口を開くと。

――大丈夫、私笑えます。そう言った。

笑えます、ということは、無理に笑うということだろう？

本当は笑いたくもないのだろう？

今、彼女がどんな思いでどんな表情をしているのかが気になって、再度抵抗を見せた時には、簡単に腕を解いてやる。でも、そこに居た少女は今にも消えてしまいそうな笑顔を浮かべていた。

「悪いが、俺には大丈夫そうには見えないな。」

『大丈夫。』

そう言われた時には、突き放されたような気がした。食事を用意しに行くと言って飛び出したネイが、一生手の届かない所へ行ってしまう気がして手を伸ばしてみたが、当然のことながら届きはしなかった。

食事を済ませ、神官服を身に纏ったネイを神殿へと誘う。その姿は非常に儚げで、神聖だと思った。

おそらくネイこそが＜最後の乙女＞だ。

でも、それを確信させたのは。

『…綺麗。でも、怖い。』

その言葉だった。自然と零れ落ちた言葉は、本心を反映させている。

『ここで感じるのは神聖さ。それ故の畏怖。

でも、今までで一番心地良い場所。』

雷に打たれた様な思いがした。

ネイは＜最後の乙女＞に違いない。こんなにもこの場所が似合い、俺の目には少しばかり眩しく映る。

それは俺だけの思考に留まらず、レークが口にした言葉がまさに同じだった。

そう長話もしていられない。行動に移させたのは、レークだった。

戸惑うように一歩ずつ、鏡盆へと近づいて行く。振り返ったときのネイの不安そうな顔を、俺はただまっすぐに見つめる。それしかできなかった。

ネイが触れた瞬間、鏡盆が光を放つ。後ろから見ていると、ネイがこの世界に突然湧いて現れたように、どこかへ行ってしまうのではないかと言う不安に駆られた。

しかし、これは神聖な儀式に他ならない。私情によって邪魔立てをすることは許されなかった。

『“ジュノワール”』

小さく呟かれた言葉は、名を呼ぶことが許されていない、誰もが知っている神の名だった。

光が一層強くなり、ああ、彼女が＜最後の乙女＞だったかと、腑に落ちた。

しかし驚いたことには。

『あんた、ホント余計な事に巻き込んでくれちゃって！これからの生活、どうしてくれんの？！』

黙っていたかと思えば、急に声を荒げる。誰かと、対話しているようだった。

『いらん！』

怒気を含んだ声は、誰かを糾弾している。俺が見える景色には、全く変化などなかった。

「とりあえず、事実を知りたい。ネイは＜最後の乙女＞で間違いないんだな？」

「やっぱり＜最後の乙女＞でしたか！神がそこにおられるのですね！」

俺とレークの質問は、ほぼ同時だった。今まではネイが独り言を言っていたようなもの。だからこそ、口を挟んだのだが、どうやらイライラしていたらしい。

『全員黙れ！一度に喋るなー！』

怒りだしてしまった。俺には自分の言葉ともう一人の男の言葉しか聞こえなかったが、ネイに見えているらしい人物も同じ時に口を開いたらしい。

「「「・・・・・・」」」

静けさが広がり、ネイは満足して三人の顔を交互に見る。

『まずは確認します。存在はともかく、二人はジュノの声が聞こえますか？』

ジュノ…？ジア教の神、ジュノワールのことだろうか？確か、先程名を呼んでいたようだが。

『黙ってって言ったでしょう？』

笑顔で起こるその様は威圧的で、そこに在られる者に怒りを向けていることがよく分かった。しばらくそうやって話していると、嘆

息を溢してから我々に手招きをしてくる。

『二人とも、こちらに来ていただけますか？』

一通り守人の説明を受け、俺は自らの意志でそれを受けようと決めた。ネイの傍に居られる。だからこその選択だ。

『レーク・ビギンズ、これより貴方に神の加護を授け、＜最後の乙女＞の証人として守人の役を授けます。

受け取っていただけますか？』

鏡盆の前で行われるそれは、厳かな空気を纏っていた。しかし、ネイは自分の言動が恥ずかしいのか、顔を真っ赤にさせている。

「はい、貴女に忠誠を。」

レークが膝間づいて、ネイの手の甲にキスを落とす。それに少々いらっとしたのは、気のせいではないだろう。

『クーン・リッキンデル・デューク、これより貴方に神の加護を授け、＜最後の乙女＞の証人として守人の役を授けます。

受け取っていただけますか？』

「…貴女に忠誠を。」

自分よりも先に、レークが同じことをしたのかと思うと頭に来る。だから、少し長く唇を落とした。

閑話？－その２－

“お前たちに、わが名を呼ぶことを許そう”

またもや光が視界を覆い、声が響いた。

その美しさ。聞き惚れてしまうほどだった。だが、見上げると少女が涙を流している。すぐさま立ち上がり、その涙を拭っていた。

「やっだー、僕の前で僕の乙女とイチャイチャしないでよーう。」

間の抜けた喋り声。微かにさっきの声だと判断できたが、どうも気が抜けてしまう。

「神、さま…このお方が…」

レークは熱い視線を送っているが、俺はどうも気が抜けてしまった。

『私がいつあんたの乙女になったって言うの。』

神に向かっての堂々とした物言い。流石ネイだ。

「この方が、神…」

見目麗しいその御人は、木で作られた馬のようなものに乗っていた。

『ジュノ、とりあえず木馬で遊ぶの止めなよ。もっとほら、神様っぽい感じで光を背負ってみるとかした方が、見栄えがいいよ?』

相変わらずの口調。二人の会話と、レークの態度に温度差を感じ、自分はどう言う態度を取るべきか計ろうとしていた。

「やあやあ、守人に選ばれたお二人さん。僕は神様。名をジュノワールと言う。」

そこから俺たち二人が乙女の証人である守人であること、ネイはその知識を使ってこの世界を変えるために来たことが告げられた。

その際、神にはいっさいの緊張感の欠片さえもが見受けられなかった。

経緯が語られる毎にネイの顔は難しくなっている。しかし、神は変わらず呑気なものだった。

…ある一言が語られるまでは。

「思い出してごらん。」

神にそう言われた次の瞬間、ネイは切り裂いたような悲鳴を上げた。

『きゃあああああああ！』

頭を抱え、その場に崩れ落ちる。咄嗟に手を差し伸べ、抱きしめる。その小さな身体は小刻みに震え、涙がとめどなく溢れ出していた。

ネイにはもう一人の自分の記憶があるというのが神の話だ。しかし、それが俺にはよく理解できなかった。

ネイはネイに変わりないだろう？

あまりの混乱に、話は明日に回すと言い、明日になれば落ち着くので早々に眠らせるように言われた。

ネイを抱えて家まで連れていく。その間ずっと、俺に縋りつくようにしていたネイは、俺が部屋を出ていこうとするのを止めるほど一人になるのを怖がっていた。

それでも、やらねばならないことがある。一人残して行くのは気が引けたが、自室へと戻る。早くに着替えると、伯父の部屋へと急いだ。

「珍しいな、お前が来るとは。」

少し面白そうに、目を弧の形に細めていた。どうも腹が立つ。

しかし、だからと言って文句を言うつもりはない。早く、ネイの元へ行かなければならないのだから。

いつも意志の強い瞳を持ち、真っ直ぐに俺を見つめる。その瞳が、涙を溢れさせるその様は俺の心を乱す。

早く、傍へ、と。

「明日のことを頼みに来ました。」

「明日…？」

何事かと不思議そうな表情。そうか、と思い、事情を説明した。

「ネイはやはり＜最後の乙女＞であったか。それで、ネイの様子はどうなんだ？」

これは内面を話すことになってしまう。それは、ネイが嫌がるはずだ。

「何やら混乱しているようで、今は傍に居てやることしか出来そうにありません。ですから、明日の朝から昼までの半休をいただきたい。

一人にすることなど出来かねますから、どうかお許し願えますか？」

これが俺の我儘だということは分かっている。仕事を投げてまでやることではないと、理解できている。

それでも、俺が傍に居てやりたいと思うんだ。

「…いい顔をしているな。お前にしちゃ、いい傾向だよ。」

何やらニヤニヤとした顔で見られている。こういう空気があまり好きではない。

何がいい傾向なんだ…？

理解に苦しむが、一応了承を得た。俺は急いでネイの部屋へと向かう。普段なら何て事の無い距離だが、少し遠く感じた。

いつの間にか駆けだしていたが、廊下で女中のダルシアに呼び止められる。

「ネイさまが、クーンさまをお持ちしております。何があったかは分かりませんが、片時も離れずにお傍に居てあげて下さいませ。」

それを聞いて、分かったと一言だけ残し、また駆けだす。

扉を開いてすぐ傍まで行くと、夜着に着替えたネイが足を抱えて小さくなって泣いていた。

声をかけると。

『…うっ、ん……』

我慢するように嗚咽を漏らし、俺に縋りつくように抱きついてきた。

それから、どれくらいの時間が経っただろうか。

大声を上げて泣きはじめたネイは、次第に声が掠れていき、今は鼻を啜るくらいになって落ち着き始めていた。

「頭の中を整理しよう。何があったのか、聞きたい。」

そう切り出すと、素直に話し出す。その内容は、俺よりも、そして以前ネイが話してくれたものよりも、遥かに悲惨だった。

両親の離婚、育児放棄、祖父母の死、父の暴言、そして自らの死。

ネイはそれを他人事のようではあったが、真実味を帯びて話した。神が言っていたことが如実に表されている。

今のネイは、前のネイにもう一人のネイが重なっているようだった。

「二人分の自分の記憶が、混同しているのだな。」

小さく頷いて、また一筋涙を流した。それを、不謹慎にも綺麗だと思った。

ネイはかなりの時間、泣いていた。夜ももう更けていて大分遅い時間だろう。

「…泣き疲れているんじゃないのか？」

そう言って、俺の胸に体重を預けてしがみついている手を何とか解き、持ち上げてベッドの正しい位置までネイを運ぶ。

慣れたように持ちあげられている間、ネイは俺の首へと腕を回した。

『独りに、しないで…』

小さな呟きは、ネイの本心なのだろうか。今までとまるで違うネイは、小さな子供のようだった。…俺から離れようとしない。

これは、常識的に考えても、よくない事だ。夫婦でも、婚約をしている訳でもない。なのに一つのベッドに入って共に寝るなど…

確かに、女を抱いた時も過去を振り返れば何度かありはするが…自らどうであれ好意を持っている女と共になど、今まであり得たことがなかった。しかし、目を合わせてくれない少女は、小さく震えている。

…この状態で放っておけるわけがあるか。

一瞬戸惑いはしたが、ネイの隣へと滑り込み、それから震える小さな身体を抱きしめ、いつもと同じように頭を撫でた。

「…ネイ。少しだけ、お前の考えに意見したい。いいか?」

先の語りに、どうしても言いたいことがあった。ネイは自己評価が低過ぎる。己の存在の大きさなど、きっと気付いていないのだろう。

「もう一人のネイは、お前が死んでも誰も泣かないと、誰も心を動かされることはないと言ったな。だけど、違う。」

跳ねあげるかのように顔を上げ、漸く目を合わせてくれた。その目は大きく見開かれていたが、少し腫れており、赤くなっている。それが小動物を連想させた上に、己の腕の中に収まっているという事実を、その近さ故に気付かされた。

「今は、俺やレーク、城に居る人だって、ネイと関わった人間はみんな明るくなった。面白い考え方や行動は、みんなの心を動かしている。

みんな、お前のことを想っているよ。」

思った事を伝えた後のネイは、少し安堵したように微笑んだ。そして、泣き疲れたのか、瞼が重たくなっているようだ。

目を完全に閉じ切る前。

「――…よい夢を。」

目を合わせてそう言うと、もう一度微笑んで、眠りへと向かった。

それから一刻ほど俺はこれからの出方を考えながら、ネイの頭を撫でていた。

なぜなら。

「――…この状況で寝られる訳がないだろう。」

この時、己の気持ちと欲望に気付いた。

――俺は、ネイを…好き、ではなく、愛している。

そう自覚すると、ますますこの状況が厄介になる。しかし、どこか心地よさを感じていた。

己の腕の中で胸に縋りついているこの少女が、自分に気を許していると思えるからだ。

ああ、そうか。俺は随分と前からネイを想っていたのだな。

自覚してしまえば、後はもう募るばかりの情。今までにない感情を思い知った。

自分の生活に、昔から常に追われている。城に住んでいる時には、毎日大人から嫌がらせや暴言を今よりも遥かに多く受けていた。誰が助けてくれる訳でもない。ひたすらに耐えた。

それから、身体の弱い兄よりも健康な俺が王に向いていると進言するものがいて、俺の意志など関係なく、派閥が真っ二つに割れた。そして、暗殺未遂に何度も遭った。

兄を慕い、力になることを元々望んでいた俺は、身の危険を感じて早々に王位継承権を放棄して、遠縁の叔父に当たる宰相殿に引き取られ、騎士団に入団。何とか今の地位に就いた。

毎日の攻防の中、異世界から来たという少女の笑顔に惹かれ、癒

されていた。他のもの、特に他の男に笑顔が向けられると、少し、いやかなり面白くないという事もあった。

それが今ならすべて分かる。腑に落ちた。

俺が神から授かった守人と言う役目は、もしかしたらちょうど良かったのかもしれないな。

俺はネイを全ての柵から救い出し、助けたい。そして、ただ傍に居たいんだ。

小さく微笑み、自分の胸にくっついて離れない少女を一度ギュッと強く抱きしめた。少し苦しそうな声を上げる。

それに今度は苦笑を溢して力を弱めると、寝ている事をいいことに額に唇を落とした。

「俺は何に換えても、ネイを守って見せる。」

熱

朝起きると、クーンさんが私の頭を撫でていた。

ぼーっとする頭で考える。私、寝坊しちゃった？

てゆーか、頭が変。熱が出た時みたいにくらくらして、思考が上手く働いてくれない。

「目が、覚めたか？」

囁くような声。なのに、はっきりと耳に届く。

あれ？前にもこんなことがあった気がするんだけど…？

そう自覚した途端、顔に熱が集まってきた。

ななな、何で隣にクーンさんが寝てるのっ？！てゆーか、添い寝、って！

どうしていいか分からない私は、狼狽えることしかできない。クーンさんはなおも私の頭を撫でていた。

朝から刺激が強過ぎるほどいいお顔ですよね、まったく。女の子の私にその麗しさ、少し分けて下さいな。なんて、文句を言ってみても仕方ないだろうね。

「顔が赤いな。熱があるかもしれない。」

おでこに触れ、そして勢いよく起き上がる。私は吃驚して見上げた。

「・・・熱がある。人を呼んでこよう。」

そう言ったのに、クーンさんは動こうとしない。見つめていると。

「その・・・手を、離してもらえると有り難いんだが・・・」

珍しく口籠っている。だが、理解ができない。

手を・・・？

不思議に思い、自分の右腕に視線を沿わせていくと、その手がクーンさんの衣服を掴んで、行く手を阻んでいた。

『ご、ごめんなさいっ！』

慌てて手を離す。頭を一撫でして出ていったクーンさんを見送り、ふと気づいた。

昨日、一人にしないで、って言ったような・・・？クーンさんが抱き締めてくれてただけじゃなくて、自分がくっついて離れなかったんじゃ・・・

顔に熱が集まり、布団を頭まで被り、丸くなる。本当に熱があるのかどうかがよくわからなかった。恥かしくなって、顔に熱が集まってたから。

しばらくしてバタバタと人が集まってきて、汗をかいた服を着替えさせられたり、ご飯を食べさせられて薬を与えられたりと、甲斐甲斐しく世話をされた。

何故かすぐにお医者さんも来たし。

でも、一言。そんなに大病患ったみたいに扱わないで下さい。

単なる熱に違いない。それなのに、未だ心配して私の傍に立ち、おでこに乗せたタオルが少し温かくなるだけで取り替える。

あんまりにも過剰な反応だった。

『あの、もう大丈夫ですから。』

何度もそう言って、メイドさんたちにようやく出て行ってもらうことができた。そして、嘆息を漏らす。一人の方が、落ち着くから。

昔から、熱を出した時は一人だった。病院へ行くのも、薬を用意したり、お粥を用意するのも自分だった。

人に心配されるのって、あんまり得意じゃないんだよなぁ。

心配されるのに得意、不得意は関係ないかもしれないけど、やっぱり慣れていないものだからどうも意識的に気後れしてしまう。

一人で静かにして耐えている方が、断然迷惑もかけないし楽だ。

そもそも、病気の時に心配されたのっていつ振りだろう。最近までは単に迷惑がられてた。

日常なら迷惑をかけたり掛けられたりと、お互い様だけど、病気の時は一方的に迷惑をかけるだけ。だから、心苦しいの。

「ネイ、大丈夫か？」

ノックをして、すぐに扉が開いた。やって来たのはもちろんクーンさんだ。表情は心配、そのもの。

…やっぱり、慣れないな。

『大丈夫です。薬も飲みましたし、すぐに下がりますよ。』

それに、大した高さの熱でもない。別に少しふらふらするくらいだし、普通に生活してても何ら支障はないと思う。

「でも、かなり熱が高いと医者が言っていた。今日は神殿へ出向けなさそうだな。」

あ、そっか。詳しいことは明日、とかジュノが言ってたっけ。

『大丈夫。行きますよ。』

あのアホのことだ。行かなかったら罵られるに違いない。病気とか、カンケー無かったもんなぁ、前に砂漠で倒れた時は。それに、早く多くを知りたいっていう気持ちが強い。

何で言語が伝わっているのか、とか。私が伝えるべき知識は何か、とか。

こっちへ来て一月半程経ってたくさんの人にお世話になったから、その人たちに何か新しい知識を教えることで役に立つのなら、喜んでそうしたかった。だから、私の出方を早く指示して欲しいの。

「その身体で…？」

少し苦い表情をしている。それでもイケメンはイケメンだ。

その表情も絵になるなぁ。とか、思わず感心しちゃった。窓から差す光の当たり具合とかもちょうどいいし、これをブロマイドにしたら、高額で売れそう。

って、そんなこと考えてる場合じゃないよ。

自分のアホな思考を早々に断ち切った。金儲け万歳だけど、今はカンケーないからね！

『この熱、単なる知恵熱ですよ。』

クーンさんは不思議そうに首を傾げ、射抜くような目で私を見ていた。瞳の奥には心配が滲みでている。安心を与えるために小さく微笑んで、自分の中で分かっている事を話すことにした。

『もう一人の私の記憶が整理している最中なんです。それに、何となくだけど、今までの私と違うような気がします。』

自分の中に小さな光が見える。それが段々大きくなっていくイメージがさっきから脳裏を過っていた。

「俺にはいつものネイに見えるのだが。」

うん、見た目的にはそうだよね。でも、精神的には違うの。なんかこう、自分にもう一人の自分が上書きされたみたい。

それでも自分は自分だから、根本的な事は変わりそうもない。だけど、ちょっと、前よりも暗い考え方が頭を過るようになった。

それがきっと、もう一人の私が存在している証。

『昨日話したもう一人の私が、私の中に居るんです。』

もう一人の私が、自分の中に入って来た。自分に重なっているようにも、別のもののようにも感じる。少し違和感があるけど、嫌悪するほどじゃなかった。

『昨日みたいに、私混乱してないでしょう?』

頷くクーンさんに、昨日は自分のことのように感じてたことが、今は別物に思える事を言うと、腑に落ちた様な顔をしていた。

「昨日はネイらしくないとは思っていたが、今朝は元通りだったな。今は、精神的には落ち着いているのか?」

『はい。両方私だもの。』

これは言い切れること。確かに高2の私は、人生が辛いと感じて自殺しようとした。だけど、やっぱりこの世界に来れたから。ここに居る人たちと交流して、優しさを知って。人を信じても良いって思えるようになって…

そうやって、私たちは成長できるんだと思う。

「それは分かった。しかし、やっぱりその体調で出向くのは難しいと思うのだが。」

クーンさんって過保護？これくらいの熱、大したことじゃないのに。

『なるべく早く、ジュノと話しておきたいんです。』

この国のこと、成り立ち。それを神様から聞けるなんて、すごくラッキーな事だと思うんだよね。貴重な体験だから、いくら相手があのアホ神でも利用してやらなくちゃ。

あれ、と疑問に思うことが一つ。なんで、クーンさんが今ここに居るんだ？

だって、もうとっくにお仕事の時間でしょ。普段ならもう城で書類と睨めっこしている時間だ。

それを聞くと。

「有休を取った。」

と、まっとうな答えが返ってきた。でも、あれだけ時間を惜しんで仕事してる人が、なんでこんなタイミングで休むの？そう考えたら、答えは一つ。

私の、所為。

『…ごめんなさい。』

昨日、泣きじゃくったり、一人にしないでとか言うから。それに、熱なんか出すから。迷惑、かけちゃった。

「迷惑、とか考えてないよな？」

そう考えて当たり前じゃない。だって、迷惑でしょ？

不安になって、クーンさんを見上げる。表情はいつにもまして仏頂面に拍車がかかっていた。

な、なんか怖い…

見下ろされている所為か、醸し出している空気の所為か。意識的にそうしてるのかは定かじゃないけど、今までにないくらいの無表情さだった。

『ごめんなさい…』

さっきから、謝ってばっかり。だけど、それしか言えないんだもん。それに加えて、クーンさんの表情が怖い所為でもある。

「ネイ。迷惑なんてかけて当たり前のものだ。」

一人では生きていけない、クーンさんはそう言った。

確かにその通り。でも、私は一人で生きようと今までずっと心がけてきていたから。その考えを急に正すことなんてできない。思いを素直に口にすると、少しずつでいいと言ってくれた。

「半休だから、午後からは城に行かなければならない。ネイは夕方まで寝ていろ。夜に迎えに来るから。」

それって、二度手間じゃない？私が一緒に行けばいいものを、そんなことでまた迷惑…って、また迷惑って思っちゃった。

それを読み取ったのか、クーンさんは苦笑している。そんなに顔に出てたかなぁ。

「ネイはこの国の重要人物になるだろう。たとえそれが公にならなくても、俺の中では乙女に変わりはない。神に怒られるなど、勘弁だからな。」

そうだね。一応は神様と話すことができるのは私だけだし。あんなのでも、一応は神な訳だし、敵牢に扱うことなんてできないんだよね。

面倒な立場だ。

「俺が戻るまで、いい子に寝ていろ？」

いいな、と念押しされてしまえば、頷くことしかできない。私の頭を撫でたその時のクーンさんは、極上の表情で私を見ていた。

やっぱりイケメンは目に入れ過ぎちゃいけない！

動悸が激しくなった私は、ギュッと目を瞑る。しばらくするとドアの開閉音が聞こえ、部屋の中は妙に静けさが際立っていた。

言われた通り、私はクーンさんが戻るまで寝ることにする。目を瞑ったままいろいろな事を考えてるうちに、眠っていたみたい。何かに触れられる感覚で意識が浮上した。

目を開けると、そこには。

『クーン、さん?』

ベッドに腰掛けて頭を撫でてくれているその人がいた。その微笑みは優しい。

もう迎えに来てくれたのかな。寝てると時間って妙に早く経ったように感じるよね。

窓の外を眺めてみれば、日はもう傾いていて空は茜色に染まっていた。薬が随分と効いてたみたい。ぐっすりと眠れた。

「そろそろ神殿へ向かおう。体調はどうだ?」

『少しだけ身体がだるくて、ぼーっとします。だけど、朝よりは全然マシ。』

身体の状態が少し良くなったことで、朝の体調の悪さが分かった。随分とキテたみたい。今思うと相当辛かったんだなぁ。

「ならいいが、どうする?今日は止めておくか?」

また心配してくれているみたいだったけど早く自分がここに来た意味を知りたい私は、大丈夫の一言で何とか了解を得ることができた。ただ、あまりに女中さんが心配して、神官服の下にも上にもたくさんの防寒をされたのには少し驚いた。

そんなに酷くないのになぁ。

そう思っても、あんな顔して世話されたら、されるがままになるのは仕方ない事だと思う。

着替えの手伝いを断ろうとした時、泣きそうな顔、されましたよ。こっちの方が悪い事を言ってる気分になってｏｋをしたけど、こんなに着せられるんなら断ればよかった。

嘆息を一つ零し、クーンさんが待つ馬車へと向かう。それに乗り込むと、すぐさま神殿へと向かった。

いつもと違う場所から入ったのか、降りた時の景色はいつもの所とは違うものだった。しかし、同じものも一つ。いや、一人。

「大丈夫ですか？」

いささか心配そうにしているレークさんがそこに居た。どうやら待っていたらしい。その顔も心配そうだった。でも、そろそろその表情飽きてきたぞ！

『みなさんが過保護過ぎるだけで、それほど大したことではありませんよ。』

ポロっと口にしていた。それを聞いたクーンさんは渋い顔をし、レークさんは笑う。ホント、二人って対照的だよね。

話をしながら、神殿へと向かう。てゆーか、このお城広すぎ。こっちから入ると、道筋なんか全然分かんない。遅れないように二人について行かないととんでもないことになりそうだ。

迷路のような廊下を進む二人は、きっと記憶力が半端ないに違いない。

すれ違う人に見られたりしたけど、極力戸惑うような表情は出さないようにして進んだ。挙動不審だと逆に怪しまれるからね。何事もない様に澄ました顔してるのがイチバン。

さっきの場所からの方が中央の神殿に出やすいのか、早くに着いたけど、やっぱり道筋は覚えられなかった。

一歩神殿に足を踏み入れると、そこの空気は澄んでいて、昨日と同じように神聖だと思った、のに。

「やあ、待ってたよー。」

気が抜けたのは仕方がない。このアホ神がまたふざけた格好抜かしてるから！

今日はどうして浮き輪をしてるんですか！この寒いのに時期外れだって話ですよ。てゆーか、いちいち使い方分かってないよね。

分かんないんだったら着けなきゃいいのに。

脱力した私を見て、二人は私の肩に触れてきた。どうやら神の姿を見ようとしたらしい。

どうかこんなのを見て、呆れないであげて。って、なんで私がフォローしなくちゃならないんだって思って、口に出すのは止めておいた。

「あれ？具合が悪いのかい？だったら休んでいなきゃダメじゃないか。」

『来なかったら文句言うくせに、そんな心配そうな顔するの止めて。』

至極真面目に言ったのに、分かっているじゃないか、と言ってジュノはへにゃっとした笑顔を浮かべた。

そう言うところが頭に来るんじゃ！

文句を言ってやろうと思ったけど、頭に血が上った所為かクラっとしてしまった。そこを支えてくれたのは、毎度お世話になっているクーンさんだ。

「やっだー。また僕の乙女とイチャイチャして！

…ところで、君、名前なんだっけ？」

死ぬほど失礼！大体人に名前を呼ぶことを許そうとか言っといて、人の名前覚えないなんて横暴過ぎる。そのうち信頼失くすね。…って、信頼とか神様にカンケー無いのかな？

ま、そこは置いといて、早く話を進めよう。なんとなく、背筋に寒気が走った気がした。今日は冷えるし、早く帰った方がいいのかもしれない。

『ジュノ、話の続き聞かせてよ。

で、その前に私の名前はネイ。こっちの神官服着てる人がレークさんで、私を支えてくれてる人がクーンさん。お世話になってるんだから、ちゃんと覚えてよ。』

文句タラタラですみませんね。でも、折角名前があるのに呼ばれないなんて悲し過ぎる。その空しさを、私は知ってるから注意した

の。

向こうに居る時はずっと、“お前”とか“おい”とか“ちょっと”って言われてた。

私に名前をくれた人ですらそう呼んでたの。それって、悲しい事でしょう？

…って、また暗い思考に……

もう一人の私に引っ張られてるなぁ。

頭の中ではそう分かっていても、もう一人の私に思考が引っ張られるのは止められなかった。

「分かったよ、ネイ。それに、レークは元より知っているし、王族の血を引いているクーンを知らない訳ないだろう。」

あ、それもそうだね。

納得して頷いていると、満足そうにジュノも頷いていた。

てゆーか、分かってるんだったら最初からそういう態度とって欲しいもんだよ。

呆れながら見ていると、レークさんから注意を受ける。神さまなんだからもっと敬えって。

「確かにねー。僕も曲がりなりにも神様だから、やっぱり敬ってもらわないと。信用問題って、大切だよねぇ。」

その口がそれを言うか。本当に、いつかシメてやる！こんなジュノのどこを敬えと？！

何よりそのへにゃっとした笑顔がむかつく。これほどまでにぴったりな表現の仕方は思いつかない。

「まぁ、そう怒らないでよ。それより、君の体調が悪くなるのはわかりきってたことなんだよ？」

…ちょっと待て！今聞こえたのは空耳？

確認してみたけど、空耳じゃなかった。ここまでくると喧嘩を売ってるとしか思えない。

『聞いてないんだけど？』

「だって言ってないもん。」

コロス！なにが“言ってないもん”だ。大人の男が使っても可愛くも何ともないからね！

怒りでいっぱいのまま飛びかかろうとしたけど、二人に止められてしまった。

女一人対男二人では力の差は歴然。糸も簡単に止められちゃって少し残念だった。

「ネイ、少し我慢しろ。体調はまだ優れないんだろう？」

優れてたら殴りかかってもいいかって聞いたら、やっぱりダメ、だって。残念。

「話が進まないなぁ。もう口開いてもいいかい？」

だ・れ・の、せいだっつーの！

いや、ここで怒ったらまた進まない。一つ大人になって、私はぐっと我慢した。

「悪いけど、今日の話の後で君はまた体調不良に襲われることになる。心して聞いてくれ。」

前提にそれって、ちょっと構えちゃうよね。それでも、嫌という雰囲気を出せない私は、黙ったまま一度だけ縦に頷いた。

「君はこの世界に新しい技術を伝えるためにやって来た。そして、神（僕）との対話を人に伝えるという意味もまた持っている。」

ここまではいいね、と言われ、また一度頷く。口を挟むとどうもケンカ腰になっちゃうからっていう理由を込めて私は頷くだけに留まっていた。最善の策でしょ？

「そして、君は不安に思っているかもしれないが、どれ程の技術を伝えることができるか、という問題がある。それに関しては問題は全くないという事を伝えておこう。」

ジュノの言うことはさっぱり分からない。だって、単なる学生だった私がそれほど多くの知識を持っている訳ないでしょ。そう思っ

ていたら、ジュノはどんどん説明を続けていた。

「君には向こうの世界の知識をあまりなく授けた。そうだろう？」

昨日のように問いかけの後、私はめまいを感じた。そして、また金切り声を上げて叫ぶ。昨日は記憶のせいだったけど、今日は頭が割れそうなほどの頭痛に襲われたからだった。

昨日と同じくクーンさんに支えられはしていたが、床にへたり込む。頭を抱えたまま動けそうになかった。

「あー…やっぱり知識が暴走したか。」

頭痛がようやく治まってきた頃、ジュノは呟くようにそう零した。

「知識の、暴走？」

怪訝そうな声。表情は見えないけど、心配そうにしているクーンさんの声は固かった。

「ああ。彼女はまだ若いだろう？学生は基本的な事しか学んでいない。だからこそ、様々な専門知識を詰め込んだのだよ。それに、力も。

どうだい、ネイ。具合は最悪だけど、状況ははっきりと分かるだろう？」

まったく持ってその通りだった。私の脳内にはいろんな知識が溢れている。これならどんなことにも立ち向かっていけそうなほどの情報量だ。

だけど、弊害が最悪。

気持ち悪いし、頭痛いし、ふらふらするし。この分だと、熱が上がったに違いない。

「ね、体調が悪くなるって言ったろう？」

ね、じゃないから！

昨日の比じゃないほどの体調の悪さは、もう立ち上がれないほどのもので、意識を保つのにも必死になるほどだった。

クーンさんに支えられていないと、倒れちゃいそう。座っているのに、身体は楽じゃなかった。

「今なら君にたくさんのことが聞けそうだけど、知識の多さで混乱しているはずだからここは譲ろう。

僕に聞きたいことはあるかい？」

もちろん。山ほどありますよ。

『なんで、個々の言語が私には理解できるの？』

文字も、言葉も分かる。それこそが一番の謎だった。私が貰ったのは、地球でのあらゆる知識。人間の脳には多すぎるほどのもの。

だけど、言葉は違う。こっちのものだもん。

「ああ、それは面倒だったから、言語全般に知識を与えたんだ。」

そう言われてみれば、英語とかフランス語とかも分かるような…？

てゆーか、こんな知識いらないよね。脳内の容量はこの所為で大きいのかもしれないし。

「今の君なら、どんな世界を旅しても言語のおかげでだまされることはないだろうね。」

それはどうも。だけど、あんたの所為で私はここから出ることすらできてないんだけどね。

厭味ったらしくそう言うと、緩い笑顔でどういたしまして、と返された。褒めてないし…ま、ここでいくら文句を言おうとも、もう無駄だって分かってる。だからこそ、違う話題に変えることにした。

『魔法、なんで使えるの？私、よく分からないんだけど、今なら何でもできる気がする。』

「そりゃあ、もう、これを読んだからだよ！」

ジュノがそう言って指差したのは、ケータイ。ってか、なんでケータイ駆使してんのに、遊び道具全般の知識は疎いの？

それより、何で神様がケータイ持ってんの？ツッコミどころが万歳過ぎる。だけど、面倒だから敢えてしないのは、面倒だと言えるからだ。

「君たちの文明はすごい発達力だね。読んだケータイ小説に、異世

界トリップものがあってね。それを参考にしたんだよー。」

何て適当な神様なんだ。それでいいのか、ジュノよ…

少し心配になった。

「こういうものはトリップした者がチートってのが定番なんだろう？大丈夫、死亡フラグは立たないようにサポートするから！」

それ、言いたかっただけですよね？！異世界の神様が、チートとかフラグとか。それでいいんですかね。

物を言う気も失せた。ってのは、ジュノのヘラッとした笑顔に脱力したのと、体調の悪さが最高潮に達した所為だとも言える。

「とりあえず、言いたかったことは伝えられたし、また鏡盆祭の時に会おう。

その時にネイにはレークのサポートをしてもらわなければならない。いいね？」

そう言って、勝手に消えやがった。やっぱり言いたかっただけかよ…

私は意識を手放した。

神様曰く、私はチートになったらしい…

何て厄介な事をしてくれたのさ。私は平凡がいいのに。

夜更け

目が覚めた時、そこはクーンさんのお屋敷の部屋だった。ジュノが消えた後、すぐに気を失った私は、どうやらここに運ばれたらしい。

心配そうにしているクーンさんがすぐに目に入った。

手が温かい…

そう思って視線を向けると、クーンさんの大きな手が私の手を包んでくれていた。

「…ネイ、目が覚めたのか。」

掠れた声。辺りは暗いし、今は夜中らしい。

『おはよう、ございます…?』

夜だけど、おはようって、合ってるのかな?起きたらおはよう、だから合ってるよね。

呑気にそんな事を考えていると、クーンさんは私の手を今度は両手で掴み、自分の額に当てている。

何事かと思っていると、大きく息を吸い、同じように大きく吐き出した。

小さな声で名前を呼んでみると、また一つ嘆息する。吃驚しながらも、私はされるがままにしていた。

私の手を握る手は力を増して、少し痛い。その行動は私の存在をまるで確認しているようにも思えるものだった。

『クーン、さん…？』

もう一度呼びかけると、今度は目を開けて私を視界に映している。その瞳に映り込む私は、不思議そうな顔をしていた。

「よかった、目を覚まして…」

小さな囁きにも聞こえたそれは、安堵を含んでいた。

私、熱を出しただけでしょ？後はジュノに与えられた知識が大き過ぎて、頭痛を起こしていたくらいなのに。クーンさんって心配症なのかな。

そう呑気に考えていた私を驚かせたのは、クーンさんが教えてくれた真実だった。

なんと、私はあれから三日目を覚まさなかったらしい。

そりゃ、心配するよねぇ。

自分のことなのにどこかそう他人事のように思い、ぼーっとする。クーンさんはやっぱり心配そうに私の顔を覗き込んで、名前を呼ん

でくれた。

『もう大丈夫ですよ。』

安心してもらうために言った言葉だったけど、やっぱりクーンさんは心配そうな顔をしていた。

それにしても三日も寝てたなんて。我ながらすごいな。

ダルイ身体、掠れた声。ずっと寝ていたことがよく反映されてる。水を貰って喉を潤すと、私はまた横になった。

「身体、辛いか？」

訊ねられたけど、答えかねる。

私より、絶対にクーンさんの方が体調悪そうだったから。むしろ、そっちの方が心配だって。

『クーンさん、食事ちゃんと摂ってましたか？それから睡眠も。』

明らかに寝不足。隈が酷過ぎる。それに、少しだけ頬がこけてるように見える。それでもイケメンは変わってない。そんな不健康さも、どこか儚いような色気を醸し出してて…

って、そんなこと考えてる場合じゃないっての！

目覚めて早々残念な思考の私を叱咤して、今は目の前の人に意識を向ける。そうじゃないと、この人は自分のことになんて気を使わないから。

「…いや。」

何とも言い難そうにそ一言。私に怒られるって、分かってるね？

ふう、と息を吐き出してから、にっこり笑顔で言ってやった。

『私に気をかける前に、自分のことを気にしてください。』

笑顔が怖いって、昔よく言われてたっけ。怒る時って、怒鳴られるのも怖いけど、笑顔でひたすら穏やかに怒られる方が怖いんだよね。いっそのこと怒鳴ってくれた方がマシだって。だからこその、笑顔でお説教だ。

『私のことを心配してくれてたのは分かります。でも、目を覚ました時にクーンさんの体調が最悪だったら、どう思うと思います？

私の所為で、体調を崩したんだって思っちゃうんですよ？』

淡々と。抑揚なく。そしてポイントは笑顔。その笑顔はもちろん口許だけ。目は笑わないのが重要だ。

「すまない…」

小さくなっているクーンさんは、怒られた子供みたいで少し可愛かった。だからって、簡単に許してしまう自分が憎い…きっとまたすぐに自分のことを蔑ろにするだろうからね。

「ネイが目を覚まさない間、気が気ではなかった。仕事をずっとしていれば忘れられるかと思えばできないし、食事を取ればネイの作

ってくれたものの味が恋しくなってまたネイを思い出して。

無理してみたが気になって仕方がなかったんだ。」

…ドキドキしちゃうじゃないですかっ！

射抜かれるような瞳には、熱が籠ってる。私は勘違いしないように目を逸らしたかった。それに、顔は赤くなってるだろう。だけど、真っ直ぐすぎる瞳はそれを許してはくれなかった。

この世界に電気がなくてよかったよ。

ロウソクが4、5本灯されている部屋はかなり薄暗い。顔が赤いのがばれなくて済む。

目を何とか逸らして2、3回小さく深呼吸した私は、心を何とか落ち着かせる。気が治まったきた頃、漸くクーンさんを真正面から見ることができた。

『まだ夜明けは近くないですよね。』

部屋や廊下のもの音はしない。人はもう寝静まっている頃だ。だけど、朝が来るにはまだ早い時間だった。

『私は無事目を覚ましました。もう安心して眠れますよね。』

顔にそろそろ限界だって、書いてあるもん。もう寝てもいい頃だよ。

そういう意味を込めて言った。そうでもしないともう一晩起きて

いるとでも言いかねない。そんな事したら、体調にも仕事にも支障をきたしそうだ。

「でも…」

ホントに心配症なんだねぇ。だけど、でも、は許さない。私の方が心配になるから。

布団をめくり、隣をポンポンと叩く。

『ちゃんと寝て下さい。』

途端にクーンさんの動きが固まる。なんか、変な事言った?

「…それは、隣に、という意味か?」

間違いなくそうなんですけど…変だった?だって、もう一人の私と私が同化して混乱しちゃった時も、一緒に寝たから気にすることないと思うんだけど。

そう思って見てみると、クーンさんはやっぱり動かなかった。

『早く入ってくれないと、布団が冷たくなっちゃいますよ。』

それに、私も寒いし。

外気に身体が触れてぶるっとすると、クーンさんは戸惑いがちに布団に入ってくれた。私は肩までちゃんと掛けたことを確認すると、満足して隣に納まり、目を閉じる。流石に三日も寝ただけあってすぐには眠れなかった。

どれくらいたっただろうか。二人でベッドに納まってそれほど経たない頃に、急に引き寄せられる手に驚き目を開けた。

横から回された腕は、寝ているとは思えないほどの力で私をその腕の中に納め、寝息をたてている。

やっぱり無理してたんじゃない。

小さく笑って、寝顔を見つめる。いつもよりも幼く見えるクーンさんは、少し可愛かった。

顔に掛かる髪をどけてやり布団をもう一度きちんと引っ張り上げると、私も寝ることに決め、もう一度目をきつく閉じた。

鏡盆祭

『ジュノー、暇だよぉ。』

私はうつ伏せに寝っころがり足をバタつかせ、目の前に居る神に珍しく愚痴っていた。怒ることはあっても、別のことで愚痴るなんて初めて。

だけど、これもジュノが招いたことだった。

今私は、神殿の一番上の部屋に居る。そこは草花でできた緑の絨毯が広がっていて、当たる日差しが綺麗だ。壁とドーム型の天井はステンドグラスのような造りと、透明なガラス造りの綺麗なものだし、最初は楽しんでいたんだけど…

こうもやることがないと、つまんないんだよ。

今日は鏡神祭。ジュノに言われた通り、私はレークさんのお手伝い、基ジュノの暇つぶし相手に任命されて神殿にきていた。

ジュノ曰く、鏡神祭の日は一日中神殿に居なくちゃいけないんだって。それが暇だからって、私を引っ張り出さないで欲しいよね。

「…ネイ?」

ここには見えるところに階段がない。まるで屋根裏部屋に行くみたいにして、床に在る人が一人通れるほど小さな扉を開いて上がってきた。

今そこから顔を出しているのはクーンさん。心配して様子を見に来てくれたようだ。

『クーンさーん！』

思わず飛びつく。やることがなさ過ぎて、テンションがおかしい所為だと思ってください。

「どうした？」

心配そうに微笑んでくれている。上まで上がってきて、扉を閉じると、そこには元の緑の絨毯が広がっていた。

私がいるよりも、クーンさんの方が何倍もこの綺麗な場所に似合う。私はしばらくボーっとその姿を眺めて、目の保養をした。

ジュノでもできるかと思ったんだけど、地球のおもちゃで遊んでる姿があんまりにも情けなかったから、止めて置いたんだよね。

ミニカー使って遊んでるから、私と話してる暇はないんだって。自分で呼び付けたくせにさ。暇で不貞腐れているのはその所為だ。

クーンさんは持ってきたバスケットの中身を広げてくれる。お昼ご飯を持ってきてくれたらしい。

草の上に白くて大きな布を引いて、その上にサンドイッチを出してくれた。エルさんが作ってくれたんだって。

流石料理人。腕上げてるねー。

私がこの間作ったものと見た目がそっくり。味も変わらなければ嬉しいけど。

『エルさんがわざわざ用意してくれるなんて、何て言ってお願いしたんですか？』

サンドイッチ、それから紅茶。籠が随分と大きいと思ったら、温かい紅茶を用意してくれたらしい。

「ネイが鏡神祭の間中レークの使いっパシリになっていると言って、用意してもらったんだ。随分と心配していたぞ。」

いや、エルさんの場合、新しい料理を知りたくてそわそわしてるだけだと思うけど。

一応、心配してくれたって方向で受け取っておきましょう。そして、いただきます。

食べること、これ至福なりー。味もそのまま表現されているサンドイッチは私にとっては、極上の品だった。

「なにそれ、なにそれー。僕も食べる！」

ミニカーを放置して、いつの間にかジュノが近くに来ていた。

『食べるって言ったって…

そもそも、神様って実体なの？食べることは可能なの？』

大きな疑問だよねぇ。だって、神様のイメージって、白い服着てバックに光り背負って、天使が近くに居て微笑んでる…ってだけだから、ご飯とか、そういうのって必要ないと思ってた。

「可能だよ。必要はないけど、娯楽の一種だね。」

そう言って、許可を出す前にもう口に運んでいた。なんて勝手な。

あ、と思い、視線が刺さってくる方へと目を向ける。そこには驚いているクーンさんがいた。

もしかして、サンドイッチが勝手に浮いて、減っていくように見えてるんじゃない？

これはさっさと説明せねば、と思っていたのに。

「ネイ…何でネイに触れていないのに、俺に神が見えるんだ？」

え、見えてたの？てゆーか、理由は私も知らないよ。大体、この神が私にきちんとしたこと話したことなんて無いんだから。

じとーっとした目で睨みつけていると、へにゃっと笑った。

呑気なもんだね。

子供みたいに美味しいと言って食べてるジュノを横目で見やり、クーンさんにも促して自分もお昼を取ることにした。

食べてるジュノに聞いたところ、今日は鏡盆祭だから力が増幅してるんだって。

それに加えてここは神殿。神様が宿る場所。だから、余計に力が増して、普通の人とは違う、守人であるクーンさんにははっきり見えるそうだ。

最後の一個を迷うことなくジュノが食べ、それをクーンさんと私はお茶を飲みながら眺める。

…大きな子供だな。

「ごちそうさまでした！」

手を合わせてそう言った。

だけど、ちょっと疑問。こっちでは食前後の挨拶は無いのに、どうしてジュノがそれを知ってるの？

悩んでいてもしょうがないので、すぐに訊ねる。そうすると、また聞いていなかったことを教えられた。

「君が前に話していただろう？」

確かに、こっちに来てから人に話はしたけど、直接ジュノと会ったのだって一週間前だし、話した覚えがない。

首を傾げていると、このアホはまたもや爆弾を投下した。

「君のことなら姿を現さなくても見えるんだ。もちろん気が向いた時しか干渉しないけど、君のことなら何でも知ってる。

僕の乙女のくせに、クーンと一緒のベッドで寝たこともね。」

何故はじめに言っておかない?!

だって、他の人が知らない生活部分ってもんがあるじゃないですか。そんなとこ見てないよね?

『…お風呂、見た?』

「ああ、君の胸はニホンでならそう小さくもないけど、こっちではやっぱり成長が足りないようだねー。」

〇び太くんか、お前は!そして無性に腹が立つ評価をお前にされたくないっての!

怒りは沸点に達し、今日こそはと思ってジュノに殴りかかろうとする。

と、ここで思わずクーンさんを見てしまった。

普通なら神に対して不敬な事をしちゃいけないとか言って止めるのに、今日はそれをしない。

思わず腑抜けて見てみると、久々にあまりにも深い眉間のしわを目撃した。

『…止めないんですか？』

「裸を見られるなど、女なら怒るべきであろう。それがたとえ神であっても、な。」

目を閉じたまま言い、難しそうな顔をしている。

でも、私はしたり顔。許可、もらっちゃったー！日頃の鬱憤を晴らしてやろうじゃないか！

ジュノはクーン、僕を助けろ、とか言ってたけど、クーンさんは動じていなかった。

完璧に私の味方についてくれたみたい。ここぞとばかりに殴ろうと思った瞬間、違う嫌がらせ、思いついた。

『…ジュノ、そこにあるので遊ばない？ルール、教えてあげる。』

わざと企むような笑みを浮かべながら、カードを指差す。さっきまでの怯えるような表情は消え、ジュノはその話に飛びついた。

「そのために君に来てもらったからね！是非そうしてくれ！」

カッチーン。上から目線のもの言いにイラッときたけど、ここでも敢えて笑顔は崩さない。てゆーか、そのために人をこんなところに呼ぶなんて。余計に仕返ししてやりたくなった。

私はトランプを取り出し、赤と黒に別ける。それからゲームの説明をしてやった。

まずは簡単なものから、そして二人で勝負が付けられるものがいい。そう思って説明したのはスピードのルールだ。

「ふむふむ。なかなか面白そうだね。」

そうやって余裕をかましてればいいさ。私、こう言うカードゲーム得意なんだから。

せーの、の掛け声で始めて、私はどんどんと手持ちのカードを減らしていく。ジュノはあたふたするだけだった。

鏡盆祭 - その2 -

あっという間に勝負がつく。横で興味深そうに見ていたクーンさんも、その速さに驚いていた。

それから何度も勝負を挑まれたけど、私は無敗。これこそが嫌がらせだ。

元々カードは強いし、負けないって分かってたからわざと誘った。我ながら人間がちっちゃいとは思うけど、ジュノには勝てなくてムシャクシャしてもらった。

途中からクーンさんも意図が分かったみたいで、呆れた顔してたけど、そこは構わず続けさせていただきました。

私、器が小さい上に、性格悪いですからね！自負してるだけいいと思ってよ。

私に勝てないとようやく分かったのか、ジュノはカードを放り出して宙に寝転ぶ。

こう言うのを見ると、神様なんだな、って納得するんだよね。普段は欠片もそんな感じがないから、たまにすご技を見ると拍手したくなる。

散らかったカードをまとめて、私はトランプでピラミッドを作り始める。手を動かしたまま、まだそこに居るクーンさんに疑問を投げかけた。

『クーンさんは鏡神祭に参加しないんですか？』

「陛下は参加するように言われるが、他の者たちがそれを許してくれなくてな。

…卑しい血だからと、本来なら神殿へ入ることすら拒否されるんだよ。」

ホントに、単なる疑問ってくらいで聞いたのに、返ってきた答えに固まってしまう。

…私、無神経だ。

『…ごめんなさい。』

顔を合わせられずに、俯く。こうやって失礼な事聞いて謝るの、最近増えてきてる。もうちょっと考えてから喋るようにしないと。

人を言い負かすような時はきちんと練ってから口を開くのに、そうでないとこんなにも簡単に失言してしまう自分が嫌になる。

肩を落としてしゅんとしていると。

「気にするな。」

ぽん、と頭に手が乗せられた。

それは慰めてくれているような温かみがあって優しい。だから、私は一度だけ頷いた。

「そうだよー。てゆーか、そんなこと言ったら市民たちはどうなるんだよーぅ。

ここの国はジア教を主としている。商人や町人、農民だって崇拝してくれているんだ。高貴なものだけに許されていることじゃない。

そもそも、そいつらが貴族だって決めたのは僕じゃないんだ。クーンの血のことを言う前に、己の身は卑しくないのかと聞きたいところさ。」

急にまじめになった喋るから、思わず聞き入っちゃったよ。そんな顔できるんなら、最初からすればいいのに。

あらためて考えると、ジュノって神様っぽくないんだよね。地球のおもちゃとかゲームとか小説とか好きだし、考え方も偏ってる。でも、それを聞いたら、そういうものなんだって返ってきた。

「僕にだって一応は感情があるんだ。君とこうやって会話しているんだから、わかるだろう。

それに、僕はこの地やこの地に住まう者たちを見守ることしかできない。人間関係や病のいざこざを全て改善してやることは元より無理な事だし、手を出すことで人生を狂わせてしまう可能性がある。

だからこそ、神たちは手を出さないという掟に従って、風や水を

操り、大地を見守るだけなんだよ。」

ああ、この人綺麗だな。そう思った。

普段はおちゃらけているのに、芯はしっかりしている。多少、いやかなり頭にくることもあるけど、それでもやっぱり神様なんだって思った。

ぼーっとジュノを眺める。思いがけず見入ってしまったのは、普段とはかなり印象が違うからだと思う。

声をかけようとして、はっと息をのんだ。

ジュノの身体が、黄金に光りはじめたから。

「出番のようだね。」

囁くようにその言葉を残し、急に消えた。だけど、そこには光の名残があって、すごく綺麗だった。

『出番って、何のことだろう…』

取り残された私は独りごちる。一人きりだと思っていたから、後ろから声がして驚いた。最低だけど、見惚れててその存在を忘れてた。

クーンさんは一部始終を傍観してたらしい。口挟んでくれてよかったのにね。

「本当の意味での鏡盆祭が始まった。今頃レークが鏡盆の前に立ち、下に広がる水の表面に町の様子が映し出されているはずだ。神はおそらくそれに引かれたのだろう。」

そっか。いくら民の祭りだって言っても、本人が関わらない訳にはいかないんだろうね。ジュノも神様やっているんだ、と少しだけ吃驚してしまった。

「そろそろ鏡盆祭も終わりに近づいている。今日は夜中まで宴が催されるから、帰りは夜中になってしまうだろう。」

そうなんだ。お祭りはどこの世界でも変わらないんだね。そして、私は相変わらず暇な訳だ。ジュノも消えちゃったし、やることないなぁ。

私はゴロンと仰向けに寝転がる。両手足を広げて大の字になった。

ボーっと上を見上げる。硝子の部分からは青空が見えて、清々しい。ステンドグラスからは光がさしていろんな色がキラキラしている。

…だけど。こんな綺麗なものが見れているのに、自由がない気がした。

「ネイ？」

呆けている所為か、心配そうな声が斜め上から聞こえた。覗き込

んでくるクーンさんは、柔らかい表情を浮かべている。

一番最初のころよりも、雰囲気が優しくなったなぁ。

会ったばかりの時は、無表情か難しい顔してたから、優しい人だと分かってはいたけど、少しだけ怖かったんだよね。

私が得意な事は表情や空気を読み取って人に合わせること。それが出来ないクーンさんは、表情や態度とかじゃなく、自分の嘘が通用しない人だと思って怖かったの。

今もその表面的な態度がクーンさんに対して出来る訳じゃない。だけど、その表情から私のことを考えてくれているのが分かるから。そういう意味で、この柔らかい表情が私は大好きだ。

「なんで、そんな顔をするんだ？」

どんな顔してたんだろ。クーンさんを困らせちゃうような顔かな。

私はジュノを見習ってへにゃっと笑って聞いてみると、泣き笑いだと返ってきた。

『どうしてかは分かりませんけど、今の表情がクーンさんにとってそう思えるのなら、そういう意味の表情なんだと思います。』

私を理解してくれて嬉しい。素直になれている。…心から笑うことができる。だけど、私の心はプラスのものだけじゃない。

いつか裏切られるんじゃないかって怖くなる。私はそうであるの

に、他の人に表面だけで合わせられていたらどうしようって思う。…クーンさんに見限られたらどうしようって思う。嫌われたくないって思うの。

自然な私を受け入れてくれる人たちに、新しいことを伝えて生活を楽にしてあげたい。もっと楽しいことを知って欲しい。だけど、今はただジュノに流されているだけな気がして、自分の意志を見失ってる。

それでいいのか、分からない。

何も言わなくなった私に、クーンさんは一言だけ、そうか、と言って私の隣に同じように寝転がった。

聞かないでくれる、クーンさんの優しさが嬉しい。思考が上手くまとまっていないように、今は上手く答えられないし、上手く誤魔化すことも出来ないだろうから。

不意にふわりと温かい風が吹いた。温かい風が私たちを囲み、へにゃっとした特有の笑顔が見えた。

でも、その風が納まろうとする時、私は意識を手放して、その笑顔の持ち主と対面することはなかった。

対話（前書き）

クーンさんサイドで、短いです

対話

「ネイは寝てしまったのか。」

風がおさまった瞬間に身体を跳ね上げる。隣に寝ているネイの傍に、神が寄り添うように座っていた。

優しげな表情、そして手つき。髪を撫でるのは俺の特権だったのに、それを容易くしている様は少し…妬ける。

睨みつけるような視線にならないように気をつけ、神から目を話すことなく一度だけ頷いた。

鏡盆に引き寄せられた神が消えてから二刻ほど経ち、外はもう暗くなってきている。神殿の明かりはおそらくないだろう。城下の方から騒がしいほどの声が聞こえていた。

鏡神祭の一番の目的である鏡盆による遠視は無事に終了したらしく、後は町で騒ぐだけのようだ。

貴族たちは城の大広間で舞踏会が行われるのが習わしだが、俺は毎年参加はしていない。

一応は王族の血を引いているが、疎まれている。それに加え、今は大貴族の長男ではあるが、立場が悪い。人に嫌われることなど、もう空気のようなものだ。

つい考え事をしてしまい、目の前に居る神に不敬にならないだろうかと見つめてみる。しかし、一向に気にした様子などはなかった。

「今年も、特に目立った問題はないよ。貴族たちがきな臭いが、町の様子は明るい。何かあるとすれば、それはこの城内で起こるだろう。」

意外にも真面目な事を淡々と述べる神に、少し驚いてしまった。ネイが共にいる時は、ふざけているようにしか見えないのに、そうでいないと至極真面目で本当に恐れ多い方だと思う。

「それは、断言できるものなのですか。」

つい聞いてしまった。しかし、一番気になる事だというのが事実だ。

ネイは自分が人目につくのをひどく嫌っている。その魅力に見な惹きつけられてしまっているというのに。

今年何か大きな変動があったと言えば、ネイつまり＜最後の乙女＞の出現だろう。これが場内に激震を走らせるのではないかと言うことが、何よりも気がかりだ。

「いや、断言はできない。単なる予想に過ぎないよ。」

その顔に、笑顔など微塵にも見られなかった。

…笑えるのはネイの前だけか。そう疑問に思う。しかし、その表情の方が神らしいもの見えるのはどうしてだろうか。

ただ視線を向けしかできない俺は、その一言一句を漏らさないようにと耳を澄ます。外の騒ぎが、とりわけくっきりと聞こえる気がした。

「君は、僕の存在をどんなものだと思っている?」

急に疑問を投げかけられ、戸惑ってしまう。だって、この方は国王陛下よりももっと尊い御方なのだから。

それが見て取れたのか、少々呆れた様子で答えを促される。

緊張が一本の糸のように張りつめた中、俺は大きく息を吸ってから話し出した。

「我らが父であり、最も尊い御方です。」

昔からそう教えられてきた。この国の歴史を語るには、無くてはならない人である。その御方が実現しただけでなく、俺にその名を呼ばせることを許してくれたということ自体が、奇跡に等しい。

しかし。

「買いかぶりさ。」

一蹴されてしまった。

「ネイの神に対する考えを聞いただろう。」

以前のことを思い返す。それはネイがこの国にやって来たばかり

のころ、宰相殿と俺とレークが聞いた話だ。

「神はこの世を創造したかもしれないけれど、縋りつける存在ではない、と。」

確かそんなようなことを言っていた気がする。

俺の答えは完全ではなかったのか、少し難しい顔をなさっていた。だが、少し考えているのかと思ったら、すぐに口を開き始めて下さった。

「大分簡略化されているけど、つまりはそう言う事だ。

僕は万能ではない。出来る事は限られていると言っただろう。人の世の中に手を出すことは禁じられているとも。」

初めてお目に掛かったときの言葉が思い返される。あの時は姿に見惚れてしまいあまり考える事が出来なかったが、今考えてみると敬虔な信者が聞いたら失神してしまうようなことを言っていた。

「僕が出来る事はこの世界の風や大地を動かすことと、町の様子を見守ること。そして、それを皆に伝える事だけだ。」

ここまで言われて気付いた。

神はおっしゃられた――断言できない、と。出来る事が限られており、そこに未来を予想することはなかった。

つまりは、予想しかできないという事だ。

考えを巡らせている俺を神が見ていたことなど気がつかなかったが、お前が敏くて助かると言われた時、俺の思考が筒抜けだったということに気がついた。

それを少し恥じて神へと視線を戻すと、またゆっくりとネイの艶やかな黒髪を撫でている。その表情は慈愛に満ちていた。

「今日は仕事もない事だ。しっかりとネイの傍に居るといいさ。」

そう、今日は仕事がない。年に一度の大神祭のために、国民全員が浮足立っていた。それには貴族も含まれる。よって、今日は仕事が回って来ないのだった。

ふわりと温かい風が巻き起こり、神は光を背負って半透明になりつつあった。

「…もう行かれるのですか。」

「ああ。その方がお前にも好都合だろう。」

交互に視線を向けられる。…ネイと俺の顔を面白そうに見ておられた。

なぜ全てがばれているのかと思い、ネイのことはすべて分かると言っていた事を思い出す。近くに居る俺の様子さえうかがっているのか、と信用されていないことが手に取るように分かった。

「僕は気まぐれにしか現れないから、次はいつ会えるか分からない。

ネイによろしく伝えてくれ。」

微笑むその姿は美しく、目を話すことができない。こんなに人を魅了してしまう方が我が国の神であることが、誇らしく思えた瞬間だった。

「これから忙しくなることだろうから、困ったら鏡盆に触れて僕の名を呼ぶように伝えてくれ。」

付け足すように早口にそう言うと、今度こそ透明になって周りの景色と同化するかのようにスッといなくなってしまわれた。

ふー、と大きく嘆息。漸く緊張がとれた気がした。

ネイは気易く話しているが、俺とレークには一生無理だろうと思い、また嘆息を一つ漏らした。

対話（後書き）

この二人の絡みをネイ抜きで書きたかったため、予定にはありませんでしたが書いてしまいました。笑

星空

目が覚めると、辺りはもう暗くなっていた。

いつの間に寝入ったんだろう。まだ完全に目覚めていない頭を働かせようと、しばらくそのままでぼーっとしていた。

この世界に電気は無い。夜もロウソクで明かりをともしている。だから、何もないここは、本当に暗い。

どれほどそうしていただろうか、横たえて居た身体を起こす。辺りを一度見回してみると、そこには誰もいなかった。

どれだけ寝てたんだよ、私…

遠くから人の騒がしい声が聞こえて、祭りの様子も様変わりしているらしい。

この状況、どうするべきか。判断に悩む。

今日はジュノの遊び相手になるためにここに居たはずだ。なのに、当の本人は光って消えた。鏡盆祭はもう終わってるはずなのに、どこに行ったんだか。

少々呆れながらも、この先のことを考える。

さっきクーンさんに今日は深夜まで動けないと言われた。城下はお祭り騒ぎで、城では舞踏会だそうだ。

舞踏会だなんて、物語の中だけだと思っていたから少しだけ興味がある。だけど、厭味な人間たちの心理戦や、自慢話が飛び交っていると聞いて、さもありなんと納得して興味はどこかへ行ってしまった。

やることがないし、まだお祭り騒ぎが耳に入っているということは、夜中じゃない。つまりはまだ暇な訳だ。

クーンさんもいないし、やる事もない。どうしようか迷った挙げ句、私はジュノの言葉を調度思い出した。

私はチートになったらしい。とは言うものの、その力を使ってみた事はなかった。

クーンさんが心配して、ぎりぎりまでベッドから出してくれなかったもんだからね。今日は数日ぶりの外出だ。

莫大な量の知識が頭の中に納まってるのは、感覚的に分かる。てゆーか、その情報処理のために三日も眠ったと言っても過言じゃない。だけど、もう一つの方は、まだ試したことがなかった。

私の世界に無くて、こっちに在る力。

――――魔法。

これまたおとぎ話のような世界観だけど、使えるとなっちゃそうしない訳がない。

少しウキウキしながら身構える。だけど、はて、と一人で首を傾げてしまった。

魔法と言えば、杖や呪文。でも、個々の人たちは単なる言葉で発していた。それは夢も希望もない様子で。状態を見れば確かに不可思議な事が怒っているけれど、何故か壮大さに掛けていた。

ここは不思議な呪文でも作ってみようか…暇すぎる私の思考は残念過ぎた。そう簡単には思いつかない。

まあ、いいか、と諦めて、人差し指を伸ばし目を閉じてイメージしてみる。

光…温かいもの…

何かをつかめた気がして目を開けると、オレンジ色の丸い光が宙に舞っていた。

『おお、綺麗だなぁ…』

独りごちてそれを見つめる。一つきりじゃつまらない。そう思った私は、両手の人差し指で空を指し、どんどんと光を作りだした。

ふう、と満足して息を吐く。そこには無数の光が舞い散っていた。

私はさっきのように寝転がり、それを見つめる。蛍のような淡い光は宙をゆっくりと動きながら、見ている私の心を癒してくれた。

それからどれくらい経っただろうか。ゴト、という音と共に下の階段へとつながる小さな戸が開く。そこから顔を見せたのは、クーンさんだった。

「…これは、ネイがやったのか？」

息を飲んで、驚いた顔をしている。その表情を照らしてくれたのも、私が出した光だった。

『はい、暇だったので、ジュノが言っていた事を試していました。本当に魔法が使えてびっくりです。』

吃驚しているのはクーンさんの方なのか、しばらく考え事をするように眉間にしわを寄せていたけど、光の動きが目に入ったのか、それからの表情は柔らかいものになった。

「火急の用事が出来て少し外していたが、俺のいない間に何もなかったか？」

『はい。特に何事もなく…というよりも、何事も無さ過ぎて暇でした。』

正直過ぎる私の答えに笑い、それから昼のように持ってきてくれたバスケットの中身を広げて遅めの夕食にした。

満腹になると騒ぎの声は小さくなり始めていて、クーンさんは光を消すように言う。綺麗なのに勿体ないと思って、理由を訊ねると。

「今日の神殿には、皆目がいく。その最上階に不思議な光が集まっていたら、何事かと騒がれてしまうだろう。」

尤もな意見だった。

人の目につくように使っちゃいけないね。特に神殿内でそういうことすると、やれ神がなんだ、とかそういった騒ぎになっちゃうもん。

私は言われたと通りにするために、光が集まるように念じる。纏まったそれを両手に納めるようにして掴み、消えるように念じた。

両手を開いた時には、また暗闇が広がる。目が慣れるまでは、少し怖かったけど今日は月が明るいからすぐになれる事が出来た。

「さっきの光も綺麗だが、今日の夜空は格別だ。」

指を差された方向は、もちろん空。私はそれに従って上を見上げた。

『うわぁ――…』

感嘆の声が漏れる。それほどまでに見事な夜空だった。

「月が全て出て、しかも満月。だからこそ今日は鏡神祭にふさわしい。」

確かに、お月さまの丸い形が、鏡盆に見えなくもない。そう言う意味が込められているのだと勝手に確信して、しばらく夜空を見つめた。

『不思議ですね。』

どれほど見つめていたのかは分からないけど、しばらくの沈黙の後、私から口を開いていた。

首が痛くなってきたけど、見ないのも勿体ないと思いながらそれを続ける。硝子越しに見ている所為か、余計にキラキラと光る者たちが綺麗に見えた。

『私のいた世界では、月が明るいと星はあまり見えません。でも、こっちは月も星もしっかり出ていて綺麗です。』

率直な感想だった。プラネタリウムで見るものよりも、作り物のように綺麗なそれは私をひどく魅了する。見入って目が離せないほどに光が眩しかった。

「…元居た世界では、星が見えないのか。」

『街の明かりが明る過ぎて、あまり見えません。少し暗いようなところでも、月が明るいと星はひとつ、ふたつと言うほど疎らにしか見えませんね。』

都会は特にそう。高校生の時に行った臨海学校なんかだと、自然の中から空が見えた。それはどっちかと言うとこの世界の星空に近い気がする。

話してるうちに首の痛みが限界になり、上を向くのを止める。それから横を向くと、いつからこっちを見てたのか、真剣な顔つきの

クーンさんと目が合った。すぐに気恥ずかしくなり、俯く。

何か話しかけなくちゃ、と思ったところで、帰ろうと声をかけられた。

ドキドキしている心臓を押さええる。訳も分からない状態の心臓に納まれと念じて、クーンさんの後に続いてそこを後にした。

発覚

『……え？』

私は耳を疑った。今しがたレークさんから言われたことが信じられない。

「もう一度言います。国王陛下に＜最後の乙女＞の存在が知られてしまいました。」

だから、え、って言ったんじゃない！

にっこり笑うレークさんから、その隣の宰相さまに視線を向けた。目を合わせようとしないまま、ばつの悪そうな顔している。その横に居る人も、全く同じ表情を浮かべていた。

その行動が真実だと証明している。私は佇むことしかできなかった。

「先に私が呼び出されて問いただされました。その後クーン殿に説明に行っていただき、何とか不問に問われずに済みましたが、貴女を陛下の元へ連れて行かなければいけません。」

死刑宣告だと思った。もう逃げ場がどこにもない言葉は、私を深く傷つける。

…腹を、括るしかないのかもしれない。

『…分かりました。オウサマに会います。』

半ば諦めだった。それに、親切にしてもらっていた人たちの暗い表情。約1名を除いて、だけど。それが悲しかった。

「…いいのか、ネイ?」

中でも一番暗い表情をした人は、聞きにくそうだ。一向に口を開かない。宰相さまは気まずそうだけど、そこは大人な対応で話を進めようとしてくれた。

それもまた優しさ。顔は怖いけど、私は宰相さまが大好きだ。

『はい。みなさんを困らせたくないですし、まだ公に出るとは決まっていません。オウサマに頼めば、他の人にばれないかもしれないじゃないですか。』

笑顔で言い切った。そうじゃないと余計に心配させそうだもん。

それに、クーンさんがあんな顔で話してたお兄さんだし、悪い人ではないと思う。お願いすれば叶うかもしれない。

そんなこんなで、私はオウサマに会うことになった。

いつそんな機会が設けられるのかと思って聞いてみれば、今日だという。いきなりや過ぎません？

だけど、それほどに＜最後の乙女＞はこの国にとって重要なものだそうな。ホント、ややこしいことになったなぁ。

人目につかないように、と言うことで、オウサマの一人息子である殿下の部屋で面会することになった。それは必要最低限の人間にしかその稀は伝えられず、陛下、王妃、そして私の真実を知っている三人のみ。

オウサマが殿下に勉強を教えている時間があるらしく、そこへ私たちが訪れる事になっている。

で、手ぶらで行く訳にもいかないよな、と思った私は、クーンさんに頼んでキッチンへと行かせてもらった。

毎度のことこれをお楽しみにしてるエルさんに手伝ってもらい、オーブンに生地を入れて焼き上げ、魔法で冷やしてもらった。一応、魔法は稀な力だそうで、そんな力があったら女中をしていることが疑われてしまうそうな。と言う訳で、これまたこないだのおじさんにお願いした。

私は生クリームを冷やしながらかき混ぜる。その横でエルさんは、さまざまな果物をカットしていた。

「これがこのように泡立つなんてなぁ。」

感心しながら、生クリームを見ている。てゆーか、刃物使ってるのによそ見しないでよ。

全ての用意が済み、生クリームとフルーツを入れて巻く。ロールケーキの完成だ。

我ながら満足していると、名前を呼ばれる。それに反応して横を向いてみれば、にこにこしているエルさんがいた。

この顔、私は何度も見ている。

『…ダメです。』

先に牽制させていただきました。だって、流石にこれは味見もわけてあげる事も出来ない。

エルさんが私を見つめてくる表情があまりにもがっかりしていて良心が痛んだけど、それでもそれは許可してあげられなかった。

『これは流石に量が少ないですし、今日は私から差し上げたい人がいるんです。だから、また今度作ります。今度はエルさんのために。』

そう言って、その場を後にした。後ろからよろしく、と喜んでいる声が聞こえたから、少し助かった気がした。あんなに私が作るもので喜んでくれる人はいないからね。

ケーキを入れたバスケットを提げてクーンさんの執務室へ行くと、そこには共にオウサマの元へ行く人が揃っていた。

「今日も何かを作ったのですか？」

にこにこしているレークさんには、緊張感が欠片もない。私はドキドキしてるのに、これじゃなんか不公平だよ。とか、勝手にむくれたりして。

ま、これがレークさんだし、この空気が読めないでワザと読んでない感じは、もう無視するしかない。

私はにっこり笑って。

『陛下に手土産を、と思いまして、ロールケーキを用意しました。』

よく分かっていないようだったけど、説明は後だ。いくら私にはオウサマの凄さが分からなくても、この国の最高権力者に会いに行くのだから、待たせるわけにはいかない。

私たちは最上階にある王子の部屋へと向かった。

そこは明らかに私が今まで立ち入ったことのある場所とは違う。質も、警備も、何もかもだ。

私はオドオドしないように一番後ろから従うように着いて行き、重そうな扉が開かれ、中に通される。

そこには美麗集団がいた。

…思わず見惚れちゃったよ。

机に椅子についている男の子は、金髪に碧の瞳、傷一つない肌を持っていて、例えるなら…そう、天使だ。

女性は見事な肢体を持っていてプロポーションが見事過ぎる。それに加えて、金の髪と緑の目はまるで女神様だ。

そしてもう一人、この人が国王陛下でクーンさんのお兄さん。クーンさんよりも少し色素のうすい茶色の髪で、目は碧。その顔立ちはよくクーンさんに似ている。違うことと言えば目の色と、神が肩よりも長いということ。そして線の細さ。病気がちだということが一目見て取れた。だけど、その威厳は半端じゃない。

まさにオウサマと言うべき人だ。

事情を知らない使用人の人たちは、何事かと慌てだす。それには訳があった。

クーンさんの存在だ。二人は兄弟だというのにあまり謁見は認められていないらしい。そして宰相さまと神官が揃う事もあまりないのだという。今までにない組み合わせの人物が揃ったことにより、広い部屋の中は混乱に陥っていた。

「皆席を外せ。」

その声は酷く部屋に染みわたった。みんなは一斉に視線をオウサマへと向ける。その中の騎士のひとりが、できません、と言った。

「謁見手続きはされておらず、この訪問は不敬にあたります。何らかの処罰を与えるべきかと。」

…なんだぁ、こいつ。

少しイラっとした私は、睨みつける形でその人に目をくれる。騎士だというのに大きな態度。そりゃあもう、嫌ってほど目につきますさ。あとでクーンさんにでも聞こう。

「余が下した命に従えぬと言うのか。」

その一言の威力は大きかった。そこに居た使用人はみんないそいそと出ていく。それから人払いをし、役者がその場に揃う。その時には、三人の視線が私に向かっていた。

「…そなたが、＜最後の乙女＞か？」

いつまでも俯いてはいられずに、顔を上にあげる。その時、三人が息を飲んだのが分かった。

私は、クーンさんたちの前に出て、オウサマへと近づく。そして、礼をとって行った。

『お初にお目にかかります、サカキバラ・ネイと申します。現在はクーン魔道師さまの専属女中をしております。』

顔を上げてみると、顔を抓まれたような表情をしている。何事かと思って後ろを振り向くと、三人は微妙な顔をしている。

『私、何か間違えました…？』

不安になってクーンさんに訊ねてみたけど、答えは返って来なかった。

発覚 - その2 -

「いや、間違ってはおらぬが、それは余が問うたものの答えにはなっておらぬ。」

ああ、そっか。だけど、これからお願いに入るわけで、話は長くなると思うんだよねー。ってわけで。

『オウサマ、私はあなたの国の人間ではない。そうですよね?』

「…ああ。」

『だったら、オウサマへの態度とか、間違っていても不問には問われませんよね?』

これにもまたああ、と言われて、私は満足して言った。

『とりあえず、みんなでお茶にしませんか?積もる話はその時に。』

そう言いきった時、一番最初に笑いだしたのは宰相さまだった。何事かと思った私は、振り返る。そこには無表情のクーンさんと肩を震わせているレークさんがいた。

『私、何か間違えました…?』

再びの問いにもクーンさんからの返事は返って来ない。どうしたものかと思っていると、オウサマから許可が出た。

ロールケーキをカットして、それぞれに渡して行く。王子様へと渡した時、にこっとされて、胸がキューンとなりました！

…可愛過ぎるっ！

それからお茶を淹れて全員へと配ると、皆で同じテーブルにつく。お茶を淹れてる時に手伝ってくれたレークさんの話によると、普通なら王と同じ席に王族以外がつくのは珍しいんだって。それを押し切った形で話を進めた私の強引さに、宰相さまは笑ったらしい。

王妃様へとお茶を渡すと、ありがとうと言う言葉と微笑みが返ってきた。その綺麗さに思わず赤面し、それから私も席へとつく。はたから見たらあり得ない図が出来上がってるそこでは、私に視線が集まっていた。

「父上、僕もご一緒したいのですが…」

一人勉強机にいる王子様が駄々をこね、渋るオウサマに王妃様からお願いが出て、王子様も一緒の席につくこととなった。

その時の王子様の満足げな笑顔と言ったら。そりゃあ、可愛過ぎました。

「余が聞きたいのは、そなたが＜最後の乙女＞なのかどうかと言う事だ。」

率直に述べられた。誰もお茶と菓子には手をつけようとせず、静

けさが広がる。

ここからは攻防戦。腹の探り合いなら負けないぞ、と意気込み笑顔を張り付けた。

『あなたの言う＜最後の乙女＞とは何ですか。』

異世界から来た、神の声を聞けるもので、神の声を民に届けるだけでなく様々な事を民に与える人物だと言われた。

強ち間違っちゃいないけど、当たってるのは約半分ってとこだ。

『では、何故オウサマはこの国に＜最後の乙女＞が現れたことが分かったのですか?』

「…鏡神祭だ。」

はて、と悩ましげにしている私に、続けざまに答えをくれる。

「神殿の空気が異なり、他人には分からんだろうが、余には町の様子が例年よりもよく見えた。そして、何よりも余の魔力の増幅がとてもすごい。」

手をぐっと握りしめている。しかし、視線は私から外していない。私も、目を逸らしたら負けな気がして、真っ直ぐに目を見つめていた。

『それが、確証ではないでしょう?』

あまりにも曖昧すぎる。だから率直に聞いた。

「そなたは敏いな。」

お褒めいただき光栄ですけど、そんなこと小学生でもわかるって。

「王家に代々伝わる書物がある。それは王を継ぐ者のみに伝承されている。そして、その書物はこの国も物とは異なり、王が王位継承者へと伝承することになっている。」

なるほどね。そういうことか。差し詰めその書物とやらに、＜最後の乙女＞が現れた時に起こる変化が書いてあったんだろう。その予想は見事に的中した。

無理を言ってそれを見せてもらい、中を読む。それには確かにこの国と違う文字が書かれていたけど、ジュノがくれた力で私には読むことが出来た。

そして、オウサマが私に質問した事は、すでに分かり切っていた事だという事も分かった。

『そうですね。この書物を読めば、私がどうやら＜最後の乙女＞のようです。』

「…そなた、それが読めるのか？」

目を丸くしているオウサマ。そして、周りの人たちは私と王を交互に見ている。だが、誰も口を挟もうとはしていない。

「ならば理解できただろう。そなたが＜最後の乙女＞だ。」

そう言ったかと思えば、王が私へと傅く。

え、と思っていると。

「よくいらっしゃいました。＜最後の乙女＞よ。」

目を丸くして、固まるしかできない。

何してんすか、この人。こんな小娘に！

だけど、そう思っているのは私だけらしい。そこにいたみんなが王と同じようにする。

…私、そんな偉い人になったつもりはないんですが？！

『あ、頭を上げてください！』

「そうはいきませんわ、乙女さま。」

王妃様までもが私に丁寧な言葉遣いをしている。明らかに高貴な雰囲気を纏ったその人たち、そしていつも仲良くしてくれてたその人たちがそうしていることがすごく嫌だった。

『どうしたら、やめてくれますか？』

そう問うと、私が命を下せば、という答えが返ってきた。

呆然としてしまう。だって、王族、だよ？この国で一番偉い人た

ち、なんだよ？なんで私がそんなことしなくちゃいけないの。

だから。

『お願いです、頭を上げてください。』

懇願した。

だけど、と言う声を遮ってもう一度お願いする。すると、最初のようにみんなが席に着いてくれた。

ほ、と嘆息。それからしばらく、私は頭を抱えた。

「乙女さま？」

可愛い声が聞こえる。私の顔を覗き込む碧の瞳は、途方もなく純粋なもの。声をかけた事を諫められていたが、私が頭を撫でると嬉しそうに微笑んでくれた。

『よし、オウサマ、一回落ち着きましょう。私が＜最後の乙女＞だとして、何故あんな態度を取ったのか教えていただけますか。』

言葉遣いを注意されたけど、年上は敬うものだから、と断った。てゆーか、意味分かんないんだもん。

「乙女さまは神の遣いであり、存在自体が尊い御方。我々王族よりも上なのです。」

そうキタか。ジュノのヤツ、迷惑極まりないルール作ってくれちゃって。おそらく、伝承の書物を作ったのもジュノだろうから、余

計に腹が立った。

『それはわかりました。だけど、私は見た通りの小娘に過ぎません。だから、普通に接して欲しいのです。』

ね、とレークさんとクーンさんに目を向けると、まずはレークさんがにこっと笑ってくれる。クーンさんは相変わらず固い表情をしていた。

『私はレークさんの胡散臭そうな笑顔も、クーンさんが私をネイと呼んでくれるのも好きなんです。』

正直に言ったのに、お一人、酷い言い草だと零した人がいた。だけど、ホントの事だもん。

オウサマにはいつもの態度でいて欲しいし、他の人もそうだ。私は“ネイ”なんだから。

『とりあえず、ケーキ食べて下さい。お茶も冷めちゃったし、淹れ直しましょうね。』

そういうと、皆は慌てるが、いつもの習慣だからみんなを止める。これは私の仕事だ。

お茶を淹れて席に着くと、まずレークさんが私のケーキに手をつけてくれた。それをオウサマが諫めたけど、笑顔を浮かべて言うことには。

「ネイさんは頑固ですから、一度言いだしたら聞きませんよ。」

酷い言い草だと思ったけど、向けられた笑顔にさっきの仕返しだと書いてあったので納得した。

『さて、オウサマ…じゃなくて、陛下。』

「いえ、ルードヴィヒとお呼びください。」

そうか、オウサマも頑固者なんだな。さっきから頑なな態度を改めてはくれない。少し拗ねそうになったけど、ジア教の敬虔な信者なのだと思い、仕方なしに諦めた。

『じゃあ、ルードさまとお呼びしても?』

それに否、様はいらないと言われて、さんに落ち着いた。

『ルードさん、私ちゃんとさまざまな技術は伝えます。それから、ジュノの言葉も。』

だからそれと引き換えに。

『私を公の場に引っ張り出さないと約束して下さい。』

これが今日の目的。絶対に折れてはいけないこと。

懇願すれば聞いてくれると思ったのに、返事がないまま渋ったような表情をしている。これは長期戦になるのか…と覚悟した時。

「それは、命令でしょうか。」

何とも頑なな人だ。

しょうがない、と一つ嘆息。そして、厭々ながらに言った。

『私を公の場に出さないと誓いなさい。』

「仰せのままに。」

ネイはやはり＜最後の乙女＞の立場からは逃げられないようだ。
もちろんそんな予感はしていたが、この国の最高権力者である陛下の態度を見れば、さらなる納得を与えられた。

そして何よりあの言葉。

“私を公の場に出さないと誓いなさい”

厭々ではあったが、あれは譲歩した命令。しかし、その光景はあまりにも高貴であった。

はじめから態度も雰囲気もコロコロ変わる少女だと思っていたが、あの時は格別で誰もが見惚れていたのが分かる。かく言う俺も。

そして、言うなればあの雰囲気こそあの少女にふさわしいと思った。

少女を他人に知られたくないという思いで溢れていたが、それはもう到底叶わない。

そして、こうなる事は兄上がレークを呼び付けるという、数日前の出来事から予想していた事であった。

「先程、陛下に呼び出されました。」

低い声でそう始まった。

今は鏡盆祭の最大の遠視の行事が終わり、眠りについてしまったネイをそこに残して執務室に居る。

レークの言葉に何事かと思い視線を書類から上げると、いつもの胡散臭げな笑みを浮かべているレークではなかった。

そこにいたのは、至極真面目な表情を浮かべる青年。レークではないと思ってしまったのは、普段のレークからはかけ離れ過ぎているからだった。

「なぜ陛下がお前を呼びだす必要がある？」

祀り事は無事に終わった。取り急ぎ占じるような事も今は無いはず。

市井のことは鏡盆祭で明らかになった。つまり、城下や地方の様子は把握している。

…他に神官に訊ねる事があるのだろうか。

「＜最後の乙女＞の存在を疑われました。」

驚き、耳を疑ってしまうような言葉だった。

鏡盆はネイが触れたことにより使用できた。他の神官にさえ気づかれていない。だというのに、何故陛下に分かり得るのか。

「驚かれるのも無理はありません。しかし、王の目を欺き続けるのは不敬に当たります。どうかクーン殿より陛下に説明していただけないでしょうか。」

俺は兄上を尊敬している。不敬に当たるなど、あって欲しくないことだ。ならば全てを申し上げるべきだろう。

しかし、そうすればネイはどうなる。あれほど嫌がっている表舞台に出る事になってしまうのではないのか。それこそ忌み嫌うべきだ。

「ネイさんには申し訳なく思いますが、正直にすべて申し上げるべきです。それは仕方のない事でしょう。」

表情からすべてを読み取ったのか、言われた事は俺の胸を強く突いた。だが、理解はしていても、どうにも納得はできない。

「陛下は感づいておられるというより、確信を持っておいでです。他の貴族に知られてしまえば、どうやっても表舞台に引っ張り出されてしまうでしょう。」

尤もな言い分だ。避けられない、か。

「ネイさんは嫌がるでしょうが、まずはクーン殿が陛下にお話しく

ださい。」

嘆息し承を告げる。満足そうにして出て言ったレークから、翌日の朝陛下からの呼び出しの手紙を渡された。

伝説の乙女のことだからか、随分と話が早い。俺はそれに従い、無い蜜に陛下へと会いに行った。

「久しいな。元気にやっていたか。」

にこやかな笑顔。そこに居たのは、国王陛下ではなく俺の兄上だった。表情はいつもよりも柔らかく、目には親愛の情がある。

腹違いとは言えども、目の色と少し違う髪色以外はよく似ている。しかし、身体の弱い兄上は騎士団に努めている俺とは、体格の差が合った。

「…お久しぶりでございます。」

謙ってそう言うと、やめてくれと言われて顔を上げる。

いつも言われるがこれだけは止められないことだ。兄上が陛下であり、俺がその臣下であることの証明として。

「早速だが、単刀直入に訊く。」

身体を一瞬震わせ、王たる者の視線を一身に受ける。ああ、この人は自分の兄上ながら陛下であるのだと、いつもながらに実感した。

「〈最後の乙女〉の存在を確認しているな？」

もう、すべて存じ上げているのだ。あの目はそう言っている。

俺は嘘はつけないと思い、目を合わせてしっかりと頷いた。

「・・・なぜ、黙っていた。」

「・・・申し訳ありません。」

理由を訊いているのだと言われ、今度は謝罪の言葉も言えない。どう説明するべきか。口をつぐんだまま考える。

説明をするにはネイの内面的なことを話さなければならない。しかし、それはすべきでない。

では、どうする。

よく考えてみれば、乙女は陛下と同等、または上の存在。ならば答えはひとつ。

「・・・自分は、公の場には出たくない、そう言われてしまったのです。」

「乙女は、我々に協力しない、と？」

訝しげな表情を隠すことなく露にしている。普段ならば隠すだろうが、相手が俺だからなのか、自然なままの表情だった。

この時は威圧感はなく、兄上としての質問だ。使い分けがどんな基準かはわからないが少し嬉しい。

「いえ、そういう訳ではありません。レークや私に異なる思想を教えてくれ、新たな料理を作ってくれています。」

これを後に、兄上はネイについてさらに熱心に聞いてきた。

今は俺の専属女中として働いていて、シェパードの邸にいるという話には目を丸くしていた。だが、次に議会を正論で言い負かしたことを教えると、愉快そうに笑っていた。

そして、俺が部屋を後にするときには、明日には会えるように手筈を整えると言って、楽しげに送り出してくれた。

仕方のないことだろうが、自分の気持ちを自覚してしまっているために、たとえ国王陛下と言えども、ネイに会わせることにあまりいい心地はしない。

単なる独占欲にすぎないそれを理性で抑えながら、ひとつ疑問が浮かんだ。

…ネイは俺をどう思っているのか。

たまに近づき過ぎると顔を赤くしたりする。なのに、同じベッド

で俺と眠るという大胆な行動に出るのは、ネイの方だ。しかも、気にした様子はなく、俺の方が戸惑ってしまった。

確かに近い存在なのだろうが、自分の位置付けが気になる。

本人に聞いたところで、戸惑って答えてはくれないだろう。もしくは、平然として単なる知り合いと答えるだろう。

どちらにしろ答えは俺を奈落の底辺にまで突き落とすだろうから、聞かないのが無難なのだろうとそこからの思考はやめた。

自分の執務室へ戻り、嘆息をひとつ。とりあえず、今は目の前の書類を片付けねば。

そう思った瞬間に、ネイがお茶を淹れにやってきた。本来ならば、断って仕事をするべきだ。しかし、可愛い笑顔を浮かべるネイの表情が曇ることを考えれば、それは絶対にできない。

己の変化に少々戸惑いながらも、それに嫌な心地はしない。だからこそ、早々に書類を放り出して、ネイの元へ向かった。

そして、いつものことではありながら、決まった時間はないのに、レークがやってきて二人の時間を邪魔するので、俺は肩を落とした。

それにあからさまに面白そうなニヤリ顔をしている姿には、わざと気づかないふりをする。ネイはもちろん何も気づいていなかった。

いつか、この気持ちに決着がつくだろうか。果てしなく遠い未来を想像してまたひとつ嘆息した。

平穏な日常

オウサマに会ってから早一週間。何事もないまま無事に生活してる。約束は守ってくれてるみたいだ。

安心して生活できることを嬉しく思い、私は今日も元気よく働いている。

「今日のお昼ご飯は、レークさんが気にしてるハンバーガーにしましょうね。楽しみにしていてください。」

今だって、いつもの如く神殿を抜け出してニホンのことを聞きに来たレークさんにお茶を出して、ファストフードについて語っていたところだ。

毎度のことながら目を輝かせている様子は、大きな子供のように思える。毎日変わらないその様に、自然と笑みがこぼれた。

しかし、変化したこともあった。

「ネイっ！」

『殿下！？』

お茶のワゴンを片付けるためにキッチンへ向かう。近道しちゃえ、と中庭を横切ろうとした時。可愛らしい男の子が近寄ってきた。そ

の周りには誰もいない。

『また抜け出してきたのですか？』

満面の笑みで頷かれてしまえば、もう何も言えない。私は諦めたように、殿下に視線を合わせた。

「ネイに会いに来たんだよ？」

ズッキューン！

撃ち抜かれました！何この可愛さ！

身もだえしそうになりながら、笑顔がとろけないように心がける。それと一緒に、抱きしめたい衝動も抑えた。

何故か殿下に懐かれた私は、もう一週間毎日殿下と会っている。大抵は王妃様にお茶菓子を届けに行く時に会えていた。だけど、私を見かけて駆けつけてくれるようになってからと言うもの、もう４日も殿下から私に会いに来てくれるようになっていた。

私、小さい子に好かれるようなことは昔からなかったんだけど。

そう不思議に思いながらも、女の子みたいに可愛い殿下が合いに来てくれるのは嫌じゃない。本当に、こんな弟がいたら甘やかし続けるだろう、と言うほどだ。

「今日も母上の所へ行くの？」

『はい。後でお茶菓子を届けに参ります。』

「じゃあ、僕もその時一緒に行く。それまでネイと一緒にいてもいいでしょ？」

もちろん、うんと言いたいところだ。でも、そうはいかない。

彼は王位継承権第一位の王子様だ。そう簡単に姿を消していいはずもない。現に、遠くから殿下を探している声がする。

「…ダメ、なの？」

ウルウルとした純粋な目で私を見つめないで…心が揺れるから。

『殿下、黙って出てきたのでしょう？それではみなを心配させてしまいます。』

ここは心を鬼にしてお説教と行きましょう。嫌われたくないけど、仕方のない事だ。私が目に入れても痛くないと言わんばかりに可愛がっている殿下は、皆にも同じ扱いを受けている。もちろん殿下が良い子だという事もあるが、怒られた事はあまりないんだってさ。

確かに可愛いけど、皆どれだけ甘やかしてるんだよって話。

「じゃあ、許可を貰ったらいいんだね！」

急にお喜びになってどうしたんですか、そう聞きたかったけど、掴みどころのない殿下は、声のする方へと私の手を引きながら走っていく。

私は前屈みになりながら、足をもつれさせて転ばないように気を付けた。

「殿下！」

騎士も女中も殿下が私みたいなのの腕を引いてやって来たことに驚いているのが一目瞭然だ。でも、ここ数日王妃様の元へお菓子を届けているので、私の面も割れている。

周りの人たちがあからさまにほっとしたのには、殿下がどれだけ可愛がられているのかが明らかだった。

「僕ね、これからネイのお菓子作りをお手伝いしようと思うんだ！」

『殿下？！』

一番最初に私が声を上げたのは無理もない。だって、そんなことさっき言ってなかったんだもん。許可を貰う、としか言ってなかったはずだ。

「母上においしいものを食べさせてあげたいんだ。ダメ、かな？」

きっと、皆はウルウルとした目で見つめられてるんだろう。見事に狼狽してる。

「でも、護衛はどうなさるおつもりですか？」

「ネイは叔父上の専属だもん。何もないよ。」

ここにいる人たちは陛下の腹心とも言える。クーンさんと陛下の

中を疑う人は一人もいない。だからと言って、王妃様に持っていくお茶菓子の毒実を止めてはくれないけど。

まああれは、自分が食べたいからって意味もあるんだろうねぇ。毒味係のお姉さんはいつも嬉しそうに食べている。十分過ぎるってほどに。

「しかし…」

渋る家臣たちに殿下は、もう一度ダメか聞き、小首を傾げるようにしている。ああ、もうダメだな。

そう思った時、見事に陥落した。許可が下りた。

殿下、そこには純粋なものだけしかないと思わせて下さい。

将来腹黒くなりどうな事を心配しながら、昼食のワゴンはそこにいる侍女に任せて、私はクーンさんに許可を貰うべく、執務室へ向かった。…仲良く殿下と手を繋いで。

周りからの視線が時折痛かったけど、毎度のことながらあの目で見つめられてしまうと断れなかったんですよ。

言い訳がましいことを考えながらも、ノックをしてから執務室へと進む。中に私たちが入ってもクーンさんは書類から目を離さなかったけど、天使のお告げによって例に無く驚いた顔をした。

「殿下…こちらで何を？」

声を大にして問わないところが、なんともクーンさんらしくて面白かった。だけど、この状況で笑ったら浮く。ってことで、我慢した。

「勉強が嫌で逃げて来たんだ。」

屈託のない笑顔。これはクーンさんも陥落だろう。と思ったのに。

「殿下、あなたは将来この国を担うのですから、勉学を厭ってはいけません。」

固い声。それは小さい子には厳しいものだろうけど、私にはその意図がよく分かった。

殿下が大切だからこそ、自分が憎まれることを分かっていて説教役を買ってる。将来的には仕える事を考えているからこそ、立派になってもらいたいんだって言ってたから。

「うん、わかった！」

笑顔は曇ること無い。怒られていたはずなのに、少し嬉しそう。

「だけど、今日はこれからネイと一緒にお菓子を作るんだ。いいでしょ。」

クーンさんはしばらく難しくしていたが、渋々頷いた。それに殿下は満足そうだ。嬉しそうにありがとう、と言って近づいて行き抱きつく。その姿は見ていて微笑ましかった。

眼福、眼福。天使と美青年。何とも絵になりますなぁ。

ニヤける顔を隠す事もせずに二人を見る。クーンさんは少し戸惑ってるみたいだけど、ちゃんと抱きしめてあげてた。

「叔父上の分もちゃんと用意するからね！ネイ、行こう！」

クーンさんから離れて私の所までやってくると、手を繋ぐ。私は苦笑しながらクーンさんに一礼をしてそこを後にした。

『殿下、今から行くところは殿下の思っているような綺麗な場所ではありません。それでも構いませんか？』

「もちろんだよ。母上と叔父上に美味しいお菓子を食べさせてあげるんだ！」

手を繋いで大きく振りながら歩く。すれ違う女中さんがお辞儀しているけど、その表情は驚いていた。

それはもちろん、少し違う女中服を着たクーン魔道師専属が、仲良く王子殿下と歩いてるからだろう。ちょっとだけ、みんなが驚ろく顔をするのは、面白い。

それを楽しんで歩いていたんだけど、中でも一番驚いていたのは、エルさんだった。

調理室に入ってきた私に挨拶をしようとしたまま、固まってしまっている。一方の殿下はにこやかだ。

『今日は殿下と一緒にお茶菓子を作ります。エルさんもお手伝いしてくれますよね？』

固まっちゃってるエルさんにそう言った。でないと、動いてくれそうになかったから。何度も度持ったようにして何とか返事をすると、必要な材料を聞いたエルさんは勢いよく飛び出して行った。

…どこ行ったんだか。

ま、普段は王族がこんなところに来るはずないもんね。王族の料理を担当していて触れ合う機会が多かったとしても、そりゃ緊張しちゃうよ。

エルさんが戻ってきてくれることを祈りながら、私は器具の用意をする。

その一部始終を笑顔で観察してくる熱い視線にやりづらいな、と思いながらもテキパキと動いた。

『殿下、分かっているでしょうが、くれぐれも私のあの事は内密に。』

分かってるんだかいないんだか、大きく頷いてくれました。可愛いけど…もし喋っちゃったらいくら殿下でも許せないかも。

と、まあ考えはここら辺にして。エルさんがやっとこさ持ってきてくれた材料を確認してから殿下に向き合った。

『さ、始めますよ。腕まくりをして、せっけんで丁寧に手を洗いましょう。』

そんなスタートで始まり、白いエプロンをつけた殿下は私の言葉に従って料理を開始した。

簡単なものにするべきだろう。そう思って考えたレシピはクレーム・ダンジュ。ふわふわとした食感のチーズケーキだ。

ケーキの説明もそこそこに、殿下が真剣に努力している姿を私は微笑ましく見、エルさんはハラハラして見ていた。

「ネイ、状況が全く理解できないんだが…」

いつもなら周りをうろうろしているエルさんが、手招きして私を端まで呼んでの第一声がそれだった。

確かに、一国の王子様が使用人の台所にいたら吃驚だよねー。

どうやって説明するべきかを考えをめぐらせ、何とか言葉にした。いろいろちょろまかしちゃってごめんなさい。そう思いながらも、嘘を並べる形になってしまった。

「クーンさんに着いて王族の方に会った時の話はしましたよね。あの時以来、殿下に懐かれまして。今日も殿下から会いに来てくださったんです。」

これは事実だし、嘘も含まれている。だって、もしかしたら殿下は、私が＜最後の乙女＞だから気に掛けてるのかもしれない。

「それは分かったが、どうして今ここに殿下がいらっしゃるんだ?」

「妃殿下にお茶菓子を作って差し上げるそうです。」

これは事実。今目の前にいて嬉々として調理をしている様を見れば、それは一目同然だ。

エルさんはそうか、と言い、そこを離れようとする。私が声をかけると、自分が同じ場所にいるのは身分不相応と言った。

だけど、そんなこと言ったら、私だってそうなるじゃないですか。ってことで引きとめる。エルさんは不安そうにしてたけど、でもやっぱりどこか嬉しそうだった。

平穏な日常 - その２ - （前書き）

お気に入り登録が３００件を超えました！
たくさんの人に読んでいただけて、とても嬉しいです。

「ネイ、こんな感じでいいのかなぁ。」

「もう少し頑張って泡立ててください。」

分かった、と言うと腕が疲れた見たい出歯を食いしばりながらやっている。

あー、もうっ！可愛過ぎるよー。ってことで、甘やかします。

「殿下、それは料理長のエルさんに任せて、次の工程に進みましょう。」

最後まで自分でやりたいと一度はごねたけど、あまり時間がかかってしまうと良くないことを伝えるとしぶしぶエルさんに泡立て気を渡していた。

「さて、次はもっと力が要りますよ。クリームチーズと砂糖を混ぜますからね。」

やっぱり次の工程も殿下がやるには大変そうだったけど、何とか生地が出来た。

「これは濡らした布で巻くんです。そうしたら、ふわふわだけどしっとりしたケーキに仕上がりますからね。」

「ネイ、さっきから気になっていたんだが…けーき、とは何だ？」

……

はい、思わず固まっちゃいました！

ケーキを知らないって…どんな生活してたらそうなるんですか。てゆーか、ケーキなくて生きていけるんですか！

甘いもの好きな女の子にとっては別腹。そして無限に食べられそうなものなのに。

「スポンジ生地にクリームを塗ったものです。中に果物を入れると美味しいんですよ。」

そうは言ってみたものの。見たことがない人には想像もできない代物らしい。私に取ったら普通なのに、料理水準の低いここではお茶菓子にはティレ・タータという一度苦しんだ思い出のあるアレしかないんだって。信じられない。

料理と同様、誰か開発すればいいのに。

今度作りますよ、と言えば、エルさんは嬉しそうに頼んだ、と言った。

「ネイ、その話は良いから、次はどうするの？」

殿下は今は目前のものに集中してるらしい。それ以外は目に入ら

ないのか、次の手順を促した。

「器に濡れた薄い布を入れて、生地を半分入れてください。そうしたら、切った苺を入れます。それからもう一度生地を重ねて布をきっちりかぶせて完成です。」

殿下はそれを丁寧にやった。いつもの私だったら見ていてイライラするはずの不器用さなのに、殿下がやると可愛いから許せちゃう。

「できた！」

キラキラとした瞳。笑顔を浮かべるその姿は、本当に嬉しそうだ。

私はその容器を受け取り、昼食の後のお茶の時間に持っていくことを約束した。そして、一度殿下を送りに、行こうと思ったんだけど。…駄々を捏ねられまして。これはどうするべきなんでしょう。

もっとネイと一緒にいる、とか可愛いことを言っているから、叱りたくても叱れない。だけど、いつまでも殿下がこんなところにいるわけにはいかない。それに加えて私には仕事がある。午前中の分の配達がまだ残っていた。

「殿下、申し訳ありませんが、私にも仕事がございます。

もしもお部屋へ戻るのが嫌なのであれば、ここではなくクーン魔道師さまの執務室に行かれてはいかがでしょうか。その勤勉さを見る事も一つのお勉強になると思いますよ。」

本当はもっと遊びたいのだろう。俯いてしまっている。だけど、他のやるべきことを蔑ろにできるほど時間はない。クーンさんは忙しい。その時間を少しでも短縮させたいと願う私が、何もしない訳にはいかないから。

ネイは心を鬼にします。

何とか説得することが出来、断わり切れず一緒に手を繋いでクーンさんの執務室へと向かった。

ノック、それから部屋に入ると、書類から目を離すことなくひたすらに仕事をしている。その姿を見た殿下は真剣な眼差しをクーンさんに送っていた。

「…殿下、どうしてここにいるのですか。」

視線に気づいたのか、目の前にいる人物に驚いている。

そんな表情を見るのは少し嬉しいから、私は二人の顔を見比べながら顔がニヤけるのを必死にこらえた。

「ネイがね、叔父上の勤勉さを見るのも一つのお勉強になるって言ったからだよ。」

クーンさんの視線が痛い。言いたいことはよく分かってる。ってことで、私逃げます。

「殿下、よろしければそちらにお掛けください。では、私は書類の配達に行ってきまーす。」

私は二人をそこに残して、書類を持って駆けだした。

「おい、ちょっと待て！」

げ！

一応走らないように心がけていたのに、声を掛けられてしまった。で、思いっきり嫌な声が出そうになったのは、胸に付いている赤い羽根が原因だ。

過激派のお偉いさんに捕まっちゃったみたい。どう切り抜けよう。

そう考えても、こっちから声をかけるのは失礼にあたる。私にとってこっちのルールなんてあって無きが如しなんだけど、流石に一女中として働いている今はそうもいかないのだ。

「その書類はうちの省への届けか？」

「ええ、そうでございます。」

書類の省名を見て言ってるのだからそうなんだろう。でも、いちいち多い議員や貴族を私が覚えてると思うなよ！

自慢じゃないけど、五分前に自分の顔を殴った人を忘れるくらい私の顔覚えは悪いの。

つまりは、貴方がどこの省のお偉いさんで、どんなに偉いかなんて知らないってこと。話を合わせているのは、過激派の人だから波風を立たせないためだ。

「お前、クーン魔道師の専属だな。」

手で顔をくっと持ちあげられる。気分悪いけど、顔が引き攣らないように心がけた。

「お前が数日前より、王族の方に接触している事は分かっている。ヤツは何を企んでいる。国王の座か？」

…頭悪いヤツ、私嫌いです。

そう言ってやりたくなった。なんてったって考え方が早計過ぎる。

クーンさんが王族に接触する＝何か企んでいる、にどうして繋がるんだろう。陛下もクーンさんもただ単に兄弟としての時間を楽しんでいるだけだ。それに王妃様と殿下は私のお菓子を美味しいと言って食べてくれているだけなのに。

短絡的でヤになっちゃう。

私は早くそこを去ろうと、引き攣らないように笑顔を作って一歩下がる。それから一礼をして言った。

「申し訳ございませんが、私には身に覚えのないことでございます。」

「嘘をつくな！みなが多くを目撃しているのだ。逃れられる筈がないだろう。」

うん、わかってるよ。王族に接触してたのはクーンさんもとい私だ。それを多くの人に見られている事も。

クーンさん曰く、クーンさんが陛下に会うのってどうも周りからしたら嫌な事なんだって。

「確かに、何度かお会いになられておいでです。しかし、それは私が異国の地からやってきたからです。」

訝しげな視線。まるっきり疑ってくれちゃってますよね。ま、そんな視線も慣れちゃって、私にとってはお手のもんだけどね。

「お前が異国からやって来たことがどうして関係している。」

「私の国ではお茶菓子の種類が豊富にありまして、それを王妃様に食していただいているのです。

幸い気に入っていただけたようですし、陛下からの命を受けてお菓子を作っているのです。」

ここまで言ったら何も言えないでしょう。私は心の中でほくそ笑む。

過激派は温厚派に対してはきつく中り、特に温厚派代表の息子であり元王族でもあるクーンさんを疎ましく思っている。だけど、彼らは絶対に陛下には逆らえない。だからこそ、陛下の命だと言ってしまうのが黙らせるのには一番だ。

大方の予想通り、おじさんは黙りこくる。私は一礼をしてそこを後にしようとした。が、呼び止められる。それは書類を受け取るというものだったけど、一蹴した。

だって、ちゃんと扱ってくれるか分かんないし、本当に省の役人かなんて信用ならないんだもん。

世の中信用第一ですよねー。

「申し訳ございませんが、これを省の係の者に届けるまでが私の仕事でございます。貴方様のお手を煩わせるほどのことではありません。」

では、とお得意の笑顔と綺麗な礼を決め、ずっぽりと猫を被ったままそこを後にした。

後で陛下に謝んないと。勝手に名前使っちゃったし。

書類を届けた帰りにのんびりとそんなことを考える。近道のために外に出てみると、青空が透き通っていた。

さーて、次のお仕事に励むといたしますか。

そう思って執務室へと戻ると、殿下はもういなかった。どうしたのかを訊ねると、私が配達に行ってすぐに帰ったんだって。その理由が可愛いことに、私がいないとつまらないんだって。

嬉しくなって出てしまったニヤけ顔を両手で押さえながらいると、クーンさんは走らせていたペンを止め、私の顔をじっと見つめていた。

何事か、と聞くと、何でもない、と返される。しかし、私を伺うのは一向に止めてくれそうになかった。

『あのー…居辛いんですけど、出てった方がいいですか？』

「いや、いい。」

そう言うと、今度はペンを持って書類に視線を走らせる。ホッと一息ついて、私は書類の整理に取り掛かった。

それでもやっぱり集中できないみたいで、時折こっちを伺ってるのが分かる。だから、私は書類から目を離すことなく、何か用ですか、と聞いてみたら、吃驚したようにどもっていた。

それを見て笑うと、お昼の用意してきます、と言って出ていく。

ここでの生活にも慣れてきたなぁ、と少し嬉しくなった。

閑話 - 気の毒に - （前書き）

今回は珍しい人の視点からです。

閑話 - 気の毒に -

鏡盆祭が終わり、今日は特別やる事もない。部下たちに追い回される事もなく、のんびりと城内を歩いていた。

そして、ふと思い出す。

鏡盆祭の最大の行事、遠視。その際に鏡盆の上へと舞い降りてきた神はあまりに美しかった。

なぜ見えたのかは分からない。ネイさんに触れていなければ見る事が出来ないはず。なのに、鏡盆祭の時には見えた。

何か理由があるのだろう。

そういえば、最近ネイさんの所でお昼をいただいていませんね。

鏡盆祭までの準備期間、当日、事後処理。それがやっと終わって暇が出来た。今日あたりにでも、それを聞きに行こう。

そして、チキュウの料理をいただいて、ニホンの話を聞こう。まずはお昼をいただきたいことを申しておかなければ。

そう思って、クーン殿の執務室へ行く途中。庭園に差し掛かった辺りで、いつもは聞かないような笑い声が聞こえた。

さて、この城にこうやって声を上げて笑う方がいたでしょうか。

不思議に思い、声を探して歩を進める。聞こえる声は、まだ幼さが残る男の子の声と、うら若き乙女の声。どちらも、自分には聞き覚えがあった。

しかし、このような所で話しているはずもない。半信半疑のまま、バラの道を進む。さまざまな花が咲き誇る庭園の中の、一際大きな木の下。その下に二人はいた。

…やはり、このお二人でしたか。

ネイさんと王子殿下。二人は仲良く手を繋いで木の下に座っている。それはまるで、仲の良い兄弟の様。ネイさんが若く見えるので、そう年が離れているように見えないのが、少し可愛らしい。思わずもれる笑みを隠すことなく、声をかけることにした。

「お二人とも、こんなところで話していては風邪をひいてしまいますよ。特にネイさんは病み上がりなのですから。」

心配して声をかけたはずなのに、二人は私の名を呼んでニコニコしていた。

本当に兄弟のようですね。ネイさんはあまりそう思っていないでしょうが、綺麗な顔が並んでいると、本当に天使のようです。

感心して見ていると、二人は不思議そうに私の顔を見ていた。

「ああ、特に用はないのです。普段あまり人気のない庭園から明るい笑い声が聞こえたので。」

そう言うと二人は納得したように目を合わせていた。

…ここに画家がいたら、この素晴らしい被写体に感動するのでしょうね。

と、関係ないことを思ってしまうほど、花に囲まれた二人は綺麗だった。

「用事、と言うほどではありませんが、今日からまたお昼ごはんをご一緒させて頂いてもよろしいでしょうか。」

『はい、喜んで。』

殿下は事情を知らないからか、どういう意味かをネイさんに問っている。彼女の答えを聞いた殿下は、自分も一緒に食事をしたいと言いだしたが、私もネイさんもそれは許さなかった。

それよりも、いつの間に殿下はネイさんに懐いたのでしょうか。仲、良過ぎませんかね。

これではクーン殿もやきもきしているだろうと思い、その様子を思い浮かべて思わず笑ってしまった。

まだ幼い甥っ子にネイさんを取られたと思わなければいいのですが。

昔から何に対しても頓着のなかった知人の豹変ぶり。陛下も宰相閣下も私も驚いていた。

この三人が揃うと大抵はクーン殿の話になる。陛下は兄弟として、宰相殿は親として、私は友人として。さまざまな話は尽きないが、やはり語ることは共通のものが多くなる。それがクーン殿だ。

少し前まではどんなに朴念仁だとか、女たちのことに対しての行動の鈍さなどの笑い話をしていた。しかし、今では違う。

ネイさんの存在が陛下に認知され、その後に一度だけお茶をしたが、その時の話題はクーン殿とネイさん。二人がどうなるか、とのことだった。

クーン殿のあからさまな態度。見ていて面白いくらいネイさんのことになると過保護になり、他の男などを近寄らせないために彼女に近づこうとする男を眼力で抑えている。彼女はそれに気づいていないが、もしかしたら鈍感な友人も自覚で無しでやっているのかもしれない。二人とも疎いとは、救いようがない。

本来ならば、＜最後の乙女＞という尊い存在であるネイさんとの恋は叶わないだろう。しかし、初めて見せた執着を垣間見て、どうしてもくっつけてあげたい気持ちになる。幸いネイさんは公には出ていない。陛下にも私たちにも普通に接してくれと頼んだ。

それならば叶うかもしれませんね。

貴族階級がない彼女が王弟であるクーン殿と婚姻を結ぶのは難しいだろう。ならば、私が後ろ盾になってもいいですね。

そう思って、思わずニンマリしてしまった。

それを見ていた二人が私を見上げて首を傾げる様は、本当に愛らしく身もだえしそうに…

…コホン。決して変な趣味ではありません。綺麗なものや愛らしいものを愛でるのが好きなだけですから。

どうしたのかを訊ねてくる殿下に。

「いえ、先日陛下と宰相さまとクーン殿のことを話しまして。その時のことをつい思い出してしまいました。」

そう言った。

すると、二人はまた顔を見合わせている。その目は、丸く見開かれており、何かに驚いている様子だった。

「僕たちもね、神官様が来る前に叔父上のことを話していたんだ。」

「ほう、それはどんな事でしょうか。」

非常見興味深い。もしかしたら、ネイさんの心が聞けるかもしれない。そう思う前に、私は聞き返してしまっていた。

無礼に取られたかと思い、態度を改めようとするが殿下は気にした様子もない。

この方はこう言う御方なのだ、と思いだすと、緊張していた肩の力を抜いた。

王族の方々はとても気さくだ。どちらかと言えば上級貴族の方が身分について口うるさい。

仕事もせずに威張り散らしている姿など、見苦しいだけです。それに気づかないのですから、少し哀れですね。

酷い物言いと思われるかもしれないが、これが事実。陛下も宰相さまも頭を悩ませていることだった。

「ネイと僕にとって、叔父上は頼りがいのある、兄貴のような存在だ、ってね。」

ここで私が脱力した理由を、みなさんはご理解されていると思います。

あれほどまでお互いに近い場所にいて、何故片方は気付かないのだろうか。明後日の方を見て、少し考えてしまう。

むかし、あれほどクーン殿の人に関する鈍感さを笑ったけれど、こっちもいろいろと問題がある。

二人を一番近くで見ている自分が、二人の心の近さを理解している。神がおっしゃられたように、二人がイチャイチャしているようにも見えてきた。つまりは、彼らがお互いに自覚が合ってそう言っ

た雰囲気を作り出していると思っていた訳で。

…まさか、クーン殿よりも鈍い方がいらっしゃるとは思いませんでしたね。

ネイさんは敏い娘。人の機微を読み取って、会話の主導権を握って言葉巧みに人を誘導し、全てを意図的に動かせる子ということは、まだ付き合いも浅いが理解できていた。それなのに、色恋沙汰に疎いとは。

今、ネイさんは、クーン殿の前で地を出していることが多い。だからこそ、二人が理解し合って、傍にいることを認めた相手同士になりつつあると思ったのに。

「ネイさんも、そう思うのですか。」

『はい。あ、でも、納得してる訳じゃなくて…なんだろう、もっと別の存在のようにも思いますけど…』

「…まだ、分からないので、とりあえず“頼れる兄貴”なのですか？」

満面の笑みでそうだと言われた私は、また脱力してしまった。

問題があるのは男の方だと思っていたのに、それを上回る人がいるとは思っていなかった。

これは、三人で話しあってもどうにもならない問題ですね。

この後、私は彼の執務室へ赴き、訳も分かっていない彼に頑張れ

と言ってしまった。

彼に紅茶を差し出す、ネイさんの微笑みは誰の前よりもクーン殿の前が一番輝いているように見える。そして、二人の雰囲気は、自分がこの場にいると言うのに酷く甘ったるかった。

それなのに、ネイさんは何故無自覚なのでしょう。

二人の顔を交互に見て、今日三度目の脱力をしてしまったのは無理もない――

閑話 - 気の毒に - （後書き）

レークさん視点でお送りしました。
この人、個人的にお気に入りです。笑

厄介事、急展開

今日は陛下に招かれて食事をしてる。いつも食べているものよりも豪華なそれは、実は私が作ったものだった。

人払いをして食事をしている。コース内容はフランス料理だ。もちろん、正式なマナーに則っている。

私は師匠兼給使なので、同じ席には着いていなかった。

陛下とも一悶着あったけど、元居た世界のものを伝達するためだと言うと、しぶしぶ席についてくれた。てゆーか、この夫婦頑固です。

嫌われてはいない。むしろ好いてくれてる。それは分かるけど、一線を引いて決して折れようとはしてくれない。

私の言葉が通るのは、命令を下さない限りないのだと言う。そんなこと、したくないのに。

「乙女さま、とても美味しゅうございます。」

『王妃様、ネイとお呼びください。』

見目麗しい王妃様とは、会ってからと言うもののこの言い争いを続けていた。やはり、折れてくれないこの方は、頑固者だと言えるだろう。

てゆーか、こんな小娘に謙らないで欲しいんだよねー。

私なんて適当な性格してるし、腹黒いし、この国の名前を呼んではいけない神様のことを愛称付けて呼んでるバカ者なんだから。

って説明したのに、どうも上手くはいかなかった。

普段は言い勝る私なのに、陛下たちにはそれが上手く作用しない。王族たる人たちの威厳の所為か、単にものの考え方が同レベルなのか。それはそのうち確かめて行こうと思う。

これからの付き合い長くなりそうだし、いつか言いくるめて見せたいし。気長に様子見します。

こうしてこの日のディナーは滞りなく終了したのに。次の日になると、とんでもない事態に陥ってしまった。

いつものようにクーンさんと一緒に馬車を下りる。ここまでは普通だった。

「ネネネネ、ネイさまっ！」

駆け寄って来たミリアは酷く慌てていた。今まで優秀な女官としてのミリアは見てきたけど、こんなに慌てふためく彼女を観たのは初めて。面白くなって笑いそうになったけど、ミリアの言葉で全身の血が凍るような思いがした。

「噂が広まっています。」

何の、と問えば近づいてきて小声で答えをくれる。

「ネイさまが＜最後の乙女＞である、と。」

クーンさんも私も慌てて、陛下の元へと行く。その時に聞いたミリアの話だと、こうだ。

昨日の食事の際、女中の一人が陛下夫妻が誰かを“乙女”と呼ぶのを聞いた。

…人払いがされてたはずなのに。気になって聞き耳でも立ててたのかもしれないけど、それ不敬じゃないですか。

ま、それはおいといて。

陛下よりも上の存在は神。もしくはその言葉を伝える＜最後の乙女＞のみ。謙っているその様から、一人の少女が＜最後の乙女＞なのではないか、とのことだった。

それがどうして私に繋がるのか。

昨日の食事の際にはクーンさんがいた。それに宰相と神官も参加しており、給使にはクーン魔道師付きの侍女がひとり。その場にいた女は王妃様か私。必然的に王妃様はその対象から除外され、結果的に私が＜最後の乙女＞だと言われているらしい。

こんな事態、予想もしてなかった。陛下は約束を守ってくれるはず。だけど、勝手に公になってしまったものはどうしようもない。

「…やはり、いらっしゃいましたか。」

人目を無視して走り抜けた。その先にいたのは陛下。というのも、飛び込んだのが陛下の執務室だったから。

予想していた通りだったのか、書類から目を上げてそこに脱力していた。

「乙女さま、申し訳ありません。侍女の躾が行届いていなかったせいで。」

椅子から下りて私の前に傅く。いつもなら止めて下さいと言うところ。だけど、そんな気にもなれない。

だって、本当のことだから。

『その侍女が誰か分かりますか。』

「申し訳ありません。それが誰かは分かりかねますが、分かったところで罰を与えるわけにはいかないのです。」

侍女は貴族の娘。基本的に城は出会いの場でもあるから、お嬢様たちは働きに来ていると言うよりも結婚相手を探している。その娘や一家を潰すには周りの貴族たちの反感を買って、ボイコットされ兼ねないってことか。

「ネイ、少し気を静めてくれ。」

一応は静かにしている。正確にいえば、静かに怒っている。クーンさんにはそれが分かるのか、私の背中を支えてくれていた。

だけど、怒らないはずがない。約束、したのに。確かに、全てを陛下一人で掌握するのは無理かもしれない。だけど、そんな風に臣が手をつけられなくなるまで放っておいたこの国の政治の在り方が問題だ。

陛下一人の問題じゃなくて、これまでのオウサマによってそれが成り立ってしまったのかもしれないのに、頭の中がスーッと冷たくなって、思考のどこにもざわめきがない私は、自分がいかに頭に来ているかがよく分かった。

『ミリア、そこにいるでしょう。』

「…はい。」

『普通の女中服を持ってきて。あと、さっき聞いた話は内密にお願い。』

「…かしこまりました。」

扉のすぐ傍に立っていたであろうミリアに内側から話しかけ、お

願い事をする。その時の声が自分でもびっくりするくらい低かった。

「乙女さま、いかがなさるおつもりですか。」

『まず、私を乙女と呼ぶのは止めてください。』

問題はそれだ。それが原因でばれたんだから。頑固夫婦も大概にしてくれないと。いくら私が二人にとって敬うべき存在であっても、人としてお願いしたことさえも聞いてくれない。そんな人間を、どうやって信じろっていうの。…その前に、私が人を信じる事も珍しいんだけど。

「申し訳ございません。」

それさえもできないって言うの？マジでムカつく。

『いい加減にして下さい！どうしてバレてしまったのか、まだ分からないんですか。

もしあの時誰かにのぞかれていたとしても、貴方達夫婦が私のことを名前で呼んでいればそんな可能性なかったんです。』

陛下に説教垂れたくはない。だけど、自分がこの国にとって変な位置づけにいて、それを回避したい気持ちでいっぱいだから、つい声を荒げてしまった。

『私にとって、ただ笑って過ごせる時間が一番幸せで、一番貴重だったんです。』

結った髪を解いて、睨みつける。陛下は一瞬目を合わせたけど、

ばつが悪そうにすぐに目を逸らした。

手に力を込める。右手を開いて頭を撫で、意識して神の色を薄い茶色に変えた。そして、左手で目を多い、これまた意識して蒼に変える。それを見た二人はそれに驚いていた。

「ネイ、そんな力、いつ…」

『わかりません。こうした言って思ったらこうなりました。』

むすっとして答える。クーンさんにこんな態度取ったらいけないって思うけど、八つ当たり。だって、クーンさんと陛下って中身は全然違うけど、見た目がかなり似てるんだもん。

無言で髪を結わき、一つにまとめる。その時ちょうどミリアがやってきて、女中服を渡してくれた。

「ネイさま…その御髪と瞳は…」

『ごめんね、ミリア。ありがとう。』

今は何も聞かないで。みんなに中り散らしちゃいそうだから。また後で会う約束をして、そこから出て行ってもらった。

厄介事、急展開 - その2 -

外はざわついている。人がたくさん聞き耳を立てているみたいだけど、お生憎さま。一度陛下が私のことを乙女と呼んだ時点で、この部屋の会話が漏れないように魔法を使わせてもらっていた。

指で操作してカーテンを閉める。その場で私は着ていたものを脱ぎだし、新しい女中服に袖を通した。

二人は目を逸らして居辛そうにしていたけど、丸無視を決め込んだ。だって、他に着替えるところ無いもん。

着替え終わった私はカーテンを開け、陛下に向き直った。

『これは一時しのぎです。いずれは皆に分かってしまうでしょう。こうまでしても私は、少しでも長くのんびりとした日常を過ごしたいのです。』

とどめを刺した。オウサマは落ち込んでいるようで、悪いけどいい気味だと思った。

『クーンさん、しばらくの間専属で働くのを止めてもいいですか。』

「…どうして。」

『いくら髪型と目の色を変えても、元の噂はクーンさんの専属女中が＜最後の乙女＞だというものですから。』

私の存在を知らなかった人には、髪色が違えど、今傍に居る人がそうだってことになる。だから、保険としてそうしたい。

「今さら、ではないですか？おそらく外で聞き耳を立てている人間が多数おります。」

『大丈夫。周りにはこの部屋の音が聞こえないようにマホウ掛けておきました。』

だから、思った事は何でも出来るって言ったじゃん。二人して目を丸くしないで欲しい。

ふう、とあからさまにため息をついて、いらついているように見せつけてやった。

「おと…ネイさま。」

『陛下、“ネイ”と呼び捨てにして下さい。クーンさんだって、宰相さまだって、殿下だってそうしてくれてます。』

確実に私のこと乙女って言おうとしたね。

腑に落ちないのか、変な顔してる。それでも、さっきよりかは私のお願いを聞いてくれているようで嬉しかった。

「ね、ネイ。」

うん、うん。これで満足。私は満面の笑みで、何でしょうと聞い

た。

その表情を見てあからさまに陛下がホッとしたのは、今は気付かないふりをしてあげましょう。

一応は怒ってるからね。だからと言って、嫌いになれる人じゃない。陛下とはここ数日で確実に仲良くなっていた。

王妃様にお茶菓子を届けに行くと、陛下もそこに居る時があった。そんな時はいつでも人払いをして、国政についたり市井についたり話していた。もちろん、今までだって思考が面白いと言われてきた私の意見は、陛下を驚かせるには十分だ。柔軟な考えによって新たな政策を行うことにもなったと聞いた時は、本当に嬉しかった。

それに、話すのはいつもこの国のことだった。たまにクーンさんの話もあったけど。

本当にこの国のことを考えているんだな、って分かったから、過激派のおじさんたちとは違って嫌いにはなれなかった。

私の思考を知ってか知らずか、まだ難しい表情を浮かべる陛下は、私の様子を窺いながら訊ねてくる。

「我らに伝わる書物には、＜最後の乙女＞には守人が付き物です。誰が守人となったのでしょうか。」

あー…そんな事もあったねぇ。てゆーか、決め方とかかなり適当

だったしね。それでも、守人になってくれた二人には感謝しなくちゃ。

『守人の条件は、神殿の清水が毒にならない人物。』

説明するのが嫌だと思いながらも、律義に話す私を褒めて欲しい。

「毒にならないのは、代々の王と神官…」

そう呟いた後、はっと視線を彼に向ける。どうやらもう一人いる事に気付いたらしい。彼とは、つまりクーンさん。

急に視線を向けられたクーンさんは驚いていたけど、すぐに肯定の首肯をした。

『もう一人はレークさん。ジュノが適当に決めました。』

その場に居たからって言う安易な理由を話すと、陛下は不自然に動きを止めてしまった。これだけジュノを崇拝してる。ってことは、だ。あの姿を見たら感嘆こそすれ、性格や態度を知ったら脱力しちゃうんだろうなぁ。

うん、世の中知らない方が幸せな事もあるよ。と言うことで、ジュノの性格については触れてあげないことにした。

『もう一つ触れておきたいことがあります。』

これはクーンさんも知らないこと。私とジュノの間で交わされた会話だから。

『守人の契約を交わした時、クーンさんの名前をクーン・リッキンデル・デュークと呼びました。』

二人が息をのむ音が聞こえた。クーンさんも気づいてなかったらしい。あの時は空気に呑まれてたみたいだし。無理もないよね。

「それは、神がクーンを王家の人間として認めた、と…」

『さぁ、詳しい事は分かりません。私はジュノに言われた通りにしただけですから。』

いくら私がおざなりに言ったからって、冷たい人間だなんて思わないで欲しい。無理だろうけど。でも、私にだってあのつかみどころのないアホ神は分からないことが多すぎる。ジュノの本心を私が全て知り得ることなんてできないもん。

「それで？」

聞き返されても困る。

『私が伝えたかったのはそれだけです。ただ、クーン・リッキンデル・デュークが守人になったとお伝えしただけですよ。』

では失礼します、と綺麗に手を前で組んだ形で礼を取った。

クーンさんもそこに残す。だって、私は今日からクーンダンの専属ではいられないんだから。

私は足早にそこを離れ、ミリアがいるであろう女中部屋に急いだ。

…ダメだ、泣くな。

急に視線が滲んできた。我慢していたものが溢れるように。

恐れていたことが起こった。私の存在が過大評価される。私自身を、誰も知らないのに。私は、私を知ってくれていた上で仲良くしてくれる人たちと、のんびりと過ごしたかっただけなのに。

さっきは陛下の前で起こって見せて、気丈に振る舞えた。だけど、その状況から抜け出した途端に、我慢が聞かなくなった。

――相変わらず、見栄っ張りだな。

苦笑しても、目の前のゆがみが消えてくれる事はなかった。それは、やっと手に入れた平穏と、私をお前と呼ばずに名前で呼んでくれる人たちに出会えたのに、それを手放さなければいけないかもしれない可能性に動揺してるからだ。

どうすればいいんだろう。…どうしようもない。

その繰り返しばかりが思考を埋め尽くし、女中部屋に着いたころには瞳から涙が溢れてしまった。

「どうなさったのですか?!」

駆け込んだ瞬間に、駆け寄ってきてくれたその人にしがみついて、私は声だけ堪えて泣き崩れた。

「…とりあえず、こちらに参りましょう。」

そう言われたけど、私は上手く歩けなくて。支えられるようにしてそこを後にした。だけど、分かる事も一つ。

ミリアはあえて私の名前を呼ばなかった。髪色と目の色、服装を変えていたから。その優しさに縋りつくように、私はミリアに従った。

告白

ミリアは私をどこかの部屋へと誘った。それがどこかは分からないけど、小さなベッドが一つあるだけのその部屋の、唯一のものに私は座らされる。

その背を撫でてくれるミリアは、心配と疑問がいっぱいな様子だったけど、訊くことはしないでくれた。

「…申し訳ありません。業務時間となりましたので、私は行かなければならないのですが、ネイさまはお一人で大丈夫でしょうか。」

すまなそうに言ってくれるけど、ミリアには元々関係ない事なのに私が泣いてるからって理由で傍に居てもらってるんだもん。

仕事をしないで私の傍に居てもらうことなんてできない。

『だい、じょうぶ。』

泣き過ぎてて上手く喋れない。視界に入ってくるミリアはずっと歪んでいた。

「…では、なさそうですね。」

泣いてたらそう思われてるのも同じ。だけど、仕事は仕事。無理をさせちゃいけない。だから、行くように促した。

ミリアはちらちらこっちを見て気にしてるみたいだったけど、時間にはあらがえないみたいで、扉に手をかける。だけど、やっぱり心配は尽きないみたいで、出る前に、この部屋から出て行かないことを約束させられた。

どうしよう…

涙があふれて止まらない。やっと手に入れた小さな幸せを奪われるかもしれない。私はそんな些細な恐怖に苛まれて、今までなかったほど子供みたいに泣きじゃくった。

『私はっ…誰かが私を認めてくれたら、それで、よかったのに…っ…！

誰かの役に立てることが、幸せだった、のに！

…それを、奪わないで……』

大きな独り言を言う。声は震えて、鼻はグズグズ。酷い声が部屋中に響いた。

「…ネイ?そこにいるのか。」

『クーン、さん?』

蹲っていたベッドの上から顔を上げる。視界は滲んでいたけど、扉を開けているその人がクーンさんだということは、纏っている空気で容易く分かった。

「泣いて、いるのか?」

それが分かったのか、クーンさんはすぐに駆け寄ってきてくれ、私を強く抱きしめてくれた。

優しい空気、温かさ。クーンさんの香りに包まれた私は、そうしてくれているのと同じように背中に手を回してギュッと力を入れ、そして、その胸に縋りついて大声を上げて泣いた。

――どのくらい泣いてたんだろう。それが納まる頃には、私はクーンさんが胡坐をかいているその上に横抱きにされ、身体全体を包んでもらっていた。

小さな子供をあやすみたいに、背中を一定のリズムでポンポンしてくれている。それを恥ずかしく思いながらも心地よくて、私はまだその胸に縋りついていた。

『私、あの人たちに認めてもらったこと、無かったから…

名前を呼んでもらえる事も、笑顔を向けてもらえる事も、嬉しくて。私個人を見てもらえて、役に立てる事も見つかって…それが、どんなに小さくて些細な事でも、嬉しくて…

そんなこと、初めてだったから。』

私は時間をかけて、ゆっくりそう言った。クーンさんはその間、ああ、と小さく言ってくれるだけだったけど、まだ頬を伝っている滴を拭ってくれていた。

『どんなに人の役に立てても、一度私自身を見てもらえることを知っちゃったから…

＜最後の乙女＞として認知されて、私を見てもらえなくなることが、怖い……』

それがどうした、と言われるかもしれない。だけど、私にとったら大問題だった。

私を拒絶して名前も呼ばない家族。そんな環境だったからか表面上でしか接せなくなった友達。ここに来て、一からの自分を見てもらって、優しくしてもらえる。…こんなに幸せな事があっただろうか。

私はまた小さく嗚咽を漏らし始める。涙を拭ってくれていた手は、今度は私の頭を撫でてくれた。

「ネイ、俺は変わらない。ネイをネイとして見る。」

うん、嬉しいよ。クーンさんは私の嫌な所を知っていて、それでもなお普通にしてくれてるから、そうしれくれるのかもしれない。

…でも、他の人はどうかはわからない。

『クーンさん、レークさん、宰相さま、殿下だって、きっと変わらないでいてくれる。だけど、エルさんやマーサさんたちは全部は知らなかったから、変わっちゃうかもしれない。

それに、これから出会う人は私のことを＜最後の乙女＞っていうフィルターを通して見るから。どうしても、私個人を放置する。その時、初めて会った陛下たちみたいな態度を取られたら、一線どころか何本も線が出来たように、遠くなる。

私には、今の生活が最善で、初めて手に入れた、幸せだったんです…』

全てを吐露した。クーンさんはさっきみたいに何かを言うことはなくて。ひたすら近くに居て、慰めてくれてる。

だけど。

急に切羽詰まったような声が聞こえた。

「…俺が、傍に居る。ずっと傍に居て、ネイをネイとして、見るから。」

クーンさん…？

さっきまで私の身体を支えてくれていたはずの手が、私を力強く抱きしめる。その強さは、必至で私を何かから繋ぎとめるかのようだった。

泣いていたことを忘れて動きを止めてしまう。私は視点が合わない目でクーンさんを見つめていた。

『クーンさ…んっ…！』

な…に…？

何が起きたのか分からない。だけど、歪んだ先にあるクーンさんの顔がものすごく近くにあることだけは分かった。

「…悪い。」

急に離れていく体温が淋しい。だけど、状況が理解できない私は引き留める事さえできなかった。

「こんな時に、言うことじゃないかもしれない。だけど…

…俺はネイが好きだ。愛しいと思う。だからこそ、これから先、ネイの隣に在りたいと思う。

…俺は、ずっとずっとネイをネイとして見れる自信がある。」

理解が、上手く出来なかった。

クーンさんが…好き？…何を？

状況が全く理解できない私は、呆然とするしかない。ただ、暗い部屋に一端光が差し、る偽の瞬間にはまた暗くなる。そして、クーンさんの気配もなくなった。

しばらくそのままそこに佇み、視点があってくる。そして、話の内容も全て脳に伝達された。

…クーンさんが、私を好きだと言った。

そして…

私はパッと両手で口を覆った。心音が早くなって、全身の血がものすごいスピードで駆け巡る。さっきまで泣いていたこととか、不安になっていることとか、全部がさっきの出来事に上書きされて、頭からはじけ飛んでいた。

キキキ、キス、された!!!

クーンさんは私にとって、お兄ちゃんみたいな人で。でも、そう位置づけるにはしこりが残って。正確に私にとってどんな人かは明言できない人。

私は混乱と効用を胸に抱いて、ベッドに体育座りをした。それから顔を自分の膝に埋めて考える。その間も、クーンさんの香りは鼻に残り、腕の感覚が身体に残っている。そして、冷たい唇の感覚も。

それを思い出して赤面し、忘れ去るように頭をぶんぶん振る。そして、自分の胸に浮かぶ疑問を考えた。

――クーンさんは、私にとってどんな存在、なんだろう。

後悔と苛立ち（前書き）

今回は短めです。
クーンさん視点です。

後悔と苛立ち

「クソッ！」

悪態をついて、握りこぶしで机を殴った。それは後悔の表れ。そして、自分に対する苛立ちだった。

兄上の所から逃げるようにして去ったネイを追い、女中部屋へと顔を出す。そこに居たミリアからは、俺の執務室の仮眠室へと誘ったと言われた。

俺の気持ちに感づいているからか、傍に居る事を配慮してもらったことに感謝する。そして、足早にそこを後にした。

執務室へと入り、奥へと続く扉へと手をかける。その時。

『私はっ…誰かが私を認めてくれたら、それで、よかったのに…っ…！誰かの役に立てることが、幸せだった、のに！

…それを、奪わないで……』

震えるような声が聞こえた。それを聞いた途端、俺の行動は一つに決まっていた。勢いよく扉を開ける。そして、その傍まで駆け寄った。

ネイが泣いている。それを抱きしめるのは、俺の特権だ。

珍しく自分のことを饒舌に話してくれ、その言葉は大きく俺の心を揺さぶった。

ネイは両親に蔑ろにされていた。それは以前に聞いたこと。名前を呼ばれる事はなく、扱いも赤の他人同様だった、と。

その気持ちが、こっちへ来てから変わっていたなど、俺は気付きもしなかった。ネイの家庭事情は聞いていたが内心を聞いたのは初めてのこと。だが、それを嬉しいと思いながら、吐露された本心に焦燥感を抱いた。

…なぜ、気付いてやれなかったのだ、と。

自分は唯一ネイの過去を、ほんの少しだったとしても、聞いていた。それなのに、当たり前の日常生活に、ネイがそれほどまでに幸福感を抱いていることなど気付かなかった。彼女を想いながら、気付いてやれなかった。

いや、普通なら、気付いていたはずなんだ。

なのに、俺もネイが傍に居てくれることで明るくなった日常に幸福感を抱き、配慮を忘れてしまっていた。ネイが全ての感情を言葉にしないことなど、分かっていたはずなのに。

後から後から、次々に後悔が浮かんでくる。俺は頭を抱えるようにして、顔を机に伏せた。

何よりも後悔している事は、自分の本心をネイに告げてしまった事だ。好況をわきまえず、いい歳をした大人が残念な構想をしてしまった。

しかし、それには訳がある。

ネイはもう一人のネイとひとつになった。つまり、もう一人のネイの過去を持ち、思考も少し変わった。もう一人のネイがしたこと。それは――――自殺。

全てが嫌になって死を選んだのだという。それを、今回もしてしまったらどうしよう、という不安に駆られ、思わず強くネイを抱きしめてしまった。その時、小さく震えていたからだが、余計に俺の不安を大きくしたのは無理もない。

しかし、だからと言って唇を奪うなど…あっていいはずがない。

確かに、潤んだ瞳が俺を捉えていて煽られた…いや、不安そうにしているネイを繋ぎとめるためにしただけだ。

そう言い聞かせてみたものの、嘘は付けない。

愛おしいんだ。俺のものにしたいんだ。

苦しい思いが自分の心を埋め尽くす。こんな想いは初めてだった。本音を言ってしまえば、思いを通い合わせたい。そして、もう一度口付けをしたい。

いや、今は俺の気持ちは関係ない。ネイのことを一番に考えるべきだ。

ネイは周りの人の態度が変わるのを恐れているようだった。自分を自分として見てもらえないかもしれない、という不安を抱いていた。だからこそ、己の心を暴露してしまったのだ。

誰が何と言おうと、俺の態度は変わらない。ネイをネイとして見て、愛し続ける、と。

そんなことを告げたら、関係性が変わってしまうだろう！

今になってそんなことに気付き、自分の馬鹿さ加減に嘲笑を浮かべた。

「クーン魔道師さま、少々よろしいでしょうか。」

唐突に扉が開き、思考が中断されてしまう。俺は思わず、その役人を睨みつけてしまった。

「ヒッ！」

なぜか、怯えられた。少し睨みつけただけだと思うのだが。

それから俺は、来る人来る人に怯えられ、様子を身に着たミリアでさえ青い顔をされた。

「…なぜご機嫌が悪いのかは分かりませんが、人を次々に射殺すよ

うな目で睨みつけるのはおやめ下さい。

クーンさまの機嫌が悪く、話を取りあわないと噂になっておられますよ。」

それは、どいつもこいつも＜最後の乙女＞のことを聞きにわざわざやってくるからだ。ネイはそれを望んでいないし、今は俺が言った言葉で混乱しているだろう。空気で察してくれ。

そうは思ってみたものの、ミリアの忠告も一理ある。だから、一度だけ首肯した。

「今は城内全体がざわついていますし、ネイさまのことで持ちきりで苛立つのも分かりますが、人を傷つける事はしないで下さいまし。」

ミリアは変な忠告を残してネイの元へと行った。と、間もなく出てくる。そして俺に言った事は。

「ネイさまに何をなさったんですか。」

睨むような、そして呆れた様な顔で言われた。

「私はクーンさまを応援するつもりですが、それはネイさまが笑顔でいてこそです。」

さっきとは、明らかに問題点が変わっている。それまではネイが＜最後の乙女＞だということが発覚してしまったことが問題だったはず。それが、いつの間にか俺がネイに何かをした、というものに。

泣いているネイの頭から重大な問題が抜け落ちた事は良かったと思うが、突発的な自分の行動は確実にあの時には不釣り合いだあった。そうやって、また後悔がつのるばかりだ。

それがさらに募ったのは、その日の夜だった。

俺は帰ることをネイに告げ、別行動をとって馬車に乗ることを提案したのだが、その時に一切俺のことを視界に入れようとしない。さらに、同じ馬車に乗って屋敷まで帰る時も、同じように視界に入れようとしなかった。それに加えて、会話など一切ない。

…こんなに辛いと思うことが、未だかつてあっただろうか。

幼いころの記憶が薄れているため、そんなことを思ってしまう。今なら、前国王に認知されなかったことや、貴族連中に嫌がらせを受け続けていることなどなんとも思わない。そんなことよりも、今のこの状況の方が辛いのは確かだ。

結局その日は恒例の髪拭きもできず、ネイの艶やかな黒髪に触れられなかった初めての日となってしまった。

俺の中には後悔と、苛立ち。それに少しだけ焦燥感があり、どうしようもないこの感覚をごまかす為に、度の高い蒸留酒を珍しく呷って、その夜を一人で過ごした――

信じるということ

帰りの馬車は無言。夜の時間はいつもと違って一人きり。ううん、一人ぼっちだった。

私はお風呂に入ってから、自分で髪を拭う。いつもならクーンさんがやってくれてるのに…と、ここまで考えて急に赤面してしまった。

クーンさんが、私のことをその…す、すすススキ、じゃなくて、好きって……?!

考えた事もなかった。自分が誰かから好かれることなんて。

ずっと疎まれて、漸く私を大切にしてくれる人たちが出来たと思ったら、すぐに居なくなった。…また、すぐに居なくなるかもしれない。

そうだよ。きっと、一時の気の迷いだ。また、すぐに裏切られる。私の前からいなくなっちゃう。

だけど、クーンさんはそんな人?

…違う。まだ短いけど、一緒にいて、真摯で誠実で、嘘なんてつく人じゃないって分かってる。なのに、クーンさんの言葉が信じられない。

てゆーか、そんな素振り見せなかったくせに、いきなりあんな状況で言わなくたって。

…あ！

ひらめいた。もしかしたら、私があんな風になってたから、気を紛らわす為に言ってくれたのかも。って、キスの意味は？…よく考えたら、初めてだった。

思いだして、恥ずかしくなって。私はベットの端っこで、小さく蹲る。そして、膝に顔を押し付けた。

きす、しちゃった。唇を手で覆う。あれ、クーンさんが本気だってことを示してるのかな？それとも、やっぱり気を紛らわす為に…？

てゆーか、考えて答えが出ないんだから、今は別のことを考えるべきだ。この先を、どうするか。

いっそのこと、逃げる？それもいいかもしれない。

うん、それが最善。と、言う訳で荷造りを…って言っても、カバンも服もお金も持ってないし。

ぐるりと部屋を見渡しても、自分のものと呼べるものが存在しなかった。この屋敷の中にもたくさんの使用人さんがいて、誰にも気づかれないうちに逃げだすってのも無理そうだ。

はあ、と嘆息一つ。

「ネイ?どうした?」

『宰相さまっ』

宰相さまが扉の近くに立っていた。いつの間に入ったんだろう。全然気付かなかった。

私が吃驚している訳が分かるのか、苦笑して近づいてくる。その手には白いものが握られていた。

「陛下から手紙だ。ネイのことだから、今のうちに逃げだそうとするだろう。だから、そうはさせないという稀を伝えて欲しいとのことだ。」

丸分かりかい。思考が読まれてるのって嫌なんだよねー。てゆーか、展開的にはここで逃げ出すのが王道だから、そう考えちゃうのは仕方ないのかも。

「それより、さっきから百面相をしていたが、何かあったのか。」

何かって、今日はそりゃいろいろありましたよ。乙女だということが知れ渡り、クーンさんに告白とキスをされ、おまけに陛下からは逃亡するなと伝言され。私の意志で動いたことが一個もない。

『宰相さま。』

声をかければ笑顔が返ってきた。顔自体は怖いけど、その人を知

っているからこの笑顔がとても優しいことが良く分かってる。なんだ、と聞いてくれるその姿に、おじいちゃんを重ねてしまった。

だから、甘えるように訊ねる。

『信じるってどう言うことですか？』

「それは、難しい問題だな。」

近寄ってきて、ベッドに腰掛ける。それは、真剣に考えてくれようとしてるんだって、そんな風に思える行動だった。

しばらく難しそうな顔で考える。

「まずは、自分を信じる事から始めるべきだ。誰かを信じるよりもまず、自分を信じること。ネイは、自分を好いていない。おそらく、期待もしていなければ信じもしていない。」

違うか、と問われ、思わず考え込んでしまった。

自分は自分でしかない。それを、信じるというのはどう言うことなのか。加えて、自分を好きじゃないことを言い当てられた。本当に、そうだから。

私は小さな声で肯定を示した。

「それが分かってるなら、後は自分の良いところも悪い事も知ること。それが出来れば、自分の理解者になれるよ。」

…難しいことを仰る。

理解できない私は首を傾げたけど、宰相さまは今は分からなくてもいいよ、と言って頭を撫でてきた。

「それともう一つ、自分を信じる事が出来たら、人を信じる事をすればいい。

あと、ネイが聞きたかったことは、おそらく人を信じる方法と、人に信じられる方法だろう。」

…うん、そーだね。

少し考えてしまったけど、結局はそう言うことだ。私は人を信じる事が出来ない。人に嫌われることが怖いのに、その人を信じる事が出来ないなんて、自分勝手過ぎるよね。

「人に信じられたかったら、まずは自分から。」

その言葉は、重くのしかかった。だって、本当にその通りだから。人を信じたいのに、出来ない。だけど、信じて欲しい。そんなの、不公平だもん。

「例として、うちの愚息を出そう。」

『クーンさん?』

そう、と返事が返って来た。何てタイムリーな。その話題は今や私の中では触れちゃいけないことですよ。

って、宰相さまが私たちの間に起きたことなんて知るはずもない。私は小さく頷いて、話を聞くことにした。

「ネイはこちらに来てから、ずっとクーンと居るだろう。あれは、嘘をつくような人間だったか。」

『…いいえ。』

むしろ、吃驚するほど真っ直ぐだ。表情は出にくいけど、決して裏で画策するような人じゃない。私を、本気で心配してくれる人。

「あいつの言葉は信用に足る。違うか？」

『…その通りです。』

今まで嘘なんて無かったもん。私を心配してくれて、私を支えてくれて。クーンさんにとったら利害何もない。それなのに、無条件の優しさをくれる人。

「その返事が出来るんだ。ネイはクーンを信じる事が出来る。私の言葉に嘘はない。これも、そのうち理解してくれると嬉しいよ。」

はい、と返事をすると、宰相さまはもう一度私の頭を撫でて、頬笑みを浮かべてから部屋を出て行った。

…なんか、答えが出た気がする。

信じるということ、だけじゃない。今日の昼間の出来事、クーンさんに言われたこと。

たぶん、自分に都合の良いように決めつけようとしてた。クーンさんが向けてくれた好意を、いつかは離れていくものだから、って。

それに、私の気持ちも。自分の気持ちに鈍感になってた気がする。ううん、分からないふりしてた気がする。

だって、そうでしょ？今まで信じられなかった人たちが傍にいた。信じてもらおうと思っても何度も裏切られたから、信じてもらうことを諦めてた。でも。思い返してみると、自分から信じようとはしていなかった。

私、今までどのくらい殻に籠ってたんだろう。

考え直してみても、答えは見つからない。だって、その殻から脱したところで、あの人たちは私と関わろうとしなかったし、今私の目の前にいる訳でもない。だったら、ここから始めよう。

自分の心に答えを出した私は、クーンさんが今ここに居てくれないことがとてつもなく淋しく思えてきた。

明日、素直になってみよう――

そう思ったら、心も身体も何だかすっきりと軽くなった気がして、深い眠りにつくことが出来た。

返事

って、待て！

朝目が覚めて早々、何も解決していないことに気付いた。

自分の気持ちには気付いた。それに正直になろうとも思う。そして、自分を信じて、クーンさんを信じる事から始めようって思った。

だけど、その前に＜最後の乙女＞のこと考えるの忘れてた。

間抜けすぎる。

私は一度起き上がったベッドにもう一度倒れた。力が抜けたから。

のろのろとサイドテーブルに手を伸ばして、昨日渡された手紙を開ける。そこには、今日陛下の元を訪れて欲しいことと、逃げだしたらどんな手段を駆使してもどこまでも追い掛けていくとか言う、脅しが書かれていた。

…拒否権ないじゃん。

はぁ、ともう一度布団にへたり込む。白いそれは、フカフカのモコモコで、眠りを誘うには充分だった。のに。

「ネイ、行くぞ！」

ノックも無しに乙女の部屋へ突入してきた宰相さまによって妨げられた。

てゆーか、またこのパターンか！

って、祖父くらいの年齢の宰相さまに行っても仕方ないよね。乙女の部屋を勝手に訪れるなとか言っても、小娘の私を気にすることはないだろうし。

私は何かを諦めた。

もう一度布団に脱力できるわけもなく、無理やり起こされた私は入って来た女中さんに着替えさせられた。

今日はいつもと違って、メイド服じゃなく生成り色の簡素なドレスみたいなのを着せられる。髪も結われ、化粧も施された。

朝から疲れたよ。

馬車で揺られていく間、正装は侍女としてではなく客人として招かれたからだと言われた。

気が重いなぁ。朝からクーンさんにも会ってないし。折角言いたいことが出来たのに。…もしかして、避けられてる?昨日、あんな態度取っちゃったし。

変な態度取っちゃったけど、今思い返すと混乱してたって言うか…今ならきっと言葉に出来るから、出来れば会いたいんだけど…

「また、百面相だな。」

いろいろ考え過ぎていて、宰相さまがこっちを見ていることに気付かなかった。私は今までの思考を全部見られていたような気がして、赤面する。誤魔化すように外を覗いた。

何を考えていたかは聞いてこないから安心。宰相さまは、さすが年の功。スマートに対応してくれて有り難かった。

もう少しで城に着くという頃。私は思っていたお願いをする。

『陛下のところへ行く前に、行きたい場所があります。』

どこかを問われ、私はまずクーンさんのところと言った。だけど、宰相さまは渋い顔をしている。何か、問題でもあったんだろうか。

「朝、あの愚息は機嫌が悪かった、いや、何かを悩んでいるようだった。今日会うことは勧めないが。」

最後の言葉を濁し、どうするかを訊ねてきた。だけど、そんなの訊かれなくても答えは決まってる。

『…会いに行きます。で、その後に神殿に行きたいんです。ジュノと話したくて。』

「神、と？」

『はい。』

さも当たり前のように答えると、宰相さまは固まっていた。

って、そりゃそーだ。神様が絶対的な存在のこの国では、名前を呼ぶことも許されていないんだから。

それに、神様の存在を見る事が出来ないから、宰相さまから見たら私は物珍しいんだろう。

だからって、そんなに驚いたように固まらなくたっていいじゃん。でも、ちょっと面白いから、そのままにしておこう。

残りの短い時間で打ち合わせをして、到着するのと同時に昨日のように髪と目の色を変えた。

やっぱり宰相さまは驚いている。私をエスコートしている間に、魔法について聞かれた。

『私、いろいろ魔法が使えるみたいです。』

にっこりそう言うと、もう何も言うまいと宰相さまはため息をついていた。

「おや、宰相殿。そちらの御方はどなたかな。」

げっ！

思わず顔を引きつらせそうになりながらも、笑顔を絶やさないように努力する。二人でクーンさんの執務室へ向かっているその途中の道すがらで、過激派の赤い羽根をつけた一人の男に捕まってしまった。

「ルイス殿。あなたに関係があるとは思えない質問ですな。」

宰相さまー。なんか笑顔が怖いよー。てゆーか、いまルイスって言ったよね。

その名前が意味するのは過激派の筆頭の人物。議会の大物。

今度はそっちに顔を引きつらせないようにしながら、私は傍観者にでもなったつもりでそこに立っていた。

「何か良からぬことでも考えておられるのかな。その麗しいお嬢様が誰なのかを訊ねる事が、別段悪いとは思えません。」

ニタッと笑う、その笑顔が気持ち悪い。画策を好んでいそうなキツネに似たその人は、自分の七三に分けられた前髪を撫でつけながら私を舐めるように見回した。

ここで、笑顔を絶やさなかった私を褒めてください。目が合っちゃったから、ちゃんとお辞儀もしましたよ！

「この娘は、レーク殿の再従兄妹に当たる。今日は神官の才を確かめにやって来た。」

「ほう、この娘が…しかし、解せませんな。そのような用事があれば、まずは神殿に向かうべきでしょう。それに、なぜ貴方と居るんだ？」

いちいち気に障るような事言うなよ！それに、さっきから不躾に見過ぎなんですけど。

そんなクレームをつけてやりたいのは山々だったけど、今ここで波風を立てるのは良くない。どうやって乗り切ろうか。そう考えを巡らせていると――

「お礼ですよ。」

『れ、お兄様。』

突然現れた人物を、レークさん、と呼ぼうとして、さっきの馬車の中で取り決めた設定を思い出す。

私は神官の才があるかどうかを確かめに来ているが、王都に来たのは随分前のこと。神殿にやって来たのが今さらになったのは、賊に襲われて怪我をしたからだ。

と言うことは、お礼って言うのは賊から助けてくれたクーンさんへの感謝、と言う意味。私は素早く頭を働かせ、ルイスっておじさんに向き直った。

そりゃあもう、極上の笑みを浮かべるような気持ちで微笑んでやりましたよ。

『私を助けてくれた、クーンさまにお礼を述べたかったのです。

漸く外出することが出来るようになって、朝一番にシェパード様のお屋敷に行きました。けれど、クーンさまはお忙しいお人なのですね。もういらっしゃらなかった。

落胆していたそんな私をここまで案内して下さったのが、宰相さまですわ。』

必殺、猫かぶり。私、何匹も被りますよ。お淑やかなお嬢様だって上辺だけを信じさせるには、十分なくらいに。

そんな私を見て、宰相さまもレークさんも笑いを堪えてる。

そりゃ、普段の自分とはあり得ないくらいかけ離れたキャラを被ってるのは認めるけど、こんな場面で笑うことないじゃん。

でも、二人が笑うのも当然。わざとらしく、しおらしく、お嬢様らしく。そんな風に目をキラキラさせ、両手を組んでみた。ってことで、どう考えても、普段の私とかけ離れててキモい訳ですよ。

二人は、時折咳払いをしてごまかしてるみたいだったけど、目ざとい私はそれを見逃さなかった。

後で何か仕返しを考えよう。

「そ、そうか、ならば早く行くがいい。」

およよ？なんか、騙されてくれた感じ。私はにっこり笑顔を浮かべて一礼をし、二人に続いてその場を後にした。

廊下を真っ直ぐ進む。隣で笑っている二人の横腹を肘で小突いた。

『笑い過ぎです。』

「すまない。」「すみません。」

同時に謝ってくれたはくれたけど、やっぱり笑いは納まっていなかった。

むう。もう怒った。

私は手でピストルの形を作って、二人に向ける。バン、と口で言うと、思った通りに、空気の塊がぶつかった。

「おわっ！」

前のめりになる宰相さまを、自分もよろけながらレークさんが支えている。

少し離れたところにいる二人は、私を訝しげに見てきた。ふふふ、と不敵な笑みを浮かべ、ポーズをとってみる。やっぱりピストルと言うものに馴染みがないのか、不思議そうな顔つきに変わっていた。

『ピストルです。』

そう言っても伝わらないのは分かってたけど、とりあえず言ってみた。案の定、二人は分からない様子で。私は拙いながらに、ピストルの説明をした。

「そんな兵器があるのですか。進化した文明は恐ろしいですね。」

『そうですねえ。まあ、米国だと一般の人が持っているから怖いですけど、ニホンだと銃刀法違反で持ってたら逮捕されますから、そこまで怖がることはないですよ。まあ、それで平和ボケしてるところもありますけど。』

それに比べたら、こっちは随分と危険が満載らしい。らしい、って言うのは、私は城と宰相さまのお屋敷を馬車で行き来しているだけだから、実情が分からないのだ。

今日の朝読んだ手紙でここから逃げ出せないことは分かってるから、そのうち城下町に抜け出して行ってみよう。

今なら魔法も上手くコントロールできるし、安全面から言ったら大丈夫な気がする。

「さて、着きました。私たちはどうしたらよいでしょうか。」

考え事をしている間に、クーンさんの執務室についてしまった。

返事ー その２ ー

こっ、心の準備忘れてた！

急に焦り出した私を、二人は何事か、という顔で見てる。だけど、そのうちの片方は何かを企んだような笑顔になり、目の前の扉をノックしてた。

ちょっと、何してんすか！

その叫びは、出てこなかった。

緊張し過ぎて、魚みたいに口をパクパクさせるだけ。一人分からなさそうな宰相さまは、見守ることに決めたらしい。腑に落ちない表情で黙って立っていた。

「失礼します。おや、すごい顔してますね。寝不足ですか。」

ひょうひょうとして中に突き進んでいくこの人は、本当にこの国の中枢である神殿に仕えてる人なんでしょうか。いささか、この国の先行きが不安になるのは私だけなんでしょうか。

思考がショートしてる。だから、考えていることが可笑しいとか言うツッコミは、受け付けません。

「…おや、何かありましたか。」

今度は目ざとく私たちの顔を交互に見る。その顔が面白そうなのがどうも許せない。いつか、復讐してやろうと心の中で決めた。

「ここは、お二人で話すのがよさそうですね。私は表で待っています。」

意気揚々と出て行った。痛い沈黙が残る。お互いに目を合わせないまま、何もない時間が過ぎた。

思うところはお互いにあったんだろうけど、口に出せないのが現状だ。

「…なにか、用があったのか?」

『…はい。』

いつもより、声が低かった。それに、小さく零れた様なその声は震えていた。私の緊張をそのまま表している。

私は身体全部が震えた様な気がして、入ってすぐの扉の前から動くことが出来ない。それでも前に進もうとすると、足までもが小刻みに震えているのが分かった。

…恥ずかしい。これがクーンさんにバレていて欲しくない。

俯いたままゆっくり、ゆっくりと前に進む。ようやく辿りついた机の前で、私は深く呼吸をした。

目の前には、いつものようにたくさんの書類が重なっている。その様子からみて、クーンさんはいつも通りに働けているんだと安心し、ちょっとだけ落胆した。

『クーン、さん。』

私は、いつまでもそうしていられないと決心して、ぐっと前を見据える。目の前にいたクーンさんと真っ直ぐ目を合わせて、昨日気付いた自分の心をゆっくりと言葉として自分の口から紡いだ。

『昨日、気付いたんです。』

クーンさんが傍にいてくれることが当たり前で、私を心配してくれるのが当たり前で。陛下に求めた日常に、クーンさんが欠かせなくなっていることに。そして。

『…私、クーンさんのことが…好き、です。』

――――と、いうことに。

何かが自分の中で切れた。何か、糸みたいなものがプツンと。そうしたら、今まで思ってたこととか、これからどうしたい、とか。バカみたいに正直に口から出てて。それと一緒に、自分の目から熱いものがもあふれ出ていた。

「ネ、ネイ。それは…本当か？」

焦ったような声。それは、私の知っているクーンさんで、皆の知

らないクーンさん。

『こんなこと嘘なんて、吐きませんよぉ。』

我ながら情けないことになってるとは思う。だけど、どうしても涙は止まってくれなかった。

『私、人も自分も信じられない…けど、それでも、初めて信じてみたくて、信じてもらいたいと思ったんです。

私のこと…信じて、もらえますか？』

両手で覆っていて視界を捉えられない私を、温かな感触が包み込んだ。

「信じる。信じてる。これからもずっと。」

甘い囁き。それが自分の耳元で聞こえてることが分かったら、感触はクーンさんによって作り出されたものだって分かった。大きくて温かい腕が私を包む。私も同じように、広い背中に腕を回した。

「ネイ、もう泣くな。」

何度も何度もそう囁いてくれたけど、その優しい囁きが余計に私の涙を誘発させてるだなんて、クーンさんは分かってないんだろうなぁ。

段々、涙も嗚咽も治まって来た。

だけど、もう少しだけ。

涙が完全に止まっても、しばらくの間、甘えるようにその腕に身体を預けた。

部屋に入った時のように沈黙が続く。だけど、それは全然嫌なものじゃなかった。むしろ、心地良い。誰か人が傍にいてくれる時、こんな風に思ったことは未だかつてない。クーンさんが初めてだ。

『…そろそろ、行かなくちゃ。』

ずっとここにこうして居たい。だけど、そうはいかない。

私は自分からその腕の中を出た。離れた時に目に入るクーンさんの少しだけ寂しそうな顔。それが、少しだけ嬉しかった。

「どこかへ行くのか。」

『はい、ジュノに会いに。その後は陛下のところへも。』

何事かと聞かれ、クーンさんに昨日陛下から届いた手紙を見せる。そして、今の私がどう言う立場でこの城内に足を踏み入れたのかも説明した。

「兄上にしては、力を誇示してきたな。何か考えがあるのか、それとも貴族たちが動き出したのか…」

どうやらきな臭くなってきたらしい。

クーンさんの呟きで、私は予測に貴族のことを考えていなかったと思いだした。

陛下は確かに上から目線。だけど私に謙っていて。そして、嘘はつかない。信念は曲げない。私は陛下をそんな人だと思ってる。

今回の手紙は、陛下の意思じゃなく、貴族たちに言い寄られてるのかも知れない。陛下にこそ威信はあるだろうし、それこそ国を担う重鎮だもん。反逆者が出たら国政が伴わない。

＜最後の乙女＞をひた隠しにして、独占していると思われたら皆従わなくなるかもしれない。それが特に過激派だと厄介だな。

しばらく、考え事をしていたから、クーンさんが心配そうな表情でこっちを見ていることに気付かなかった。

頭の上に重みを感じ、その後に温かさが伝わる。はっと気づいて顔を上げると、クーンさんが頭を撫でていた。

『どうかしましたか？』

「俺も共に行こう。」

その言葉に、途端に嬉しくなる。それは、昨日一緒に居られなかったからこその反動かもしれない。少しでも一緒に居たいと思っていた。

だけど、そこで気付く。クーンさんの机の上に広がる書類の数々。これを放置して行けるほど、この国の政務は捗っていない。

『…お仕事、有りますよね。』

そう言ったのだけど、いいんだって。紙にさらさらと何かを書いて、それを丸めて手に持った。そして、私の隣までくると、背中を軽く押してエスコートしてくれる。外の人たちをあまり待たせてはいけないから、早く行った方がいいとのこと。それはそうだと納得して、促されるまま従った。

『お、待たせしました…』

口調が変になっちゃったのは、目の前にいる御人の所為です。

相も変わらず、いけ好かない笑顔を浮かべている。さっきと違う空気感を読み取ったのか、よりいけ好かなくなっていた。一方で理解できていない宰相さまは始終不思議そうだ。

だけど、お願いだから分からないままでいてください。私は心の底からそう思ったし、そうでいてくれることを祈った。

「さて、神の元へと参りましょうか。」

素早く神殿へ移動する。それは、先のクーンさんの執務室訪問に時間を取られてしまったからだ。早く陛下のところに行かないと。だけど、それには確かめたいことを確かめてからしか許せない。

さっきのことは嬉しいけど、ここは気を引き締めて行かないと。

ああ！

急にあることを思い出した。さっきの一部始終、もしかしたらジュノが見てたかもしれない…

あー、完璧忘れてた。これでからかわれたらどうしよう。でも、常にこっちにいるわけじゃないって言ってたし、大丈夫だと思おう。

うし、と拳に力を入れて小さく気合を入れていると、隣にいるクーンさんがどうかしたかと聞いてくる。

その時の、窓から差し込む光の当たり具合。抜群過ぎて鼻血もの。きっと真っ赤になってるであろう顔を背けて、何でもないと言って誤魔化した。

『今日は私一人でジュノと話をします。』

そう言って神殿内に進む。中にいた人たちは何事かと訝しげな表情をしていたけど、レークさんが礼の胡散臭い笑顔でやんわり追い払ってくれた。

ひとつ息を吐いてから、神殿の入口方面に向かって手をかざす。それは、聞こえないように壁を張るため。頭の中で想像すると、簡単にそうなってくれた。

今度は鏡盆に向かって歩いて行き、手をかざす。そして、呟いた。この国の神の名を――ジュノワール――と。

「お呼び出しご苦労様。そろそろくると思っていたよ。」

いつもと違っておもちゃを持っていない。そして、至極真面目な表情だった。こんなの、ジュノらしくないと思う。だけどその一方で、こっちが本質じゃないかとも思う。

まあ、ジュノに掴みどころが見つからないことには変わりはないけど。

『私は質問に来たの。正直に答えて。』

周りの人のことなどもう気にしていられない。私はジュノと二人きりの世界に入った。

事実と決心

『ジュノは私をこちらの世界へと引き込んだ。それは、自分が異世界へ行った時に生じたひずみの所為で私の人生が変わってしまったからだと言った。』

そうよね、と聞けば、そうだね、と返ってくる。少しだけ笑っているその表情は、これから何を聞かれるのか悟っているような感じだ。それでいて、訊いて欲しくないという空気を醸し出している。

だけど、そんなの無視だ。なんか、この国の政治に思いっきり巻き込まれそうな気がするから。いや、現在進行形で思いっきり巻きこまれつつあるのか。

『ジュノは自分で一人一人に干渉することは許されていないと言っていたよね。それって、異世界なら余計にそうなんじゃないの？』

ここまで訊けば、もう諦めたようだ。自嘲気味に笑っているその表情は、ジュノには似合わない。そんな顔をさせているのが私だということは悲しかったけど、それでも真実が知りたかった。

「僕は君に叡智を与え過ぎたようだね。

時には気付かなくていい、残酷な運命って言うものがあるのに。」

これがジュノの地だ。完璧に素に戻ってしまったその様子から、これから待ち受ける事になるその言葉が真実だと信じていい気がした。

『ねぇ、話してよ。本当のこと。』

「今言った言葉の意味、分からない訳じゃないよね。君は確実に傷つく。それでも聞きたいのかい？」

これから何を話されるのかは分からない。だけど、他の世界の神様が干渉してくるほどのことがあったのだと理解は出来ている。私は覚悟を決めて、ゆっくりと深く首肯した。

「君は両親に捨てられた。これは運命。」

胸の奥がチリッと痛む。

それは前にも言われたことだった。それは最初から定められていたことなのだと。

でも私は、辛い事は乗り越えられる人に神様から与えられたものなんだって、クーンさんに言われたことがあるから信じてるの。

「彼に言われたことで、今の君が在ることは分かっている。

けど、君が望むから、残酷な事を言おう。君は地球の神に捨てられたんだ。悪戯に見放された存在だったんだよ。」

ジュノの話は正直に言って、相当苦しかった。顔が何度も歪んだ。でも、それが事実で、今私がここにいる事が現実。覆す気にはなれ

なかった。

――とある神様は暇を持て余し、何か面白いことはないのかと企んだ。そして、それは一人の人間の生活に干渉することだった。それが、私。

一人の私は自殺したけど、もう一人の私は強く生きた。それが面白くなかったのか、新居へと買い物帰りに向かっている私を、交通事故に見せかけて殺そうとしたらしい。

そんな理由で人間をやすやすと殺そうとするなんて。それが癖になったらどうするんだろう。

神様が快楽殺人者とかになったら嫌だな。ってか、そんなことしたらいつか人がいなくなっちゃうんじゃ…？

自分の恐い考えに身震いする。それを追い払うために、2、3回首をフルフルと回した。気を取り直さないと。

つまり、神様は干渉材料が詰まらなくなったから、消して次の対象者を見つける。そう行動をしようとした。

それを見過ごせなかったのがジュノだという。事故に遭う前に干渉して、私を異世界へと取り込んだ。

それに加えてこっちの世界の過去を干渉し、＜最後の乙女＞という存在を信じさせ、王家に伝承させたらしい。

『ジュノが私をこっちに引っ張った理由は納得したけど、どうして

＜最後の乙女＞なんていう、面倒な存在を作ったの？』

これが今日一番訊きたかったこと。これさえなければ私は穏やかな日々を送れたはず。なのに、これの所為で私は平穏を取り逃しつつあるから。

「それはね、色々とあるんだよ。」

急に緊張感がなくなり、ジュノは胡坐を掻いたまま宙で逆さまになった。

これは…ツッコんだ方が良いのかな。…いや、止めとこう。とりあえず今は時間がない。陛下のところへも行かなくちゃならないんだもん。話を進めなくちゃ。

『色々って？』

「うーん、神様の世界も、掟とか上下関係とかあるんだよ。君の運命を歪めた神と僕は同等で、かなり上位に位置づけられている。僕らのもう一つ上の位が、僕ら神を統括する最強神さ。それが今回の乙女の件で大分お怒りになってね。特別措置を命じたんだ。」

それで作られたのが＜最後の乙女＞？なんて厄介な特別措置を取ってくれたのさ。

確かに地球では酷い生活になってたかもしれないけど、こちとらそれが普通だった。不幸慣れしてて、それが当たり前だったんだから、今さら特別なものなんて望んでなかったのに。

『今からその措置を取りやめる事は…「無理。」

で、ですよねー。

最強神と言う神の上の神が私のことを取り決める、とか訳わかんないけど、どうやら神様も上下社会らしい。つまり、ジュノは上司に命じられてそれを実行した、と。

あまりの事実に私は頭を抱えた。ジュノはおどけたように、喋るのを止めた私にどうしたのかをしきりに聞いてきたけど、いつもながらに間延びした声はより脱力させるだけだった。

あからさまに嘆息を溢す。そして、真っ直ぐにジュノを見据えた。

『正直に答えて。私は＜最後の乙女＞をまっとうするしかないのね？』

「そうだね。」

やっと、事実が理解できた。

よし、と私は決心した。

『ジュノ、また来るよ。人の私生活の覗き見は勘弁してよね。』

それだけを言い残すと、私は神殿を後にした。後は陛下に私の意志を聞かせるだけだ。

「話はもう済んだのか。」

『はい、一応は納得しましたから。』

後を追ってきてくれた心配げなクーンさんに笑顔を返す。ならいいんだ、と安堵したように私の頭を撫でてきた。今までよりクーンさんが近くに居るように感じられる。思わず照れ笑いを溢してしまった。

二人で交わすやり取りが、前よりも甘く感じられるのは私だけだろうかと、ほんの少し照れくさく思いながらも考えてしまった。

それをレークさんがほくそ笑んで見ていることには気付かなかった。そして、一人理解が出来ていない宰相さまの表情に気付く事もなかった。

「さて、予定も大詰め。陛下のところへ行くのでしょう。私と宰相さまが前に出ましょう。ネイさんはクーン殿と後ろを付いて来て下さい。

陛下の周りの使用人には、神官の件の報告と、クーン殿に助けられた稀の報告、とのことにいたしましょう。」

にこやかに笑みを浮かべてそう言うと、さっさと歩きだしてしまった。

良くそう容易く嘘が思い付くな、とクーンさんが厭味を言っていたけど、それも軽くスルーしたレークさんは大物だと思う。

私も話を合わせたりほらを吹くのは得意だから、人の事言えないけどね。

私が城の中で見知らぬ人物だといっても、他の三人はかなりの有名人。廊下を歩く時には道を譲られ、スイスイと進むことが出来た。

だけど、厄介なのはこれからだと思う。

「ここはお通しできません。」

ほら、キタ。

前回は調度誰もいなかったから良かった（それはそれで警備が成っていないという問題だ）けど、前々回もそうだったように命じられた仕事を全うしようとする騎士さんたちやお貴族役人様は中々頑固だ。陛下とクーンさんが接触しようとすることに過剰反応を示す。

「申し訳ありませんが、私たちは陛下に呼ばれたのです。」

レークさんが一歩前に出てそう述べる。比較的宰相さまとレークさんには好戦的ではないのか態度は柔らかかったけど、見知らぬ女と騎士団長様には手厳しかった。

てゆーか、同じ騎士団でしょ、ってツッコミたかったけど、小声で聞いたら騎士団内の統括は温厚派と過激派に分かれていて、陛下の護衛は後者になるらしい。

どこまで城内の政治が歪んでるんだか。

「そちらのお二人もそうです。」

「しかし、見知らぬ女など…」

ほー。その言い方頭にキター。ネイさん、ご立腹の巻。黙ってようと思ったけど、笑顔で怒りをぶつけさせていただきますとも。

事実と決心 - その2 -

「私は陛下から呼ばれたのです。証拠として手紙もございます。ところで貴方様は陛下の側近とお見受けいたしますけれど、そんな御方が陛下のご予定を知らないはずがありませんよね。」

横を向いてクスッと笑って、イラッと感を引きださせる。わざと演技がけてやったから、イラつきは倍増だろう。

「なっ、失礼だぞっ！」

あー、はいはい。わざと失礼なことやってますからねー。

私はあまりにも想像した通りの反応を詰まらないと思いながら、手紙の署名をちらつかせて見せた。そうすると、急に黙りんでドアの前から退く。

初めからそうしてくれてたらいいんだよ。ま、表面上はそんな態度億尾にも出さないけど。

私は笑顔を浮かべたまま丁寧に礼をした。騎士さんは急に慌てふためいて、素知らぬ方向へと目を逸らす。一部始終を見て半笑いになっているレークさんの足を、先に進むふりをしながら踏むことは忘れない。

こっちが真剣にごまかしにかかったって言うのに、バレたらどう

するの。

宰相さまもクーンさんもそんな様子には慣れたのか、二人とも気にすることなく陛下の執務室へと進んだ。

部屋に入り、陛下が人払いをして5人が残る。音漏れしないように結界を意識化で張ると、キッとレークさんを睨みつけた。

『レークさん！こっちは無い知恵絞って誤魔化してるんですから、バレるような態度を取らないで下さい！』

いくら慣れてるって言っても、その場で考えた事を口から零してるだけ。いつ尻尾を掴まれるかも分からない状態。なのに、レークさんの態度と言ったら、どうぞ嘘だとばれてください、とでも言ってるようなもんだ。

「しかし、それにしても人格が違い過ぎて面白いんですよ。」

そう言うと、今度は我慢もせずに笑いだす。私は例の如く、手で作った銃でレークさんのおでこ辺りを弾いて黙らせた。

「っ、ねいさん、痛いです…」

おでこを押さえてしゃがみこんでいる。それを見て、私は大満足だ。

「ネイさんはおっとりしていると見せかけて、まずは手が出るのですね。」

暴力女とでも、何とでもお言い！否定はしないけど、今日のはレ

ークさんが悪いもん。攻撃したって当然のことだったからね。

そんな私たち二人のやり取りを見ていた陛下が声を掛けてくるまで、私たちのやり取りは続いていた。

漸くひと騒動治まって、陛下に髪と目を元に戻すように言われて、素直に従う。それからさらに奥の応接室に通され、全員が小さな机を囲んでソファに腰掛けた。

『さて、詳しいことを教えてください。』

私はそう言うや否や、席を立ってお茶の用意をする。陛下が手伝おうとしてくれたけど、中身を注ぐ前のカップを運ぶだけでガチャガチャと怖い音を鳴らせていたから、無理矢理止めさせた。

お高そうなティーカップを割られたら、面倒だし勿体ない。

用意が終わって席に着き、一口お茶を啜ってから陛下を真っ直ぐ睨みつけた。

『あの脅しまがいの手紙の訳を教えてください。』

自分の決心を告げる前に、陛下の事情と真意を聞いておきたい。あの手紙は今まで接してきた陛下からかけ離れていたし、残念に思った。クーンさんの言葉を聞くまで見事に疑っちゃったし。

「それについてはまず謝罪させて頂きたい。」

『陛下。貴方はこの国の頂点なのですから、私のような小娘ごときに頭を下げる事は許されません。私はただ、貴方の真意をお聞きしているのです。』

陛下の一存でそうなったとは思えない。何か訳がある。だって、私のことを公にしないと約束したんだから。

「噂を聞きつけた家臣たちが、こぞって私のところへ来た。火の無いところで噂は立たない。早急に調査するように、と。

それを渋ったら、私がこの国のことを考えていないのかと問われてな。」

陛下もいろいろ大変だな。って、元をたどれば私の所為なんだけど…って、違う。ジュノの所為だ。

それにしても、理解しかねるなぁ。元々信仰だのなんだのが関係ない生活を送っていたから、そこまで固執する訳が分からないんだよね。

そもそも人頼みだなんて。そんな風に国のこと考えちゃっていいのかな。てゆーか、神の使いだからって、良い人とは限らないでしょ。私が悪女で、この国を乗っ取ろうとしている、とか考えないのかねぇ。

ああ、それは過激派の人たちのことか。その人たちに引き入れられて、過激派の象徴として使われたりしてねー。…いや、それは冗談にならないか。

お茶を口に運びながら、そんなどうでもいいような思考をしてし

まう。それを知ってか知らずか、陛下は不安そうにしていた。

『さて、訳も聞いたところですし、今度は私の話を聞いていただけますか。』

喋り出しは順調かと思ったけど、いざ本題に入ろうというところで尻込みしてしまう。所詮は人間。自分が一番可愛い生き物だ。

だけど、逃げるわけにはいかない。私はここで生きてかなくちゃいけないんだから。

『まずは、私がここに来た理由から話しましょう。』

ジュノから聞いたことを素直に話す。だけど、私の身に降りかかった不幸は、不幸という単語で通した。内容を細かく話したいとは思えなかったから。

「…神が、そんなことをなさるのですか。」

珍しくお茶らけた感じも、胡散臭い笑顔も浮かべていないレークさんは貴重だったけど、そうやって笑い話に出来る雰囲気じゃなかった。陛下も宰相さまも私の顔を見ようとはしていない。

ただ、クーンさんだけが私の顔を真っ直ぐに見据えていた。

『最終的には面白い反応を取らなかった私を、車と言う移動道具、つまりは鉄の塊なんですけど、それで轢き殺そうとしたそうです。そこを見かねたジュノが助けてくれたらしいです。

みなさんは良い神を持っていますね。』

ま、性格残念だけどね。でも、感謝してる。

私は家族と離れて生活しようとしてたけど、その状況が辛くて死のうなんて考えた事もなかった。生にも死にも執着も頓着もしてなかったけど、あの人たちに裏切られる度に涙を流すことも忘れていった私の心は、一応強かったんだと思う。そう思いたい。

この話を聞いた反応を知りたかった。私がどんな境遇に居て、どんなことを思ってきたか。悲劇のヒロインを語りたかったわけじゃないけど、ここに居る人たちには知っていて欲しかった。

『私は、神の使いを名乗れるほどの人生を送ってきていません。それでも、私を＜最後の乙女＞にしたいと思いますか？』

内心複雑なんだろう。元居た世界の神に悪戯に見捨てられた私が、この世界では＜最後の乙女＞として神に近しい存在になっている。

いきなりこんな話を聞かされて、反応に困るのもよく分かる。だけど、ここに居る人たちのことを私は信頼したいと思ってる。だから、話した。

気まずい沈黙が続く。その間も、クーンさんは私のことをじっと見つめてくれていた。

「…貴女の境遇は分かりました。そして、貴方が平穏な日常を望んだ訳も。神に干渉されてしまったあなたは、普通の生活が送りたかったのですね。」

愁いを帯びた陛下は、綺麗だった。

ようやく理解してもらえたことに満足して、話してもないのに理解されようとしていた自分に嫌気がさす。それでも、一歩前進できてよかった。

『分かってくれて、ありがとうございます。そして、これから宜しくお願いします。』

前をぐっと見る。弱気にならないように、声が小さくならないように。これは、一大決心だから。

『私、＜最後の乙女＞の役目を果たさせて頂きます。』

その言葉にすぐ顔を上げたのは陛下だった。意外だったのか、予想だにしていなかったことなのか、目を丸くしている。そして、言葉に困っているようだった。

「…私が、困っているから、と言う理由で引き受けて下さるのであれば、どうかお気になさらず。」

陛下は、私を聖人君子だとでも思ってるのかな。私、そんなできた人間じゃない。自分勝手で身勝手で。この決心だって、避けられないからだもん。

『そんな理由じゃないんです。私はこの国の神に救われて、その神が取り計らったことで＜最後の乙女＞になった。その親切を、いくら嫌だからと言って、逃げることなんかできないと思います。』

死んじゃう所を助けてもらったんだもん。務めは果たさないと。

ただ、そんな短絡的な考えが頭の中に浮かんで離れないだけ。陛下が貴族に追い詰められて可哀相だな、って理由じゃない。ま、それもちょっとだけはあるけどね。

『ただ、約束して下さい。私の生活に干渉しないことを。

＜最後の乙女＞として公の場に発表して下さって構いません。それでも、今の生活を止めるつもりはないんです。それだけ約束して下されば、神からの言葉も私の元の世界にあった技術もお伝えします。』

「私の目の行き届かないところもあるかと思いますが、今度こそ努力いたします。」

その言葉に私はにっこりと笑顔を溢す。今までの中で、今日が一番良い日。私の顔には、自然に満面のものが浮かんでいた。

変化

『だぁー、もう無理っ！』

出だし早々ごめんなさい。だけど、私は辟易しております。

侍女の台所で私は木で作られた丸椅子に腰掛けて、両手足を伸ばす。頭は壁に預けて天井を見上げていた。

私が無理と言っているのは、ここ数日の生活のこと。周りの変化に気分が悪くなりそうだ。

「そんなことをおっしゃられても仕方ありません。ネイさまは乙女さまなのですから。」

そうなのです。陛下は私から許可を出した次の日に、＜最後の乙女＞のことを公表したのです。早すぎ…

その日から三日が経つ。それからというものの、会う人会う人の態度が仰々しいし、くねくねとすり寄ってくる汚い大人たちが後を絶たない。

「掃除を乙女さまがやるなど！」

「乙女さまにそんなことを…出来かねます！」

「おお、乙女さまが書類を届けて下さった！」

この態度の変貌は何、ってほどの言葉の数々。下手したら感涙されることもある。この前までは大分敬遠してたじゃないですか。ってことで、はい、うんざりです。

嫌になった私は人が多く訪ねてくるクーンさんの執務室から逃げ出して、女中の台所に避難した訳だ。

逃げてきた私のところに何故ミリアが居るのかと言うと、これまた不思議な事に私のお世話係に陛下直々に任命されたそうな。

過保護だよねー。てゆーか、侍女にお世話係付けないでしょうよ。

そう文句を垂れてみても、騎士を付けないだけ譲歩したと言われてしまって閉口。城内に居る時だけだと言って、業務以外の日常生活については干渉していないと言われてしまった。

屁理屈だって言い返して、ついでに言い負かせてやろうと思ったけど、陛下の顔色が優れなかったから止めておくことにした。ちらっと耳にしたことがあるような無いような話だけど、陛下ってば身体が弱いんだって。

無理しちゃダメだって言いたいところだけど、一国を背負っている人だからそう易々とは言えない。私は様子を見て、陛下の食事を作らせてもらおうと思っている。身体に良いもの作ってあげたいしね。

「おお。乙女さま、今日もいらしたのか？」

『エルさんー。その口調、止めてくださいよー。それと！私はネイです。乙女なんて名前じゃありません。』

だれてるところに颯爽と入って来たのは、ここの料理長であるエルさんだ。

向こうの大きい調理室に居るよりも、こっちに居る方が多い気がする。それでいいのか、料理長さん。そう言ってからかってやりたい。だけど、先制攻撃を受けた私は撃沈していて、それどころじゃなかった。

エルさんの態度は…変わらなかった。すごく、嬉しい。

そりゃ、もちろん最初は敬語とか乙女って呼ばれたりとか、急な変化はあった。だけど、それを止めて欲しいって、今までと同じで居て欲しいってお願いしたら、渋々だけど了承してくれた。それはマーサさんたちも一緒。嬉しい限りだ。

だけど、私が嫌がるのを面白がって、わざとそう言う態度をふざけてとってくることもある。それにいちいち反応するのもそろそろ面倒になってきていた。

『執務室にね、いろんな人が訪ねてくるんですよ。クーンさんに書類を届けに来る人以外もたくさん集まっちゃって。邪魔になると思ったので逃げてきました。』

「そりゃ、災難だったな。」

『ホントですよー。ごま擂ってくる人とかも面倒臭くて嫌になっちゃいます。てゆーか、そんな時間があるんなら仕事しろって話です！』

本気で冗談じゃないからね。訪ねてくる多くのおじさんたちは、油ギッシュで加齢臭がきつい。こっちが嫌な顔をしていないからって、仕事中に迷惑掛かってないとか思うなよ。

一応敵は作らないように、よく話しかけられるようになってからと言うものの外面だけはよくしてきた。だけど、たった三日、されど三日。短いようで短長いこの期間に、嫌な思いはたくさんしてる。

「あら、ネイさまが逃げてきたのは、それだけじゃないでしょう。」

…なんで、バレてるの？

私は半信半疑でミリアを見てみたけど、その笑顔には自信があるようだった。

確実に何か知ってる。そう思った瞬間に、背筋を嫌な汗が伝ったような気がした。

「照れていらっしゃるのは可愛らしくて、ネイさまらしいです。しかし、いつまでもお逃げにはなれませんよ。それに、クーンさまだって少しでも長い時間を一緒にお過ごしになりたいと思っているに決まっております。」

『いつ、どうして、なんでバレたの…』

「三日ほど前、遠目に見たお二人の雰囲気が変わっていましたから。二人が纏っていらっしゃる空気感が違います。明らかに関係性が変化しております。」

ミリア、恐るべし。レークさんといい勝負だと思うよ。

私が執務室を逃げ出してきたのには、ある特定の人物から遠ざかるためだった。いや、別に嫌いになったとか、そう言うんじゃない。確かに、ミリアに言われたように照れくさいっていうのもあるけど、クーンさんの纏う空気が明らかに変わって私は戸惑っていた。

その…何と言うか、甘い。

私を見つめてくる視線も、時々交わされる会話も。それが仕事中であろうと家であろうと、甘い空気に包まれている。

今まで恋愛経験なんてない。そりゃ、私だって告白とかされたことくらいはあるけど、家庭環境が複雑で誰かと付き合う気分にはなれなかった。それに、好きになる人もいなかったし。

小さいころから家庭内が冷え切っていた所為か、男女の仲を疑う気持ちがあったのは仕方ない。恋愛とか、結婚とか、上手くいくものだなんて思ってもいなかった。幽霊が存在するかしないか、って言うくらい曖昧で不確かなものだって思ってた。

なのに、今のクーンさんはどうなんだろう。私をべたべたに甘やかして、生活力を奪われちゃいそう。それくらい甘々なのだ。

それに、どんな反応していいのか分からない。そんなスキル持ち合わせてないですからね。

また一段下に落ち込む私を余所に、今の会話で何かを読み取れたのか、エルさんが吃驚していた。狼狽するだけで、言葉は出てこないらしい。てゆーか、驚き過ぎ。

「まだまだ日が浅くて繊細な頃です。触れてあげないで下さいな。」

まず話し出したの、君だよね。うん、もうなんかいいよ。

遊ばれてる気がした私は、もう関与することを止めた。ていの良いおもちゃになるなんて真っ平御免。私はいじられるよりもいじりたいタイプの人間だ。

頭を抱える私を余所に、ミリアが他言無用だとエルさんにくぎを打っていた。

有り難いけど、それ、私の台詞です。

そんなこんなで今日も一日悲惨だったけど、無事に仕事も終わらせて帰宅することになった。

『あの、クーンさん？』

ガタガタと揺れる馬車の中。私は明らかに動揺していた。

「何だ？」

何だも何もないですよ！

進行方向を真正面に隣り合って座っているはずなのに、クーンさんはずっとこっちを見ている。それも満面の笑みで。

少し前まで無表情に拍車がかかっていたはずなのに、今ではその面影すらない。仕事中にちらっと覗いた時には真面目な顔してたけど、顔を合わせている時は常に笑顔だ。

この人、どうしちゃったんだろう。頭でも打ったのか？

そんな失礼極まりないことを考えちゃうくらいの変貌だ。

『何でもナイデスヨ…』

ハハハ…後半がカタコトになったのは、イケメンスマイルを直視しちゃったからですよ。

やっぱりキラキラし過ぎてて心臓に悪い。どうしても慣れない私は、ここ数日クーンさんの顔をまともに直視できていなかった。それを、今まさに見ちゃって、動揺してる訳だ。

「ネイ？」

『…ハ、ハイ。』

「どうしてこっちを見ない。」

それはさっき考えてたことですけど、何か？

しどろもどろになった私は、馬車が丁度停まったのをいいことに、着きましたよ、と言って馬車を飛び出した。

逃げだけど、これは仕方ないということで許して欲しい。それ以外に今はどうしていいか分からなかったんだから。

私は足早にそこを立ち去って、部屋へと逃げ込んだ。

変化 - その2 -

「あらあら、まあまあ。急にどうなさったのですか。」

私のすぐ後に部屋に入って来たのは、例のおばあちゃんメイドさんだった。少し、ほっとしたのは内緒だ。

「湯あみの用意が済んでおります。お話を聞きがてらにお手伝いしましょうねえ。」

あの、と反論しようとしたけど、柔らかい笑顔に相殺された。いつもは勝ち取っていたはずの一人風呂を今日初めて諦める事になった私は、ぐいぐい押されて浴室へと進む。結局身ぐるみ?されて、あわあわの湯船に身を浸からせた。

おそるべき、メイドさん。何だか、これからも逆らえる気がしない。

力を抜いてはー、と両足を伸ばして首を縁に預けていると、頭をマッサージしながら洗ってくれた。

これ、気持ちいいー。寝ちゃいそう…

そんなフワフワした気分の時、声をかけられた。状況判断力が鈍ってる時に、ずるいなぁ。

「急に走って家に飛び込んできたりして、どうかなさったのですか。

」

私は目を閉じたまま、ぼーっとした頭でぼそぼそと答える。

『なんかね、クーンさんが、満面の笑みだったんです。』

「まぁ、珍しい。しかし、それに何か問題でも？」

泡を掬って、腕を洗う。いい匂いがして、幸せな気分だ。もちろんあっちの世界でも出来た事だろうけど、言え自体がリラックスできる場所じゃなかったし、わざわざ面倒だし。ってことで、堪能してるふりをしながら質問に答えた。恥かしいのを誤魔化す為の行動だ。

『クーンさんって、格好良いですから…その…キラキラした笑顔って、心臓に悪いって言うか、直視できないって言うか…』

もごもごとそう言った。そうすると、クスクス笑う声が聞こえてくる。調度神を流されているところで目が開けられない。振り返ることが出来たのは、笑い声が納まったその後だった。

声は納まったとはいえ、メイドさんは笑顔のままだ。そして、かなり面白がっている。

最近、よくこんな笑顔見るなー、と脱力し、話したことを後悔した。

後悔後先を立たず、とはよく言ったもんだよね。適切過ぎるたとえに私はがっくりと肩を落とすしかできなかった。

「随分とお可愛らしい悩みですね。しかし、急に逃げられたクーンさまはどう思うでしょう。理由も分からず、どうしていいのかも分からず、悩んでいるのではないでしょうか。」

そう、なのかな。いや、そうなのかもしれない。理由も言わずに逃げてきちゃったし、今更どうしよう…

私は百面相していたのか、くるくる変わる表情を見てメイドさんはまあまあ、と言ってまた笑っていた。

笑いごとじゃないですよー！この後、顔を合わせた時、どうしたらいいの。そう質問すると。

「思っていらっしゃることは、はっきりとお伝えしないと。言葉は伝えるためにあるのですし、自分の気持ちは言葉にしないと相手には伝わりません。」

見事なまでの正論が返ってきた。

まったく持ってその通りですね。

「さあ、長く浸かり過ぎては、逆上せてしまいます。もう上がりましょう。」

この後が大変だった。

妙にフリフリした白い夜着を着せられてしまった。今までにないくらい抵抗したのに、ここにはこれしかありません、とか言われて、取りに行くからと抵抗してみても外にはクーンさんが居るから出て

いけないことが判明して、もうどうすることもできなかった。

ううー、こんな人形みたいなフリフリ、恥ずかしいよー。

半泣きの私を見ていたメイドさんは、またゆっくりと笑いを溢すと、クーンさんに頑張るようにと言って出ていってしまった。

残された私は浴室から出る事が出来ない。こんな格好でクーンさんの前に行くことが恥ずかしいからだ。

てゆーか、全然似合ってないから！キモいよ、私。でももでもっ。自分の意思で着たわけじゃないし。

何度も呼ばれて出ていかないこともできず、私は観念して渋々出ていった。

「…おいで。」

恥かしくて、きっと今顔赤い。

私は俯いて、クーンさんのところまで行った。

ベッドに腰掛け、その後ろからクーンさんが髪を拭ってくれる。いつもと同じようにされてるのに、着ている服の所為で恥ずかしさが倍増だ。

露出度が低いのに、それよりも遥かに恥ずかしくなるくらいのフリフリ度。この世界の服だけは好きになれそうにない。

髪を梳かれ、髪が整えられる。ここからが、さらに覚悟しなくち

ゃいけない時間だ。急に後ろへと引かれて、クーンさんの腕の中にすっぽりと収められる。

さっきまで赤かった顔は、真っ赤になってるだろう。

「ネイ、さっき、なんで逃げた?」

耳元で声がする。掠れた、囁くような声。

みみっ、耳に息掛かってるからぁ!

たじたじの私を余所に、クーンさんの声はさらに艶やかに私を攻め立てる。敢え無く陥落して、正直に告げるのはそのすぐ後だった。

『クーンさん、自覚ありますか?クーンさんって、その…すごく、格好、良いんですよ?』

あーっ、もう!何言ってんの、何言っちゃってんの!自分自身に突っ込んで、恥ずかしさのあまり死ねるかと思った。

『そんな人の笑顔、ドキドキしちゃって、直視できませんよ…』

言い終わるのと同時に、クーンさんの腕にさらに力が入った。

く、苦しい…!

「そんな可愛いこと、言ってくれるな。」

私は振り向こうと思って、力強いクーンさんの腕を自分の手ではがそうとする。だけど、できなかった。

しばらく無言が続く。クーンさんは私の方に顔を埋めてるようで、首に掛かる息がくすぐったい。それから逃れようにも、やっぱり力が強くて上手く対抗できなかった。

「逃げようとするな。しばらくこのままで。」

そう言われてしまえば、抵抗することすらできなくなる。私は大人しく動きを止めて、じっとしていた。

はー、と大きくため息が聞こえる。それは二人しかいない部屋の中に響いた。

「ネイ。」

名前を呼ばれて、少しだけ振り向く。すると、一瞬で私の唇は奪われ、チュッと言う小さなリップ音がして私の顔から影が逃げ去った。

何してんすか、いきなり！

私の身体はビクッと震え、そのまま硬直した。

後ろからはクスクスと声が聞こえ、揺れる体で笑っていることが分かる。私の心とは全く正反対だろうクーンさんは、何だか上機嫌らしかった。

「うん、ネイらしい反応だな。」

なんだ、それ！

理解できないものは、いつもなら訊ねる。でも、それが出来ないくらい、私は硬直し続けていた。

「俺の理性の固さに感謝しろよ。」

全く訳が分かりません！

だけど、後ろのクーンさんは、嬉しそうにしている。ようやく動けるようになってから、そろー、と横目で覗き見をしてみると、そこには満面の笑みでいるクーンさんが居た。

てゆーか、また直視しちゃった！

また慌てふためく私を、クーンさんはもう一度ギュッと抱きしめてきた。

てゆーか、お兄さん、キャラ違くないか?!そう言いたくなるくらい、普段からかけ離れてるクーンさんは心臓に悪かった。

「ネイ。ネイだけじゃない。俺だって、ドキドキしてる。」

そう言って、私の頭を自分の胸に誘って、耳を押し付けさせる。そこから聞こえてきた鼓動は、私の速度と重なった。

『心音、早いですね。』

「同じだ。」

うん、そうみたい。クーンさんも私と一緒。それが嬉しくて、今

度は自分からその背中に腕を回してくっついた。

「だから、あんまり可愛いことしてくれるな。」

その呟きの意味はよく分からなかったけど、私は同じ気持ちだったことが嬉しくて、もう一度きつく抱きついた。

筋肉質な腕にもう一度包まれる。温かくて心地良いクーンさんの腕の中は、ドキドキして恥ずかしいけど、すごく安心できた。

その温かさに、心地よさに、まどろみの中に意識が落ちていく。

「もっと、甘えていいんだ。」

小さな囁きが聞こえて、私は微笑んだ。

『うん…』

囁きが確かかは分かんなかったけど、私も小さく囁くように返事をした。

拉致監禁は犯罪です

『ちょっと！何するんですか！』

クーンさんの執務室を出てしばらくした時。人があまりいないいつもの近道を歩いてたところで急に後ろから声をかけられた私は、連行されるように連れ出された。

引きずられるようにして連れて行かれる。辿りついたそこは、神殿の最上部にあるガラスの塔だった。

「やあ、乙女さま。お久しぶりです。手荒な真似をして申し訳ありませんね。」

そんなこと、微塵も思ってないって顔してるけど?！

私は目の前にいる人物をキッと睨みつけた。そこにいたのは、以前に出会ったその人。周りの人よりも一回り大きな赤い羽根の飾りを付けている、キツネ顔の男。つまり、過激派筆頭のルイスだった。

ねちっこそうな笑顔。見ているだけで鳥肌が経つ。

てゆーか、ルイス派って、王に絶対従うんじゃなかったの?それよか、宗教に心酔しきってるから＜最後の乙女＞に手を出すことはしないって言ってなかったけ?

混乱したまま、表向きは冷静になってるように振る舞う。後ろで掴まれた手は、ガラス張りの部屋に入れられてすぐに解かれたけど、

少し赤くなってて痛かった。そう思って腕をさすると。

『なに、これ？』

金に赤い石がはめ込まれた腕環がいつの間にやら付いている。ごついその造りは、お金をかけた、と言わんばかりにキラキラしてた。

「それは魔法封じですよ。貴方は魔法が使えるとのことでしたので、逃げだせないように失礼ながらつけさせて頂きました。それは、腕環を造ったその本人の魔力でしか解除できないという代物ですから、無理に取ろうとしても無駄ですよ。」

ひょうひょうと言ってくれちゃって。てゆーか、陛下！約束はどうしたんですか。

そう文句を言ってやりたい。だけど、それは無理だ。

陛下は今病に伏せっている。その体調の悪さは今までにないくらいで、意識がはっきりしていないらしい。らしい、って言うのは、様子を見に行けてないから。謁見を申し込んだけど、あまりの体調の悪さに、王妃様でさえ見舞いに行けていないようだった。

『…説明、していただけませんか。』

唸るように低い声が出る。威嚇するように、私は睨みつけた。

「おやおや、仔犬が牙をむいているようですね。」

うるさいっ！睨みに威力がないことくらい自負してる。だけど、これが精一杯の虚勢だ。だって、このうすら笑いを浮かべてるおじ

さんが、何も企んでいないはずがない。だから、牙を剥くのも当たり前だ。

「…我々は先王が退いた後、共にその座を奪われた。いくら王へと忠誠を誓おうとも、我々も欲深い人間。己の欲望に忠実だ。我々も神の恩恵が欲しいのだよ。

現王が貴女独り占めにしておられる。それは、許せない。だが、今は自由にできる。あのお方が病床にいては貴女との逢瀬も叶わないだろう。だから、そのうちに事を進めるのだ。」

逢瀬って…あんたアホか！私は…クーンさんが好きで、オウサマとは何の関係もないっつうの。

邪推もここまでくると意味不明だな。私は睨みつけた。

だけど、すぐにそれを止めて、ちらっと横を向く。さっきから気になっていたことがあった。

『あんたさぁ、助ける気とかないわけ？』

「無いねーぇ。」

どこから湧いて出てきたのか、ジュノのヤツが隣で積み木をしている。何を作ってるのかは分からない。言えることは、完全に使い方間違えてるってこと。

「か、神がそこに…」

ええ、いますよ。明らかにやる気のないヤツが。私は今ピンチってやつなんですけど。

「どこに、どこに…私を、守人に…」

…へぇ、そう。それが目的な訳ね。守人になって、乙女の恩恵を受けよう、と。そりゃまた、図々しいこと考えたね。

睨みつけるのも嫌になって、プラス、隣のヤツにうんざりして、私は積まれた積み木をぶち壊した。

「あー！もう少しで完成だったのに！」

知るか！てゆーか、完成っていったい何作ってたんですか。

ここにいる人物たちにほとほと呆れ、私はこれからのことを考える。まずは、ここからどうやって出してもらうか、か。

つまり、守人になることを諦めてもらうしかない。てゆーか、もう守人はいるしねぇ。

『守人なんですけど…』

ここまで言い掛けて、服をツンツンと引っ張られた。大事な話をしようとしてたのに、ジュノには邪魔ばかりされる。何よ、と睨みつければ。

「言わない方が良い。」

さっきとは打って変わって至極真面目な表情でそう言われてしまった。

意味を計りかねる。だって、ここから出してもらうためには必要な事でしょ。なのに、それをしない方が良いと言われた。それって、ここから出るなって意味なのかな。うーんと唸り、考え込む。その横にいる神は、また積み木を重ねながら言った。

「守人がもう居ると分かれば、その人物は殺され兼ねない。」

衝撃が私の中を駆け抜けた。

殺、される…？クーンさんとレークさんが？でも、だって、それじゃ神の意志に従わないってことなんじゃないの？

そう考えていたことが伝わったのか、ジュノは続けざまに言う。

「今まで従ってたはずなんだけどねぇ。先王の一件以来、自分たちに権力を集中させるように算段を立てていたみたいだ。そうでなければ、僕の乙女に魔法封じの腕環を付けた上で、軟禁することなんてしないだろう。」

そこまでして、自分に権力が欲しいの？人間の欲は、本当に強欲だ。特に、お金や愛なんかに対しては。

それが神にも逆らう事態となっては、この人はもう止まらないだろう。どこまでも自分の欲求に従って、突き進むしかない。

「神よ…どうか、私を、守人に…」

祈るように言い続けてるルイスは、トチ狂ったようで少し怖い。
本当に、誰かを殺してしまうかもしれない。私の知り合いである、誰かを。

ここは日本じゃない。誰かが何かを殺すことなんて、身近にある世界だと聞いた。それを思い出して、私は震えた自分の身体を抱きしめるように両手で自分の身体を抱える。

いつもなら、クーンさんの腕の中でそうすることが出来るのに。私の一言にクーンさんの命が掛かってると思うと、どうしても震えが止まらなく、自分の腕でそうするしかできなかった。

「僕の言う通りにして。」

ゆっくり、頷いた。

いつも貶してばっかでごめん。ジュノに、こんなに頼り甲斐があるとは思わなかった。

私は真っ直ぐに前を見据える。両手もちゃんと前で組み、怯えを見せないように構えた。

『…これより、二月の間に守人としてふさわしい者を決める。我こそは、と思う者は神殿の前に出でて、祈りを捧げよ。』

「神の、お言葉…確かに賜りました。」

恍惚としていた表情は固まり、難しい表情になっている。きっと、この場で自分が認められなかったことに腹を立ててるに違いない。

ホント、自分勝手だよなぁ。

「乙女さま、貴女の部屋をガラスの塔のこの最上部の階下に用意した。貴女の侍女を連れて来よう。しかし、ここから出られるとはお思いにならない方が良い。」

それは一般的に、脅しって言われるんですよ。

私は成す術もなく、違う方向に顔を背けることしかできなかった。小さ過ぎる反抗だ。だけど、今はこれくらいのことしかできない。だって、自分を守るための魔法が使えないんだから。

全員がガラスの塔から出ていく。そこに残ったのは私と、皆にはその存在が分からないジュノだけだった。

『これからどうしよう。』

外の誰かに伝える事は出来ない。こう言った行為を取り締まることのできる陛下は、病に伏せっている。

「どうしたものかねぇ。」

考えてるんだか、いないんだかの曖昧な返事。それは私の心を余計に乱した。

『一緒に考えてよ！もし、クーンさんが死んだりしたら…私…』

もう、絶対なにも思えない心になる。

「考えるよ。とりあえず、クーンに伝えよう。」

そう言って、何かを考えている。私は恐怖で涙が止まらず、緑の上に寝そべって左腕で自分の目元を隠した。

涙があふれる。どうしていいのか分からない。

こんな時、一番頼りにしていいはずのクーンさんに会えないことが、今は一番辛いことだった。

私がここに連れて来られて１０分もしない頃。ここに繋がる私の横にあった戸が、ゆっくりと開かれた。

そこから顔を出したのは…

『ミリア…』

真っ青な顔をしている。何を言われたのだろうか。怯えている事が明らかだった。

ミリアが完全にここへあがると、同じように顔が見えた。そこにいたのは、私をここに軟禁し始めた大元だ。

「いいか、お前も他言無用だからな。

乙女さま。これにてあなたの生活は保証されました。しかしながら、ここを出ようとしても貴女の部屋の階へとつながる階段の下に騎士がおります故、そんな変な気は起こさないようにお願いします。貴女はただ大人しくしていればいいのだ。」

最後に本音が零れたのだろう。ねちっこい笑みを浮かべていたル

イスの顔が、おおいに歪んでいた。

扉が閉じられる。足音が遠のき、次第に聞こえなくなった。

『ごめんね、ミリア。巻き込んじゃって…』

そう言いながら抱きついた。

「構いません。ネイさまのためですから。」

そう言ってたけど、やっぱり体は小刻みに震えていて。怖いのを我慢して虚勢を張ってることは、一目瞭然だった。

『ミリアは、何て脅されてここに来たの?』

「ネイさまがガラスの塔で生活することになったから、私がそこでの生活を支えるように、と。」

『そうじゃない。脅されたでしょう?』

泣きはしなかったけど、表情は歪んでいる。綺麗に整った眉の先に、皺が寄った。

「私の家も、弱小ですが貴族の部類です。慎ましやかに生活し、父母共に民を守って生きているのです。」

確か、ミリアの家は辺境にある領地の領主だ。農作が主に盛んであり、丘陵地で作られる果実酒で主に生計を成り立たせているらしい。何もないけど、空気も景色も水も澄んでいるところなんだって、ミリアが楽しそうに話してくれたことを覚えている。

「その領地を、潰すと脅されました。これを他言してしまえば、民の命も家族の命も無いと。」

あのオヤジ、サイテー。

私はブチ切れる寸前だ。私だけならともかく、いろんな人巻き込みやがって。

「私は必要最低限しかここを出る事を許されておりません。食事の用意や洗濯、掃除など。それ以外の生活は、ネイさまの部屋にある備え付けの小さな部屋でするように、と言われました。

この国の象徴である乙女さまと生活を共にさせるなど、何て事を考えているのでしょうか。」

さっきまで泣きそうだったのに、今度はプリプリ怒ってる。これでこそミリアだ。その様子を見た私は自分の怒りがどこかへ引いて行くのを感じた。

「ねえ、僕の存在忘れてない？」

丁度話の折。隣にいたジュノに不意に声をかけられた。

『あ…ごめん。』

完全に忘れてた。

自分の隣に積み重ねてある積み木をちょんちょんしながら拗ねてる。そんなことしても可愛くないぞー。どっちかと言えば綺麗だからね、ジュノは。

とは思いつつも面白いから、膨らませた方をツンツンしていると。

「ちょっ、まっ、もっ…（ちょっと、待って、もしかして…）」

言葉にならない声がミリアの口から零れてきた。

混乱している。それもそのはず。さっきルイスだって、驚いてたもんね。それほどまでに、この国にとって神は大き過ぎる存在なのだ。

『ミリア、ちょっと落ち着こうか。』

ハイ、吸ってー、吐いてー、と声をかけるとその通りにしてくれ

る。ようやく落ち着いたミリアは、自分の両手を胸に当てていた。

『確かにジュノはここにいる。けど、そんなに畏まらなくてもいいよ。ジュノは気にしないし、ミリアには見えないらしいから。』

ちょっと安心したような、残念そうな複雑な表情をして、ミリアはそうですか、と一言だけ言った。

「この娘には、クーンに手紙を届けてもらおう。それが最善だ。

ここは神殿内だから、恐らくレークには伝わっているだろう。それをクーンに伝える事はまず間違いない。ことの詳細を知らせ、ヤツらには守人として乙女をここから救い出すことを命じよう。」

ミリアには聞こえてないからって、勝手に決めないでよ。命だって、家族だって一度失ったら帰ってこないんだから！

『ちょっと、ちょっと、そんなのって…！』

「そうするしかないだろう。」

…うん、そうだね。他に何も言い考えなんて浮かばないもん。

ミリアにはまた怖い思いをさせちゃうかもしれないけど、どうにかその稀を説明した。

「もちろん、引き受けさせていただきます。だって、神様からのお言葉ですし、ネイさまのお願いですし。私に出来ることであれば、これからもなんなりとお申し付けくださいね。

領地のことならお気になさらないで下さい。だって、私の父さまと母さまですもの。何かあっても絶対に守り貫いてくれると思います。」

ミリアの優しさが、本当に嬉しくて。私は胸の奥がほっこりと温かくなるのを感じた。

よし、と気合を入れて、気分を変える。

とりあえず、届ける手紙を何とかしなくちゃ。

下の階へと梯子を伝って下りる。そこには下へと続く階段と、一つのドアしか存在しなかった。つまり、そこが私の部屋、と言う訳だ。

騎士さんが音につられて見に来たけど、それを無視して私はミリアを引き連れ部屋へと足を踏み入れた。

「酷い…」

中はベッドが真ん中に置いてあり、端っこに勉強机と椅子。小さいテーブルとソファが置いてある、向こうで一人暮らしするには広すぎる、こっちとしては狭い部屋があった。

生活するには十分なスペース。だけど、埃まるけで。部屋を用意したって言うか、誰かの部屋だった物を私に宛がったって感じ。

部屋の中には三つ扉があって、一つずつ開けていくと、浴室、ト

イレ、そしてベッドが一つ置いてあるだけの部屋だった。

なんじゃこりゃー！私ならともかく、ミリアは元々お嬢様。あり得ないでしょ、こんな部屋！きっと自分は綺麗で温かくて、キラキラしてる部屋で生活してるに決まってるのに。

すごく理不尽な人だと思った。あのルイスって人、いつか絶対目に物言わせてやるんだから。

私の心の中で、めらめらと火が燃えだした。

「わーお！なに、ここ。」

『ジュノ、いらっしゃい。今日からここが私の部屋らしいよ。』

ぷかぷかと浮かんでいるジュノに一瞥くれ、勉強机へと歩を進める。人差指でスーッとこすると、大量のちりと埃が指に付いてきた。

これ、手紙書くどころじゃない。まずは掃除しないと。

『ミリア、手紙の前に掃除しちゃおっか。まだ午後になりたてだし、今からなら洗濯物も間に合うでしょ？』

「いえ、私一人でやりますのでっ。」

焦りながらそう言うミリアは、さすが侍女の鏡だ。だけど、時間を喰ってる暇はない。早くしないと、手紙を書くどころか、今日の夜の就寝場所を確保できないかもしれないから。

『今日はミリアには重大な任務があるでしょう。そのために、まず

はお掃除が必要なの。

私はここから出られないから、洗濯物を届けた後にお掃除道具を持ってきてね。』

そう言うと、渋々分かったと言って出ていった。

本当にいい子だよね、ミリアって。って、私よりもお姉さんだから、良い子って言うのも変だけど。

何の関係も無い私のことを、最初から尊重してくれたのはミリアだった。そして、ずっとその態度は変わらない。今回だって面倒な事に巻き込んじゃったのに、にっこりと笑顔を浮かべてくれた。

今だって、信じる事が出来る人かもしれない。だけど、これからもっともっとミリアに信頼を寄せていけるような予感がして、私の胸はすごく高鳴った。

「ニヤけてないで、早く始めなよ。」

余計なひと言に自分の中のテンションはガタ落ちする。宙にぷかぷかしているその人は、何やら座禅を組みながら考えているようだった。

それを横目で見て、まあいいかと何かを納得する。そして、丁度女中服だったことから、汚してもかまわないな、と嬉々として部屋の中を引っ掻き回した。

掃除道具がないと、何も進まない。だけど、出来る事もあるはずだ。でも、物を動かすには人手がいる。それ調達することを、あの

キツネおじさんが許してくれるはずもないだろう。と、ここでピンとくる。

色々と有効活用しないとね。

『あのー、すみませーん！』

私は表に立っていた、声を掛けられて驚いている騎士さん二人を巻き込んだ。

そんなこんなで掃除は終了！見事にピカピカになっていた。漸く人が住めるような部屋に見えるな、と納得していると、横にいる騎士さん二人組は、腰をおろしてへばっていた。

私、腹黒いですからね。中らせてもらいました。

演技っぽく散々どうしようもない稀を伝え、マットレスを外に運んで叩いてもらい、ベッドや机の移動もさせた。

この騎士さんたちは魔力が無いみたいで、魔法では出来ない。だから、きっちり自分の身体で動いてもらいましたよ。つまり、こき使い倒した。

ってわけで、見事にへばってる騎士さんたち。それを私は満足げに見つめた。そんな私をジュノが不審そうな眼で見ている。だけど、私はそれを完全に無視した。

『お手伝いいただき、ありがとうございました。漸く住める部屋になった、嬉しい限りです。』

その言葉を聞いた騎士さん二人は急に立ち上がり、私からのお礼の言葉に感謝の言葉を連ねて、交代時間だからと去って行った。

「ネイさま、確信犯ですね。」

何の事だか分かりません、と誤魔化してみたけど、やっぱり私の性格を知っている人だから、嘘を吐くなとすぐに言われちゃった。

私は意味深な笑いを溢してから、小さな紙に急いで走り書きをする。そこには、今の状況と主犯格、そして、守人についての事を書きこんだ。

紙とペンはミリアにお願いして、日記をつけたいからという理由で持ち込んでもらった。その時に誤魔化しで本を数冊持ってきてもらったから、疑いの目は向いてないと思う。

その手紙を、ミリアにお願いして、胸元、つまり下着の中に隠してもらう。ミリアは元々胸が大きいから目立たないだろうし、流石にここまで調べる事はないだろうと思ったからだ。

準備は言い、と緊張気味の表情のミリアに訊ねると、ゆっくりと首肯してくれる。私も覚悟したように頷くと、ミリアを伴って部屋を出た。

『申し訳ありませんが、一つお願いがございます。』

さっきとは違う騎士が立っている。さっきの人たちならもっと気易くできただろう。それも叶わないのは、少し状況が厳しかった。

「何でしょうか。」

一応返事をしてくれてほっとする。それを気に私は打ち合わせ通りに話を進めた。

『私は今までシェパード様のお邸でお世話になっておりました。それを何のお礼も申さずに、急に居なくなることなどできません。どうか、このお手紙を私の侍女に届けさせてくださいませ。』

下手に出てみた。この人たちもキツネおじさんと同じ考えで、神から権力だけを得ようとしているのかどうかを計るために。それはどうかはやっぱり読めなかったけど、すぐに了承しかねるという答えが返ってきた。

どうしてかを咄嗟に訊ねる。騎士さんは難しそうな顔をして、答えてくれた。だけど、その間も私と目を合わせようとはしない。きっと、キツネおじさんに指示されてるんだろう。

「そちらからシェパード派に連絡を取ることは固く禁じられております。」

頭でっかち。てゆーか、バカなのかな。私が行方不明になったことを露呈させるようなものなのに、それに気付いてないんだろうか。

「貴女が今日から城に住まうことは、すでに魔道師さまに言伝されているでしょう。」

『しかし、私から今までのお礼を申し上げたいのです。会いに行けないのなら、せめて自分の言葉を伝えたいと思うのはいけないことなのでしょうか。』

困った顔で見つめる。上目遣いが重要だとミリアに教わったから、それを実践してみた。だけど、効果は良く分からない。一瞬目があったと思ったらすぐに逸らされちゃったんだもん。

「手紙の内容を拝見しても？」

『ええ、どうぞ。』

一人が内容を見る。そして、これならばいいだろうと許可が出た。しかし、もう一人が渋る。その人にもその手紙の内容を見せ、この方が私の意思でここに住まうことを決めた様な感じで信じ易いだろう、と二人はそう判断したようだった。

ミリアが許可を得て進んで行く。私はそれを祈るような気持ちで見つめていた。ミリアの後ろに騎士が一人くっついて行くのを見て、どうしても祈らずにはいられない。

どうか、届いて。誰にも見つからないように、私の一番甘えられるその人に助けを求める言葉を――――。

憤慨

「失礼いたします。」

ノックと共に入って来た人物は、俺の期待していたその人とは違っていた。

今日は一度部屋を出て行ってから会っていない。この部屋を訪れる見物客に嫌気がさしたのだろうと思い、干渉しないようにしようと思っていた。

しかし、この時間になっても戻って来ないのは、流石におかしい。今処理している書類を終わらせたら、探しに行こうと思っていた。

「ミリア、ネイを知らないか？」

その言葉に、一瞬怯えたように身体を反応させる。その様子のおかしさから、俺は何かを察した。ネイに、何かがあったのではないのか、と。

よく見ると、いつも俺にはっきりとものを言うミリアの顔は青ざめている。心中穏やかではない様子がはっきりと見えた。

「…これはネイさまからのお手紙でございます。」

それを手ずから奪い取り、急いで開く。

そこには、今日から城に住まうことになったこと、専属女中を辞めて新しい技術の伝達に従事すること、そして今までの生活のお礼が述べられていた。

最後の言葉が俺の胸を引きさきそうになる。これがお互いにとっての最善だと思う、と書かれていたのだ。

手紙をグシャッと握りつぶした。これは明らかにネイの字だ。上手く書けないからと練習していたことを思い出し、前よりも上手になったその字を見て、俺は肩を落とした。

なぜ急に心変わりしてしまったのか。何故俺に会いもせずに離れようとするのか。

そんな疑問が頭に浮かんでは消えていき、あまりの辛さに頭を抱えることしかできなかった。

俺を嫌ったのか？いや、最近はネイの方から甘えてくれるようになっていた。昨日だって、今朝だって、その態度は変わっていなかった。ならば、何かあったに違いない。

俺は頭の中でそう結論付け、憔悴しそうな一歩手前で何とか踏みとどまった。

「お返事は、どうなさいますか。」

顔を上げたと同時に訊ねられ、そして、目の前に小さな紙切れを差し出された。ミリアはさっと、俺の手からネイの手紙をかすめ取

り、そこにあったペンでこう書いた。

“私は後を付けられております。どうか時間稼ぎをするために返事を書くとおっしゃってください”

何が起きているのかは理解できないが、ミリアがそう言うのだからそうするべきなのだろう。

「返事は書く。だが、この書類を終えてからだ。悪いが少し待ってくれ。」

そして、俺は渡された四つ折りにした小さな紙を開いた。

…何と言うことだろう。そこには、信じられないことが書き連ねられていた。

今神殿にいること、自分もミリアもルイスに脅されているということ。陛下が病に伏せっているのをいいことに守人の立場を得て権力を握ろうとしていること、その守人を二月後に決める事にしたと嘘を吐いたこと。

そして――会いたい。最後にそう書いてあった。

俺は顔を上げて、ミリアの顔をじっと見る。そして、一度だけ小さく頷いた。ミリアも脅されている。だから、何も言えない。この手紙ですら危ない橋だ。それを渡ってくれたことに感謝するべきだろう。

新しい紙を用意する。そこに、分かったと一言書き、手渡す。しかし、すぐに最初の手紙の内容を思い出して、追伸を書き足すこと

にした。

“私もそう思います”と。

これなら見られてもなんら問題はないだろう。

ミリアはペンを取り、立ったままの状態ですらすらと文字を書いて行く。俺から渡された紙を受け取ると、綺麗に一礼をして出て行った。

残された俺は急いで書かれたものを見る。そこには単語しか書かれていなかったが、大体の意味は伝わってきた。

守人を決める期間は時間稼ぎで、罰を与える事の出来る陛下の回復を待つためのもの。ネイは魔法封じの腕環を付けられている。おそらくそんな意味だろう。

どうしたものかと腕を組んで考える。そこに、勢いよくレークが飛び込んできた。

「大変ですっ！」

おそらく大変と言うのは、この事だろう。俺は四角い手紙を手で包み込むようにして、ネイの無事を祈った。

「お前にしては余裕がないな。どうした。」

「何落ち着き払っているんですか！ネイさんが、神殿に…」

大分興奮している様子に、俺は宥めながら手紙を差し出した。グシャグシャになったそれを解いて読みだす。その表情に段々険しさが出ていった。

「これを読んだのに、貴方は冷静でいられるのですか。」

今の俺が冷静に見えるのなら、やつの目は節穴だ。

「それは建前だ。事実はこちら。」

そう言って、四方形の手紙を差し出す。本来ならば、ネイからの可愛い言葉を見せたくはないが、不本意ながらも見せる事となった。

「これは、とんでもない事態ですね。どうやら…貴方は、まったく冷静ではなさそうですね。」

これで事の詳細がすべて分かる訳ではない。しかし、今までの事もあり、ルイス側がどうしようとしているかくらいは読める。

「しかし、ネイさんは魔法が使える。逃げ出せるはずなのに、どうしてそうなさらないのでしょうか。」

「ミリアが残したメモには、魔法封じの腕環と書かれていた。きっと、誰かに嵌められてしまったのだろう。」

ネイの笑顔が浮かんで消えた。なるべく早く、ネイに会いたい。

そうして、この腕の中に納めたい。

俺は震える手を隠す為に腕組みをして、前にいる男を真っ直ぐ見

た。

「陛下の周りも、今は慌ただしい時期だろう。そして、王妃すら近づけない。しかし、陛下に謁見できる可能性があるのは王妃だけだ。これを伝えてもらうには、王妃に伝えてもらうのが一番手っ取り早いだろう。」

しかし、それは最善ではない。陛下、いや、兄上の体調が余計に優れなくなってしまう恐れもある。だからといって、この状況に何らかの手を加えない訳にはいかないだろう。

「先までの私の目は節穴のようでしたね。貴方は十分に焦ってらっしゃる。」

いつものいけ好かない笑顔になったレークは、どこか頼りがいのある様子だった。

「今の陛下には、このお話は無理でしょう。幸い峠は越えたそうです。二、三週間もあれば、完全に復活するでしょう。それまでは、変な気など起こさないように、静かにしていることです。」

そうだ。俺が今動けば、一番厄介な事になる。それは分かっているが、最低でも二週間以上ネイにも会えないという事実が胸の奥を絞めつけた。

「しかし、今回ばかりはルイスさまもバカな方法を取られた。」

そう、いささか早計な行動に出たとしか言いようがない。そこはどうも不思議でしかならなかった。

「あの人は、どうやら宗教に心酔し過ぎている。己をついに見失ったのかもしれません。」

笑顔でおぞましいことを言ってのける。しかし、俺には分かっていた。これがレークの怒り方なのだと。これで、力強い味方がついた。まあ、ネイがさらわれた時点でレークがこちら側につくのは分かっていたが。

「しかし、私にはこれだけで済むとは思えません。何か、もっと複雑な事を企んでいそうな予感がします。」

確かに、そんな気もする。向かい側にいるレークも、同じように腕を組んで悩んでいるようだ。

この予感が、当たってしまうとは――この時は微塵も思っていなかった。

企みと籠の鳥

ただボーっとしている。私は最近、それしかしていない。

「ネイさま、またここにいらっしゃったのですか。」

ひょっこりと顔を出したのは、一人しかいない。そうできる人はたくさんいるけど、それは私の味方じゃない。ここに一緒にいてくれる唯一の味方はミリアしかいなかった。

ここのところの私は、ほとんどの時間をガラスの塔の最上部で過ごしている。何もせずにただボーっとしていることが多い。だって、やることなんて何もないから。

「この一週間、お食事もろくになさっていません。そろそろ身体が参ってしまいますよ。」

心は、とっくの昔に参ってるもん。

私はその言葉に反応せず、緑のじゅうたんの上に寝そべったまま、空を眺めた。

ガラス張りになっているそこは、周りはステンドグラスだけど、その天井の部分は透明。だから、良く外が見える。そこから取りが飛び立つのを見て、ため息をついた。

私も空を自由に飛び回りたい。

「籠の鳥になったみたい…」

金属でできた枠組み。それが余計にそう思えるのを促進させていた。

「私があまり顔を出さなくなったことを、周りの人間も不審がっています。もうそろそろクーンさまも動きだされると思いますよ。

エルさんもマーサさんもネイさまの顔を見たがって心配していらっしゃいます。早く会える事を一緒に祈りましょうね。」

最近会ってないなぁ。そう思いながら、返事をする気力も無い私は動く事も出来なかった。

少し前が懐かしい。お菓子やご飯を作って、いろんな人に食べてもらってた。それを思い出し、一緒に他の事もたくさん思い出す。

チキュウについて根掘り葉掘り自分の興味に従っていろいろ聞いてくるレークさん。私に癒しをくれた殿下。頑固者の陛下夫妻。優しく包み込んでくれるお母さんみたいな存在のマーサさん。お調子者のリュクスさん。料理に関しては何処までも子供みたいな興味に突き動かされてるエルさん。

そして、優しい微笑みや温かい想いをくれるクーンさん。力強い腕。とびっきりの笑顔。恥かしがってる私に少しだけイジワルする

時の囁き。全部が、遠い記憶のようだった。

たった一週間でこんな風に思えるようになるなんて。私の心の変化は、思っていた以上に大きかったみたいだ。

空虚感が大きい。胸の中にぽっかりと穴があいてしまったみたいだ。

この感覚、私知ってる。向こうにいた時、ずっと感じてたの。心の中に何かが足りない、この感じ。いつの間に埋まってたんだろう…それが、また掘り返されたみたい。

『ごめん、ミリア…独りにして…』

助けてくれることなんて、分かり切ってる。だけど、心が悲鳴を上げてるの。

クーンさんに会いたい…いつの間にかクーンさんは私の安寧になっていた。支えになってた。

閉じ込められて、ミリア以外の誰にも会えず、やることも無い。狂いそうだ。

…涙が出そう。そんな時。

「今はいけません！」

「五月蠅い。侍女ごときが、引っ込んでいろ！」

ガタガタと騒がしい。私は身体を起こして身構えた。

ミリアが引き留めようとして、それが叶わない人物。そんなの、ここに私を閉じ込めたその人しかあり得ない。

「やあ、乙女さま。今日も実に麗しく。」

やっぱりね。人が沈んでる時に、空気を読まないキツネ男のお出ましだ。

ちょっとはジュノを見習ってほしいよ。あいつも空気読めないけど、この男ほどじゃないと思うんだよねぇ。てゆーか、毎日会いに来ないでよ。

この男は、何の用も無いのに、私の顔を毎日見に来ていた。だけど、声をかけられたのはこれが初めて。でも、顔を見に来る時はいつでもタイミングが悪い。

ミリアとクーンさんの話をしてる時とか、ジュノと話してる時とか。いざ聞かれたくない話の時にいつもやってくる。それに、何が一番残念って、その容姿だ。

周りがイケメン祭開催してたものだから、どうもキツネに似てるってのは残念過ぎる。それに、こう言った党派の分かれた対決の中心には、イケメンが付き物でしょ。って、勝手な私の妄想にすぎないんだけど。

いつの間にやら私の目は肥えたらしい。目の前の男を見て、私は大きくため息をついてしまった。

「そろそろ神が何か申されているだろう。私は毎日神殿で祈りを捧げている。」

私の失礼なため息に一瞬顔を歪めたけど、そのまますぐにニタッとした笑みを溢してそう言った。

まだ一週間なのに、せっかちな人だ。これは陛下の周りに何か動きがあったんだろうなぁ。

『申し訳ありませんが、何も言っておりません。そもそも、期間は二月。まだ当分先です。そして、もう一つ申しておきましょう。』

おそらくこの人は、自分だけの情報にしてる。だから、なるべく多くの人にこれを伝えるように仕向けよう。

『守人は一人ではない。そもそも守人とは私が乙女であるということを証明する者。そして、乙女を守る者。その人物は私の左右に立って、私を守るのです。』

願ってればいつかかなうと思うなよ。

さっきまでのネガティブな自分を払拭して、心の中でほくそ笑んだ。

陛下ですら貴族にはあまり手を出せない。だけど、そんな常識が私に通用すると思ってもらっちゃ困る。

「つまり、守人は二人必要、だと…」

『ええ。そして、その人物は神が吟味して決める。祈りをささげ、熱心な崇拝を贈る者が選ばれるかもしれないし、ジュノを神として信じない者が選ばれるかもしれない。

神からの言葉です。たくさんの人を神殿に誘い、守人の選考が平等になるように取り計らうように、と。

まあ、貴方のような熱心な崇拝者は皆より頭一つ分抜きんでているでしょうが、それでももう一人の人物が必要になってきます。』

これを言ったら憤慨すると思ってたのに、意外にもキツネ男は私に熱い視線を注いでいた。

「神が、私に言葉を…」

ああ、もう。この人の頭が心配になってきた。って、私が心配してやることじゃないけど。でも、これで安心した。

きっとこの人は多くの人にこれを伝えるだろう。

『お願いできますね？』

「…勿論。承りました。」

よろしい、というように、私はとびっきりの笑顔を浮かべた。それは、キツネ男にとって、麻酔になるようだったから。

私の笑顔を見ると、狂ったように“乙女さまの微笑み…”と喜ぶからだ。

分かっててわざとやってる私は、どこまでも性格が悪いと思うけど、私はじっとしていられない性質だ。自分から行動を起こすのが性に合ってる。

この男が焦って聞いてきたのは、もしかしたら陛下が回復し始めた証拠かもしれない。だったら、私が軟禁されていることを知ってもらいたい。ならば騒ぎを大きくするのが一番伝達にはいいだろう。

自分の思い通りに事が進んで満足。だけど、キツネ男は帰ろうとしなかった。

「ところで乙女さま。あのお方が目を覚ましたらしいですよ。」

『陛下ですか？体調は回復なさったのですか？』

「え、ええ。そのようです。」

そっか、よかった。そう安心していると、キツネ男は何やら考えるような仕草を取っている。何かおかしいことでも言っただろうか。

そのうちぼそぼそと喋り出す。本格的に危ない人だ。

「そうか…陛下ではない…では、誰だ…」

口籠っていて何を言っているのかはよく分からなかったけど、結論が出たのか伏せていた目を上げて私をじっと見つめてきた。

嫌な汗が背中を伝わる。

「…確かめる、必要がある……」

『何を、ですか。』

にじり寄ってくるその人から逃げるように後退る。キツネ男は右手に何やら赤い光を浮かべると、私の腕を左手で掴んだ。

これは、魔法！

分かっていても、成す術は無い。逃げる事も叶わない。ギュッと目を瞑って、何か痛みが来るのかと覚悟した。

でも、いくら待っても痛みは無い。恐る恐る目を開けると、そこにはもうルイスはいなかった。

何だったんだろう。掴まれた腕を見つめる。そこに嵌められていた腕環の赤い石が、濃くなっていた。まさに、黒に近い。

不吉な色。そう思って見ていると――――。

「君は嘘付きだね。」

『ジュノ。』

静まり返った部屋。寝そべった私を上から見つめてきたのは神様だった。

顔を合わせて早々酷いことを言う。いきなり人の事を嘘付き呼ば

わりするとは、なかなか腹が立つ。ムッとして睨みつけても、ジュノは全く視線を気にしていなかった。

『何が嘘付きよ！』

「さっきの男に神の言葉と言って嘘を教えただろう。」

なんだ、いたんだ。

ジュノはときどき私にすら見えないように様子をうかがっている。そんな時は姿を現す時もあるし、何も言わないままの時もある。今日は前者だったらしい。

『嘘は悪いことだって分かってるけど、時には自分を守るための鎧にもなるの。』

「だからと言って、神の言葉を乱用して言い訳じゃない。」

初めて、叱られた。いつもは私が怒ってるのに、いつもと立場が逆転だ。

『わかってる。』

「わかっていない。」

静かな、静かな声だった。急に頭の中が冴えて行くのが分かる。私は、ジュノの怒りに触れてしまった。その事実に胸を痛めたのは無理もないと思う。

『…これからは許可なしでは使わない。』

「うん、分かってくれればいいんだ。」

そう言って、ゆるーいヘニャッとした笑顔を浮かべた。それに安心する。さっきまでの雰囲気はすごく怖かったから。

『ねえ、どこから聞いてたの？』

「あの男が、守人が二人いるって知ったとこ辺りから。」

『なら、分かったんじゃない？あの人は尋常じゃない。』

空気で分かる。だって、私を目に写そうとしないくらい、私の作り出した偽りの神の言葉を聞いた後の目がやばかった。

あれはあ…麻薬中毒、みたいな。そんな感じ。

「そうだね。確かに危なそうな目つきだった。正当化して僕の乙女を殺されても困るからね。これからはちょくちょく様子見に来るよ。」

…言った後に欠伸すんな！少し前までは目をキラキラさせるような事言ってたくせに。

でもね、ジュノ。私、やられたらやり返す性質なんだ。向こうが動いて来なかったとしても、こっちが動き出すことだってあるんだから。

おそらくそんな事を考えもしていないジュノを横目で見て、私はクスッと笑いを溢した。

『ジュノ。鳥ってさ、自由に飛び回れてこそだと思わない？』

「何、急に。」

何でもない、と言ってまた笑う。それを不思議そうに見てきたけど、私は敢えて空を飛んでいる鳥を見つめる事に徹した。

私は、籠の中にいる鳥じゃない。自分の意思で、自由に飛び回りたい。だから、何としてでもこの状況を打開する。

私は人知れず、心の内で決心した。

忘却（前書き）

短いです。

忘却

頭が上手く働かない。それは、ルイスがこちらにやってきた日から、日に日に酷くなるばかりだった。

折角反撃に出ようと思って、暗い自分の考えを払拭させたのに。

今日もまた、ガラスの塔で力無く寝転んでいる。頭が働かなければ、身体も動かない。ここに上がってくる時も、ミリアに手を貸してもらわなければならないくらい、自分の自由が利かなかった。

どうしちゃったんだろう、私。

ご飯食べる気にもならないし、何をする気にもならない。いや、なれないと言っても過言じゃないくらい、無気力だった。

「乙女さま、お久しゅうございます。」

ひょっこりと顔を出してきたルイスは、相も変わらずいけ好かない笑みを浮かべてる。だけど、そんなことを気にしてもいられないくらい、何も考えられなかった。

ルイスが上がり切った後、ミリアもやってくる。そして、私の体を支えてくれた。そのために上がってきたみたい。迷惑かけっぱなしで、本当に申し訳ないの一言に尽きる。

「貴女は神官殿の再従兄妹と最初おっしゃられていましたね。神官殿とは仲が宜しいのですか。」

いきなりなんだって言うの。こっちは体調良くないってのに。察してくれ。

そう思っても、ここで空気を読まないのがこの男だろう。今日もまた一段とタイミングが悪い。

この状況では話をしないと帰ってくれないだろうと諦め、私は口を開くことにした。

『レークさんとは、たくさん話をしました。私の知識に興味がおありのようですね。おそらく仲良しさんです。』

こんなこと聞いてどうするんだろう。そう思ったのに、私の答えには興味がなかったのか、次なることを聞いてきた。

「陛下がまた伏せったのはご存知ですか？」

『そうなんですか?!無事なんですか?状況はどうなのです?』

それって、ヤバイでしょ。折角の時間稼ぎなのに、もしかしたら二ヶ月じゃ足りないかもしれない。そうなったらどうしよう。

…後でジュノに相談しよう。

「命に別状はないそうです。」

だったらそんなに深刻そうに言うなよ。

私は思わず脱力した。そうツッコミたかったけど、この人にそんな事言ったら面倒になるからと止めておく。賢明な判断だと褒めてもらいたい。

「卑しい血が、この辺りを嗅ぎ回っているようです。」

また急に脈絡も無く話が変わる。この人が何をしに来たのか、本当に意味不明だった。

『誰の事を言っているのか、分かりかねます。』

「…魔道師ですよ。騎士団団長の。」

『だから、誰の事言ってるんですか。』

急に訳の分からないことを言い出すから、返答に困る。だって、さっきまではみんな知ってる人のことだったのに、知らない人のこと話されたって答えられる訳ないでしょう。

「ネイ、さま…何をおっしゃられているのです?」

後ろから支えてくれているミリアが震えた声でそう言った。訳が分からない私は理由を聞こうとしたんだけど、キツネ男がそれを許さない。侍女の分際で口を挟むなと言っていた。

「ほう、それが貴女の…」

『…何、ですか。』

そう問えば、何でもないと返ってくる。ここまで意味が分からないと、本当に怒りたい気分だ。

用がないなら帰れ。こっちは具合が良くないんだっての。

そう言おうとしても、ひゅーひゅーと喉が鳴って言葉にならない。私は何かが身体を蝕んでいる様な気がしてならなかった。

「今日は、貴女をお誘いするために参りました。」

それが用件なら、最初から言ってくれればよかったのに。

本題に入るまで遠回りしたのが訳も分からず、しかしボーっとしてた頭では考えられない私は喋ることをもう止めていた。

「貴女はずっとここから出ていない。気分転換が必要でしょう。今夜夜会が開かれます。そこに出席していただけますね。」

無理だよ、こんなにダルイのに。それに、いきなりここから出してくれるなんて、裏があるに決まってる。絶対、そうだ。

考えはそうまとまっているのに、口は思いとは正反対のものを語っていた。

『…はい、もちろん……』

「無理です、このような体調ではっ！」

うん、そうだよ。その通りなんだよ。

だけど、私は頭まで何かに浸食されたようで、今度は考える事までを止めていた。正しいと思えるミリアの意見も、よく意味が分からない。言葉は、右から入って左に抜けた。

「侍女風情が口を出すな。お前は従ってればいいんだ。」

二人の会話が続いている。私は、よく分からなかったけど、何かを口走っていた。

『様式、分からない…だから、ミリアも、いっしょ…』

「乙女さまがそう申されている。仕方ない。お前も同行しろ。」

「了解いたしました。」

そんな会話がなされ、今までになく上機嫌になったルイスが笑みを浮かべながら去って行ったことに私は気付かなかった。

頭、重い…

そう思ったのと同時にまぶたも重たくなり、私の意識はブラックアウトした。

遠くで、知らせないと、というよく意味の分からない呟きが聞こえた。きっと空耳に違いない。

忘却（後書き）

お気に入り登録が４００件を超えました！
嬉しいです！！
ありがとうございます。

動揺

「失礼します。」

ノックと共に入室してきたそいつは、この部屋には滅多に来ない人だった。

「久しいな、マーサ。」

マーサとはもう長い仲だ。俺がこの城にやってきたその時から、俺の事を知っている数少ない人物だ。そして、俺が卑しい血と呼ばれているのを知っていながら、そんなことは気にするなと豪快に笑い飛ばしてくれた人物でもある。

最近はネイが俺の世話をしていたために、会うことはめっきりなくなっていた。ネイが俺の傍を離れてから他の女中が世話を焼こうとしてきたが、俺はそれを一切拒絶している。だから、役人以外がこの部屋に来るのは本当に久しぶりだった。

…たまに宰相や神官が呼んでもいないのに出入りしているが。

「誰も寄せ付けずに一心不乱に仕事をしていると聞いたので、お茶をお持ちしました。」

こうやって、俺を心配してくれる人物でもある。母親の記憶はほとんどないが、これが母親と言うものだろうというような包み込むような雰囲気をいつも纏っていた。

「口調、普通でいい。」

そういうと、いつもの調子に戻り、豪快に笑った。

「あんたは仕事に夢中だし、ネイは見かけないし、ミリアは様子がおかしい。＜最後の乙女＞が現れてからと言うものの、この城内は少し騒がし過ぎるきらいがあるねえ。」

手慣れたようにお茶を注ぐ。口調と所作が合っていないその様子が、なんとも不釣り合いだった。

「さっきだって、ミリアのヤツ急にぶつかってきてね。」

…おかしい。ミリアが仕事中に誰かにぶつかるなど有り得ない。仕事に関してはどこまでも真面目で、ネイに関しては俺にすら注意を厭わないほど頑固な性格をしている。仕事に矜持を持っているあいつのやることではない。

「謝りながら、手を差し出してきてね。立ちあがるのを手伝ってくれたんだけど…身体を起こす時にこれが手に挟まれていた。事情はよく分からないが、秘密裏に渡されたんだ。」

掌に収まる大きさの紙が目の前に差し出される。これは、以前にネイの状況を伝えてきた者と同じ形をしていた。

奪い取るようにしてそれを受け取り、勢い良く開いて読み始める。書き記されていることを、俺は信じたくなかった。

「ミリアが渡してきたなら、それじゃ間違いなくネイ関連だろう。

それで、ネイのことならあんたに伝えるべきだろう。間違っていなかったかい？」

「…ああ、ありがとう。申し訳ないんだが、レークと宰相を連れてきてくれないか。ついでに、頼みたい。この手紙の事は他言無用としてほしい。」

早急に手を打つべきだと思い、そう願い出た。

扉が閉じる音が消え、静寂が残った部屋に、俺は一人きり。心が後悔の渦に巻き込まれていた。

なぜすぐに助けに行かなかったのか、と。ネイが＜最後の乙女＞であるからと、安心し過ぎていた。手を出すことはないだろう、と高を括っていた。

己の不始末を苦しく思い、頭の奥がズキッと痛むような感覚がする。思わず顔をしかめた俺は、眉間に手を這わせ、痛みが治まるのを待った。

…どれほどそうしていたのだろうか。二人が揃って息を切らせてこの部屋に飛び込んできたのと同時に俺は顔を上げる。

悔いても遅い。ならば今から動くまでだ。

そう決心して、二人に話を持ちかける。それは俺の意志の範疇でしかない。

ネイが乙女だから独り占めは出来ないと分かっている。それでも、

彼女の心の多くを自分に向けて欲しいと思っている俺は、どれ程自分本位な人間なのだろう。分かってはいるが、止められない。こんなにも狂おしいことなど煩わしいと思っていた俺が、その甘美なまでの幸せに酔いしれて、己の心の舵がとれないのだ。

「ネイに異変が起きた。これを読んでくれ。」

渡した小さな紙を、レークはじっと見つめる。その表情は見る見るうちに険しいものとなった。もう一人へと紙が移行される。しかし、その人物は老眼の所為か上手く読めないらしい。

紙を遠退けたり顔を顰めている様は滑稽で、普段なら笑い飛ばしていてだろうが、今それをするには似つかわしい。一秒でも時間が惜しい俺は、自分の口から説明することにした。

「…ネイが、俺を忘れた。」

言った自分の表情が曇るのが分かった。

目を背けたい異変とは、ネイが俺を忘れたということ。俺と言う存在が記憶から抜け落ちてしまったという事実だ。

「それは、どう言うことだ！」

そんなことは、俺の方が聞きたい。真実など分からないのだから。ただ、ネイに異変が起きたのであれば、それはネイを攫ったやつらの仕業だろう。

「なぜ、そんなに冷静でいられるんだ！お前の大切な人が、お前を忘れたんだぞ?!」

「冷静ではありません！」

俺は震えるほど拳を握りしめていた。

…冷静なんかじゃない。それに、これは俺の責任だ。

「…その紙に走り書きされているのは、三項目。ひとつは“ネイの体調がすぐれず、人形のようだ”と書かれている。ふたつ目は“ネイが魔道師のことを忘れた”、最後は“今日の夜会に参加する”。意味がどうであれ、起きてる事実だけを書き述べられていると思う。」

手紙を渡すなど、危険極まりない行為。それを無理をしてまでやってのけたミリアの、小さな叫びと恐怖が届けられたような気がしていた。それほどまでに、ネイが危ない状況にいるのだと伝わってきたのだ。

「ネイの体調が悪いんだ。もう黙っていられないだろう。相手の尻尾をつかむのは諦め、早々に奪還しよう。」

そう言い残すと出て行ってしまう。頭に血が上るのが早い宰相は、それをどうやら冷やしに行ったようだ。そう言った自己判断も早くて助かる。冷静でなければ、奪還することもできないだろう。正しい選択だ。

残された二人では、計画を算段することもできない。こう言ったことを考えるのは、やはり年の功である宰相に尤も才がある。

「…貴方は、何を悔いているのですか。」

「すぐに、ネイを奪い返していなかったこと。」

投げかけられた質問にすぐ投げ返す。今、何かをしていなければ、自分がどうにかなってしまいそうだった。

目の奥がズキズキする。俺は先程と同じように、眉間にしわが寄り、仕方なしにそこを右手で抑えていた。

それが余程苦悩に満ちているように見えたのか、レークが俺の心に追い打ちをかける。後から分かる事だが、これは単なる親切だ。

「後悔は無駄です。今すぐ捨ててください。」

「でもっ…」

「捨てなさい。」

いやにきっぱりと言う様に、俺は反論の勢いを削がれた。

確かにその通りだ、と。今考える事ではないと、明確に分かり得る事だ。それさえ、俺は見失っていた。後悔し、何もできなかったと自分を責めることで、まだ終わってもいないのにネイの記憶の中から自分が抹消されてしまったことを諦めようとしていることに腹が立つ。

ネイは俺を忘れたりしない。だって、俺はネイを信じているから。

少し前の言葉を思い出し、少し柔らかい気持ちになる。

ネイはきっと俺を信じてくれている。だから俺も信じる。そうすれば、おのずと原因も見えてくるだろう。どうして俺が記憶から抹消されてしまったのか、その答えが見つかるはずだ。

「…助ける。絶対に。」

「はい、その通りです。」

いつもならば怒り狂ってしまいそうなその飄々とした態度に、今回は救われた。冷静さに事欠き、後悔に苛まれ、己を見失うところだったのを、目の前にいる男が救ってくれたのだ。

「貴方はもっと自分に自信を持ってください。そして、もっと我が儘になっていいんですよ。いき過ぎてはいけませんが、自分に正直になることも必要です。そうでなければ、大切なものを今度こそ本当に失ってしまうでしょう。」

我が儘。正直。自分にいらない感情だと、切り捨ててきたものだ。俺に要求されてきたのは、従順さのみ。自分には理解できない。そう思った時、不意にネイの顔が頭に浮かんだ。

ネイが愛おしい。この腕に納めたい。それは、自分の正直な気持ちではなったか。…まったく持ってその通りだ。

ネイ、お前はすごい。自分でも気づいていなかった感情を、芽生えさせてくれていたんだから。

「俺はとっくに我が儘だ。」

さっきも思ったじゃないか。ネイを己のものにしたい問う欲求。
二人を巻き込んでまで、ネイを助けて俺の腕に納めたいという欲求。

絶対に叶えて見せる。

「その意気です。」

俺はレークと二人、ニヤッと笑みを溢しあった。

たすけて

「ネイさま、そのような体調で本当に参加するのですか？」

ミリアが心配してくれている。声色が不安げだ。椅子に座った状態の私の顔を覗き込み、心配そうな顔を見せている。だけど、返事は思っている事と違うことを口走っていた。

「…だい、じょぶ。」

本当は行きたくない。今ここから動きたくない。だけど、考えとは裏腹に、答えは行くという意思表示をするものだった。

ミリアはやっぱり心配そうな顔をしながら、着替えを手伝ってくれる。私は着せ替え人形のように、されるがままにしていた。だって、少しでも動くと辛いから。

身体は軋み、だるい。思うように手足が動かず、指先も間接が固まったかのように、上手くは動かせなかった。そして何よりも不思議な事は、考えがまとまらない。頭がぼーっとして、理解は出来てるのに思うような答えが喋られなかった。熱に魘されている感じ。まるで病気になった状態みたいだ。

いや、考えることはできているのに、思ったこととは違うことがいつの間にか口から零れていると言っても過言ではない。

「一応お化粧までしますけど、もしもいけないと判断したら必ず言

ってくださいね。」

私は首肯し、それ以上動かないことを選んだ。

それからしばらくすると、日が沈んで行く。月が二つ出た頃に、ルイスがやって来た。

「おや、乙女さま。今宵は一段とお麗しい。」

恭しい挨拶。反吐が出る。そう思うのに、なんでだろう。自然と笑みがこぼれてしまった。

「乙女さまの微笑み…それがまた一段と麗しく見える。」

手を取り、しがみついて頬ずりしてくる。

キモチワルイ…

そう思ってるのに、振り払えない。それほどの力も残っていなかった。五分くらいたっただろうか。漸く離してもらえた。

「さて、参りましょうか。」

エスコートをしてくれてるんだろうか。さっきまで縋りつかれていた右手を取られ、階段を下りて行く。その背中をミリアが押さえてくれていた。

そうじゃないと歩けないほど弱った状態の私。…これ、ヤバイ病気なんじゃ？

そう思ってしまうくらい、身体のコントロールが利かない。本当に、おかし過ぎる。何か、されたのかも。

ご飯は食欲がないからあんまり食べられてないし、毒とかじゃないはず。と言うことは、残るは――。

そう思って見やるのは、取られた右手の腕についてるもの。魔法を抑えるために付けられた腕環だ。

今見やると、一度魔法をかけられた時よりもはめ込まれた石が赤黒くなってる。血が乾いたような色。あんまりよろしいお色とは言えませんよね。

そんな風に考え事をしていると、あっという間に馬車に乗り込まされ、どこか分からない場所へと先導された。

降り立ったそこは、はじめて見るお邸。感想は一言で十分だ。――豪勢。

無駄に金掛けてるね。そんだけ金があるんだったら、もっと有意義な事に使いなよ。

そんな感想が漏れてしまうお邸の造りは豪華そのもので、玄関へと続いて行く階段は大理石でできていた。

「……っ！」

下がツルツルしている所為か、急に足元がふらつく。ヒールを履いている事も相まって、私の身体は地面へめがけて一直線に落ちて行った。

「ネイさま！」

ミリアの悲鳴。だけど、女の力じゃどうにもならないのか、支え切ることが出来ないみたいで手が見えただけだった。

私はスローモーションのように見える中、冷静に考えている。上手く体が動いてくれなくて、受け身なんてきっととれない。

…痛そうだなぁ。

身構える事も出来ず、しかしどうにか痛みには耐えられるだろうと覚悟したその時。目を瞑った瞬間に、何かが私の体を支えてくれた。

「…大丈夫か。」

『…は、い。ごめん、なさ…』

誰かが抱きとめてくれたらしい。力強い腕は、男性だということを示している。きちんと立たせてもらうと、そこには正装をした若い男が立っていた。

亜麻色の髪、意志の強そうなスミレ色の瞳。整っていて綺麗だけど、どこか野性味のある顔はもう、格好良いの一言に尽きる。筋肉質そうな体は、見事に鍛え上げられていた。

…あれ、デジャブ？前にも同じような事思った気がするんだけど、どこでだったかな。

思いだそうとしながら、覚束ない足取りで進もうとすると、またふらついてしまう。そこをもう一度支えられ、フワッと香る石鹸のような清潔感の溢れる香りが鼻をかすめる。私はなんとなくそれを覚えてる気がした。

「体調があまり良くないようだ。無理はしない方がいい。」

「それは、貴方が決めることではないのでは？乙女さまはご自分の意思で来られたのだ。」

あ、あんた居たんだっけ。

横から入って来たのは、さっきまで私の手を持っていたはずのキツネ男。てゆーか、あんた手離すなよ！そうツッコミたくなった。

「これはこれは、クーン魔道師殿ではないか。お前がこのような場に来るとは珍しい。さぞ、お嬢様方は喜ぶだろう。

ところで、乙女さまに向かってなんて口の利き方をするんだ。卑しい血が、この神聖なる方に失礼だろう！」

卑しい血？なんじゃそりゃ。なんかの形容？それにしても尋常じゃない呼び方だなぁ。その呼び方こそ失礼だと思うんだけど。

ぼーっとする頭の中も、自分の意見が飛び交うことは止められないらしい。口には出さないけど、それ相応の事を私は考えていた。

「どうぞ、足元にはお気をつけて。」

最後にそう言い残し、その人は去って行ってしまった。

格好良い人だったな。目の保養にはもってこいだ。お邸の方に向かってったし、また後で目の保養できたらいいな。

そう思いつつ、また右手を取られた私は、引っ張られるような形で会場へと足を踏み入れて行った。

中は、なんというか、煌びやか。豪華絢爛。贅沢の骨頂。キラキラ輝く照明に照らされ、人々は会話やダンスを楽しんでいる。

見事なまでに着飾っている人たちは、おそらくみんな貴族だろう。これが社交界と言うヤツか、と私は妙に納得しつつ、ルイスに連れ回された。

色々な人が挨拶をしてきて、その大抵が親子だった。

夫婦にその息子のセット。その息子と言うのが十代後半から三十代前半というのは、何かしら意図があるのだろうか。

重い身体を引きずり、連れ回されること約一時間ほど。何度もふらついてしまう私を見かねたのか、ミリアが反発してくれたことで解放されることとなった。

ミリアに支えられながらテラスへと進む。そこには木製の白い猫脚テーブルとイスのセットが配置されていた。その可愛らしさに薄っすらと笑みがこぼれる。私は腰を下ろして、ほっと小さく嘆息し

た。

「お疲れになったでしょう。今温かいお茶を淹れますね。」

ニットのストールを肩に羽織らせてくれ、そこでようやく肩の力を抜くことが出来た。

会場内と庭が見える位置に腰掛けた私は、一度外を見やり、それから中を眺める。喧騒と静寂の間に居るような感覚がして、少し不思議な気分だった。

湯気のたつお茶を一口身体に中に納めると、より落ち着く。安堵感が漂い始めた頃、私はそこにルイスが居ないことに気付いた。

…まあ、いない方が気分が楽だからいいやー。

そう思うとさらに身体の力を抜くことが出来た。

「…ネイさま、どうなさったのですか。貴女は嫌な事は嫌という性格だったはずなのに、ルイスさまの言うことに対して反論しませんね。」

本当だねぇ。どうしてノーが言えないんだろう。

自分を不思議に思いながら、カップを両手で包んで暖を取った。

ふいに会場を見やる。ある一角に、女の人ばかりが集まっているところがあった。何かあるのかと思って目を凝らす。その中心に居るのは、どうやら男の人のようだった。

『さっきの…』

助けてくれた人だと思って、ありがとうの気持ちを込めて頭を小さく下げた。

すると、集団から頭一つ半抜き出していたその人が、同じように会釈をしてくれ、私は吃驚して目を白黒させる。それを見ていたミリアは、双方を見やって何か理解したらしく、私の手からカップを取ると、お代わりを注ぎながら話し出した。

「あの方はクーン魔道師さまと言って、大変女性に人気がある方です。」

うん。見ればわかるよ。見事なまでに女の人が群がってるしね。でも、私がその人を見ていたのはそう言う理由がある訳じゃない。

『頭、下げたら…下げ返してくれた。遠いのに…』

「まあまあ、それはよろしかったではありませんか。」

私が不思議に思っている事はそんなんじゃないのに、ミリアは明らかに面白がっている。何かしら知ってそうなのに、それを教えてくれようとはしなかった。

傍観を決め込んで、会場内を見つめることおそらく３０分以上。私はどうしてもその人を目で追ってしまっていた。

たすけて - その2 -

「乙女さま。紹介したい人を連れてきました。」

ニタッと笑顔を作り、闊歩してくるその人は、いつの間にやら消えたルイス。その横にはよく似た、少し若い男性がつき従っていた。

「こちらは、我が愚息、アーシェイドにございます。アーシェ、こちらは乙女さまだ。」

「おお、よもやこんなにお美しい方が乙女さまだったとは！」

すみませんが、これは演劇か何かですか。

そう言いたくなるほどわざとらしい身振り手振り、そして口ぶりで振舞っている。それにしても、大根役者だ。私に方がまだマシだっての。

そうまじまじと見つめていると、私の横に傅き、手を取られる。そして、甲にキスを一つ落とされた。

やめてよ！鳥肌立ってるから！

そう言いたいのに、どうしてもその言葉が口から出てこない。私はされるがままに、手に頬を寄せ縋りついてくるアーシェイドを横目で見ることしかできなかった。

「今宵は乙女さまにぴったりの男性を、と思いまして、いろんな男

性を紹介させて頂きましたが、どうです？お気に召す方はいらっしゃいましたか？」

あー…そう言う訳ねぇ。無駄に近寄ってくる人が多いと思ったら、そう言う理由があった訳だ。めんどくさいなぁ。

『今は、それより…体調が…』

「ネイさま。お辛いのですか？」

心配そうなミリアに首肯する。肯定を示したのに、ルイスはそれをよしとしなかった。

「それは困ります。貴方様に挨拶したいと申している者はまだまだおります。それに、うちの愚息も貴方と話したいと申しておりますし…」

それどころじゃないんだよ。いい加減イライラしてきた。どうやってももう耐えられそうにない。

そう思った時。グラッと身体が傾いた。

「ネイさま！」

支えを失った身体は、倒れて行くしかない。だって、力が入らないんだもん。これは今度こそ地面とこんにちは、だな。そう覚悟した時。

少しの衝撃と、温かさが私を包んだ。

「大丈夫ですか？」

『はい、すみません…』

支えてくれたのは、アーシェイド。それを、私はかなり残念に思った。

…なんで？どうして残念だと思うの？私、助けてもらったのに。

なぜか私はこの腕が違うと思っていた。

「ルイスさま、どう見てもネイさまは限界です。これを見ても、貴女はまだここに留まれというのですか！」

ルイスはグッと苦そうな顔をしている。私はと言うと、身体を起こしてもらい、自分の力だけで座ろうと努力していた。

「仕方ない。これならば帰っていただくしかないな。アーシェイド、馬車の用意を。私は挨拶回りをしてくる。」

そう言うと、すぐに踵を返して行ってしまった。

「父は相変わらずですね。」

…こいつ。

私はすぐにピンときた。いきなり雰囲気が変わったそいつは、苦笑を浮かべている。さっき私の手に縋りついた人物とは明らかに人格が変化していた。

『父親の前で、猫…被ってました、ね…？』

「当然です。」

きっぱりと言いやがって。だったらさっき手にすりついてくんなっての！

呆れて睨みつけると、ニヤニヤしてる。どうやらそれが本性らしい。とんでもないヤツだ。

「面倒ですが、当主に従わなければならないのであの態度を取っていたんです。どちらかと言えば、私は反対勢力側ですよ。」

…なに？

私は耳が可笑しくなったのかと思い、とんとんとしてみる。それを見たアーシェは見事に馬鹿にしたような笑いを溢した。

ジュノとまた違ったタイプのムカつきが沸々と湧いてくるそいつは、父親のルイスとは違い、それが嫌悪するムカつきになっていない。多分、本能的にも害のある人物じゃないと分かったんだろう。

「では、馬車の用意をしてきます。独りで歩けないようでしたら、私が知人に声をかけておきますので、その人にお願いして下さい。」

そう言うだけ言うと、さっさと行ってしまった。身構えたのがバカみたい。安堵して体の力を抜く。すると、また身体がぐらついてしまった。

「…大丈夫か？」

支えてくれる腕。さっきのアーシェとは違う、もっとがっちりとした腕だった。

『貴方、さっきの…』

「運びます。」

私の言葉には反応せず、すっと持ちあげられる。運ばれながらこっそりと見上げると、端正な顔立ちが際立っていた。スミレ色の瞳が煌めき、亜麻色の髪が靡く。

私を持ち上げているというのに安定した状態の腕は、とても安心することが出来た。

「今日は早く休め。」

馬車の前で下ろされると、頭を撫でて立ち去ってしまった。

サーっと風が吹く。その冷たい風が、ほんの少し火照った頬を撫で、熱を奪ってくれるような気がした。

そのまま馬車に乗り込んでミリアと二人で城に戻る。何とか階段を上り切ると、私はすぐにベッドに腰掛けた。

『はぁー…』

大きく嘆息してしまったのには、自分でも驚いた。でも、それくらい体には限界が来てたんだと思う。

ここに来てから、少しおかしいなぁ。前は病気になることだって滅多になかったのに、ここ数日の体調は最悪。今日は二回も倒れそうになった。異常事態だ。

「ネイさま、着替えましょうか。お化粧も落とさないといけませんし。」

そう言われても、動きたくない気持ちでいっぱいだ。それでもこの格好でいるよりも早くコルセットとかドレスとかを取った方が良いと判断した私は、化粧を落として軽くお風呂に入る。髪はミリアに洗ってもらって時間を短縮させた。

恥かしいとか、それどころじゃない。お風呂に入るのも本当に嫌だったけど、いろんな人に縋りつかれた手を、どうしても洗いたかった。

思いが重い。私は神聖な存在じゃないから。

全てが済んでベッドに寝そべる。ミリアにも休んでもらって、光の消えた部屋は本当に静かになった。

――――…それからどれほど経っただろう。

もう宵も深いころ。何かが私に近づく感覚で目が覚めた。

ちらっと見やると、闇の中を何かが動いてる。扉は開いているようで、外の明かりが差し込んでいた。

どうしよう…怖い。だけど、動けない。金縛りにあったような感覚が身体を襲う。ミリアを呼べ。そうすれば、すぐにでも駆けつけてくれる。そう思うのに、声も出なかった。

影は一歩、また一歩と近づいてくる。そして、私の寝ているはずのベッドに上がって来た。

ちょっ、待て！これって、ルール違反でしょ。夜這だなんて、時代錯誤もいい所だ。って、ここ地球じゃないから時代とか関係ないし！あーっ、もう。それは今は関係なくて、とりあえずこの状況を何とかしないと。

影は私に覆い被さるようにしてくる。顔を背けた私は、恐怖でどうする事も出来なかった。

「乙女さま、それは合意の意思表示と判断させて頂いても…？」

囁くような声。それでいて、はっきりしている。

私は正直言って驚いていた。だって、この声を私は知っていたから。

目をそっと開く。射し込んできている月の光に照らし出された顔は、少し前に夜会の会場で別れた人物のものだった。

『なんで、貴方が…』

声が震える。驚きのあまり、声が出るようになっていた。

「貴女の髪は美しい。そして、白い肌も赤い唇も、触れたくなる。」

あの言葉は、嘘だったの？私をだますための巧妙な手口？

混乱している私は、いつの間にやら両手の自由を奪われ、接近してきている顔に恐怖を募らせるばかりだ。

これから何が起こるのだろう。そんなの、愚問だ。

「今宵私は貴女を手に入れる。既成事実があれば、貴女は私の手中のものとなり、我れが一派の権力は強くなるだろう。」

騙されたんだ。悔しくて、唇を噛む。少しでも言葉を信じてしまった自分が恥ずかしい。

宰相さまとに教えてもらった信じるということ。それに倣って、頭から疑うことを止めようとしていた矢先に、裏切られるような行為。…信じることが、これで完璧に出来なくなった。折角信じられるようになったのに。

それは…誰？

私には確かに信じている人が居るはずなのに、それが思い出せない。記憶をたどろうとしても、何かがそれを阻んでいた。

だけど、思い出したい。そうやって無理やり思考をたどっていると、割れんばかりの激痛が頭の中を駆け巡る。私は思いっきり顔をしかめた。

それが一瞬の隙となったんだろう。その人が襲いかかって来た。

首元に顔を埋められ、何かが這っている。

キモチワルイ、キモチワルイ、キモチワルイ…！

嫌悪感しか浮かんでこない。そして、私は自分の身が置かれている状況が、とてつもないものだと判断した。

助けて…誰か、助けて――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0585x/

異なる世界で

2011年12月5日21時33分発行